

第 5 章

太平洋戦争下の同盟

概要

対米、英、オランダ開戦から2日後の1941（昭和16）年12月10日に発行された「同盟通信報」（社報）は「宣戦布告の日」と題するコラム記事で「陸海軍は元より外務省、各国大使館その他へ散った記者諸君から情報が雑観が解説が洪水のように押し寄せて、社内は戦場さながらの忙しさ。『宣戦布告』や『大詔渙発』^{たいしやうかんぱつ}など号外が何十枚出ても間に合わぬ超重大ニュースの連続がやっと一段落した途端、編集室の真ん中からドツと歓声が上がったのが『ハワイの大戦果』だ」と、当日の編集局の様子を描いた。

開戦とともに欧米支局の特派員とは連絡が途絶し、「しばしの別れを告げん」などとする電報を受け取った同盟外信部には「悲壮な色がみなぎった」という（『通信社史』534頁）。これに先立つ40年9月、同盟の古野伊之助社長は支社局長会議における訓示で、同盟の使命、任務、精神について、それぞれ「報道報国」、「正確迅速」、「大同結盟」というスローガンを示し、同盟の基本姿勢として取り組んでいくよう指示した。この姿勢は開戦後も堅持されたが、検閲の存在が「正確迅速」を大きく制限したことは否めない。また、本章の証言に出てくる「敵性情報」や「特別情報」が、政府や軍の首脳部にだけ提供され、国民とは共有されていなかったことも事実だ。そうした制約下での同盟の活動が、本章を貫くテーマの一つでもある。

本格的な戦時体制を迎え、同盟の人員は大幅に拡充された。それまで西銀座の電通ビルにあった本拠地が狭くなったため、42年1月、編集、通信などの中枢部門が日比谷の市政会館に移転した。今でもクラシッくな雰囲気をとどめる建物だが、米軍機による空襲や、日比谷公園での軍事訓練など、市政会館に刻まれてきた歴史の「こまこま」が、

体験者の証言として語られる。

戦線の拡大に伴い、同盟の海外展開も勢いを増す。特に中国や東南アジアの同盟記者はニュース取材という本来の業務に加え、新聞の発行も請け負うようになった。42年7月には南方各地の支局を統括する南方総局がシンガポール（当時は昭南と呼ばれた）に置かれた。「太平洋戦争と南方」に関する座談会は、真珠湾攻撃とほぼ同時に実施されたマレー作戦の最初からシンガポール陥落までを見届けた記者の証言として貴重だ。

同盟本社機構改革も頻繁に行われ、43年2月には「積極果敢なる世界思想戦を展開し、もってわが社本来の使命達成にまい進せんがため」（「同盟通信報」）、本社に对外発信を担当する海外局を新設した。この頃から同盟通信報には「思想戦」や「報道戦士」などという勇ましい見出しが目立つようになるが、戦況が日本にとって不利に傾いていることの裏返しでもあった。

証言としてはやや異質だが、戦時中の経理責任者による同盟経理の説明は、具体的な数字も入っており、あまり知られていない分野だけに、重要な証言だ。当時の同盟に政府から補助金が出ていたという事実は目新しいことではないが、経理責任者は「同盟の19年度の総支出に対し、わずか1割3分程度」で「度外れた低い額」としている。一般論として報道機関が政府から独立していなければならないのは当然のことだが、この証言からは、当時、同盟が維持していた政府との微妙な距離の一端を知ることができる。

第1節 開戦の火ぶた

真珠湾攻撃の外国ラジオ放送を傍受

小糸忠吾（元同盟通信海外部）

今から半世紀前の1941（昭和16）年12月7日の晩、私は8時すぎに小川優君（後にジャパントイムズ主筆、日米協会専務）に伴われ、同盟通信社通信局海外部から外務省へ向かった。外国ラジオの傍受を手伝ってくれと言われ、その夜初出勤した。小川君も海外部員で、外務省ラジオ室で同盟からみれば「アルバイト」をしていた。

着いてみると、ラジオ室には7、8人の二世がいて受信機にかじりつき、各国のラジオ放送に聴き入っていた。同室のボスは樺山愛輔^{あいすけ}氏の御曹子。現場監督格はその東京帝大の同級生で、同じ試験にパスしなかったことを自慢していた小平氏（戦後に読売記者）。小平氏によると「明8日早朝、日本軍が仏印（インドシナ）に進攻¹⁸¹するので、それに関する外国の反響を傍受してもらいたい、と陸軍は言っていた」。

その晩はいつもと違い任務が特定されたので、ラジオ室もやや緊張気

味だったようだ。私は新手なので、その晩は翌日配信されるニュースの調製に当たった。円筒に録音されたラジオ放送を、誰かが平文化する。それに手を入れながらステンシル（複写紙）にタイプする仕事である。

夜は深々と更けていく。誰かがダイヤルをひねる度にキーキー、ピーピーとラジオのうめき声があたりの静けさを破り、気味が悪い。夜半がすぎ8日の午前2時半ごろ、何か怪しげな放送がどこからともなく流れてきた。新周波数の探索係は緊張し、意気込んだ。だがその正体をつかむことはできなかった。

睡魔が襲い始めた5時25分ごろ、小川君が日本軍の真珠湾爆撃の放送を確認した。その瞬間、放送を傍受していたハワイ出身の若い留学生が椅子から飛び上がり、「日本の飛行機がオレの国を爆撃した！」と絶叫した。時を移さず、小平氏が陸軍にその旨を注進した。その部屋でアメリカ生まれでないのは小平氏と私だけ。彼らそれぞれの頭をよぎったのは何だったろう。

ここで新周波数の探索は打ち切られ、サンフランシスコ、マニラ、シドニー、ロンドンなどの放送に全力が集中された。後で分かったのだが、そのころホノルルでは、UP支局長、F・トレメーン君（後にUP写真担

当副社長などが、取材、送信、本社との連絡でてんでこ舞いしていた。

6時ごろ勤務が終わり、私は麻布谷町の自宅に寄ってから同盟編集局に顔を出した。出勤ではなかった。それにしても、みんな落ち着いている！ おそらく彼らにとっては「来るものが来た」にすぎなかったのであらうなどと考えていると、誰かに「君、安達（鶴太郎）さん（後に時事通信社取締役と外務省のプレコン（記者会見）に行ってくれないか」と声をかけられた。勤務中ではないし、今さらプレコンでもあるまいと思ったが、見れば人手が少ないのでお付き合いすることにした。

外務省のプレコンはわびしいものだった。私たちのほかに出席したのはたった2人。もう外務省の発表がデカデカと新聞に載る余地はないのだ。その朝8時に大本営発表を担当したNHKの館野氏も、NHKの雰囲気似たり寄ったりだったと述懐している。

12月8日の戦争突発は、大竹貞雄君、私、外信部の該当部員の生活に狂いをもたらすことになった。その翌日だったが、加藤万寿男氏（当時調査局長）が私をつかまえ、「今、参謀本部の恒石少佐に会ってきたのだが、前に君に話した入隊してから3カ月間基礎訓練を受ければ、後は社に帰って日常業務につける」という約束は、ご破算になった」という当方にとっては穏やかならぬニュースを知らせてくださった。

徴兵検査前にアメリカに渡った大竹君と私は、帰国してから1年以内に検査を受け、合格すれば2、3カ月後に入隊することになっていた。私より1年早く帰国した大竹君は、12月8日には所属部隊も決まっていた。私の入隊は昭和18年12月であった。行く先は麻布3連隊を経て極寒の地ハルビン郊外の荒野、孫家。ハルビンからは汽車で約1時間の距離、ニュースから絶縁された別世界であった。

時はさかのぼる。開戦の年の4月2日。ニューヨークにいた私は、例えばナチス・ドイツ軍がアメリカに上陸するようなことになれば、外国

人ではあるが銃をとって応戦する義務を負うという徴兵Cクラス票を市当局から頂戴した。

一方、司法省移民局からはその頃、「あなたは身分が留学生であるから、直ちに出国されたい」という通告を受けた。だが、それに従うと同盟ニューヨーク支局の業務に支障を来すというので、支局の皆さんが引き止め工作をしてくださった。また稲本国雄支局長と同盟本社の好意により、多忙な二世弁護士山岡氏を通じ、移民局に「アメリカ市民を配偶者とする日本人1人ぐらい、人道的に例外扱いしてくださいさうか」と陳情した。

だが「坊主憎けりやけさまで」だったのか、温情のひとかけらも示されなかった。誰も時勢には勝てなかったのかもしれない。私は官営の渡し舟でニューヨーク市の沖合にある小島エリス・アイランド（移民局＝ヨーロッパ移民の関門）を2、3回陳情に訪れた。だが、その空気も肌寒い外気のように冷たかった。

私は結局、本社勤務を命じられた。帰国準備も万端整い、7月25日夜、支局に別れの電話を入れた。応対したのは木下秀夫君（後に時事通信取締役）。Y談の名手で笑いを誘うのが得意だった彼も、その晩は神妙で、「君は東京へ帰れるかどうか分からないが、シアトルまで行き、そこで待機したまえ。明朝、敵資産凍結令が発効する」と言っただけだった。

その翌朝、私たちはワシントンへ行き、反日ニュースの選別に忙しい加藤万寿男氏およびクラーク河上氏にお会いした。それからワシントン発シカゴ行き列車に乗ったのはよいが、フィラデルフィアを出ると間もなくエアコンが効かなくなり、身動きもできないような暑さ。外からの熱風に4時間悩まされた。シカゴに着くまで生きた心地がしなかった。

シアトルに着くと早速AP支局を呼び出し、あるいは知人に電話して、停泊中の「平安丸」の情報を集めた。出帆はいつか分からなかった。「平

「安丸」は公海を航行中、シアトルに入港すると貨物を押収されてしまうという情報を手に入っていた。そこでしばらく入り江の島陰に身をひそめていたところ、米軍機が出動して発見され、「日本船、出てこい」と命令した。入港した「平安丸」の荷物は全部陸揚げされた。

私たちがシアトルに着いたのは、それから2、3日後だった。当時シアトルおよび近郊には、6千人以上の一世、二世がいた。連邦捜査局(FBI)が日本人を使って、日本人社会の指導者を調査しているようだった。「平安丸」出港の日が決まった。8月8日だったと思う。船主の日本郵船から「荷物は身の回り品以外なるべく少なく」との要請があった。アメリカから持ち出せる金は1人200ドルに限定された。ここに来て敵資産凍結令は及んでいたのだ。

船上では違法行為の摘発が熾烈しれつであった。船客の身体検査は手厳しく、女性移民官は赤子のおしめの中まで調べたという。女性の間から人権じゅうりんの声も聞かれた。アメリカは既に、日本に対し準戦時状態にあった。出港してからは平穏な日々が続いた。荷物の代わりに船底に海水を積む「平安丸」の船足は重く遅かった。私は毎日発行される「無線ニュース」(内容は同盟の邦文、英文記事)を読みながら、11年住み慣れたアメリカと徴兵検査の待つ日本のことを考えた。時勢は戦争に向かって流れていた。

(新聞通信調査会報)第349号 1991年12月1日発行

日米開戦時のニューヨーク支局

稲本国雄(元同盟通信ニューヨーク支局長)

国際3年、聯合10年、同盟10年、共同10年―それぞれの時期に、それぞれの深い思い出があるが、同盟期に絞ってみると、やはり一番強烈に記憶に残るのは、真珠湾攻撃の日のことである。異国での異体験という特殊な状況にあったからであろう。

1941(昭和16)年12月7日(日本は8日)、ニューヨークはどんよりとした憂鬱ゆううつな日曜日だった。支局のあるロックフェラーセンター一帯は、いつもの日曜と同様、ひっそり閑として、窓から見下ろす歩道にも人影はまばらである。この昼下がり、ぼんやりと事務所の椅子に身をなげかけていた。例によって朝の間は、ほとんどニュースはない。並列しているAP、UPの大型チックカーはジジジと、ドットを打ち続けている。傍らでは臨時出勤を命じた山崎(二世)と平島(二世)が、黙って新聞を読んでいる。すべて平穏無事な日曜風景である。

どっかりと椅子にもたれて足を投げだしていると、何だかそのまま眠りに誘われそうになる。無理もない。疲れているのだ。悪化の一途をたどる日米交渉は、言わずもがなだが、現実には7月末に出た在米資産凍結令にとどめを刺された。以後4カ月、在米日本社会は一日として安き日はなかったといつてよい。中核をなすダウントアウンの銀行、商社の立場は深刻だった。商取引は一切許可制。資産の移動にもいちいちライセンスがいる。船は来なくなる。手持ち資金はしらみつぶしに調べあげられる。日米関係は経済的には7月から弾を撃たない戦争せんそうに入っていたのだ。

同盟支局は立場は違うが、やはり難渋した。本社からの送金も途絶えがち。たまにあっても、引き出すのに数週間もかかる。一方、総勢6人という大世帯朝、誂、毎の倍以上を抱えている。APの家賃や、UPへの通信代、電信会社への支払いなど、大口は少々延べ払いで済ませても、支局員の給料は遅配したくない。金策^{きさく}という余分の仕事に百万奔走、ずいぶん胸くその悪いこともあったし、情けない思いをした。すっかりくたびれた。12月中旬には、最後の便船として「竜田丸」が来る予定。商社の連中は総引き揚げの覚悟らしい。支局にも4、5日前、本社から「貴下一人残り、安保^{やすほ}、木下、寺西全員、帰国の用意をせよ」との密電があった。あれやこれやで11月下旬以来、連日の奔走、連夜の不眠だった。

ウトウトしかけたとき、突然、UPのチッカーがジャンジャンと、けたたましいアラーム。とっさに飛びついた山崎が、「やった!」と叫んで顔面蒼白。「どこを?」「パールハーバー」、「どこが?」「……」。正直、僕自身も瞬間、真実とは思えなかった。第一報は「Flash—Pearl Harbour Raided by Air」とあるだけで、どこの国がやったのか明らかでない。十数秒遅れて、APのチッカーが鳴り出す。あとは息つくひまもなく、二つのチッカーが狂気のようにフラッシュのつるべ打ちである。やったのはもちろん日本軍。

ハワイだけでなく、フィリピン、香港、グアムも総攻撃と情報はくしの歯を挽く^{ひく}ことくだ。時計を見ると2時40分すぎ、フラッシュは全部本社宛てに新聞至急報で転電。果たして通るのかどうか。電信会社へ聞く。「まだ何の指示もない。受け付けたものは全部、サンフランシスコまでは行っている。それから先は、ここでは分かんが、止まったという通知はない」。ようし、打て、打て、ジャンジャン打てータイプをたたく手ももどかし、しゃにむに突っ込んだ至急報は合計20通にも上った

ろうか。息もつかせぬスリルと緊張のうちに、時間は瞬く間に過ぎた。3時すぎには寺西、5時ごろには安保、木下も来て全員そろった。事務所の整理にかかる。

まず書類と言ってもキャビネットいっぱいの手紙やコピーは、とても始末に負えぬ。ごく機密のものだけを金属製のくず籠の中で焼く。窓から出る煙に気付いたのか、守衛が飛んでくる。平素、顔なじみの愛想の好いヤツだが、血相変えて腰のピストルの留め革を外している。「何でもないよ。Don't you worry」と追い返す。とかくするうちにAPのデスクから、今にもFBIによる大検挙が始まるかもしれないとの注意の電話がある。ラガーディア市長がラジオ放送で「日本人はすべて外出せず、自宅に引きこもっているように」と告示したとの情報も入る。

ドアを固く閉ざして、さて今後の対策だ。といって格別変わったこともない。3年か5年か10年か、どうせ持久戦だ。ジタバタしないで困難に耐えていこうというくらいのこと。ただ気の毒なのは、山崎、平島の2青年である。彼らは二世で米国民だ。しかも妻子を抱えている。彼らに後難の及ばぬよう「本日限り解雇し、以後何等関係なし」という意味の覚書をタイプし署名する。財布をはたいて当座の生活費として各自に300^{ドル}を渡し、FBIが来ないうちに家へ帰れと命令する。2人とも涙ぐんでいる。興奮のためタドタドしくなった日本語で、「戦争スندگان、キットマタ、オ会イシマショウ。ドウカ、オゲンキデ」と言いながら固い握手、よい青年たちだった。

そのうちに電信会社からは、同盟の新聞電報は一切受け付けられないと通告してくる。まさに「わがこと終わる」だ。外はとつぷり暮れてしまった。捕まるなら事務所でみんな一緒にという気持ちから、近所の料理屋から弁当とビールを取り寄せて腹ごしらえ。疲労がいつときに出て、僕は別室の折り畳みベッドで横になる。いつまで待っても仕方がないか

ら、ひとまず家へ帰ろうと衆議一決。最後にブエノスアイレス支局経由で、社長へお別れの電報を一本。「Days work been done we are all high spirited and fully prepared whatever comes tomorrow wish you good luck and goodbye for awhile」—45年たつても、この文句は、まだはつきりと脳裏にある。

〔新聞通信調査会報〕第270号 1985年5月1日発行

眼前で開戦の火ぶた

井出新六(元同盟通信中支総局経済部)

「帝国陸海軍は本8日未明西太平洋において米英軍と戦闘状態に入り」——この大本営発表から既に半世紀に近い。

当時私は「国策通信社」同盟の中支総局(松方三郎総局長 経済部員として上海にいた。あの朝、北站(北停車場)に近い老靶子路の同盟社宅で突然の轟音にたたき起こされた。黄浦江上の軍艦の主砲が、対岸の英砲艦に向け火を噴いたからである。私はこの時の模様を「十二月八日の感激を語る」として、1年後の大衆娯楽雑誌「日の出」(昭和17年12月号)に次のように書いた。

まだ深い眠りの中にあつた。突如もの凄いガガーンという轟き。一瞬、夢うつつの間を彷徨した。花火への連想が頭を流れた。次の瞬間、隣室から「あ、あ、あれを見るとひきつったカン高

い声——何事ぞとあわててベランダに飛び出した。見れば河向う租界方面にパツパツと稲妻のような閃光、そして轟音。半月かかる星空のもと、まだ深い眠りにとざされていた大上海はいきなり大揺れに揺り動かされた。文字通り肺腑をえぐるような衝撃であつた。一体どんな重大事件突発か——と重苦しい恐怖に起き出した者皆が固唾をのんだ。どこの軍隊が何を目標に攻撃したのか——それさえ判らなかつた。間もなく薄墨色の闇空へひときわ黒い煙が立ちのぼつた。ところがそれは拡大の様子もなく砲声も止み大上海は夜明け前のもとの静けさにかえっていった。ただあちこちのビル窓にパツパツと電灯のともる数が増していった。間もなく黒煙も薄れ飛び出した人々も大方ひきあげた。

これこそ十二月八日という感激の日、大東亜戦争開戦劈頭、英砲艦ペトレルが撃沈された時の永久に忘れることのできない私の鮮やかな記憶である。開戦の火蓋を身をもって体験した在留同胞十万人の感激はまことに大なるものであつた。勿論一般の多くの人は砲撃当時、事の真相を知らなかつた。何かどういことが起きた興奮に暗中模索の形だつた。ところがどうだ、対米英開戦だつたのだ。夜の明けるに従つてこの事実は、それからそれへと拡まり、あの歴史的な大本営発表の貼出しに誰の顔にも極度の緊張と悲壮な決意がうかがわれた。

午前十一時を期し、目抜き街の邦人街——北四川路を大軍艦旗を立ててトラックに分乗、租界へ向けて進軍する海軍陸戦隊のつわもの達を見て邦人たちは腹の底から「万歳」の歓声をあげた。

皇軍の上海占領から四年余——蘇州河以南の租界だけは、わが警備地区外に残り、敵国陰謀の策源地であつた。その租界へこの日、この時を期して堂々の進駐となつたのだ。

私は開戦の日の上海取材に飛び回ったわけではない。社宅から歩いて10分ぐらいの北四川路の総局に駆けつけると直ちに經濟部（漢口義敏部長から一般ニュースの編集部）松田常雄部長に配置替えとなり、ローマ字電報書き換えの仕事に回された。この電文は東京本社の大陸部後に放送部が内外ニュースを編集し、主としてアジア各地に向け短波で放送するもの。モールス信号で送られ、出先の支局などで通信オペレーターが受信、それを漢字まじりの普通の記事に書き直すのである。それが印刷され同盟ニュースとして地元の新聞社、各出先機関、商社などに配布された。

この朝の入電は大本営発表に続いて超大物―宣戦の詔書があった。「天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ」に始まり難解極まる長々しいものであった。総局は9階建てビルの8、9階を使い、1階には森永の喫茶店があった。租界方面に並び立つ、しゃれた高層ビルに比べると、薄汚れて天井が低かった。編集室は9階、30坪ほどの大部屋で、編集部、經濟部を合わせて20人分ぐらいの黒っぽいデスクが詰め込まれていた。

開戦の熱気で出入りの者も多く騒然たる興奮の中で、私は「落ち着け、落ち着け」と心に念じつつ、詔書の一字一句を書き連ねた。辞書と首っ引きで全く夢中の作業であった。詔書は一句ごとに字解付き。例えば「汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ」は一応の読みの後、かついで (taishun chuugi nakoto isamashii bushi shinrai ninben kimyoo) という具合。普通の記事の2、3倍も長かった。一字でも間違えたら大変と全文を書いてタイプしてもらい、それを校正、仕上げるのに何時間かかったことか。

この後、真珠湾奇襲、マレー沖海戦の思わぬ戦果（英戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」など撃沈）と「皇軍の連戦連勝」が続く中で、上海編集部は外国通信社のニュース傍受を続けており、敗戦への転機となったと言わ

れる17年6月のミッドウェー海戦惨敗の実態もつかんでいたはずである。ところが上海在勤中にもかかわらず、なぜか私にはその記憶が希薄である。外電を直接扱わなかったためかもしれない。17年夏、東京本社に転勤し、その年の暮れに「十二月八日の感激を語る」の原稿を書いた頃までは、少なくとも日本が敗戦への坂道を駆け落ちていたとは知らなかった。当時の古野伊之助社長は「同盟ニュース」を「紙の爆弾」といって社員を励ましたものである。今思えば、私はこの紙の爆弾製造工場の忠実な工員だった。そのうえに紙の爆弾の自家中毒に陥っていたのである。

さらに、戦時中の編集局長松本重治さんの回想録によれば、「同盟がキャッチしたニュースの7割は新聞にのせられず、編集幹部、陸海軍幹部に『特別情報』として内外の実情を知らせた」という。その「特情」は100部程度。天皇も読んでいたとある。「下級記者」の私が知るはずもなく、愚かしくも「皇軍の連戦連勝」を謳歌していたことになる。いままさながら誠に腹立たしい。

私は本社に転勤して1年後の18年8月には赤紙召集によって仏領インドシナ（現在のベトナム、カンボジア、ラオス）派遣軍の一兵卒になった。20年降伏の夏は、三国直福中将率いる第21師団司令部要員としてハノイにいた。同年3月「明号作戦」というのがあって、非協力的な仏印軍に対し真珠湾攻撃と同様の奇襲攻撃をかけ、わが師団司令部は仏印軍司令部を占領した。

私はその2階建て、2階の会議室らしい大部屋で独りひそかに敵のラジオ放送を聴いていた。参謀の密命によるものだが、ボイス・オブ・アメリカ（VOA）と英国放送協会（BBC）などを聴いた。降伏直前の7月から8月にかけての短い期間だったが、ポツダム宣言はBBC女性アナの滑らかな声が「聞き取り速度で申し上げます」と何回もゆっくりと繰り返したため、十数カ条をきちんと書きとめることができた。さらに原

爆投下、ソ連軍参戦などの重大ニュースをストレートに知った。上海や東京で同盟に勤務していたときよりも一兵卒としてハノイにいた時の方が、はるかに「正確迅速」な世界ニュースをキャッチしていたのである。誠に皮肉な話というべきである。

8月15日の天皇の放送は司令部で全員揃って「拝詔」したが、雑音のため、訳の分からぬものだった。後からハノイ同盟が受信した「万世のために太平を開く」詔書を参謀(伊藤中佐)が改めて読みあげ、事態ははっきりした。同中佐は「奉読」後、忍び難きを忍び冷静に対処するよう力説した。負けるのではないか、という予感が誰の心の奥にもあったようで、特別の混乱は起こらなかった。むしろほっとした者が多かったようだ。しかし「海外にある日本軍将兵は武装解除された後、すべて本国に送還され生業に従事することを許される」というポツダム宣言の条項が、そのまま忠実に実行されるとは信じなかった。何らかの労役が課されれると思った。それにしても、米軍が上陸してきてラオス山中に逃げ込み、食うや食わずになるよりマシかなとも思った。

(新聞通信調査会報「第337号 1991年12月1日発行」)

連れ去られた上海ロイター社員

渡辺 孟次(たけじ)(元同盟通信中支総局)

その前夜、同盟通信社漢口支局長の小松利一氏が揚子江を下って上海に現れ、私たちは花札で遊んだ。寝たのは午前1時ごろ。何時ごろか分

からぬが、松原弘雄君に慌ただしく起こされた。電話だという声で私は飛び起きたが、途端に耳にしたのは飛行機の爆音と砲弾の爆発音である。「やっぱり始まった」と洋服を着ながら思った。電話の主は松方三郎総局長で、至急、ブロードウェー・マンション(プロマン)に来いという。同盟の腕章は洋服に付けていた。それが役に立った。プロマンまでの間に、中国人運転手の私の自動車は3回も陸戦隊に止められたからである。プロマンに着くと、爆発音はやんでいた。4階か5階か忘れたが、松方さんの部屋に行く間に、エレベーターに沿って工兵隊が電話線を張っているのを見た。エレベーターに乗ったら木内信胤氏(当時、横浜正金銀行副支店長)に会った。松方さんの部屋にたどり着くと、窓から下を見ろという。ガーデン・ブリッジの向こうの黄浦江に米国の砲艦が横になっているのが見えた。浦東側から砲撃されたと松方氏が説明した。開戦の詔勅をラジオで聴いたのは夜が明け始めた時間だったと記憶する。

私は11月上旬から田誠・華中鉄道副総裁(田英夫君の父君)のあつせんで華北と蒙疆を旅行し、雲岡の石仏前で同行の斎藤栄三郎君(当時中外商業特派員)に写真を撮ってもらって、大同の旅館に帰ったら、上海の松方氏から「スグカエレ」の電報が来ており、青島經由の船でとんぼ返りした。上海イブニング・ポスト紙で日米間の緊迫した情勢を知った直後だった。夜が明けきると陸戦隊の租界進駐が始まり、私は村山謙君と2人で日本人記者として最初にガーデン・ブリッジを渡り租界に入った。もちろん行き先は愛多亜路の大北電信ビルの中のロイター通信支社である。開戦の少し前まで同盟の英文部と経済部はロイターに間借りしていた。大北ビルに入ってみて驚いたのは、毎日仲良くしていたロイターの連中が廊下に座らされ、陸戦隊の銃剣の下、監視されていたことである。村山君がすぐに食事のことを聞いたら、朝から食べてないというので、ビルの向かい側、仏租界の路地にあったジミー(喫茶店)でサンドイッチを買

い込み、みんなに配った記憶がある。私たちが電話で租界進駐の模様を北四川路の同盟総局に連絡し、廊下に出たときには、ロイターの連中は既に連れ去られて姿はなかった。

その日から租界は日本軍の支配下で新しい占領行政がスタートし、私たちの多忙な毎日が続いた。そして年が明けると私はフィリピン行きを命ぜられ、1月に入ると約3年を過ごした上海を去った。

〔南船北馬〕創刊号 1981年11月発行

緒戦のマニラで抑留

牧内正男（元同盟通信マニラ、バンコク支局長）

太平洋戦争の間、わずか1年の本社勤務（最後は大陸部長）を除いて、アジア地域の戦略的2要点、マニラとバンコクで緒戦と終戦を迎えた筆者にとって、どちらかといえば、前者に関する思い出の方がより鮮やかに脳裏に浮かぶ。しかし、緒戦でも、終戦に当たっても、連合軍により2度も抑留されたことは、わたしの経歴にとって珍しい記録である。

1941年（昭和16年）12月8日、ラジオで開戦を知ったわれわれのところに雑音の多い電話線を通じて「今あなた方を押さえるために巡警隊が行くから、身を潜めたら……」という忠告が支局の現地人記者ガラング君から甲高い声で伝えられてきた。好意はありがたいが、「もう戦争が始まったのだからハラは決まっている。あなたも元気で」と答えて電話を切った。

米比官憲側に没収されるのを覚悟しながらも、開戦直後の現地反響を東京本社宛てに打電し、各種の書類も焼却した。そして「万歳」を叫んで杯を挙げた途端に剣付き銃やピストルで武装した10人ぐらいの巡警隊が事務所にガヤガヤと入ってきた。責任者らしい1人は、今までいつも事務所の周辺を見張っていた人物らしかった。

「マニラ銀座」とも言われるエス・コルタ街。フィリピン人ばかりでなく、中国人や白人が並んでみている中を、抜き身の銃剣に守られてわれわれは行くのだが、沿道からは手を振り上げて憎しみの言葉を浴びせる者もある。在留邦人とともに押し込まれたバスは、まず市のほぼ中心にあるビリビッド旧刑務所に着き、所持品検査が行われ、写真機、刃物、現金、時計、万年筆、書類などを取り上げられた。受領メモのようなものはよこしたが、これは全く形式に過ぎず、どうなったか最後まで分からない。どうも役人たちのもうけになってしまったらしい。

厳しい身体検査の後、放り込まれた鉄窓の中は電灯もつかず、おまけに水道管が壊れていてジメジメしている。時々、小銃や機関銃の音が聞こえる。これは、臆病になっている警備員が「水鳥の音」に慌てて発砲しているものらしい。不安のうちに十数時間たっても、食べ物らしいものはもとより、1杯の水さえもらえない。再びトラックに乗せられて、月明下、人っ子ひとり通らぬ街の中を進む。パツと前方を横切った子猫の姿がすこく印象に残った。間もなく急設の収容所とおぼしい所に着いたが、それから男たちは床下や庭先でゴロ寝で、1日2食、それも握り飯と缶詰と湯茶だけの生活が続いた。

こんなぎりぎりの生活の中でも、口コミによる情報は伝わる。軍用路に面する場所だから守備員たちの話ばかりでなく、品物を包んだ新聞紙、そのうえ、手錠はおろか、足かせまではめられた「新入り」の口から情報が入ってくるのである。

とにかく、敵機ならぬ日本軍の飛行機が1日数回も基地へ爆撃にやってくる。これに対する高射砲のゴウ音に、われわれは「クワバラ、クワバラ」を連発して身を縮めるのだった。そのうちに「日本軍ルソン島上陸」の情報が口コミで伝えられてきた。一方、守備員の態度もようやく軟化してきた。それは立場を変えて、自らが捕らわれの身になる場合を恐れているからである。

情報や流言は娑婆の方でも行われているらしく、われわれを見回している米人少佐も「日本軍落下傘部隊が降りた形跡がある。見つけ次第、ただちに知らせるように」と命令してきた。初めのうちは「日本軍せん滅」とか、「日本軍用機何十機撃破」とか、景気のよかった米比系英字紙や華字紙も、戦況に応じて次第に調子を変えるようになってきた。警備員の中には、逆に収容所の台所で食物をねだるものさえ出ていたが、これは、彼らの方でも兵たん、配給に不足や欠陥があることを想像させるものであった。

クリスマス・イブは空襲警報と爆弾のさく裂音の下に迎えた。そして26日にはマニラの「無防備都市」宣言が発せられた。しかし、日本軍はこれを一方的宣言として正式に認めぬ態度をとった。これは宣言を発表したにもかかわらず、依然として戦車やトラックが兵隊を乗せてバターン半島に進入するなど、時をかせいでいたからである。

いよいよ「日本軍のマニラ占領近し」とばかりに、収容所のなかでは、ハンカチに赤インキを使って日章旗や腕章の製造が始められた。「幽閉の身にもきたかや、おらが春」などと駄句った正月も、自爆や爆撃で燃え上がる石油タンク、物資貯蔵所、船舶などが吹き上げる煙は天に沖し、戦争の現実と呼び戻される。周囲を固めていた警備員たちもいつの間にか、ステッキを持つ私服に代わってしまった。なかには「日本軍が入ってきたら、われわれのことはよろしく」などと頼み込むものも出てきた。

日本軍マニラ入城の歴史的な日の1942年1月2日、南方からの上陸部隊をポロで出迎えることになった。まだ地雷が敷設してある道路をわれわれは走った。はるかかなたから日章旗を掲げた小部隊が、左右の敵ゲリラを狙い撃ちしながら徐々にやってくる。われわれは手製の日の丸を振りながら近づき、あいさつを交わした。そして日本軍トラックの東道役を務めながら、燃え上がるマニラに向かって走る。路上の両側に立ち並ぶフィリピン人たちは顔にわざとらしい笑みを浮かべながら手を振っていた。

米比軍が去って、新占領者日本軍を迎えたマニラの市街は、過渡的ながら混乱していた。裕福な中国系食料品店や雑貨店はフィリピンの窮民によって略奪され、夜は人影もなく、街には時々、ゲリラの散発的銃火や放火事件が起こる。1月3日からの日本軍による軍政施行にもかかわらず秩序ははかばかしくなかった。やっと店も開かれ、平静を取り戻したのは6日ごろであった。

「フィリピンの行政はフィリピン人の手で」という方針で、軍政監部の一部として比島行政府が設けられ、大マニラ市長のバルガス氏が1月23日、行政府長官に任命された。彼も日米比3国間の微妙な立場を覚悟していたらしく、自宅に豚をたくさん飼育し、「いつ食い扶持から離れても、豚で食っていけますよ」と語っていた。

（新聞通信調査会報」第117号 1972年9月1日発行）

乏しかったアメリカ情報

村田為五郎（元同盟通信調査局編集部長）

戦時中、戦局の動向について一喜一憂していた私たちにとって、通信社に勤務している者として、いちばん有利な条件は、ニュースを早く知ることができるといったことだった。

当時、国内で仕事をしていた社員たちに、そのときの情勢をまとめて報告してくれる役割は、情報部の加藤万寿男^{ますお}さんや井上勇さん、外信部の長谷川才次さんたちであった。市政会館¹²⁶一階の奥の一室に、それぞれの担当の編集者を集めて、時々的情勢をまとめた形で報告してくれた。それによって一般の人には分からない情報も、早く知ることができたのは、通信社に勤めている者として恵まれた立場にあったといえるだろう。

古野伊之助社長の時々の訓示なども、私たちに大きな感銘を与え、当時は何としても戦争に勝たなければならないし、また当然、日本は勝つものと思っていた私たちにとっては、大きな励みと刺激を与えてくれたのである。古野社長の訓示の中で、当時から今もなお強く印象として残っている言葉は、太平洋戦争の始まった後、編集局の部屋に社員一同を集めて社員の奮起を促した演説をされたことであった。

昭和16（1941）年7月、すでに米、英、オランダ3国は、日本資産の凍結を行い、日本の海外権益は封鎖状態に置かれていたが、太平洋戦争の緒戦の大勝利は私たちに大きな希望を抱かせた。

古野社長は訓示の中で、「日本は資源がないといって嘆いているが、これからは南方の資源が確保できるから、日本に足りない石油やゴムや鉄鋼なども、十分に入手できるし、戦争の遂行には、何の心配もないか

ら、諸君も安心してよい」と語られた。

古野社長はよく冗談のように「君たちチンピラ・インテリは心配ばかりしていて駄目だ」と言われたものだった。日本は資源のない国だからアメリカなどと戦争して勝てるのだろうかというのが、ひそかな私たちの不安でもあった。しかし、そんなことを口に出して言える時勢では、もはやなくなっていた。

古野社長の言葉は、古野さんだけの個人的発言ではなくて、当時の為政者たちは、一様にそれを信条とし、また政策の指針ともしていたのであった。何よりも戦争に必要な資源が南方のボルネオ島占領などによって確保できるなら、もはや戦争遂行に心配などいらないのだと、私たちも考えていた。それはある程度、事実であったに違いないが、当時のアメリカの資源、生産力、海上交通路確保の能力などについては、日本側の情報量はあまりにも貧しかった。というよりも、そういうことが分かっている人がいても、それを国の政策の面に押し出すことのできる時勢ではなかったということかもしれない。

今になってみると、あそこには大きな見落としがあったのだと言えるようなことでも、当時は、それが言えなかったということが、結局日本の敗戦にも、つながっていったのもあろうか。

（新聞通信調査会報」第276号 1985年11月1日発行）

戦時下、対外英文放送の記事執筆

小糸忠吾（元同盟通信海外部）

日本が対米英戦争に突入した1941（昭和16）年12月、外務省は対外宣伝放送のため調査部第5課に企画室を新設した。省内には当時、外国ラジオの傍受室があったが、それはニュース、ニュース解説や政府発表を聴くのが精いっぱいだった。

一方、米政府が検閲局（OC）を創設したのは開戦直後。局長にはAP通信社編集総務ブライアン・プライスを据えた。対内外情報サービスの総合機関として戦争情報局（OWI）¹⁸⁵が出現したのは遅れて翌年6月のことで、CBSニュース解説者エルマー・デービスを頂点とし、マスメディア各界の知名人が各部に配置された。ニューヨーク、サンフランシスコで対外ラジオ局を運営し、独自取材のニュースのほか、USIS、AP、UP、INSが無料提供するニュースを短波放送した。

外務省の企画室に話を戻すと、室長は大島文一氏。その直属上司は彼がニューヨーク勤務時代に総領事だった井口貞夫氏だった。当時同盟ニューヨーク支局から本社勤務になって3カ月半、海外部で対外英文放送を担当していた私は、大島氏に請われて企画室入りすることになった。店開きしたばかりの企画室には、ラジオ室で傍受した外国ニュースを検討する鹿児島トリオ（うち1人は後の自民党副総裁二階堂進氏）がいた。彼らはロサンゼルス、南カリフォルニア大学出身の同窓生だった。このほかエール大学に留学した緒方君（後に戦死）とハワイ生まれの二世タイピストがいた。私は同盟海外部の仕事の合間をぬっての出向である。

外務省で私は囑託の身分だったが、放送原稿を書くうえで自由裁量

を許されていた。私は大島氏と相談のうえ、対外宣伝放送を進めるにあたっての基本方針の一つとして、既に苦境に立たされている在米一世、二世に追い打ちをかけるような言辭は絶対に用いないことを決めた。

私の出稿は大体週2本。これをカナダ生まれの二世牧田和子さんがタイプし直して大島氏に提出。コピーをとって省内、NHK、情報局¹⁸⁶、その他関係官庁への配達を手配した。原稿は米国、カナダ生まれの二世嬢6、7人（アメリカ兵は「東京ローズ」と呼んだ¹⁸⁶）により海外へ放送された。

私は放送されたこれらの原稿を保存すべきだと考え、大島室長に出版の可能性につき打診してみた。その結果、外務省地下室にある活版印刷所で活字を拾ってもらえることになり、42年7月初めには放送記事89本（うちやや長めのもの4本は緒方氏、他は私が執筆）を収録する第1巻（410ページ）が出来上がった。

表題は「WE FIGHT THROUGH THE RADIO VOL.1 THE FOREIGN OFFICE TOKYO 2602」¹⁸⁷（われらラジオをもって戦わん 第1巻 外務省 東京 2602年）で、マル秘印がついている。

巻頭の「対外プロパガンダのしおり」¹⁸⁸（Introductory Notes on Overseas Propaganda）はその理論と実際を8ページにわたって説明、各章（放送原稿）には出稿年月日をつけた。

この第1巻は敗戦後、連合軍の目を恐れて処分したのか、現在、外務省、NHK総合放送文化研究所、国会図書館でも見当たらないという。残ったのは私の手元にある1部だけかもしれない。第2巻は私の徴兵検査合格（42年7月）、入隊（同12月）で計画倒れとなった。第1巻は結局、外務省の当時の対外放送を記録する唯一の文書ということになる。

（新聞通信調査会報「第373号 1993年12月1日発行」）

第2節 国内での活動

収入不足分は政府が負担し戦時下の同盟経理

上村藤吉（元同盟通信経理部長）

過日何気なく『通信社史』を拾い読みしておりましたら、同盟通信社の昭和19（1944）年度の収支実績と20年度の予算を対比した次のような表を発見しました。なぜ発見したなどというかと言えば、私は17年11月から、本社で経理部長をやらされていたところ、19年5月に赤紙が来て応召、北支の河南、河北、山西の各地をバタついていたので、このような計数には、お目にかかったことがなかった、というわけです。『通信社史』677頁679頁からその計数表を再録しますと

▼19年度収支、ならびに20年度収支予算を示すと次のとおり（単位千円）

▽一般会計		昭和20年度予算	昭和19年度実績
収入			
新聞通信		6、393	5、486
経済通信		4、903	4、903
海外通信		4、054	3、971

▽中国特別会計		収入		支出	
計	収入	雑収入	通信収入	計	通信外
18、299	12、457	144		18、299	514
17、770	13、603			17、770	110
32					
出版部費	1、169			出版部	1、134
写真部費	1、116			写真部	1、134
海外電信電話費	3、365			海外支局費	4、435
国内電信電話費	1、196			国内支社局費	4、052
本社費	2、276			総体費	2、276
海外支局費	690			本社費	4、052
国内電信電話費	1、196			国内支社局費	4、435
海外電信電話費	3、365			海外支局費	690
写真部費	1、116			国内電信電話費	1、196
出版部費	1、169			海外電信電話費	3、365
雑収入	144			本社費	4、052
通信収入	12、457			国内支社局費	4、435
収入	13、603			海外支局費	690
中国特別会計				国内電信電話費	1、196
計	17、770			海外電信電話費	3、365
	32			写真部費	1、116
				出版部費	1、169
				雑収入	144

不足金	13、866	3、999
計	26、467	17、602
支出		
総体費	3、233	1、927
総支社局費	19、233	14、172
電信電話費	4、001	1、503
計	26、467	17、602
▽南方特別会計		
収入		
通信収入	3、281	7、793
雑収入	60	205
不足金	8、605	2、291
計	11、946	10、289
支出		
総体費	1、692	2、075
総支社局費	8、520	6、391
電信電話費	1、734	1、824
計	11、946	10、289

20年度予算の内容は、20年4月1日から21年3月末日までの収支予算であります。8月15日のポツダム宣言受諾により、同盟の活動にも大きな変化が生じ、10月31日をもって解散することとなり、清算行為に入ったことは、ご承知のとおりであります。従って20年度の予算を云々するより、19年度実数を取りあげて検討する方が、妥当であろうと考えます。

19年度の中国特別会計と南方特別会計で、不足した額は630万円程



同盟通信本社経理部

度でありました。これを(以前からの処理方式に従えば)受益者たる政府に負担してもらったことでしょう。収入は3937万円でありますが、それは全国の新聞社、日本放送協会、一般経済界、各種写真の収入、出版収入等です。これは当時のように、戦局が苛烈になっても、同盟は「自前で稼げるものは、当然自前で稼ぐ」ことにしていた証左であります。

しよう。同時に政府はわずかな負担で、同盟のあれだけの陣容（終戦時の従業員は5500名）と諸施設を、国のために役立てていたということになるわけです。この政府負担額は、同盟の19年度の総支出に対し、わずか1割3分程度にしかありません。

戦時中、同盟に対する政府の各種要請は、情報局を通じたものだけではなく、現地軍からも、同盟の出先総局や支社局に対し、色々と出されていたことは明白であります。このようなことは、今日から考えますと、古野氏がよく口にされた「最小限の実費分担主義」どころの計数でなく、度外れた低い額であったわけです。

もちろん国の興亡をかけて、決戦の真っ最中だったので、国の負担分が多いの少ないのということは、問題にならないことだったのでしょう。しかし一般から見れば、国策として創設された「国家代表通信社」なのだから、その経費の大半は国家の負担（いわゆる「親方日の丸」）ではなかったかと受けとられがちであります。古野氏は、ご自分が、ニュース収集頒布の仕事に携わっておられた長い期間中、ニュースで受益する各界に向かい「最低限度の実費を分担願うだけで結構です」と言い続けてこられましたし、またこの方針を貫かれました。19年ごろの同盟従業員は、世間と同様、物資の欠乏に耐えながら、ただただ夢中で働いていたわけです。

そんなところから、古い言論・報道人の中にはいまだに、同盟の運営は「親方日の丸」ではなかったのか、という考えを持ち続けている向きもあるようです。これは当時の色々な事情から、十分な説明をなし得なかったという、無理からぬ面もあったわけです。この解釈の違いを、放っておくのも如何かと考えまして、敢えて一つの視点から、拙文を認めて、ご清覧に供することにした次第であります。

（新聞通信調査会報」第288号 1986年11月1日発行）

社長指示で市政会館に会議室設営

進藤陽吉郎（元同盟通信総務局）

戦時中、同盟本社が電通ビル内にあったことです。夕方でした。古野伊之助社長が、4階の社長室から総務局に來られ、ちよつと来てくれと、私を外へ連れ出しました。自動車に乗せられ、市政会館¹²⁸に連れて行かれました。社長は、自動車から降りると、黙ったまま建物の正面から中に入って行ったのです。建物は、戦時下のためか、各階の各室が空き室となっていました。

社長は、階段を4階まで行くと、廊下の中央に位置する一つの部屋に私を連れて行きました。その部屋は、南側に窓のついた五、六十坪はありと思われる大広間でした。天井、壁、床などが真っ黒に汚れ切っていて、至る所にクモの巣が張っていました。

社長は、黙って部屋の中を見詰めていましたが、しばらくして、「この部屋で五、六十人が集まって話ができるような会議室を用意してくれ」と言われました。私は社長の言葉を聞いて驚きました。この部屋の調度、家具、室内装飾は一切、既製品では間に合わないのです、新規に作ることにしたいと思います。1週間ぐらいの日数では、平時でもできないことでした。

戦時中のため、職人が軍の徴用でいない状態だったので、この仕事は不可能なことだと思ったのですが、社長も十分ご承知の上の言葉だと、分かりましたので、無責任にも、この仕事を承知しました。

仕事に入って7日目になり、室内の営繕は一応できましたが、カーテン、緞帳張装飾、ソファ、椅子、テーブル、家具類をそろえることが

できなかったのです。ところが、社の出入り業者の好意で、社長のお考えに沿った大会議室を用意することができたのです。これはすべて、古野社長のお人柄によるものです。この部屋に用いた室内装飾品、家具類は全部、当時、大政翼賛会発足に当たり、業者が受注、納入を用意していたものです。それを業者が、古野さんのために商売の心を捨てて、納入先を同盟に変更してくれたのです。

〔新聞通信調査会報〕第295号 1987年6月1日発行

室蘭支局の開設から撤収まで

佐藤文三郎（元同盟通信室蘭支局長）

昭和17（1942）年3月上旬のこと。「文ちゃん、きょう昼食を一緒にしよう」と部長の山口巖^{いわ}さんから誘いがかった。「こんど北海道の室蘭に支局を新設して無線の受信をすることになった。君の希望しているシンガポール行きは一時棚上げして、室蘭支局長として行ってくれないか。業務部長のドンチャン（塚村敏夫さん）が現地に行っている準備作業をしており、近く帰ってくるはずだから、よく打ち合わせてくれ」

暦の上では春も半ばになろうというのに、北海道はまだ冬の営みを続けていた。札幌には七、八十^{センチ}の積雪に毎日吹雪が舞っていた。任地の室蘭は、雪こそ少ないが室蘭湾には海の氷が張りつめていた。

支局を開設する室蘭日報¹⁸社は室蘭駅から歩いて15分ほどの室蘭湾を一望できる小高い丘の上にあった。社長は鈴木さん。編集局長は谷村さん。

朝夕8^バ建てで発行部数は公称3万となっていた。アンテナの建設、無電受信室、デスクの配置や調達などなど、忙しい毎日の連続だった。やがて本社から待望の無電機が到着し、オペレーターの操作で「ピーピー」と甲高い音響が入ったときは、言葉で言い表せない感動だった。支局の構成は支局長、オペレーター2人、手書き要員3人、ボーイ1人の計7人。

5月半ばから本格的作業に入った。同盟支局が開設される以前の室蘭日報社は、札幌、函館の同盟支社局から1日4、5通話の予約で、中央ニュースを受けていただけで、ほとんどローカルニュースで紙面をつくっていた。ところが室蘭支局の作業開始と同時に中央ニュース、特に戦争のニュースが東京から空を一またぎにして飛び込んでくるようになった。当時の室蘭市は人口約7万。測量^{そりょう}山や地球岬^{めづみ}など景勝の地としても知られていたが、開戦と同時に要塞として一般人は足を踏み入れることが禁じられていた。

同盟の支局ができたと知って、官庁関係や学校、婦人会の人たちの見学申し込みが相次いだ。3本の電信柱をつないで立てたアンテナを通じて「大本営発表」の記事が間髪を入れずに飛び込んでくる。オペレーターがカタカナで受信し、デスクでそれを新聞原稿に書きかえて新聞社の整理部に流す一貫作業を、目を見張って眺めるのであった。学校の綴方の時間に同盟通信社が取り上げられたことを後で知った。

室蘭は天然の良港で栗林商船はじめ多くの船舶関係の会社があり、日本製鉄など鉄関係の会社が多く、北海道最大の工業都市として知られていた。これらの大きな工場が同盟からの情報を手に入れるためもあってか、幹部が支局を訪れることが多くなり、つながりも日を追って密になった。

18年の秋も深まる頃だったように思う。札幌支社の滝谷（實）支社長が、

前触れもなく自宅に訪ねてみえたとの連絡があった。「佐藤君、社の方針で室蘭支局の無電受信をやめることになった。道内の新聞統合で、小樽と室蘭は北海道新聞の札幌本社から新聞を送ることになったからだ。これからの室蘭支局は業務関係だけを残し当分1人にして、後日札幌支社長が支局長を兼務することになっている。支局員の処遇については本人の意向を聞いて決めなければならないが、君はこの残務整理が済んだら札幌支社編集主任としてきてほしい。ポストを空けておくから……」アンテナ用電柱も取り去り、19年の1月、残務を整理したうえ夢のようなうつろな気持ちで室蘭の駅を離れた。

〔新聞通信調査会報〕第282号 1986年5月1日発行

鉄道電話で仙台大空襲の一報

桃井幸吉（元同盟通信仙台支社）

同盟10年間は、青森支局、仙台支局（その後、支社）で聞きづらい専用線と、虫食いの同報無線を主軸にした通信部に属していたが、同盟末期には企業への情報（週報）売り込みにも参加した。どうしても忘れられないのは昭和20（1945）年7月10日の仙台大空襲と、古川秋太郎・仙台支局長ご家族の死である。

空襲で全市の大半が焼けたが、幸い支社のある河北新報社は類焼を免れた。肝心の電話回線がやられたため、支社は孤立状態になったが、社員の決死的な取材で本社への第一報がまとまった。

「仙台は10日午前0時5分、B29約100機に空襲され、約2時間30分、焼夷弾でやられ、死傷者約2800名、建物全半焼約1200戸」。電話が不通とあって一時は右往左往したが、かねて本社の指示で非常手段として鉄道電話を利用する手が生きていることが分かった。しかし近くの仙台駅も焼けていたので、「それでは南方の長町駅（約5^{キロ}）まで歩いて行こう」と徒歩で同駅まで行き、新橋駅の鉄道司令部を呼び出し、待機していた本社員に急報した。たしか朝8時ころだった。

さて深夜の空襲でまわりは火の海だ。やっと支社に着いた。当直は佐藤好也君であった。河北の一次郎社長以下同社員が駆け付け防火に必死だ。佐藤君といっしょに屋根に上り、バケツで水を運び消火に協力した。

太平洋戦争は末期の様相を呈していたが、同盟は一般ニュースの他に、特に内外重大情報や、経済週報の企業進出を策し、同時に本社は仙台をブロック支社に格上げし、当時の古川支局長は福島支局長に転任し、後任に関門支社長の塚本氏が仙台支社長として着任した。古川氏は單身福島に赴任し、家族は仙台に残した。古川氏がたまたま妻子を福島へ連れて行くと仙台へ戻った7月9日の深夜、不幸にもあの空襲に遭ったのである。古川氏は生後1歳の長男をおんぶした奥さんと一緒に避難するため自宅を出たが、奥さんは途中、煙にまかれ行方不明になったのである。

〔新聞通信調査会報〕第282号 1986年5月1日発行

無線機持ち鳥取大地震現場に

檜村雅信(元同盟通信岡山支局)

昭和18(1943)年9月10日夕、鳥取市が大地震に見舞われ、同市の住宅など建造物は90%近く倒壊し死者も1200人を超えた。岡山支局に勤務していた18歳のときだった。

11日朝出勤すると「すぐ同報無線機を持って鳥取に行ってくれ」と当時の支局長白川重吉氏と宿直明けの今井至郎氏から指示を受けて出発した。その頃鳥取行きは直通列車はなく、津山駅で乗り換え。駅長は危険だからと拒否したが、事情説明で「安全は保証できないが…」と緊急用務用の腕章をもらい救援列車に乗り込んだ。

県境のトンネルを抜けて、しばらくは平常運転だった列車は、被災地に近づくにつれ揺れが激しくなり、転覆するのではと思うほど傾斜し、途中停車も多く、歩くほどしか進まない。無線機には真空管がたくさん使用されているため、万が一にも損傷があつてはならないと膝の上に乗せていた。小型といっても重量は約20^キ。時間がたつにしたがい、足に食い込むような「鉄」の重みを感じた。列車は、日暮れ近くになって鳥取駅ようやく到着した。駅頭に出てあつと驚いた。満足な家はほとんどない。宿舎は、崩壊を免れた図書館だった。毛布をかぶりゴロ寝、不安な一夜を過ごした。

(「新聞通信調査会報」第282号 1986年5月1日発行)

無線機は日銀支店の地下室に

得能益忠(元同盟通信松山支局)

同盟に入社したのは昭和16(1941)年の春、衆議院速記者時代に患った難病の後遺症である左足関節障害を克服し、再起に備えて郷里松山で道後温泉通いを日課にしていた頃のことである。松山支局長の山田繁治氏から声がかかり「支局の曾山主任が急に転出するので、あとがまの速記者にどうか。NHKへのローカルニュース提供が本決まりになったので、外勤1人と計2人、このさい補充を本社へ申請したい」とのこと、そのとき同時入社したのが近藤善寛氏である。

当時支局は、米穀取引所裏の古ぼけた木造建物の2階にあった。支局員は男女合わせて8人、それに電報局から出向のオペレーター1人(4人交代制で、ニュースは無線受信のカナ文字電文と広島支社から電話受けの二本立て。配信先は地元の海南新聞、伊予新報、宇和島の南予時事(電話送り)の3社。反訳した原稿にカーボン紙を入れて4部取り。何もかもが手仕事なのと、各社の締切時間もまちまちなので、特に、夕刻はてんでこ舞いの思いをしたものである。

やがて大戦に突入。山田支局長はパレンバン支局設営のため南方に飛び、後任に岡本友三郎氏着任。いよいよ本格的戦時体制に移行し、上記3社も統合されて愛媛合同新聞となり、社屋は伊予新報社に決定。それを機に支局も同社の一室に移転した。これで配信作業は単一化され、ニュース量も用紙統制につれ漸減(女子雇員2人は相次いで退社)、一応楽になったようなものの、業種別活版通信の予約取りや年鑑の売り込みに出歩くなどけっこう暇はなかった。

そのうち戦局は日に日に悪化。松山にもグラマンが日課のように飛来し、あたりかまわず機銃掃射していく。そこで支局は県庁屋上の展望台に移転、無線機器は市内で一番堅牢な建物といわれた日銀支店地下室に据え、両方で仕事するようになった。これらの作業が支障なく運んだことから当時の同盟の威信がうかがえる。

東京、大阪はじめ、すでに全国27の主要都市が大空襲を受けているのに、松山が無事なのは道後温泉温存の意図からだろうか（戦後進駐軍に接収されるなんて話をしていた矢先の20年7月26日、B29の大編隊に襲われ温泉地区を残して市内は一面の焼け野原と化した。新聞社は輪転機、平版印刷機各1台を市の東部石手川堤防下の選果場に疎開させていたの

で、タブロイド判を印刷（電力がないので手作業）、1日も発行を絶やさなかったのは見事。

開戦当日は終日勤務

前川春吉（元同盟通信熊本支局）

昭和11（1936）年6月1日、同盟通信社熊本支局が開設された。支局長は河邑光城氏。当時の社屋は、熊本市行幸町1番地（現在桜町）の2階建て日本家屋（1階は支局長の住居、2階が事務所）。17年4月に九州日日新聞、九州新聞が統合して熊本日日新聞となる。支局は熊日の3階に移った。

16年12月8日朝、井戸端で洗面中、NHKの7時のラジオ放送を耳にした。「戦争になった」と言い残して、朝食もとらず粉雪舞う中を徒歩で急ぎ支局へ向かい、7時半、支局に着いた。支局長の河邑さんが座り込み、受信するだけで翻訳できずにおられた。早速、支局長と受信を交代、一番出の9時まで頑張る。この日は終日勤務となった。

支局の業務は、新聞社へのニュースの配信と同盟速報の発行。速報は支局長と熊谷啓二氏が担当。1日3回、諸官庁、銀行、会社、商社に配布していた。第2次大戦中は、万々に備え、市内の京町台下に掘られていた大きな横穴の防空壕と、社員住宅の2カ所に電話機など通信機材、謄写版その他一式、筆記用具、原稿用紙などが分散されていたという。避難集合地は、熊日から300メートル余り離れた大甲橋際と指定されていた。20年7月1日深夜から2日未明にかけ、熊本市はB29の焼夷弾の攻撃を受け、古い町並みを残し、市街地は焼け野原になった。翌早朝、自宅へ帰ってみれば、わが家は影も形もない状態で家財の一切を焼失した。熊本日日は戦災を免れ、支局も安泰だった。

（新聞通信調査会報」第282号 1986年5月1日発行）

早めに配信終え、釣りに

中村俊一（元同盟通信大分支局）

昭和16（1941）年7月、同盟通信社福岡支社で行われた満州国通信社、同盟両社の速記者採用試験に合格した私は、関門総局の塚本、日笠

岡氏の肝いりで、同盟大分支局に採用された。当時、支局のスタッフは、支局長岡本友三郎、社員岡崎保、中村俊一、本田顕吉、木下、西田の計6人。このスタッフは、同年12月の開戦時まで、岡本氏と交代して本社整理部から着任した大西保太郎支局長を除き、変わらなかった。

支局は、大分市荷揚町にあった。支局といっても普通の民家で、2階が仕事場となっていた。本社とのニュース送受信は、関門総局との予約電話と短波無線に依存していた。無線受信は、通信省から出向の瓜生田小野、森田、後藤ら4人のオペレーターが交代でこれに当たっていた。この家は、かつて荷揚町辺りに散在した赤提灯の一つで、支局となつてからも、灯ともし頃になると、時折酔っぱらいが上がり込んだ。

当時の加盟紙は大分新聞と豊州新報の2社で、同盟からのニュースは、同時配信の方法をとっていた。締め切り時間の名人がいて、両方の新聞社に「相手社はもう締め切った」と言つてその日の配信は午後1時ごろで大体終わりにしたものである。これ以後のニュースは、関門に依頼し、翌朝のバッグ便に託してもらふシステムが採られていた。私たちが仕事が終わると、釣り竿を片手に大分川の河口によく魚釣りに出掛けた。当時は、現在のように石油タンクや工場群が櫛比する新産業都市とは違い、白い砂浜の向こうには、紺碧に広がる別府の海があった。

平穏な日々は、長くは続かなかった。年を経るごとに食糧が不足し、米麦の粉かすや、かぼちゃの茎を食う日が多くなった。ことに20年3月18日以来、B29による空襲は日ごとに激化し、市内舞鶴のわが家一带は、大分海軍飛行場が近かつたために、連日500キロ爆弾に見舞われ、ついにはわが家も星空が見える、廃屋同然となった。6月、暗号兵として西部軍に入隊したが、7月に病を得て福岡の野田目の陸軍病院に入院。ここで8月15日の終戦を迎えた。

（「新聞通信調査会報」第282号 1986年5月1日発行）

業種別通信の発想は大阪内信部

神坂鶴太（元同盟通信大阪支社内信部）

『通信社史』は、少なくとも業種別通信に関する限り、腑に落ちないものがあつた。第一着手として開発した「同盟海運通信」の経緯などは、極めて無表情に「これよりさき、大阪において海運通信が発行された」と触れているだけである。新しい転換に内蔵する意義とか、苦悩、焦燥が、少しも分かっていないのである。

業種別通信の発想は、大阪支社内信部によるものであつた。テストケースとしてまず「同盟海運通信」が創刊された。経過は極めて順調で、後に続く各業種別通信発刊の立派な前衛的役目を果たした。第1号は昭和14（1939）年ごろだったと記憶している。17年ごろには、神戸の海運通信はもちろん、各種の業種別通信を経済局内経部の傘下に集約していた。

業種別通信開発の最大のメリットは、今はやりのニューメディア的転換であつた。従来、同盟のニュースは、新聞社をメディア（媒体）としなければ一般大衆に情報伝達することができなかった。しかし業種別通信の出現によって事情は一変した。新聞社を媒体としなくても直接、読者に情報を流すことが可能になった。第2のメリットは企業利潤の飛躍的増強であつた。戦争の後期には、業種別通信の収益が加盟新聞社の負担金を圧倒するほど飛躍したといわれている。第3のメリットは、同盟解散時に、利潤追及部門を母体として設立された時事通信の有力な基盤となつたことである。海運通信創刊には、神戸の海運協同会にいた細谷藤四君、海運集合所にいた樽谷義雄君など卓抜な同僚が参加した。

米飛行機の写真をスクープ

木村良一（元同盟通信内経部）

私が同盟通信社の内経部で楽しく働いていたのは昭和19（1944）年で、大東亜戦争が日一日とわが国に不利になってきていた当時である。家へ帰ると、どこの誰が戦死したとか、貧しい誰々さんが何人かの幼い子供を残して出征したとか、戦況がだんだん悪くなっている、などという話ばかりで陰鬱^{いんうつ}だった。

しかし朝になると、私は別人のように元気になった。社へ出勤すると楽しく仕事ができるからだ。当時、部長は板垣武男氏で、大変にらみを利かしていた。よいということはどうしどし指令して実行に移した。そしてそれはよく行われていた。時々実施する社内の分会の軍事訓練のせいもあったのか、各自の能力は別としてみんなよく服従し働いた。今はいくつかでよいという気持ちだったが、よい部次長が2人いたからでもあった。次長は確か鈴木健氏と三浦良知氏である。

三浦氏は毎日、忙しい忙しいと言っていた。隣の机が私なので、座ると私も忙しいような気になった。思い込むとなかなか考えを変えない人だったが、よい人だった。鈴木氏はりっぱな次長だった。健さんとみんなから慕われていた。初対面の私も、いつしかそう呼んでいた。そして今もそう言って指導してもらっているが。

この2人の補佐があつて板垣部長はさらに光っていた。だから、部長から一若手記者まで部は一体となつて、随分社のためにプラスとなつていたと思われるのである。

部首脳部の英断で、私がよい記事が取れたことを述べたいと思う。その年の暮れ近くに私は召集されてしまったが、それまでは解説版に出すからと、米国の兵器、特に飛行機を調べて記事にするようにと言われ、それにかかつていた。初め取材のため、私は陸軍省と海軍省に何回か通い詰め、クラブのキャップにも頼んでみたが、頑固な軍部は軍事秘密と言って私を拒んだ。それでも引つ込むわけにはいかなかったので苦心していると、どういう訳か陸軍科学研究所に食い込むことができた。が、ここでもそつけない軍隊用語で断られた。私はない知恵を絞つて、課長という大佐や、部下の中佐らにいろいろ説いた。

すると、同盟の社長の書いたものを持って来いという。何だかんだで社から借用書を出せば借りられるまでにこぎ着けた。しかし、果たして社がそんなものを出すかと危ぶんだ。鈴木氏は部長に話せというので、思い切つて話した。難しい顔をして目をパチパチしていた部長は、文面を見てから社長室の方へ行き、社長印を押してくれた。これでようやく苦心が報われた。部長らの決断で秘密だという米国の飛行機の記録と写真が全部借用できたのである。そして、当時どこの新聞にも雑誌にも系統だつて出ていなかったのが、わが社の（配信先新聞社の）紙面を飾つたのであった。

（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」）

同盟航空部始末記

森元治郎(元同盟通信航空部長)

戦が始まると戦局は、あつという間に、西はビルマ(現ミャンマー)からマレー半島、蘭領インド(現インドネシア)、比島(フィリピン諸島)へと広がった。同盟としては、この広大な地域にどうやって速やかに記者や通信機材を送り込むか、その方法が問題になった。

航空部が発足

そこで社が考えたのは、まず「航空部をつくり、飛行機は陸海軍から貸与してもらう」という虫のいい話であった。そのためには、まず軍に顔が利く住谷金吉さん(陸軍省語)を部長に、海軍担当の私が編集局兼務のまま次長ということで、昭和17(1942)年7月、にわかづくりの航空部が発足した。燃料は向こう持ち、こちらは乗員の人件費を負担するだけ。ただし「軍の要請があった場合には、これに応ずる」という取り決めた。

搭乗員集めには苦労した。そこでまず、負傷や病気のため兵役免除になって、今は民間で働いている、軍の元航空機搭乗員に狙いを定めた。最初に採用したのは、海軍から推薦のあった山内保三である。彼は明大出身、学生航空のリーダーの一人で、海軍予備大尉の肩書もある。技量の程は分からなかった。とにかく部の支柱はできた。あとの機関士、通信士については、大日本航空(後の日本航空)に、お百度を踏んで、本職の曽我晴行、三森正直を回してもらった。整備員も集まったのでーチー

ムの編成が可能になった。

こうなれば一日も早く社の期待に応えようと訓練を兼ねて上海、台北、サイゴン(現ホーチミン)、昭南(シンガポール)、ジャワ、フィリピンと、南方一巡の初の大飛行に出たのが10月18日である。使用機は海軍から貸与された「中攻」(九六式陸上攻撃機)である。操縦士はメインが山内、サブには元海軍2飛曹の遠藤正三をあてた。私は社会部のころ「飛行記者クラブ」にいてリンドバークや、太平洋横断に成功したパングボーンらの取材に働いたことがある。ワルシャワ特派員時代にも、フォッカーなどによく乗っていたので飛行知識、経験にはうぬばれがあったので、機長気取りで同乗した。

戦線がさらに南に下ったせい、味方機の姿さえなく大空には同盟1機だけであった。何の心配もなく穏やかに飛び続けた。便乗者は吉田松治、殿木圭一君ら。帰途スラバヤから古野社長も利用してくださった。

昭南ではわが社員や報道班員、それに軍人からも子供の革靴からハンドバッグ、チョコレート、砂糖など、わんさと内地に届けてくれるよう託された。中にはこもに包んだ大型ミシン1台をこっそり機内に置き去りにした者がいた。あまりの図々しさに機外に蹴落としてやった。

山内機が不時着

スラバヤまで来たところ、古野さんにつかまり、「君はマカッサルで海軍軍政地区(セレベス、アンボン、ボルネオ)の支社局開設に当たれ」と命ぜられ、マカッサルで降ろされてしまった。ここまで来たのにと恨めしかった。「支社長事務取扱」の仕事が始めたのは18年1月からである。この間、3人の若い社員を殉職させる悲劇を味わった。任を解かれて本社に戻ったのが5月である。驚いたことに山内機(機長名をとる)が大事故

をやっていた。

それは2月13日午後5時ごろのことである。山内機(中攻は台湾の屏東から上海に向かうとき、航空士が天候不良だから延期した方がよいと進言したが、頑固に拒否して飛び立った。案の定、上海付近まで来たとき雪に遭い、エンジンも凍結してストップ、揚子江の河口にある崇明島(崇明島)に不時着して大破した。幸い乗員、便乗者に異常はなかった。上海総局との無電連絡がうまくとれ、陸海軍の救援隊が駆けつけてくれたので、ゲリラに襲われる心配もなくて大助かり。機体は、そのままにして、乗員5人は陸路内地に帰ったという。

私はかねてから「同盟機は軍用機ではないのだから決して無理するな」とえ軍から言われても断れ」とまで厳しく注意しておいたのにこの始末。事故なんて予測していなかったからショックだった。

夏ごろには、操縦士に塚本松哉(元兵曹長)、尾上勇(元2飛曹)らが入っ



同盟通信機前の森元治郎航空部次長(右)と山内保三機長(左)＝1942(昭和17)年11月、サイゴン(現ホーチミン)

て来た。遠距離の洋上飛行に慣れていない陸軍出身者からの応募はなかった。大掛かりの修理や点検は、軍側でやってくれたので、地上整備員の数は少なくとも2チームをつくれるまでに成長した。

参考のため、乗員たちの給与のことを付け加えておく。操縦士、機関士、通信士など幹部クラスの月俸は1200～2000円、固定給が500～1000円の間であった。このほか乗務ごとに、特別乗務手当を支給した。最高額は1キ。当たり7銭だったと記憶している。これも人集めのため、よそよりぐんと弾んだので、特別手当をもらうときの彼らの顔は、ほくほくだった。

本格的に運航を始めてみると、いろんな事故が起きた。10月27日、海南島の海口飛行場にいた遠藤機(三菱MC20旅客機)が突如、飛来した敵機に銃撃されて曾我機関士が重傷を負った。これ以後、19年秋までにいくつかの事故があった。正確な年月日は確認できないので省く。第一は山内機(中攻)が台湾の嘉義飛行場に降りるとき、舞い上がってきた陸軍機をグラマンと勘違いして慌てたため脚をねじって小破、お粗末な話。第二は塚本機(中攻)がスラバヤで脚上げ操作が早過ぎて、つんのめって小破。第三は遠藤機(MC20)が雁ノ巣(福岡第一飛行場)で離陸に失敗して壊れてしまったことである。

そんなことが続くと、乗員の間から「もうあいつとは乗らぬ」と、ストライキまがいの不穏な動きが出たりして、私も収拾に大汗かいたことがある。山内、遠藤は19年になって辞表を出して去った。

航空部長となる

しばらくの間、整理部次長に横滑りしていた私は、19年8月1日付で住谷さんに代わって航空部長になった。古巣に戻ってみると、1カ月前

に、かの有名な零戦のテストパイロットだった志摩勝三が入社していた。零戦の設計者である堀越二郎の折紙付きのベテラン。硬骨漢だったので上司と折り合わないで海軍軍籍を退いたという。彼の入社で、部は活気づいた。育ちの違う寄せ集めの乗員間の「和」もでき、度重なる運航で、その練度もぐんと上がっていた。それに「わが社」精神が身についたのがうれしかった。剣持、塚本、志摩の3ベテラン機長、部員20人、部は最充実期を迎えた。しかし、残念ながら、サイパンが落ちたため、遠く南へ飛ぶチャンスは、ほとんどなくなった。

こんな空気のと看、陸海軍から飛ばしてくれの催促が相次いだ。こちらでも、取り決めに従って出すほかはない。まず初めは海軍からであった。九州の鹿屋基地へ機銃弾を運んでくれというのである。後で知ったことだが、これは「幻の大勝利」に終わった台湾沖航空戦のためのものであったようだ。西日本に空襲があるので、乗員は気乗り薄の様子。そこで私は「俺も一緒に行ってやる」と大きく出たので、みんなは納得した。10月20日、志摩機(ダグラスDC3)は横須賀から機銃弾を満載して鹿屋に向かった。途中で警報解除というラジオを聞いて生きた心地もなかった。

12月初旬になると、こんどは陸軍から「比島のクラーク基地(マニラの西北)から急ぎ、人と物を運んで来てくれ」と言ってきた。こちらは米軍がマニラに近いミンドロ島に上陸の気配ありとは知らないから、すぐ承知した。塚本、剣持(いずれも陸軍の97式重爆撃機を使用を出すことにした。出発地は九州の新田原陸軍航空基地。台湾の屏東經由クラークへ片道約2600^{キロ}である。両機は、10日ごろ相前後して出発した。

両機長の談によれば、薄暮に基地に着いて、翌日は夜明け前に飛び立った。まだ帰還待機者がたくさんいた。危ないときは、北ルソンのツゲガラオに一時待避したこともあった。両人は月末までに2、3回は往復している。剣持が3回目を終わって羽田に帰ったのは29日、志摩機が

運命のクラーク行きの前日であった。民間機が、こんな危険なピストン飛行を無事やってのけたのは立派なことである。

軍からの要請

下旬になると、海軍航空本部から「硫黄島へ1機連絡に出してくれんか。発進地は北海道の美幌^{びほろ}だ」という。同盟機の実力を買ってくれたのは光栄だが、途中不時着するところもない遠い孤島までは、とても無理だと判断して断った。

するとまた海軍からこれもクラークから帰還要員を内地に緊急輸送してくれ、頼むと言って来た。外務省からも、福島慎太郎(後に共同通信社長)という1等書記官を乗せてきてくれとのお願いがあった。こちらは運ぶだけで、人を選ぶ権限はないので聞き流しておいた。こんな大事なことから、海軍から、ちゃんとした航空部を持っている朝日、毎日、読売にも要請があったはずだと思う。海軍が要請したのかしないのか、要請があったとすれば、どう答え、いかに対処したか。陸軍の場合も同様、同盟としては当然質すべきだったが、ついつうっかりしてその手を打たなかったのは、私の大きな手抜きであった。

大本営発表は、寄せくる敵の艦船を撃沈破して、まだ余裕のあるところを見せているが、私はわが社が入手する外電から察すると、米軍の比島上陸近し、危ないと判断し、いかに回答すべきか悩んだ。部会を開いて、皆の意見を聴いたが誰も黙っている。すると志摩が立ち上がって「私が行きましょう」と名乗りをあげた。私には意外だった。彼はベテランといっても、37歳で2歳の子もある。軍籍もない、自分から飛び出した海軍に義理を感じている様子はない。今更、快速といっても旅客機で、戦場になりそうところへ突っ込んで行く客気^{きゃき}などはありません。

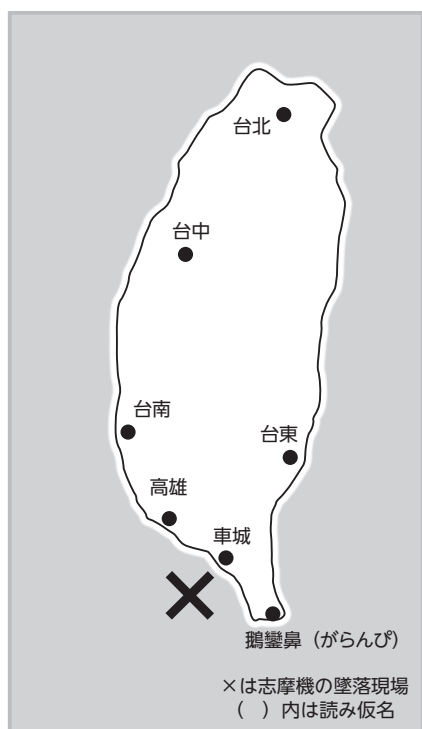
い。

ではなぜか、と言えは、おそらく同じ海軍出の塚本、剣持が、目覚ましい活躍をしているのを見て、いたたまれないで申し出たのではないかと想像する。腕はよし、親分肌の頼もしい一言に皆はつられるように「志摩さんが行くなら一緒に行く」と声を上げた。一つの勢いである。私も「いや待てよ、慎重に」とは言いそびれてしまった。いよいよ出発準備だ。

他にマニラを目指す塚本機(97重)と、五日市にある昭和飛行機へ空輸する国産のダグラスがあつたので、どうせやるならと、30日に3機同時に出発させることにした。

志摩機帰らず

私は航空部の充実ぶりをお見せしようと古野社長に、ご来場を願った。社長の姿をみつけた搭乗員十余人は、たちまち整列して「社長殿に向



同盟機墜落＝「新聞通信調査会報」第268号
(1985年3月1日)

かつて『頭―中』と号令、挙手の礼。これにはさすがの古野さんも照れくさそうに腰をかめられたのは、おかしかった。この日は快晴、羽田飛行場は空っぽだった。私が振り下ろす小旗を合図に3機は、鮮やかに離陸した。こんないい気分はない。機種が違うのに見事な編隊を組んで、われわれの上空に飛来、一斉にサヨナラのバンクをして去った。志摩機は遂に還らなかつた。

志摩機は雁ノ巣経由で台北に着いたのが31日である。当初の予定では、20年の元旦に台北を発つて2日に戻るはずであった。当時、品質がぐつと悪くなっていたプラグ交換のため1日を空費してしまつたらしい。これが運の尽き。台北支局から「2日にたつ」のバタ(連絡)が入つた。明日は帰るんだなと思つていたところ、3日午後、「志摩機、高雄沖で撃墜さる」の緊急バタで、がくぜんとした。

志摩機は、うまくクラークに潜入、3日午前10時半には、台湾の南端「車城」(高雄ではない)にさしかかったところ、グラマンF6Fの3機の急襲に遭い、撃墜され海中に没してしまつた。運悪く、この日、米艦載機による台湾初空襲に引っ掛かつてしまつたのである。志摩機長、尾上副操縦士、三森通信士、整備員松本貞男、山田三郎の5人全員が殉職した。便乗者の数も氏名も分からない。気の毒の至りである。5人は軍属として「戦死」の取り扱いを受け、それぞれ叙勲された。

社としては、各人平等に1万3千円の特別弔慰金を贈つた。私が茫然としてみると、部員の1人が「部長は現地に行かんのですか」と詰め寄つたが、私は即座に「行かんよ、また人を殺すだけだ」と突っぱねた。

敗戦とつむぎ

22日には若い整備員の笠原美孝君が羽田で整備中に事故死。3月に入

ると、海軍から大阪にある川西航空が作っている最新鋭の戦闘機「紫電改」を、四国の松山にある343航空隊（司令は源田実）のところにヘビーストン空輸してほしいとの要請があった。私は新参の操縦士2名をつれて約1カ月これに協力した。事故の跡始末や慰霊祭も終わったが、部内の空気が湿ったまま。乗る当てのない乗員が、うろろろしているのを見るのが辛かった。5月25日の大空襲で同盟別館は焼失、航空部の何もかも灰になってしまった。乗員も社に出て来なくなった。私は所在のないままに、秘かに東郷外相に頼まれた終戦工作に深入りして行った。

剣持も手持ち無沙汰である。残るは塚本チームだけが、陸軍につかまって、所沢と満州、北支へ息もつかせず、こき使われていた。彼がどこで何をしているかも皆目分らない。8月15日、塚本機は所沢にいた。軍はまた飛ばせたいらしいが、勘のいい彼は、終戦近しとみて、整備などで時間稼ぎをしているうちに玉音放送となった。彼はすべてを捨てて本社に帰った。25日、私は念のため羽田を見回ったが、掘っ立て小屋の同盟事務所は跡形もない。同盟の小型機を含め、大日本航空や各新聞社の飛行機はブルドーザーで海老取川岸に山と掃き寄せられていた。すごい機械があるもんだと感心しただけで、悔し涙は出なかった。乗員は四散して、残ったのは塚本1人だけである。かくして、同盟航空部は敗戦とともに潰え去った。合掌。

〔新聞通信調査会報〕第280号 1986年3月1日発行

幻の東南海大地震の津波目撃

大沢正作（元同盟通信航空部）

私は昭和18（1943）年2月、同盟通信社に入社、航空部に配属されました。当時の航空部は住谷金吉部長、森元治郎次長以下内勤職員4人、航空機乗員は山内、塚本、大沢、石原、志摩の5人が機長、このほか機関士、航空士、整備士、通信士などがおられました。入社当日、山内機長の中型機が中国の上海付近の揚子江中州に不時着したとの情報が入り、住谷部長が大変緊張して、部屋の人の出入りが激しかったことが記憶に残っています。

翌年、今度は志摩機長のダグラス機が台湾沖で米軍のグラマン戦闘機に撃墜されました。志摩さんは当時のわが国航空界では有名なテストパイロットでした。

入社当時の私には、住谷、森ご両人の存在がとても大きく、公私さまざまな面で親切なご指導をいただき、早速陸軍航空本部に派遣され、陸軍軍属になりました。特に森さんのお人柄につきましては、忘れられない多くの話があるのです。それは以下の通りです。

一、森さんの入社は満州事変発生年の年（1931年）。入社早々満州に特派され、報道機関として初めて無線を使って他社を圧倒した。

一、その後ワルシャワ特派員になり、第2次世界大戦の口火を切ったナチス・ドイツのポーランド侵攻の第一報を打電。

一、帰国してマカッサル支社開設。19年、住谷さんと航空部長交代。

一、終戦間近、終戦工作に体を張った。中央公論社から『ある終戦工作』（新書）を出版。映画『黎明八月十五日』の主演となった。

一、終戦後、期するところあってでしょう。同盟解散の後、片山（哲）首相秘書官、参議院議員として活躍された。

この森さんの指示で、私は空から幻の大津波を眺め、特攻隊の出撃を涙で見送ったのです。19年12月7日、森部長は「大沢君、もう日本はおしまいだ。特攻隊を見ておくといい」と、確かこんなふう言って、私に宮崎県新田原基地への出張を命じられたのです。軍属の私は腕に同盟の腕章と軍属バッジを付け、立川飛行場から陸軍機に搭乗しました。

機は海岸線に沿って九州へ向かいましたが、伊勢湾上空に差しかけたところで、機長が「同盟さん、海が変ですよ。津波かもしれません」と言うので、機の小さな窓から下の海を見ると、大きな、不気味な白波が幾条もうねり立って見えました。これが東南海大地震の津波でした。機は無事、新田原基地に着き、その日は近くの宿屋に泊まりました。翌12月8日は快晴でしたが、気温は低く寒かったことを覚えています。

沖縄海域の米艦船に体当たりに向かう特攻機（神雷隊）の若い学徒兵は私とほぼ同年配です。基地司令官との別れの杯。飛び立つ機上の白いマフラ姿。手を振って発進して行きました。あの時の身の引き締まる思いは、55年たった今でも頭から離れません。涙が出て仕方ありません。軽々に語れないのです。

特攻隊出撃を見送った後、私は再び陸軍機で立川に戻ることになり、新田原を飛び立ちました。往路と同様大きな機体の中は空っぽ。座席もなく冷たいジュラルミンに尻を置いていました。紀伊半島に差しかけたところ、機長から「同盟さん、油圧系統が故障です。不時着します」と説明があり、肝を冷やした。明野基地（三重県）に着陸したときは正直はっとしました。汽車で帰ることとし、明野駅（近鉄線）にたどり着いたところ駅員は「地震と津波のため東海道線は不通」と言う。やっとの思いで名古屋に出て、中央線乗り継いで帰社しました。

この東南海大地震は、戦時中で報道管制が敷かれ、後に幻の大地震といわれています。気象庁の記録によると、19年12月7日、東南海大地震、死者998人、負傷者2136人、流失、壊れた家約8万戸の数字が残されております。

（新聞通信調査会報」第437号 1999年4月1日発行）

古野さんに晒巻く

中村信（元同盟通信南支総局経済部長）

昭和17（1942）年の暑い盛りに、南支総局の経済部長として広東に渡った。古野（伊之助）社長が南方視察の途次、広東に立ち寄ったのは、確か18年の秋だったと思う。社長を囲んで横田実総局長、坂田寛蔵編集、荒川穆写真の両部長などと会食をしたのだが、社長は腹痛を訴えて、早々に座を外された。ホテルに駆けつけると、白仁進さんや高木一実・海口支局長などが心配げに入り口でたむろしていた。

「社長は薬も医者も寄せ付けず、明日からの南方行きを案じてジリジリされている。今は部屋に入らない方がよい」と高木チョコマンが言う。私は妻に白金懷炉（はくきんかいろ）と晒木綿を持ってこさせ、2人して「無茶するな」とむずかる患者を医者があやすように、しかし強引に、腹巻き代わりの晒をぐるぐる巻きにして懷炉を挟んだ。翌早朝、社長一行は予定通り南方に飛び立った。

（新聞通信調査会報」第276号 1985年11月1日発行）

死を覚悟の後、突然の帰国命令

荒尾達雄（元同盟通信編集局社会部）

昭和16（1941）年12月8日、太平洋戦争が始まった。同盟の社会部長は佐藤喜一郎さん（戦後の産経編集局長、常務）に代わった。佐藤さんは元時事新報¹⁴の社会部長だった。時事新報解散後、同盟へ移籍。私が新入社のころは特信部長だった。当時の特信部は部員も少ない。社会部員が特信原稿を頼まれてよく書いた。新米記者の私も、夜勤でヒマがあると、外信部の英字新聞のと同じ込みを借りてきて、ドイツを中心に「大戦徒然草」といった読物を書かせてもらったりした。

佐藤さんは通称「キーさん」。社会部長になられたとき、私はもう海軍報道班員で南方戦線に出ていた。17年末にいったん内地へ帰還して、初めてキーさんの指揮下に入り、翌18年10月、再度海軍報道班員として今度はラバウルの海軍爆撃隊に従軍した。

佐藤さんはその名著『最後の記者馬鹿』（1961年）にも書いておられるが、部長在任中、多くの陸海軍報道班員を前線へ送られた。軍の検閲は厳重だし、取材範囲も限られる。最悪の状況下で「土気高揚」の記事に腐心されたが、特派した報道班員からは「戦死者」も始まった。佐藤さんはこの本の中で「長い新聞生活中…諦めきれない終生の痛恨事だった」と述懐しておられる。

さて、私はラバウル着後10日目から、連日連夜の空中戦と敵襲にさらされた。シンガポール陥落時代が記者の「天国」なら、ラバウルは「地獄」。ガダルカナルから同僚の陸軍報道班員佐藤啓之君が半病人の体でラバウルへ転進してきたところである。2人で毎夜、情報の交換をした。

その後、私はブーゲンビル島沖航空戦で、飛行場の掩体壕^{えんたいこう}上から出撃する艦爆隊を見送ったあと、壕から下りるとき、右足を捻挫した。以後は不自由な松葉づえの記者。そのうえ敵襲は日を追って激烈化した。一時200機を超えた味方の飛行機も次第に減少した。逆に敵機は大量に増えてくる。軍の参謀は、しまいに気が狂ったように怒鳴りだす。「飛行機を送れ。竹やりじゃ戦えん。報道班員、原稿などいくら書いたってダメだ。非戦闘員は防空壕から出るな」

そして毎日、「死」を覚悟する時が3カ月ほど続いて、突然、軍から「帰国せよ」と指令を受けた。だが、後方基地トラック島へ帰る輸送機もない。ラバウル港には艦艇一隻いない。たまたまトラックから深夜ラバウルへ入港して、すぐまた戻る駆逐艦に乗せてもらった。脱出の夜は至近弾を数発くらったが、運よく撃沈を逃れてトラックへたどり着いた。そのあとサイパン経由、防暑服にリュック一つ。寒さに震えながら内地へ帰還した。忘れもしない19年の紀元節の朝！

後で知ったのだが、この帰還命令を出すように大本営報道部へ、強く働きかけてくださったのが佐藤部長だった。当時私の家内は、ラバウルからの私信を受け取るため、背中に赤ん坊を背負い、幼い長女の手を引いて、時々社へ通ったらしい。佐藤さんは、私を見殺しにできないと、力を尽くされたのであろう。当時交代に前線へ出た報道班員はラバウルへは行きつけず、トラックで捕虜になったし、フィリピン島沖へ出た記者はついに還ら^{かえ}なかった。

佐藤さんは私にとって「命の恩人」。人間味あふれた「英知」の部長だった。帰国後、自宅へ伺ったとき、心情を吐露された言葉を、私は死ぬまで忘れはしないだろう。

「記者はね。非情な話だけど、独身者は俗事に煩わされないから能率は上がる。でも、独身者でない者が、独身者と同じように仕事をするね。」

それが記者ばかり。一番犠牲になるのは家庭の女房や子供だろうな」
その後の私の記者生活も、確かにこの「大先達」の余塵よじんを拝した思いである。同盟の記者には、現代のようなサラリーマン意識は少なかった。記者意識だけで能事足りりとする「記者ばかり」が多かった。当時は、それが一番の「生きがい」だったのだが…。

〔新聞通信調査会報〕第364号 1993年3月1日発行

松本編集局長の言葉

川上十郎（元同盟通信編集局整理部）

「新聞が毎日のように、東条英機首相の写真を掲載するのはナンセンスである」とは、昭和17（1942）年度新入社員研修会で、当時の同盟通信編集局長松本重治氏が述べられた言葉である。松本編集局長の英姿は、それから間もなく市政会館にあった大編集室から消えたが、研修会でのこの言葉は真に感銘深く、少々オーバーに言えば、筆者の進路を左右した。

入社1年生の筆者は、当時原宿にあった大東亜錬成院（幣原坦院長）への入所（1年間合宿）の推薦を受ける光栄に浴した。しかし、これを固辞した。生来水泳のできない筆者は、世の中を上手に泳ぐ術を知らず、コネもなく入社試験を経て入社した者であり、この推薦を辞退すればマイナスに作用することは十分予測できた。同院は各官庁の優秀な新人を集め、将来大陸で活躍させるために設けられ、報道界を代表して同盟から

一人推薦されたのであった。筆者が小利口で泳ぎ上手だったら喜んで入所したであろうが、松本さんの名言は忘れられず、筆者の大東亜戦争観は不動のものであったので、固辞したのである。

「プリンス・オブ・ウェールズ」¹⁵⁷が撃沈されたとか「レキシントン」¹⁵⁸が撃沈されたなどと言って喜ぶ同僚もいたが、筆者はむしろ日比谷公園の花を見て慰めていたのである。大本営の発表とアメリカの短波放送とを比較検討すれば手放しで喜べるはずはなかったのである。

「川上君、これをやってみたまえ。夕刊に2段で出ること間違いないニュースだ。こんな具合に書くんだよ」と個人指導の労をとられたのは外信部長入江啓四郎氏であった。パリ帰りのあか抜けした入江さんの温顔はいまだに鮮やかに顔前に浮かぶ。個人教授とかの映画はあっても、個人指導してくれる上司は恐らくいないだろう。そのニュースの全容はさだかに記憶していないが、日本海軍の駆逐艦がドイツの軍港に入港したというもので、入江さんの言葉どおり、その日の夕刊に2段で活字になっていた。

「生きていて安心したよ。君の家の方面が空襲されたので心配していたんだ」とは20年の春、筆者を小宅の焼け跡に訪れた整理部長田中正太郎氏の言葉である。当時、千駄ヶ谷に住んでいた筆者は空襲で焼け出され、父からもらったロンジンの金鎖付き金側懐中時計を捜していた。すると、同盟の社旗をつけた車が止まり、田中さんと同僚の小西政治君が出てきた。早出晩退の田中さんは職務多忙であったのに、わざわざ小宅を知っていた小西君を道案内に部員の安否を確かめに来られたのであった。筆者の目頭は感激で熱くうるんだ。その時計は父が布引の滝の水を神戸市の水道水源池に引き込む案の立案者として、またポンプ設計に対して神戸市役所から記念に受けたものであったが、焼け跡から発見されなかった。しかし、その焼け跡で人間性と人情、上司と部下の在り方な

ど胸にしみて納得することができた。このことは金時計を発見する以上に貴重なものであった。

〔新聞通信調査会報〕第165号 1976年9月1日発行

わずか2カ月の勤務

土肥良造（元同盟通信社会部）

「卒論なんてどうでもよいのだろう。どうせ君たちは、12月末に大学から追い出されてしまうのだからね。だから明日からでも編集の仕事を手伝ってくれないか」。同盟総務の方からこんな呼び掛けがあった。いつ、誰だったのか、記憶はない。昭和16（1941）年12月、開戦の日のすぐ後だったことは間違いないようだ。秋の入社試験をパス、来春には念願の同盟で記者のタマゴになれるのだ、と喜び、これからは大学卒論の総仕上げと張り切っていた矢先、突然の大学繰り上げ卒業というショッキングな話！そして真珠湾攻撃・太平洋戦争の突発。折も折、三田キャンパスで講義を受けていた窓外には高らかに軍艦マーチが鳴り響いていた。

卒業生の多くは翌春には現役入隊、一兵卒になる運命だった。それだけに同盟からこのような誘いがあったことはうれしかった。早速、西銀座電通ビルの同盟を訪れた。結束武二郎・人事部長が学生たちを連れて編集室へ案内。僕と他の2人の「タマゴ」たちを社会部に配置した。「やあよろしく頼むよ、何しろ次から次へと報道班員として出て行くので、

この通りの人不足なんだ」とデスクらしい人の思いのほかによさしい声、緊張感でいっぱいだった僕たちもややホッとする思いだった。

次から次へとかかってくる電話を受け、先方の原稿を書き取るのが一番大切な仕事。さまざまな電話取りの中でも、今なお忘れられないのが12月8日未明、日本軍のマレー半島東部コタバル奇襲上陸成功の詳しい同盟報道班員原稿を、大本営海軍部担当の記者から受け取ったもの。当時社会部もスタッフは空っぽの状態で、いや応なく「タマゴ」たちに頼らざるを得なかった。

17年1月1日、正式入社したものの、西銀座の電通ビルから日比谷公園・市政会館への引っ越しが終わって間もなく、僕たち「タマゴ」は休職の形で同盟を去らねばならなかった。前述の通り繰り上げ卒業生のほとんどが、2月1日に入隊することが決まっていたからだ。入社時にもらったバッジは北満ソ連国境地帯での軍役中も僕の手元にあった。敗戦、復員で帰京したらもう同盟はなかった。

〔新聞通信調査会報〕第290号 1987年1月1日発行

日比谷公園で銃剣術の訓練

高橋秀男（元同盟通信編集局編集庶務）

同盟通信社に入ったときは、西銀座の電通ビルの3階か4階と覚えている。昭和17（1942）年、18年の戦争のさなか。車のガソリンは配給制で、公共性のあるバスやタクシー、トラックなども車の後ろを改造し



同盟通信職員の銃剣術試合。後方右から2人目は古野社長＝1944（昭和19）年10月、日比谷公園

てかまを取り付け、木炭、まき、コーライト（コークスの一種）を燃やし、そのガスをエンジンに送って走らせていた。代用燃料車は街の中で時速40キロくらいは軽く出たのである。

当時、神田美土代町の地下鉄経営の合同タクシー会社から派遣されて、2週間くらい同盟の専属運転手として働いた。編集庶務にいた豊島さん

に請われて、正規に編集庶務の運転手として入社することになった。おかげで顔を真っ黒にしての代燃車のかまたきから解放された。やがて日比谷公園の市政会館へ引っ越した頃は、仕事もだいぶん慣れて、取材する記者とともに張り切った毎日を過ごした。

当時の編集局長は大平安孝さんで、大きな目玉をギョロつかせて、あっちこっちのデスクをにらんでいた。外信部長の長谷川才次さんは、外電が入って忙しくなると、必ず鉢巻きをしては社内を飛び回っていた。社会部長の佐藤喜一郎さんは入社当時、運転手は取材記者、写真部記者と心をついて行動するように、すなわち「三位一体となって仕事をすることによって、よりよい記事がとれるんだよ」と言われた言葉が今でもときどき思い出される。

社内の服装も、自然と戦時態勢らしくなり、巻脚半に戦闘帽という格好で通勤するようにならなくなった。社内の在郷軍人会では、白仁進さん（社長秘書）が隊長。日比谷公園の広場で、よく銃剣術にかり出されてはしごかれたものだった。

（「新聞通信調査会報」第290号 1987年1月1日発行）

長谷川さんの口述筆記

田谷文夫（元同盟通信外信部）

戦争たけなわの昭和18（1943）年10月1日に同盟に入社した。まず整理部、次いで寒い冬の真っ最中に外信部に移された。部長はいうまで

もなく長谷川才次さんである。鋭利極まりない、この先輩が、私のその後を長く左右することになるとは、当時は知るよしもなかった。

外信部1年生が命ぜられた勤務は相当に辛いものであった。朝は6時に出てこい、とのご指示である。そのころ中野に住んでおり、青梅街道を荻窪から新宿まで走る西武電車と、市電を乗り継げば、この時間に出社できた。

約30分かけて夜のうちに受信したAP、UPなどの外電を整理してそろえておく。長谷川さんは午前6時半ごろに姿を現した。帝国ホテルに泊まっておられたそうである。だからかどうか、出社した途端から甚だ元気がよく、外電から翻訳すべきものを実に手早く選り出してから、口述筆記が始まる。およそ1時間半から2時間にわたり、早口の口述を鉛筆で書いていく。ていねいに書いている暇は全くなかった。書きなぐるようにして、ようやく長谷川さんの口述のスピードに何とかついていくことができた。

もちろん整理部の方々には評判が悪く、もつとゆっくり書けばいいんだ、と叱られた。しかしゆっくり書いていたのでは、今度は長谷川さんに叱られる。

長谷川さんは、この口述に際して、漢字、漢語を頻繁に使われた。漢字を敬遠したりしない時代のことだから違和感は何もない。しかし、時折、なじみの薄い言葉が飛び出してくるのに多少困った。はっきり今でも記憶している、とつさに字が頭に浮かばなかった言葉が長谷川さんの口から飛び出してきた。「ゴング」と言われたのである。「ゴング、何だろう」と思って筆記が止まると、ご機嫌が悪かった。「欣求^{こんぐ}」が、分らなかったのである。この仏教用語は、宗教に関心の薄かった若い私の頭によく入っていなかったのだろう。

真冬の早朝出勤は、寒さが辛かった。何しろ出社して来ても、暖房は

皆無なのだから。外信部でも他でも、厚いオーバーを着たまま仕事をしている人々が目についた。わずかに隣の英文部で、英文タイプの女性たちが、陶器の湯たんばで指を温めていた。暖房器具は金属供出で、すでに取り外されていた。朝の口述筆記後に、長谷川さんとともに頂いた熱いおかゆが救いであった。

(新聞通信調査会報「第276号 1985年11月1日発行」)

多摩川寮の寮長、隣組長に

佐藤一郎(元同盟通信経済局主任)

日比谷の原頭^{げんとう}では白仁進中尉殿(社長秘書、在郷軍人同盟分会長)指揮による軍事教練が激しさを増していた。小石の交じった広場での匍匐^{はふく}前進。隊を伍^{りゆう}しての靖国神社参拝行進など。4列縦隊になると、必ず隣にいた人が稲本國雄氏(当時の上司で経済局次長、その後同氏が大阪支社長になり、社用で支社を訪ねた際、戦友^{せんゆう}が来たといつて、食糧難の折から、大変馳走^{ちそう}に相成った。そうこうするうち、旧日比谷会館²のところにあった別館に移る。昼食時には、箸箱を持って市政会館の地下食堂へ。同盟餅^{もち}が出たのもその頃か。

昭和19(1944)年に入ると空襲が激しくなり、経済通信のカード、調査局、年鑑、経理部等の資料が、京王多摩川寮に疎開され、それに関係した人々が、通勤、執務した。

寮は、元料亭だったので、幾部屋かに区分けされていた。私は家族と

ともに入居し、寮長兼隣組長となる。多摩河原では、休日を含め、同盟人が集合し、開墾の日が続いた。これは古野伊之助社長提唱による自給自足の精神と「農」への高揚にあったと思う。

隣組長という立場から、200坪先の林の中にあった古野宅によく行きた。社長が出られたあと、何か大きな用件が起きると、本社に出掛け、社長室や会議室の前に立ったりした。「何か用か」といって、社長は会議途中でも出てこられることが何度あった。

(新聞通信調査会報)第276号 1985年11月1日発行

同盟時代に応召、復員後共同へ

梶川昭(元同盟通信通信局)

関門支社から東京に転勤したときの本社は、銀座の電通ビルにあったが、間もなく、日比谷の市政会館に移転した。戦局が激化し、空襲ということも考えてのことだったと思う。当時はそれでも、コーヒーもいいのがあったし、カレーライス、カツ丼も安く食べられ、地下の店をよく利用したものだ。

昭和16(1941)年12月8日、戦争が始まって軍艦マーチが威勢よく流される毎日だったが、物資の方は逆に入手が困難となる状態で、特に速記用紙の品質低下が目立ってきた。

東京での生活は、関門支社勤務時代、日笠多賀之助氏の家に下宿させていただいていた関係で、またお世話になった。最初は、中野区沼袋で

あったが、後に麻布区市兵衛町のアメリカ大使館とスペイン公使館の隣にあった屋敷の離れ小部屋に下宿し、通勤した。夜勤帰りのときは、よく警官に呼び止められたが、後には、顔なじみとなり、声を交わすまでになった。

17年3月20日、召集令状が届いたと広島の実家から電話があり、四国の松山へ入隊と聞いて、二度びっくり。尾道から今治に渡り、ようやく間に合った。

身体検査が終わると、「ソツキ者集合」の声がかかった。走って行くと、案外と頭数が多い。速記者も随分いるものだと思いつながら、その集団に入っていると、「君は合格だ。向こうへ行け。ここは不合格者、即日帰郷者の集場所だ」という。即帰者と速記者の間違いが、初めて分かる。このことが後に人事係曹長の耳に入り、命令受領等によく利用されたものである。

松山西部第62部隊で、教育が終わり、南方第6支隊の要員となり、冬だというのに、夏物の軍服を支給され、広島宇品港で船積みが終わった頃、幹部のみ乗船出港、兵隊は残れという命令が出て、兵長だった私は、兵隊を引率して徳島に転属、新しい防寒具に衣替えして、丸亀へと向かった。

北支派遣軍に編入され、宇高航路、岡山を経て門司港に2泊。釜山、鮮満国境を経由して北支山西省太原に到着したのは2月下旬、零下20度を下回る寒さであった。

終戦を知ったのは、8月16日、山西省交城県守備隊勤務中であつた。21年5月6日塘沽港からコロ島に寄港、5月14日に山口県仙崎港外に停泊した。列車が広島駅に到着したのは、早朝。かすかに原爆砂漠が見えたときは、これが昔の広島駅前かと目を疑うばかりだった。バラック建ての家で両親と再会、聞く話が、夢のようで、ただ聞き入るばかり。5

月末上京する。通路に新聞紙を敷き、座ったままの24時間である。本社で船木重光氏にお会いし、共同通信社勤務を決めた。

(「新聞通信調査会報」第314号 1989年1月1日発行)

軍事訓練、もんぺ代わりにパジャマ姿

山主敏子(元同盟通信特信部嘱託)

昭和11(1936)年、同盟通信社がスタートした年に入社しました。その2、3年前から、講談社の「婦人倶楽部」に大臣夫人訪問記を連載したり、聯合通信の家庭欄記事を書かせていただいたりしていましたので、フリーパスで入社、特信部の小寺信重部長の下で原稿依頼や取材に走り回りました。やがて特信部へ東大出の田中庸夫さん、日大出の高橋義樹さんというピッカピカの新卒が入ってきて家庭欄担当になりました。穏やかだったそんな時代は、間もなく終わり、全国民は戦争の渦の中に巻きこまれていきました。新聞のページ数は激減し、特信部は開店休業のありさま。男子社員は、どんどん戦場へ行きます。女子社員は、銃後を守るために女子隊を組織し、日比谷公園で、白仁進中尉の指揮のもとに軍事訓練(こ)を行いました。私は編集部の女子隊の隊長でした。現代のように、女性がズボンのたぐいを愛用する時代ではありませんでしたから、誰もが着物をほどこいて、上衣と、もんぺに作り直して着ていました。パーマやスカートは、駅頭に立つ婦人会の人たちから強くとがめられました。女子隊の訓練は、もちろんもんぺでなければな



軍事教練を受ける同盟通信の女子職員＝1943(昭和18)年9月、日比谷公園

りません。ところが、女子隊には、外信部や英文タイプで働く二世の女性^が、かなり多かったので、誰も^ももんぺをはきません。

「全員^ももんぺをはいてくるように」とのお達しがあった翌朝、日比谷公園の広場に、ずらりとならんだ数十名の女子隊員を見て、私はびっくり仰天しました。なんとピンクやブルーやストライプや、色とりどりのパジャマ姿がズラリと並んでいたのです。白仁中尉が、どんな顔をしておられたか、確かめるゆとりもありませんでした。

その日から私は^ももんぺを持っていない隊員たちにどのようにして着物で^ももんぺを作るかを講習しました。派手な着物はほどこいて、濃い色に染めればよいことも伝えました。アメリカ生まれでも、やはり大和撫子のお嬢さんたち、みんな着物は持っていました。

そのころ古野伊之助社長を中心に、女子隊の皆さんが、一緒に撮った写真があったのですが、その後の疎開騒ぎで、残念ながらまぎれてしまい、いまだに見つかっておりません。

〔新聞通信調査会報〕第274号 1985年9月1日発行

初の本土空襲で本社に駆け込む

小川隆康（元同盟通信経済局内経部）

古い話で記憶違いもありますが、昭和17（1942）年4月18日の昼休み、私は同盟通信社本社裏の日比谷公園で海軍体操をやっていました。すると深川方面でボンボン高射砲弾の音がして、弾幕の間を飛行機が1

機、西の方へ飛び去って行きました。しばらくして空襲警報が鳴り、私たちは血相を変え本社へ駆け込みました。これが米軍機による本土初空襲でした。これは米空母ホーネットから飛び立ったB25爆撃機16機の1機でした。緒戦の大戦果の報道も、このころから転進、撤退、玉砕の記事が目立つようになり、20年になると米機千機来襲などという大空襲が始まりました。ある空襲のあと、靴下が脱げず、どうしたのかと足の裏を見ると、画鋲^{がびょう}が刺さっていて笑ってしまいました。

20年3月13日には大阪支社にて社屋が油脂焼夷弾で全焼。焼け落ちる社屋から荷物を渡辺橋の非常分室へ運び、次の朝から仕事を始めたことが思い出されます。

〔十五年のあゆみ〕1989年3月31日発行

重要書類は多摩川べりの家屋に疎開

吉田義隆（元同盟通信経済局業務部）

同盟在社は昭和20（1945）年の春から秋までの短期間だった。それ以前の5、6年間は、丸の内の三菱21号館にあった欧亜通信社（旧名・日露通信社）という通信社に勤務していた。

20年4月、ベルリンは陥落しヒトラーは自殺した。影響は日本にも及び、欧亜通信社もその選に漏れず、「日独情報」は直ちに廃刊となり、欧亜通信社自体も解散を余儀なくされた。同盟の長谷川才次氏に面会、同郷であることを頼みに入社を依頼し、2、3日して通知が来た。人事部

長の船木氏と面接し、2、3の質問を受けた後、入社が決まった。

翌日から別館の2階で経済局の業務部に勤務した。男子社員は佐藤一郎氏と朝倉久雄君だけで、あとは全部女子社員で二、三十人くらいはいたと思う。そこは2階で周囲は読者のカード棚でいっぱいだった。階下の部屋には、桂田増三業務部次長を頭に、十数名の部員が購読者拡張の仕事に出入りしていた。仕事というのは日刊の各種通信の全国支局からの報告に基づき、読者数を決定し、午前中に新橋近くのジャパントイムズ社跡に設けられた発送部に届け、午後は講読契約者への奨励金を計算し、経理部へ回付することになった。活版通信は十数種もあり、好評だったのは「時事解説」「海外電報」であった。

20年3月10日の江東地区の大爆撃で、同盟も重要書類などの疎開を考え、多摩川べりの元料亭という大きな家屋に一部門を移転していた。1階大広間には総務局の一部と業務部、2階には羅災社員の家族が1部屋ずつ、別棟の部屋には年鑑部、国際経済週報などが入居。裏手には軍の小部隊が駐屯していた。

〔新聞通信調査会報〕第285号 1986年8月1日発行

天皇の東京大空襲被災地視察を代表撮影

野間正二（元同盟通信写真部）

昭和20（1945）年3月10日、雪の舞う夜空を震わせてB29の帝都大空襲だ。同盟大久保寮前の防空壕に、ひたすら身をひそめていた。翌朝、



東京大空襲で被災した深川を視察する昭和天皇＝1945（昭和20）年3月18日、富岡八幡宮境内。同盟の野間正二カメラマンが代表撮影

寝不足の目に映る東京の空は、一夜に連山が出現したかのように硝煙が低空で静止していた。

数日後、天皇陛下の被災地ご視察があった。代表撮影の場所は、早朝の富岡八幡宮境内で、瓦礫^{がれき}になった被災地をバックに歩まれる。距離約15^{メートル}。カメラをほんの少し意識された瞬間、シャッターを切った。たった一枚だけ、それも豆粒ほどにしか写っていないパルモス用の手札判乾板だけに、現像液を薄めて慎重に処理した。ところが現像液を薄めすぎて時間がかり、しびれを切らした大場デスクに、再三の暗室ドアたたきをくらった。しかし結果は上出来。図柄もピントもシャープで、最大限に引き伸ばしても粒子の荒れはなかった。

〔新聞通信調査会報〕第285号 1986年8月1日発行

空襲で同盟別館全焼

芦川選太郎（元同盟通信経理部）

昭和20（1945）年5月25日深夜、空襲で同盟別館が全焼した。その日は給料日であった。給与主任をしていた私は仕事を終えて、疎開先の野田町（現千葉県野田市）へ帰るため上野駅へ向かった。ところが、宮様が乗車されるため一般人は常磐線ホームへの立ち入りは禁止という突然のことで、改札掛とすったもんだとなった。

社へ戻ると間もなく、B29の焼夷弾攻撃が始まった。初めの2、3発が屋根を貫き、2階の経理部の部屋の床で燃え始めた。その火は、消し



焼失前の同盟通信別館＝1943（昭和18）年10月

止めたものの、煙がものすごく、息ができないくらい。鉢巻きを防火用水に浸して、鼻と口を覆い、どうやら一息ついた。それもつかの間、隣の建物から火が吹き出し、とても防ぎ切れない状態となった。どうしても運び出したいものがあつた。スチール製のロッカーに保管されてあつた預かり分の給料である。鍵は女子社員が持ち帰り、開けることはできない。1人では運び出すことはできない。困っているところへ、長谷川才次さんが自転車で応援に駆けつけてくれた。

何とか2人でロッカーを運び出したものの、もうそのときは火勢が強くなり、とても外までは無理だった。仕方なく、中身は、そのまま1階の入り口付近に放り出すことになった。この時のショックで扉は開いたが、どうすることもできなかった。市政会館に避難したが(1階に同盟編集局があつた)、火災は会館にも延びており、窓ガラスを守るために取り付けてあつた木枠に燃え移ろうとしていた。会館と同盟の防護団員の必死のバケツリレーで、その火は消すことができた。幸い市政会館は類焼を免れたのである。一夜明けて、火事は消えた。ロッカーを見に行ったところ、中身は給料袋のまま残っていた。あの大火のため人通りが少なかつたのが幸いしたのだらうと思った。それはそのまま風呂敷に包み、会館へ運んだ。

(「新聞通信調査会報」第276号 1985年11月1日発行)

同盟大阪支社が炎上

小路春美(元同盟通信大阪支社写真部)

昭和20(1945)年3月13日夜、サイレンが鳴る。空襲だ。サイレンが鳴ると、社員は社に駆けつけることになっていた。明るい光は一斉に消える。電車も止まる。歩くより仕方がない。そのころ私は淀川を挟んで大阪駅から西へ一つ目の塚本駅のある塚本町に住んでいたため、淀川の堤防伝いに上流に歩き十三大橋を渡り、中津から梅田へのコースしか行く道はなかった。

どのくらい時間がかかったか分からないが、肥後橋手前、朝日新聞社の前あたりに来ると、支社のある江戸堀付近は煙に包まれ、炎も見えていた。近づくくと木造の洋館、同盟大阪支社は、半分は煙、半分は炎ですさまじい音をたて燃えていた。幸いに宿直の人たちがカメラ、電送機材など持ち出せる物を持ち出して、道一つ隔てた石原産業の防空壕が空いていたのでそこへ集め、そこから支社の燃えるのを見守っていた。砂田純一写真部長も東住吉町から自転車で駆けつけ、やっと着いたが、がっくりと疲れが出たようだった。稲本国雄支社長も駆けつけたが、どうすることもできず、悲愴な面持ちで燃える支社を見る後ろ姿が炎にシルエットで浮かび、今でも目に浮かぶ。

夜が明けると、かねてから専用線、その他をセットしてある中之島の難波橋北側道路の仮大阪支社に、てくてくと歩いて機材を運んだ。各部の人たちも持ち出せるものは持ち出したので、多少不自由はあっても支社開設の仕事は何とかなったと思う。

(「共同通信社友会会報」第47号 2006年3月31日発行)



焼失前の同盟通信大阪支社＝大阪市西区土佐堀



炎上する同盟通信大阪支社＝1945（昭和20）年3月14日未明

中之島の渡辺橋下で活動再開

三仙交二さんせんこうじ（元同盟通信大阪支社経済部内経主任）

昭和20（1945）年3月14日未明、90機のB29により、西区土佐堀にあった大阪支社しやういは焼夷弾の直撃で灰燼かいじんに帰した。かねて中部管区司令部の指示もあって、中之島にかかっている渡辺橋の橋げたの空間に仮設した業務室に押し込められて活動を開始した。この橋は1キの爆弾を落とされても大丈夫だ、と中部管区の保証があった。その後、旭区豊里町にあった淀川べりの社員寮も、焼夷弾の直撃でやられてしまった。この寮には、高射砲陣地の分室として、陸兵1個小隊が同宿していた。終戦になった。いつまでも橋の下にいるわけにもいかず、しばらく北

浜2丁目の大阪株式取引所3階（150坪余り）を借りられることになり落ち着いた。しかし今度は進駐軍が明け渡しと言ってきた。伝染病病棟にするので、拒否すれば接収すると強硬に申し入れてきた。「移転先はお前の方で探してこい。接収してやるから」と言うので、やむなく猶予期間をもらって探し回った。幸い2、3日で取引所の向かい角の建物で大日本航空協会の事務所だったのが空室となっているのが分かり、接収係に同行して家主との交渉に行った。

その建物は鉄筋2階建てで、元は株式取引員の営業所であっただけに電話回線も多く十分に利用できた。1階は時事通信、2階は共同通信で仲良く速やかに活動ができた。

（新聞通信調査会報「第282号 1986年5月1日発行」）

平穩破る重大発表予告！鈴木内閣誕生の夜

田崎与喜衛よきえ（元同盟通信内信部）

夜更けの招集電話

昭和20（1945）年4月5日（木）、私は同盟通信社政経部の夜勤兼宿直だった。正確には、内信部と言うべきだろう。『通信社史』によれば、19年12月、「政経部と社会部を合体して内信部を作り」とある。しかし、私たちは相変わらず政経部員を名乗っていた。デスクは旧社会部と別々だったし、夜勤や宿直も従来通り。ただ部長が大森吉五郎氏さきちろう（後の松下電送会長）という点だけが共通だった。だから、以下政経部と書く。

その日の夜勤は、私1人だったわけではない。私は経済関係の夜勤、旧政治部からは篠原滋君が同じく夜勤。他に私たちのアシスタントとして、その年の2月ごろ配属された浦上冬彦君が居残り。

政経部員がほとんど引き揚げた後、チリンとも鳴らぬ電話の前で、私たちは雑談にも飽き、黙って腰掛けていた。宿直は前年の11月ごろから始まり、旧政治部と旧経済部から、役付きでない古参が1人ずつ居残り、そのうちの1人が泊まることになっていた。私は週2回夜勤があり、そのうち1回は宿直を兼ねた。全くの偶然であるが、私の宿直の晩には空襲がなく、いつかそれが定評となっていた。

それはともかく、その日は生暖かく、戦時中ではなかったら銀座でもぶらつき、屋台で一杯飲みたくなるような夜だった。しかし、19年3月の料飲店禁止令で飲み屋などは一軒もなく、娯楽施設はすべて閉鎖されていた。もっとも、それは表面上のことで、裏口営業の飲み屋や麻雀屋が

なかったわけではないらしい。

午後9時半ごろになると、10時まで居残りのはずの篠原君が妙にそわそわしだした。そして私に「今晩は君が泊まりだから、空襲はないだろうな」と声をかけた。「それは分らん。しかしまあ、帰りたければ帰ってもいいだろう」と言ったら、10時の20分前ごろに帰った。篠原君を帰したことに浦上君は不満で、「篠原を帰してもよかったんですか」といささかむくれたが、「ああ、いいだろう」とのんきに構えていた。

篠原君が帰って10分ぐらいたったころ、夜はほとんど音なしの電話機の1台がチリリンと鳴った。早速取り上げると、「同盟の政経部だね。君は誰?」「田崎と言います」「ちようどよかった。私は情報局次長の奥村(喜和男)だがね。総裁(緒方竹虎)が『11時に重大発表があるから記者諸君に集まってもらうように伝えてくれ』と言っておられるんだ。それから『こちらからはかけられないから(原注)防諜の恐れがあった各社へも連絡してくれ』とね。頼むよ」「発表の内容は何ですか」「それは私にも分からんのだ」という話。私は、奥村氏が企画院時代、仕事の関係で何回か会っており、旧知の間柄だった。だから、とっさに内閣総辞職だなど思ったものの、それ以上何も聞かずに電話を切った。

十数分の差に地団駄

それからが大変。浦上君に伝えた後、立ち上がって編集局、連絡局など各部の夜勤当直者を私のところへ呼び集めて重大発表の件を話し、できるだけ部員を集めるようにと言った。そして浦上君と手分けして、19年4月現在の「役員及社員名簿」を頼りに、電話をかけることにした。

しかし、驚いたことに役職者中、電話は大森部長、小山武夫次長(応召中)の家にしかなく、筆頭次長の新井正義さんのところは呼び出し電話、

横井雄一次長(原注)後にレッドパーズで共同を去る)の家には呼び出しもない。とうてい出社できないと思われる他県在住者は初めから連絡を諦め、都内在住者だけに限ったが、電話できるところは5、6カ所、それもほとんどが呼び出し。いちいち本人を呼び出してもらっている余裕がないので、伝達を頼んだだけである。

電話連絡のできない人たちには、編集庶務部の宿直者(運転手2人のほか2人に頼んで「11時に重大発表あり、すぐ出社されたし」という電報を、近くにあった郵便局から打ってもらった。運転手さんには2台残っていた自動車がすぐにスタートできるよう待機してもらった。大森部長宅には私が電話したが「不在」との返事。その他、呼び出し電話は即刻返答があるはずはなかったから、手配は十分足らずで済んだ。しかし、その間じゅう、私は篠原君を定事前に帰らせたことに、どんなに地団駄踏んだことか。時間通り夜勤させたら、こんな慌ててすることはなかったろうにと思ったが、後の祭り。

社内の動員手配が済んだ後、各社への連絡に当たった。まず朝日の政経部を呼び出した。「同盟の政経部ですが、いま情報局次長から、11時に重大発表があるから来てくれ、との連絡がありましたのでお伝えします」と告げると、「ありがとうございました。すぐに手配します」と打てば響くような返事。多分、私の切迫した声に、ただならぬものを感じたのであろう。しかし、他社の中には「何の発表かね。内容を知らせてくれよ」とか「眉唾ものじゃないかな。君は奥村の声を確認できるのかね」などというところもあった。当時、各社はいろいろなデマ情報に悩まされていたことを知っていたから、あえて反論しなかった。

駆け付けたベテラン

社内の動員、各社への連絡などが一段落したのは10時10分ごろ。しかし、私の不安は募る一方だった。誰も肉声ですぐ出社すると言った者はいない。一方的に伝えただけである。そのうえ、当時の交通事情は劣悪を極めた。都電などは夜10時すぎるとないうに等しく、省線も20分30分置きになる。もちろん、タクシーなどは、あってもガソリンがなかった上、大部分は陸軍に徴用されていた。ただ、緊急用に木炭を焚いて走るものが少数あっただけ。従って、たとえ私の話が伝わったとしても、30分や40分で出社できる人がいるはずはなく、一番早い人でも11時すぎるのではなからうか。

10時20分ごろになると、たまりかねて私は浦上君に声をかけた。「どうもこの分では、誰も11時に間に合わないのではなからうか。もう10分待って、私が出掛けるから、後は君が電話を取ってくれよ」と言うのと、彼は青くなった。「とんでもない。私は政経部は新参者です。責任者がいなくなったら、後はどうなりますか」。もったもった話である。

私たちがそんな会話を交わしていると、息せき切って駆け込んできた人がある。政治部のベテラン、沼佐隆次氏である。編集局へ入るなり、大声で「オーイ、何があったんだ」と言われる。私は奥村氏の話を伝えるとともに、「車は待機させてありますから、すぐ出掛けてください」と送り出した。とたんに横井次長が飛び込んで来た。私は沼佐氏同様に首相官邸に向かわせた。

両氏とも、てっきり電報動員が奏功したものだと思っていたが、後で聞いたら大違い。沼佐氏の場合、後の東久邇内閣の内相となる山崎巖氏と築地の某所で飲んでいたが、10時ごろ山崎氏のところへ迎えの車が来た。その時、山崎氏は「君も本社へ帰った方がいいんじゃないか」と言

われたので駆け付けたというわけである。横井君は銀座の裏口営業の麻雀屋で他社の連中と卓を囲んでいたところ、1人の記者へ電話がかかり、「大変だ。何か重大事件の発表があるそうだ」と知らせてくれたので、飛んで来たという。

2人のベテランを送り出して、いささかほっとしたもの、私には内閣総辞職などという大事件を取り仕切る自信はない。大森部長か新井次長が出社してくれないと、収拾がつかない。しかし、大森部長は住所の關係で11時前の出社は不可能だと思ったから、当時、芝区白金三光町に住んでおられた新井さんに専ら期待した。

この稿を書くに当たって、新井さんのお宅へ電話してみた。新井さんはよく記憶しておられて、「確かに行ったことは行ったが11時前だったか、後だったかは忘れた」とのこと。無理もない、45年前の話である。とはいえ、先着者が情報局発表を送稿してきたころ、浦上君と私は夢中になってエンピツを走らせていたから、既に新井さんが指揮を執っておられたのであろう。

意外、政治嫌いの新首班

重大発表は、やはり小磯国昭内閣の総辞職と後継内閣任命だった。小磯内閣の総辞職は、4月1日に沖繩に米軍が上陸していたから当然予想できた。しかし後継内閣組閣の本命が、前年8月に枢密院議長に就任したばかりで、大の政治嫌いの鈴木貫太郎海軍大将に下されたのには、びっくりした。この間の経緯については、『木戸日記』『岡田啓介』『宰相鈴木貫太郎』（小堀桂一郎著）などに詳しいから、ここで私が孫引きするまでもあるまい。

しかし、この内閣交代劇で今でも私に分からない点が二つある。その

一つは、小磯首相が5日午前10時に臨時閣議を開き、全閣僚の辞表を取りまとめた後、当日の発表には書かれている。20名近い閣僚が続々と官邸に詰めかけるのを、各社の記者が見落とすなどということがあったのだらうか。官邸詰は確かに少なくなっていたが、それでも各社とも4、5人はいたはずである。

もう一つ、午後4時に宮中で重臣会議が開かれ、若槻礼次郎、広田弘毅、近衛文麿、平沼騏一郎、岡田啓介、東条英機らの元首相、それに重臣ではないが枢密院議長の鈴木貫太郎、内大臣の木戸幸一の両氏が出席していたのを、誰一人知らなかったという点である。しかも、重臣会議は午後8時すぎまで続いている。鈴木貫太郎大将に決まったのは、10時近くだったといわれる。

当時、敗戦は必至の情勢であり、終戦に導こうとする動きは重臣、特に岡田大将を中心に極秘裏に進められていた。同盟もそれを薄々察知していたらしい。私は3月初め、大森部長の命令で岡田啓介、若槻礼次郎両元首相のところへ探りにやらされたことを覚えている。それが無駄足だったことは、言うまでもない。

部員続々集まる

それはさておき、当夜の政経部には11時を過ぎると部員が続々と詰めかけ、十四、五人にも上ったであらうか。その半分は官邸に行き、残り新首相邸その他重臣邸へ走った。当夜駆け付けた人たちの出社経路を聞いておくべきだったが、当時はそんなことに思い当たらなかった。全員が都内在住者だったので、走ってこられた人々が少なくなかったのではなかろうか。そのほとんどは既にこの世になく、確かめるすべもない。ここまで書いてきて、私は大森部長の存在を忘れていたことに気がつ

いた。大森さんはいよいよ遅れて午前0時近くに出社された。そして「すまん、すまん」と言いながら、出稿記事に目を通し、新井さんに「よくやってくれたね。これで十分ではないか」と言われたことを覚えている。官邸はじめ、方々へ散って行った記者諸君が全員帰ってきたのは、6日の午前1時半ごろだったかと思う。誰も自宅へ帰ることはできない。みんな宿直することになった。私の横たわるはずのデスク脇のキャンパスベッドでは、既に誰かが毛布をかぶっている。やむを得ず、応接間の隅に一つ空いているベッドを見つけたら、その横には大森さんが寝ておられる。

そして「今晩はご苦労だったね。実は、君の泊まる晩は空襲がないというのが定評になっていたので、兵隊さんたちと飲んでいて、うちへ帰ったのが11時。家内から至急出社しろとの君の電話があったと聞いたが、既に私鉄はない。近所に元タクシー屋があったので、たたき起こし、拝む頼むで出してもらったよ」と、半ば独り言のように言われるのを、夢うつちに聞きながら私は深い眠りに落ちていった。

それにしても、終戦内閣誕生を何とかつつがなく出稿し終わったのは、幸運というべきであらう。もちろん、それは私の手柄ではない。新井さん以下ベテラン記者たちの努力の結果である。しかし、沼佐さんが山崎巖氏と飲んでいなかったら、そして横井君が隠れ麻雀屋にいなかったら、と考えると、今でもぞっとする。

（新聞通信調査会報」第334号 1991年9月1日発行）

「敵性情報」または「特情」のこと

田崎与喜衛よきえ（元同盟通信内信部）

敵秘のレクチャー

午前9時かっきり、手拭いで鉢巻きし、ワイシャツの袖をまくり上げた長谷川才次海外局長が会議室の机の前に腰掛けられる。向かい側には、私たち内信部員4、5人が緊張して控えている。

「いいか、これから話をすることは、伝える人以外には、絶対に話してはならん。そばに誰かいたら、どんな人でも席を外してもらえ。それからノートやメモを取ってはならん。だから、手は机の上に出しておけ」

私たちは、両手を机の上に乗せ、おもむろに長谷川さんの発言を待つ。長谷川さんは、右手に持ったスケルトン3（外電を簡略化したもの）の中から、5、6項目選んで話される。いずれもロイターやAP、UPのニュースで、大本営発表とは全く反対の内容。恐らく憲兵でも聞いたら、長谷川さんはじめ、私たちは即座に拘留されるような内容のものばかりだ。

当時、私たちは、これを「敵性情報83」と呼んでいた。しかし、外信部では「特別情報83」、略して「特情」と言っていたさうである。

太平洋戦争勃発と同時に、ロイターやAP、UPとの特約関係は切れた。タスやドイツ通信以外には外国通信は傍受するほかない。しかし、タスやドイツ通信は、そのころは到底、太平洋戦争には手が回らなかったはずだ。それ故、傍受したニュースはすべて「特別情報」というべきだったろうが、中でも特に戦局に関するものを「特別情報」といったのであろう。



同盟通信本社外信部で、鉢巻き姿で記事を見る長谷川才次部長＝1944（昭和19）年6月

局長自身も伝達役だった！

「敵性情報 特情」のレクチャーは日曜日を除く毎日行われた。時として長谷川さんが欠席される場合がある。その時は海野稔さんが代行した。外信部には寺西五郎、小黒大州、木下秀夫、原子林二郎などの次長諸君がいたが、海野さん以外には代行する人がいなかった。

海野さんは、メモを取るなどか、机の上に手を乗せろなどとは言わない。しかし、私たちはいつの間にか、メモは取らず、両手を机の上に乗せる習慣がついていた。長谷川さんも海野さんも10分間ぐらい話されるだけである。それから私たちは、伝達する人たちのところへ駆けつける。

長い間、私は「敵性情報」伝達が、昭和20（1945）年3月下旬ごろから始まったと考えていた。海野さんも、そのころからではなかったかと言う。しかし、その年は寒い春だったから、「ハリキリ男」と呼ばれていた長谷川さんといえども、3月下旬に腕まくりするはずはない。そのうえ、私は3月末には家族の疎開やら疎開した友人宅の留守番準備やらで、自分のことにかまけていた。午前9時前の出社などはできなかったはずだ。どうやら1カ月取り違えていたようである。

それはとにかく、レクチャーを聴いていたのは、内信部員（元政経部員）が4、5人いたかと思う。その人たちの名前がどうしても思い出せない。そのため、当時の内信部の事実上の部長ともいえる新井正義さんに尋ねてみた。ところが、新井さんは、「そんなことをやっていたのか。ちっとも知らなかったな」という返事。新井さんが「知らなかった」と言う以上、「敵性情報」の伝達には、内信部は部として関与していなかったものらしい。

しかし、そのころ、首相官邸クラブのキャップだった深沢幹蔵君や、確か外務省担当だったかと思う嘉納履方君がいたように考えていた。と

いうのは、深沢君とは同年入社で親しかったし、海野さんも深沢君とは同郷の関係でよく知っていたので、「いたように思う」と言っている。嘉納君は、政治部と経済部の統合前は政治部員で、その時分まで口をきいたこともなかった。それが「伝達係」（正式な名称でなく、私が仮につけたもの）をやるようになってから急に親しくなった。こうしたことは共通の秘密を持った場合などによくあることなので、彼も伝達係ではなかったかと考えていた。

しかし、この両君ともオミットしなければならない。というのは、資料を探しているうちに最近、『長谷川才次』を読んだからである。その中で、長谷川さんは次のように書いている。

「当時、同盟通信社の海外局長だったわたくしは、週1度土曜日に帰宅するほかは、近くの帝国ホテルに寝泊まりして外電に目を通す。大きなニュースは、東郷外相や迫水書記官長などに、速報する役回りを担当していたので、いつ爆撃で死ぬかも分からない……」

これを読んで驚いた。海外局長の長谷川さん自身が伝達係の一人だったのである。同時に、伝達係が誰々だったか、いよいよ分からなくなってしまった。しかし、陸海軍および内務省担当者は入っていなかったと思う。また、木村進、沼佐隆次、石井文治などの長老連中とも同席した覚えがない。大体私と同じ年ごろ、つまり三十四、五歳ぐらいで、記者歴十二、三年の人たちだった。

終戦工作とアリバイ

どういう理由で、私は「敵性情報」伝達係などに選ばれたのだろうか。それに誰が私に命令したのであろうか。内信部長の大森吉五郎（きごろう）さんには多少信用があり、経済部時代に板垣武男次長から「大森派」などと呼ば

れていた。しかし、その頃の大森さんは、陸軍幹部と親しく、「敵性情報」には関わりがなかったと思う。

従って私の伝達係指名は、専ら担当省の関係だったろう。当時、私は運輸通信省¹⁹⁸詰の、ただ一人の元政経部記者だった。他に元社会部記者が1人、経済局内経部の記者が1人いた。しかし、社会部記者は出入りが激しく、半年くらいで交代したし、内経部記者は仕事の性質上、情報伝達などはできなかった。

私が伝達したのは、運輸通信大臣^{こびやまおと}小日山直登氏と通信院総裁の塩原時三郎氏の2人だった。小日山氏は、終戦内閣誕生の日から少し遅れて4月11日に就任された。塩原氏が通信院総裁になったのも、終戦内閣成立の時だったと思う。それにしても満州国、というよりも関東軍のお目付け役として満鉄入りしていた小日山氏や、戦後の東京裁判で東条英機被告の弁護人になった塩原氏のような、むしろ伝えてはならないような人たちに伝えたのは、なぜであろうか。だから、長い間、「敵性情報」伝達が終戦工作の一端とは考えてもみなかった。

今度、この稿を書くに当たって、何か手掛かりがつかめないかと思って『通信社史』を読み返した。549^{ページ}には、次のように書いてある。

『同盟』の外国放送傍受機構は、太平洋戦争の勃発後、通信省の愛宕山情報受信所に統合されたが、対外放送の方は引続き『同盟』によって行われていたのである。その傍受機構も、7月から復活することになった。それは、相次ぐ空襲で愛宕山受信所も焼失して川越に移転し、上福岡受信所の連絡線もいつ断絶するかわからない状態にあったためである」

これでおぼろげに分かった。同盟の傍受施設は通信省に取り上げられていたが、ライター、APなどの通信社ニュースは、同盟に貸し下げられていたらしい。それを社内の一部では読んでいるが、それは伝達係が

口頭で申し上げたようなものです、と主管官庁の責任者に伝えることにあったらしい。見方によっては、アリバイ工作と言えないこともない。

発案の経緯、今も謎

「敵性情報」伝達には、その頃ほとんど使えなかった自動車を、編集庶務部は早く使わせてくれた。順序は逆になるが、私はまず通信院に行き、運輸通信省は後回しにした。小日山氏は、黙々と私の話を聞き、終わると一言「ご苦労さん」と言われるだけである。塩原氏は、通信省時代からの長い付き合いだったので、時に雑談することもあった。確か5月半ばごろだったと思う。私の話を聞き終わると、「君！ もう来なくてもいいよ。君の話を聞いていると、憂鬱^{ゆううつ}になるだけだ。君だって朝早くからこんなところまで来るのは大変だろう」と言われる。しかし、私は「社命ですから毎日来ます。わずか5分か10分だから我慢してください」と言って、7月半ばすぎまで毎日通い続けた。

「敵性情報」伝達は、誰が発案し、実施に移したのだろうか。長谷川さんは、自身担当したと書いているし、当時の関係者中生き残りの海野さんと私の記憶には、長谷川さん以外には誰も思い浮かばない。また、『長谷川才次』には、前田雄二君が書いた略伝に、長谷川さんのロンドン時代の友人、辰巳栄一中将が中国へ出征するとき(20年3月)語った次のような話がある。

「辰巳さん、あなたは軍人としてこの戦いに勝ち目があると思いますか。いま吉田(茂)さんは内密に近衛さんと終戦の工作をやっていますよ。わたしも一日も早く戦争をやめた方が、日本を破滅から救う道だと思うが、一体あなたはいかがですか」

従って長谷川さんは、終戦内閣として、20年4月に誕生した鈴木貫太

郎内閣が、一向に工作しないので、危険を覚悟して「敵性情報」伝達を実施されたのかもしれない。しかし、長谷川さんにいかに勇気があるとしても、同盟の命運にもかかわるようなことを単独で始められたのであろうか。私には、戦前、既に「特情」を配布しておられた松本（重治）さんの存在が大きく浮かんでくる。松本さんは、19年から20年にかけて結核療養中であつた。それにもかかわらず、内外の情勢に通曉（つうきょう）しておられた。だから、近衛文麿元首相が終戦工作のためモスクワ行きを決意されたとき、松本さんの同行を懇望されたのである。

古野社長と松本氏

その松本さんが、20年の内外情勢について、沈黙を守っておられるはずはない。かつて長谷川さんがロンドンから帰ったとき、再び外信部長に据えられたのは松本さんである。それは長谷川さんの才能を買うとともに、いざというときの勇気を買われたものであろう。従って「敵性情報」伝達は、松本さんと長谷川さんの合作ではなかつたろうか。

「敵性情報」伝達が、東郷茂徳（しげの）外相を中心とする「終戦工作」に何ほど役に立ったかは分からない。しかし、戦局が日ごとに不利になり、猶予を許さない状況になってきていることは、関係者に分かつたに違いない。それ故、7月下旬から、終戦工作がにわかに慌ただしくなった。その経緯は、森元治郎（もとじろう）氏の『ある終戦工作』（1980年）に詳しい。

ところで、当時の同盟通信社長・古野伊之助さんは、この事実を知っていたのであろうか。海野さんは「ああいう（おうような）人柄だから、知っていても知らないふりをしておられたのでないか」と言っている。私も同感である。古野さんが、表面上の発言の裏に、敗戦必至を考えておられたのは、終戦後の準備が周到だったことからもうかがえる。

それにしても、当時のことについて長谷川さんに2、3行の記事があり、そして海野さんが健在であるからこそで、そうでなければ、たとえ発表する機会があつたとしても、「敵性情報」伝達係は、私の夢物語として一笑に付されたであらう。だから、この話は今まで語ったことも書いたことのないのである。

（新聞通信調査会報」第344号 1991年7月1日発行）

カメラで追った戦時下の南方

小路春美（しやうじ）（元同盟通信南支総局）

昭和15（1940）年12月1日付で、同盟通信の南支総局へ転勤した。私は大阪支社からで、本社の4人と台北で合流、3日目に広東を流れる珠江（しやうこう）に入る。兩岸は緑一色で、これでも11月かと南に來たことを実感した。南支総局は、横田実総局長、市川太郎編集部長、荒川穆写真部長のスタッフだった。南支の主な取材は、「援蔣物資阻止作戦」従軍報道だった。年明けの初仕事は、デルタ地帯を警備する海軍の取材だった。稗田記者、安藤（日本ニュース映画）、新聞三社と珠江を下り、小型の警備艦に乗り、緑のデルタ地帯をぐるぐる回るが、取材対象物がないので、今で言う「やらせ」で渡河訓練をしてもらい、撮影して何とか絵になった。初めての従軍取材で夢中だった。

仏印進駐、「朝日」に抜かれる

このほかの従軍取材は、香港近くの潮州^{ちやうしやう}、海豊^{かいほう}、福州など。南部仏印進駐^{しんしゆ}の情報があり、記者、カメラの増員で本社から川井弘彦カメラマンが着任。現地で新人カメラマンも進駐に備えた。16年6月、部隊は動いた。同盟は記者、カメラ、オペ、連絡員数人のセットで2班編成、本社から大屋久寿雄^{くすお}特派員が参加した。

部隊と共に御用船に乗り、海南島南部の三亜^{さんあ}に集結。日、仏の会談結果を待つ。ヤシの木を初めて見る。光る葉先が印象的だった。会談はまとまり、船団はサイゴン（現ホーチミン）に向かって出港。この従軍取材も宣伝班の指揮通りに動いているので、原稿については深く考えていなかった。抜け穴があった。朝日はサイゴンの主力部隊以外に、支隊がサイゴン東部のニャトランに上陸したことを知り、これが特ダネになった。進駐後はカンボジア王家の式典などあったが、落ち着くと記者、カメラマンは元の勤務先に帰った。大屋、高田秀二、前田雄二記者、小路（カメラ）、葛原（オペ）はそのままサイゴンに残ることになった。

タイ・カンボジア調停を抜く

カンボジア王家の式典、駐屯部隊巡り等の取材は次々とあったが、大きなものが一つあった。そのころ、タイとカンボジアが国境を巡って絶えず紛争を起こしていたので、日本が調停することになった。大使一行の後を大屋、前田記者、小路、矢住（日映²⁸）が追いかけた。

3日目だったか、国境で矢野大使が測量機をのぞく。ヤマ場の仕事だ。三社も来ているので一生懸命だ。ブノンペンのホテルで報道陣も交えて晩さん会が行われた。矢住さんから「前田さん、今夜持って来た車を出

してもらえませんか。今日のフィルムを持ってサイゴンへ帰りたい」。私も「車が出るなら僕も一緒に帰りたい」と言っただけで出してもらった。隣の席が毎日、これを聞いて「前田さん、うちのも持って帰ってほしい」と頭を下げる（当時は三社にも配信していた。「帰るのは僕だ。持って帰るが、後の手配はそちらでやってくれ」と受け取り、夜道をサイゴンへ向かって飛ばした）。

深夜に到着。一応、毎日に電話したが、誰も出てこない。眠いのを我慢して暗室に飛び込み、電送用に3枚作り、どこに着いても分かるように、同盟宛てに荷造りをして飛行便の情報なしで空港へ走る。進駐した時の朝日のスクープが頭をよぎる。夜明けの空港を見渡すと、天の助けか、海軍の双発機が1機あり、下士官が窓を拭いている。頭を下げて聞くと、当時の大本営参謀の辻政信大佐が乗って帰るといふ。「これは日本がかかわるニュースなので、東京でも台北でもよいから」と送稿を頼んだ。原稿を渡して待つと辻参謀が来た。飛行機が飛び立つのを見送っ



同盟通信機前の小路春美カメラマン＝1942（昭和17）年5月、シンガポール

て支局へ帰る。毎日へ電話、やっと取りに来了。後日「週報」を見ると、「調停ニュース……これは我が社だけのものです」と出ていたのを記憶している。

戦闘機隊も進駐、空港も拡張工事を始めていて慌ただしい空気になってきた。マレー担当宣伝班も長として少佐が着任。市内に出て予備用の小型カメラを探す。旧式のライカを見つけ、従軍取材に備える。本社、総局から記者、カメラ、オペ、連絡員が増員され支局も大変だ。宣伝班からマレー作戦従軍登録の指示が来る。同盟は篠原記者をキャップに記者3、カメラ3、オペ3、連絡員5、日映2、トラック1の陣容で、山下奉文中将の第25軍に従軍が決まった。カメラは知久、小路、橋本の3人だった。

12月3日、御用船に乗りサイゴン東寄りのカムラン湾に集結、海南島三亜からの主力部隊を待つ。毎日、鉄舟乗船の訓練が続く。12月8日、タイ国境のマレー領コタバルに先遣部隊が上陸した。タイ領シンゴラは楽に上陸できた。前線から離れているせいか砲声は聞こえなかった。が、シンゴラからマレー領アロースターに通じるジットラライン²⁰⁰まで来たら死屍累々^{しるる}。異臭が鼻をつき、激戦のあったことを感じた。戦線では当分シャワーは駄目だと思って、悪臭防止に香水の小瓶を買って来たが、後日その香水をかぐと、その場面を思い出して使いものにならなかった。

報道関係から死傷者

アロースターに入る。2、3日休養だ。住民は半分くらい逃げているが、水も出るので汗を流す。ペナン、タイピンと部隊主力は前進。中央の首都クアラルンプールを側面からも攻めるため、タイピンから1支隊が海上を迂回^{うかい}して西海岸に出る。折井(朝旦)、安田(毎日)、小路(同盟)の

カメラ3人だけが付くことになった。鉄舟に乗り、夜のマラッカ海峡を東に向かう。船に乗ったら船任せで不安も少々あった。

東の空が少し明るくなつて鉄舟団が見えるようになった。忘れていたが、その日は17年の元旦だったようだ。用意してあったのか、少しずつ日本酒が分けられた。すっかり夜が明けて、東の空から双発の敵機が現れた。攻撃もなく去つたので、偵察だけらしい。後が不安だ。予定を変更して鉄舟部隊は左に見えて来た川に向かう。ムアール川というらしい。数^{*}上流に入った。ムアールという町に上陸して1泊する。住民は逃げて空き家になっていた。明くる日、宣伝班の少尉に連れられ犬柿大隊を追った。夕方、部隊に到着。案内された空き家の土間に3人並んで横になった。

夜になって砲撃が始まった。こちらは砲がない。撃たれつ放しで反撃できない。周囲くまなく破裂音がして、逃げようもない。これが戦争というものか。運を天に任せてじっと我慢するしかない。安田君が「怖い」と言うが、こちらも同じだ。夜明けとともに砲声はやみ、ほっとしていると、宣伝班から迎えに来た。「無事でよかった」と。

本部へ合流、クアラルンプールに入る。住民も逃げないで歓迎、トラックが動けないほどだった。この中間地点からジョホール水道までは、国境越えほど強い抵抗がなく前進できて、重砲隊の到着を待つて今作戦の最大となる渡河作戦だ。17年2月8日、渡河作戦も成功。シンガポールの中央付近ブキティマ²⁰¹で最後の猛反撃に遭う。この砲撃で報道関係から死者が出た。鯉江(同盟)、岩崎(朝旦)の2人の連絡員が死亡²⁰²。柳(毎日)、知久(同盟)が負傷した。



「同盟写真特報」が報じた1942(昭和17)年2月15日の日英両軍司令官の会見。パーシバル司令官(手前右)に降伏を迫る山下奉文中将(向かい側着席者の左端)

山下・パ会談窓越しに撮る

15日、英軍は手を上げ、ブキティマのフォード工場で山下中将とパーシバル中将の降伏会談が行われた。同盟も記者、カメラの応援があつて、上海から来た武田君と2人で当たった。たそがれの会談を窓越しに撮影する。山下中将の「フーなら今夜から砲撃する」の一声は窓の外まではつきり聞こえた。2月15日、ブキティマ高地の武装解除された英印軍の中を縫って、市街へ静かに下りて行く。永井皓記者の胸には鯉江連絡員の遺骨があつた。レディヒルの空き家に野戦支局を設営、やっと落ち着く。同盟機が来て報道各社の原稿を東京へ運んだ。

1週間後、スマトラ北部攻略部隊に従軍する。津吉記者、小路カメラ、塩谷オペ、根来カメラ(日映)、連絡員4人の同盟と三社がメダンを目指す。「蘭軍はジャカルタで全面降伏」の同盟電を船上の塩谷オペから聞く。無血でメダン近くに上陸した。後は部隊に付いて占領下を回るだけだった。中央インド洋側のパダンから引き返し、北部先端のコタラジャ(アチエ)まで行きメダンに帰る。

戦場を歩く象の親子

コタラジャから帰る途中、野生の象の群れを見た。ジャングルの空間を7頭の親子象が歩く風景は別の世界かと思つて眺めた。メダンで支局を設営、5月まで勤務してシンガポールへ。高崎(カメラ)着任。交換船「緑丸」を取材。

17年8月、ビルマ(現ミャンマー)へ。バー・モー博士がビルマ中央行政府長官に就任するので、記者2人と高崎さんの4人で応援に海路ラングーン(現ヤンゴン)支局へ。ラングーンは復興が遅れて戦後風景が生々



マルビ第一線一怒江敵陣地を望む寺内南方軍司令官

信濃毎日新聞が1943(昭和18)年の元日号に掲載した、寺内南方軍司令官の雲南視察の写真。42(同17)年11月に小路春美同盟カメラマンが撮影

しかった。ビルマ作戦従軍の大坂から来た野間君と会う。高崎さんと3人で取材、終わって記者と高崎さんは帰ったが、私は残ってラングーン勤務になる。

宣伝班から「寺内(寿二)南方軍総司令官がビルマを視察に来るので、同盟と日映からカメラを1人ずつ出して、軍の公式記録を撮影してほしい」と言ってきた。野間君と相談、私が行くことになり、日映の賢田カメラマンと指定された日時に飛行場へ。元帥と参謀は2機の輸送機に分かれて乗る。2個中隊の戦闘機に守られ、ビルマ全地区の駐屯部隊を回る。記念撮影が主だったが、中国国境の雲南省に入り、メコン川上流の最前線まで行き、説明を聞く元帥を撮影した。

明けて18年1月、忘れかけたころ朝日の野村記者から「同盟さん、いい写真が撮れたね」「何のことですか」との問いに、「寺内元帥の写真が、大本営提供で元旦の1面に出ている」と新聞を見せてくれた。雲南前線の写真だった。誰も知らない仕事と思っていたが、気の安まる思いだった。

支社になって近藤公一支社長、蠟山芳郎編集部長、藤原文雄、小松武雄記者が着任した。春になり、小松記者と雲南前線部隊取材に行く。騰越という町に連隊が駐屯していた。報道陣が珍しいので大歓迎を受ける。



巴の姿のモーター・首相

昭和18(1943)年8月3日付の信濃毎日新聞に掲載された和服姿のバー・モー主席。小路春美同盟カメラマンが撮影

小松記者と同盟が作った「報道挺身隊^{ていしんたい}」を合唱、将校が感じ入って聞いていた。雪のある山上まで行った一週間の出張だった。

18年7月ごろ、バー・モー主席がお礼に日本へ行き、お土産に着物一式一家族分をもらって帰ってきた。着付けが分からず困っていることを、バー・モー担当の藤原記者が聞いてきた。堀内電務部長が家業の関係で着付けができるので藤原記者が連絡すると、喜んで写真も一緒に頼むと言われた。日時が決まり、佐藤記者、堀内部長とバー・モー官邸へ行く。着付けも終わり、着物と一緒にもらったのか、庭園にシカの置物が二つあった。それを入れて日本ムードを出して写す。写真を仕上げて、藤原記者に渡すと、私は「これはニュースだ。送らない手はない」と多少気にしながら本社にも送った。数日後、宣伝班からこの件について抗議があった。私は知らなかったが、バー・モー関係のニュースは宣伝班がタッチしていたらしい。近藤支社長は「個人的に頼まれたものだから」と言ったが、もめた後、始末書で終わった。私には一言のおとがめもなかった。

〔新聞通信調査会報〕第556号 2008年5月1日発行

数々の歴史的瞬間を撮影

（浅井達三氏とのインタビューを基に構成。文責・新聞通信調査会）

日中、太平洋戦争を通じ報道カメラマンの草分けとして活躍、多くの歴史的瞬間を記録してきた先輩を紹介したい。浅井達三氏。振り出しは

米国のMGMニュース映画社。昭和12（1937）年7月、日中戦争が勃発し、同盟通信社が映画部を設置したのに伴い同社に移籍。15年4月、日本ニュース映画社²⁸の発足で、同社所属となった。16年12月、海軍報道班員。

浅井さんの活躍は華々しい。12年8月、上海上陸作戦に従軍。「狭い道を挟み、建物の両側から日中両軍が小銃、機関銃で激しく撃ち合う。怖かったけど、夢中でシャッターを押した」と振り返る。その後、杭州湾上陸作戦を取材。同年12月には南京に入城する。武漢攻略作戦（13年8月）、重慶爆撃（16年6月）などにも、転戦。特に、96式陸攻に同乗した重慶爆撃は10回に及び、この間数々の写真をモノした。太平洋戦争でも多くの大作戦現場に、浅井さんの姿があった。16年12月、サイゴン（現ホーチミン）に赴任。同基地の海軍航空戦隊は英戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」と「レパルス」²⁹を撃沈した直後で、士気が大いに上がっていた。

次いで、ボルネオ（17年2月）、スマトラ（同年3月）と南方戦線を駆け巡り、一転、北の幌筈島（パラムシル島、千島列島）を訪れる。そこで、ミッドウェー海戦（同年6月）の敗北を聞いたという。

17年8月には千島を去り、再び南方戦線のラバウルへ。米軍がガダルカナル島に上陸直後のころである。基地から攻撃機が連日、出撃していた。機が帰還すると、浅井さんらは滑走路に飛び出し、戦果報告する隊員の姿をカメラに収めた。18年3月「い号作戦」発動。戦局をばん回するため、空母機をも同基地に集めて敵基地をたたくのを目的にしていた。同年4月、搭乗員激励のため、山本五十六³⁰連合艦隊司令長官が来着。「純白の二種軍装で、まぶしかった。とても威厳があった」と浅井さんは語る。

さらに、山本長官らはブーゲンビル島の最前線基地視察のため、同月

18日、一式陸攻機でラバウルをたつ。しかし、暗号電報が解読されて米軍機の待ち伏せ攻撃に遭い、山本長官は戦死した。浅井さんは「当初、私も長官機に同乗の予定だった。だが、出発直前、取り消された。おかげで命拾いした」という。

19年10月、比島沖海戦。マッカーサー米軍総司令官がレイテに上陸し



漢口作戦に従軍中の同盟通信映画部、浅井達三カメラマン(左)＝1938(昭和13)年秋

た。浅井さんも同月、特攻基地クラークフィールド²⁰⁴に派遣される。「神風特攻隊の出撃を撮った。会敵時刻ごろ、突撃を告げるツウのツウ連送。やがて何も聞こえなくなる。20歳そこそこの隊員がついに散ったのです。何とも言えない寂しさ。思い出すと今も胸が痛みます」

20年1月、本土に戻った。そして3月以降、鹿屋、国分などの基地から沖縄の米軍に突っ込む特攻隊を写す。8月終戦。やがて極東国際軍事裁判を取材。東条英機、板垣征四郎陸軍大將らA級戦犯の表情を克明にフィルムに収めた。

(「新聞通信調査会報」第465号 2001年8月1日発行)

それは地獄だった、激戦地歩んだ報道班員

潮田三代治(元日本ニュース映画社)

私がニュースカメラマンとして同盟通信社に入社したのは昭和13(1938)年11月だった。当時21歳。月給は50円で、小学校の先生と同じくらい。入社してすぐ、中国に派遣され、3年間戦地を渡り歩いた。15年4月、大毎、東日、朝日、読売と同盟はニュース映画部門を一本化し、「社団法人日本ニュース映画社」を設立した。同盟カメラマンもそこに移った。

16年12月8日、日本海軍はハワイ真珠湾を奇襲した。太平洋戦争の勃発である。私にも海軍から徴用令状がきた。報道班員である。17年1月、数班に分かれ、任地に赴いた。わが班はまず、マレー半島のペナンにあ

る潜水艦基地（醍醐忠重少将）に行った。在任中、連合艦隊の泊地トラックにも出向いた。山本五十六司令長官を初めて見た。

空母「瑞鶴」（野元為輝大佐）に乗艦したのがいつだったか、全く覚えていない。18年2月初め、ガダルカナルの撤収作戦が始まった。米軍が制空権を握っていたため作戦は夜、足の速い駆逐艦で行われた。

空母「隼鷹」（岡田為次大佐）と「瑞鳳」（山口文次郎大佐）も援護のため出動した。私は隼鷹に移乗。同艦は撤収してきた将兵を駆逐艦から収容した。川口支隊（川口清健少将）歩兵第124連隊（岡明之助大佐）の生き残りだった。皆、ほお骨が出て体はがりがり。将校の一人が戦線の様子をぼつりぼつりと語ってくれた。悲惨、まさに地獄図絵そのものだった。

「将兵はほとんど餓死またはその寸前だった。食べるものがなくなる、爬虫類を食べた。初めは焼いて食べた。しかし、煙が上がると他の将兵に奪われるので、そのうち生のまま食べるようになった。司令部が持っているコメを奪うため、友軍同士の撃ち合いもあった。戦友が死ぬとすまん〴〵と手を合わせ、何人かで食べたこともある」。ガダルカナル戦に陸軍は第2師団（丸山政男中将）、第38師団（佐野忠義中将）など3万1千人を投入し、2万1千人が戦死した。

19年1月、「隼鷹」を降り、インド洋のアンダマン島にいと、日映本社からビルマ（現ミャンマー）のメイミョー行きを命じられた。陸軍報道班員として第15軍（牟田口廉也中将）の指揮下に入れという内容だった。

同年3月、インパール作戦が下令された。数師団、約10万人の将兵が出動。私は第31師団（佐藤幸徳中将）配属となった。師団はアラカン山脈を越え、インパールを迂回し、コヒマに入る一番険しい北コースを担当した。チンドウイン川を渡ると、すぐジャングル。牛に幅60センチの車を引かせ、食糧、弾薬を運んだ。道をちよつとそれ、つるに足を引っかけてたりすると、その先に仕掛けてある爆弾がさく裂した。おいしそうなイチ

ゴの絵の描いてある缶詰も触れると爆発、多数の兵が負傷した。

一時、英印軍補給路の要衝、コヒマを占領したものの、持ちこたえられなかった。そのうち連日雨にたたられ、食糧、弾薬の補給が途絶した。一日一食の日が続き、それが半食となり、ついに配給はなくなった。雨具は役に立たず、下着までびしょぬれ。夜はそのまま寝る。病気になる方が不思議なくらいだった。私は馬の飼料の草を食べた。消化されるわけはなく、出るものは真っ青、割ときれいなものだった。ただ、私は岩塩を持っていた。それをなめなめ歩いた。もし、この岩塩がなかったら、今生きていなかったと思う。

戦線は敵と味方が接近しているため、臼砲を使うことになった。臼砲とは、ドラム缶のような爆弾を撃ち込む大砲のこと。運ぶには機動力を必要とする。敵陣ではジープが走り回っていた。それを奪って臼砲を運ぼうと、夜になって分捕り隊が出撃すると、機関銃でめちやくちゃんに撃つてくる。各所に足音を探知するマイクが仕掛けられていたのだ。

私はフィルムを撮り終えていた。これ以上いても無意味だと思い、同盟の野口勇一記者とともに後退した。途中、ジャングルの中は惨たんたる状況。野戦病院には軍医も看護兵もない。死体は埋められもせず、そのまま放置されていた。アラカン山脈の中の退却道は「白骨街道」と呼ばれた。体力が衰えているところに赤痢やマラリアで、戦病死者が続出したからだ。この作戦による日本軍の戦死・戦病死者は2万〜3万。ビルマ人、インド人を加えればそれをはるかに超えた。

私が命からがらメイミョーに帰り着くと、日映本社からまたも指令が届いた。フィリピンズのレイテ島オルモックに逆上陸する第1師団（片岡重中将）に、マニラから従軍せよとの内容だった。輸送船団は昼、島影に隠れ、夜だけ航行。19年11月1日、何とか上陸に成功した。既に米軍総司令官マッカーサー大將は「私は帰ってきた」と放送していた。



従軍中の日本ニュース映画社、潮田三代治カメラマン(左)。右は従軍した飛行隊の操縦士=1940(昭和15)年秋、広東付近の飛行場

上陸は船側に網を垂らし、5、6人ずつが小型発動機船に乗り移る。荷物を背負っているため、うまく乗り移れない将兵は海に落ちる。そうしたら最後、再び浮かび上がることはなかった。この模様を撮ったフィルムを内地に送ったが、公開されなかった。上陸した将兵は隊列を組ん

で行進した。そこに米P38機が襲来。将兵は小銃で応戦した。死者が出た。なぜ、退避しなかったのか。将校に聞くと、訓練を受けた満州は平原で退避するものがないため、戦闘機に襲われた場合、銃で応戦するしかかわっていなかったのだと、言っていた。

上陸した日、私たちは第一報を送ろうと無線の送信準備に。すると、上空に赤トンボ²⁶が1機、止まっているように見えた。そのうち、どこからかドカン。遠い。またドカン。今度は近い。機が消えた途端、落雷のような音がして、めちゃくちゃに砲撃してきた。山の向こうからだ。制海空権が敵軍にある島では逃げ場がない。こんな戦争をなくすには地球が一つの国になるしかない。20サンチ長距離砲の激しい砲撃下、私は家陰に身をかがめ、そんな単純なことを考えていた。

同盟の無線機は一報も打たないうちに吹っ飛んだ。師団通信隊に依頼しようとしたが、そこも被害を受けていた。電波を出せば、たちまち砲撃の目標になったから通信隊が健在だったとしても、打電は不可能だったろう。

海も米艦がうようよ。補給路は完全に断たれ、報道班への食糧配給もなくなった。手分けしてトウモロコシ探しに行った。それがなくなるとバナナの芽を食べた。根元を切ると、中心から芽が出て翌日には7、8センチ伸びていた。第14方面軍(全フィリピン担当、山下奉文大将)が「レイテの米軍は1週間以内に撃退」とした作戦は失敗した。第35軍(レイテ担当、鈴木宗作中将)、その指揮下の第16師団(牧野四郎中将)、第26師団(山県栗花²⁸生中将)、第1師団も壊滅寸前になっていた。

山道には日本兵の腐乱死体が群れ、それに負傷者、病人も交じって鬼気迫る光景。皆、水と食べ物を欲しがった。私たちも食べ物はないので水を探し、飲ませるのが精いっぱいだった。オルモックは廃虚と化し、猫一匹いない。

報道班13人のうち、朝日の影山三郎記者、同盟の野口記者と私は装甲艇に便乗できる幸運に恵まれ、セブ島に脱出。同盟の斉藤桂助セブ支局長にお世話になった。

その後、私はマニラ、台北などを経由して、東京に帰った。20年3月14日のことだった。大本営陸軍参謀3人が「話を聞きたい」と上野精養軒に招いてくれた。私はありのままの惨たんたる戦況を語った。そして「こんな敵に竹槍で、どう立ち向かうのか。戦局は持ちこたえられるのか」と問い返した。3人はうつむいたまま一言も発しなかった。

〔新聞通信調査会報〕第481号 2002年12月1日発行

反戦分子と勘違いされ拘引

花田為次郎（元同盟通信札幌支社通信主任）

昭和19（1944）年初秋のある日、私は5人の同僚と東一札幌専用線の受信、翻訳にいつものように携わっていた。確か午後2時半ごろだった。突然サイレンの音が耳に入ってきた。反射的に立ち上がって窓越しに丸井デパートを見た。屋上のセンターポールに警戒警報の標識旗が掲げられている。

「ちよっと待った」。私は、東京の読み手を制して「札幌はただいま警戒警報発令!」。2度怒鳴った。怒鳴った直後、それにしてはサイレンの音が妙に小さいのに気がつき、北海道新聞の屋上へ駆け出していった。サイレンの音は遠い。だが、鳴っているのは確かである。それにしても

変だ。そう思いながら、再び丸井の屋上をみると、標識旗はいつの間にかポールの中間に垂れ下がっている。その時の私の気持ちのようにあいまいな状態だった。

それから30分もたったか、支社に2人の男が靴音を響かせて入ってきた。「憲兵」の腕章が鋭く私の目を射る。30歳ぐらいの下士官と、もう1人は少し年輩の黒縁眼鏡の私服だった。2人は全員をにらみ渡ししながら言った。「この中に、いま警報を東京に通信したヤツがいるだろう。誰だ!」。一瞬、社内はシーンとした。「それは僕です」。思わず大声で返事した。途端に2人は駆け寄って腕章の方がいきなり私の左腕をつかんだ。「憲兵隊までちよっと来い」。

高ぶる神経を抑えながら私はM君と一緒に連行された。札幌憲兵隊は支社の近くにあった。殺風景な部屋に私は2度も移された。2時間も待たされ、例の憲兵が入ってきた。なんとなく表情が険しい。机上に赤い紙を置くと、万年筆をとって住所、氏名、年齢、学歴はもちろん、郷里の親兄妹のことまで書き留めた後、いきなり「おい、隠しても駄目だ。もう一人のが、みんなしゃべってしまったぞ」。

よく言う誘導尋問だな、よし、その手に乗ってたまるか。「私が何をしたのです。隠すも隠さぬもない。警報が出た場合は必ず本社へ速報することになっている。これがわれわれの仕事です。私は同盟社員として使命を遂行したにすぎない」。語尾は高くなり、しばらく無言でにらみ合っていた。やがて相手はちよっと語調を落として「警報を通信したいきさつを話してもらいたい」とペンを握った。そして「これは予審調書に匹敵するものだからそのつもりで」と、柔らかな中にも一種の威嚇を含めて言った。

私の話を一言一句克明に書くのだが、前言と少しでも違っていると不機嫌な顔で、胸ポケットから印鑑を出して、けい紙の上部余白に「○字削除、

〇〇字挿入」と書き入れ、いちいち捺印していく。「ではお前は、警報を聞いてすぐ東京に電話をかけたんだな」。通信社のことなど、てんでわかっていない。「東京本社と札幌間は専用線ですよ」。そう言っても相手は不思議そうな顔をする。私は通信社や専用線について説明した。取り調べは延々8時間も続き、午前0時ごろやっと「帰ってもよろしい」と、ごくあっさり「釈放」された。夜の札幌はもう肌寒い。支社長宅に車を飛ばして一部始終を報告した。

問題は中央で解決したらしく、翌日私服の憲兵が支社長に陳謝にきて、けりがついた。当時、室蘭に反戦分子がいて、民心攪乱の宣伝をやったというので、憲兵隊が神経をとがらせていた。その矢先、何かの音をどこかの係が警戒警報と勘違いしてサイレンを鳴らした。そしてデパートの警報旗が上がった。その情報が東京憲兵隊へ回り、そこから札幌憲兵隊に問い合わせがあった。ところが札幌では警報は出していない。つまり反戦分子の策動となったわけであった。それにしても、わずか30分で私の拘引となった。サイパンが落ち、テニアンも危なくなり、内閣は東条英機から小磯国昭に代わった頃のことだ。

〔新聞通信調査会報〕第54号 1967年6月1日発行

従軍記者に破格の饒別

秋山如水（元同盟通信メダン支局長）

新聞聯合の末期に運動部の囑託となった。いっばし背広で飛び歩くの

がうれしく、3カ月もたって、ある先輩に赤坂の「幸楽」で焼きを振る舞われた。「お前の囑託料を飲んじゃったから、今夜は遠慮なくやれ」と言われて、初めて給金の出ていたことを知ったが、一事が万事で、全くのんきなものであった。

それでも、聯合・同盟と続いた冷や飯には音を上げたが、電券（市電回数券）2冊6円を、日劇前の下駄屋で2円75銭で曲げると、それで結構おでん屋に行けたし、会社出入りの日吉自動車を利用で乗り回し、月給袋はハイヤーの伝票ばかりというデタラメな生活を続けながらも、生きる不自由を感じなかったのだから不思議である。

道楽とスキャンダルは人並み以上と言われた。生来ゼニとは縁遠く、遊びも綱渡りの半生だった。そんな私が大東亜戦争の開戦当夜は、お大尽の気分を味わった。親の金では身分不相応なこともやってのけたが、社からいただいたお鳥目^{ちやうもく}としては、後にも先にもこれが最初で終わりだった。

あの興奮の日の午後、かねてから従軍記者に指名されていた編集の面々が古野伊之助社長に呼ばれて激励された。そして、松本重治編集局長の立ち会いで一人一人に金千円の饒別が手渡された。10円札で1000枚の束だった。従軍費の前渡しでは変だし、支度金には多過ぎる額だった。威勢のいい先輩は「おやじ、生きているうちに香典をくれやがった」などと憎まれ口をたたいたが、私などは部厚い札束の重みにうっとりした方の口である。

日暮れとともに街へ飛び出し、美人女将の「やす幸」を振り出しに借金のあるバーを3、4軒。あつけにとられるマダムを尻目にきれいなサッパリと片づけて歩いた。私の不確かな記憶によれば、12月8日の晩は、時々灯火管制が行われ、そのせいか、「これで銀座ともお別れか」と、柄にもない感傷に溺れたことを覚えている。だから、そんな気分の延長で、

電通通りの「阿波屋」へ飛び込み、一枚革で最上等の草履をおふくろのお土産に張り込んだ。

家に帰って残余の700円ほどと草履をみせたら、びっくり仰天したおふくろが、仏壇に明かりをつけて草履を供え、「赤紙も覚悟のお前だから、出発までは何でも好きなことをやんなさい」と言ってくれた。どれくらいときに、思いもかけず、多年の親不孝が帳消しになったわけだが、亡母のあの時の顔が、今でも時々目に浮かぶ。

〔新聞通信調査会報〕第62号 1968年2月1日発行

鉛筆に銀文字で「同盟」の刻印

浦岡偉太郎（元同盟通信社会部）

本を読むのも飽きたし、マス目を埋めるのも面倒になって、ひっくり返っていたら、ふと、ガラクタ整理を思い立った。何しろ戦争中に疎開してから、終戦後も転々と居所を替え、縄をかけたまま、全然開けたこともない荷物が幾つもあるのだ。その中に同盟の赤いレッテルを張り付けた行李があった。中身は古着ばかりで、今どき着られるようなものは、一つもなかったが、中からぱとりと一本の鉛筆が転がり落ちたのである。拾って見ると、黒塗りの軸に銀文字で「第一号用筆社団法人同盟通信社」とあるじゃあないか。途端にいろんな記憶や思い出が、束になって脳裏をかすめた。

あのころは取材に出るたびに、子供さんの削ったこの鉛筆を5、6本

ずつ胸のポケットに突っ込んで出掛けたものだ。出先から直接、家へ帰ってしまうこともあったから、知らず知らずのうちに何十本もたまった。僕はそれを近所の子供たちに度々やった。休みの日、よちよち歩きの長男を、小学校の砂場で遊ばせていると、砂の中から同盟鉛筆が何本も出て来て、苦笑した記憶もある。

何の変哲もない一本の鉛筆だが、考えて見ると面白いものだ。運動部で使った鉛筆は、今も変わらぬ「ゼロゼロ3」なんてスコアや、記録の数字に身をすり減らし、政経部へいったやつは「依って直ちに院内に於て」という原稿に骨身を削ったことだろう。社会部のは「目下犯人厳探中」の記事に、やせる思いをしたに違いない。

戦時中すでに戸塚球場には、照明設備があつて、夏になると、電気野球と称する夜間試合があつた。鉛筆とスコアカードとザラ原（ざら）紙の原稿用紙と、やぶ蚊を追うためのうちわを持って出掛けた。戦評を送るとき「○○の右飛は電気安打となつて……」と言ったら、電話を取っていた秋山如水（あきやま）がせき込んで「電気安打って何だ」と聞き返した。太陽安打（たいやうあなうち）の向こうを張って、僕の発明した「電気安打」という字を最初に書いたのも同盟鉛筆だ。

文部省が学徒体育振興会という外郭団体を作つて、中等学校の全国競技会を一手に主催することになった。甲子園の中等野球を朝日から取り上げたりしたので、評判の悪い団体だ。夏休み中に行われる全競技の日程は、正式発表まで書かないという協定だった。ところが日程表を持つて社へ帰ると、内信部長の萩野さんが「協定なんてクソ食らえだ。骨は拾ってやるから書け」と怒鳴った。気の弱い僕は、そのけんまくに恐れをなして、渋々書いた。案の定、文部省クラブを除名された。あのものすくいけんまくは、胸のポケットにあった同盟鉛筆がよく知っている。

泊まりの晩のことだ。その日に限って10時ごろ編集室のドアが締め切

られた。何だか異様な空気だった。真夜中、偉い人たちが編集局長の松本さんのデスクに集まった。たいそう物々しかった。恐る恐るのぞきに行ってみると「馬來(マレー)半島」という地図を広げて、みんなでコタバルを探していた。僕はそこで初めて大東亜戦争の突発を知り、コタバルへ上陸したことを知った。松本さんがコタバルの地点を円で囲んだ。あれも同盟鉛筆だったはずだ。

「第一号用筆」にまつわる思い出が、それからそれへと湧いて来て、とめどもなく、まとまりもなく、やたらに往時が目に浮かんで来るのである。

(「新聞通信調査会報」第132号 1973年12月1日発行)



同盟通信の社名入り鉛筆

今も口ずさむ「報道戦士の歌」

山根英夫(元同盟通信南方総社)

私が思い起こすのは、かつて南方諸地域で先輩、同僚たちと折にふれ、あるいは酒が入る部会などで、涙を流しながら蜜声(みつこゑ)を張り上げた「報道戦士の歌」である。私は今でも微醺(びくん)の夜、低唱して亡き友を思うことがある。そうかと言って私は今、過去の戦争を美化したり懐かしむ気持ちは全くない。むしろ、その逆である。社命によって戦地へ赴いた人たちは皆、職分を果たすために死を賭して働いた人ばかりだった。その中には、職に殉じた人たちも少なくない。私の手元にある「同盟南方会会員名簿(昭和49年1974年作成)」によると、南方地域と海域だけで53人が殉職している。その中には私とも親しかった人が幾人もいる。無事帰国できた人々でも、すでに鬼籍に入った方々もある。あるいはまた、太平洋戦争以前に職に殉じた先輩も多いと思う。

幸いに私自身は、途中病を得て戦野を駆けることなく帰国していま、^{よわい} 齢八十を迎えることができた。「戦士の歌」を歌うとき、私は昔を懐かしむだけではない。亡き人々を弔う挽歌(ばんか)として歌うのだ。だが私の記憶は近來、急速に衰えた。歌詞にもうろ覚えの部分があることを認めなければならぬ。近在の先輩に教えを請うたものの、完全を期したい。以下に掲げる歌詞には、ごく一部に不明の部分があり、勝手に補作させていただいた。先輩の方々の叱正(しっせい)をお願いしたい。

この歌は、太平洋戦争以前に作られた「報道挺身隊(くしんたい)の歌」が元歌だとの指摘も一部の先輩からいただいたが、それらを確認するには歴史が過ぎ去りすぎた。私がこれを記録しておきたかったのは、職に殉じた

方々に、帰国後、病などのために他界された人々の霊に捧げる挽歌として、またそのご遺族と、いま現役として激務に携わる後輩の人々への応援歌となれば、と思ったからである。

歌詞は5節から成る。次のようなものである。

報道戦士の歌 作詞・作曲者不詳

一、従軍服を身につけて

進む火のなか弾の下

いのち捧げし報道戦

武器は執^とらねど愛国の

熱い血潮は沸きかえる

二、きのう十五里きょう十里

兵と進んだ山や川

疲れし兵は眠れども

寝るに寝られずローソクの

火影のペンに血がにじむ

三、カメラを抱いて躍り込む

敵前渡河や上陸や

また占領の感激を

見事撮^とった嬉しさよ

なんの痛から擦り傷

四、岩より重き発電機

リュックに担ぐ無電機の
肩に食い入るその痛さ
草に隠れてキイ打てば
故郷なつかし虫が鳴く

五、敗残兵の中を抜け

道なき道を走る夜の

月影寂し連絡員

リュックの中に記事フィルム

兵が托^{たく}した文もある

(「新聞通信調査会報」第431号 1998年10月1日発行)

解説

「記者と兵士のはざまで」―「報道班員」の実像

報道班員とは

日中戦争、太平洋戦争期を通じ、主に前線での取材、報道に当たった従軍記者のうち、軍に徴用された「報道班員」という要員がいた。報道機関が自社で派遣した特派員もいたが、取材統制と効率化を狙い、軍が輸送、取材、記事送信までの便宜一切を計らい、記事検閲を徹底できた報道班員は、厳しい前線取材では独壇場と言える存在だった。

報道班員には、文学者、画家、宗教関係者など文化各界にわたる関係者がいたが、ニュース取材のための記者、カメラマンはその中

心だった。陸、海軍の報道部がそれぞれ一本釣りか、所属組織、会社を通じて徴用した。戦地を取材させ、記事や作品を通じて国民の戦意高揚のためのプロパガンダとするのが目的で、どのような法律的根拠、取り決め、具体的手続きのもとに派遣されたのか明確な記録はなく、派遣総数や人的被害の実態もはっきりしない。

日本大学大学院新聞学研究科博士課程に在籍時、大津昭浩氏は2017年の論文「報道班員の編成と日本新聞会」で、「『報道班員』は『国民徴用令』の範囲拡大（1940年10月改正）を根拠としている」と指摘し、「少なくとも対米戦争準備時期に着想され、徴用元となった37年11月の大本営発足以降に具体化が検討された」としている。

制度着想のきっかけについて、いわば報道班員第1号として41年7月にベトナムに赴いた元同盟通信記者の大屋久寿雄^{くすお}は「日本としてはどうしても南部仏印に実力進駐を決行しなくてはおさまらないところへ差ししかかっていたので、大本営ではかねて松本（重治^{しげち}）元同盟通信編集局長あたりが進言していたPK組織を『報道班員』という名前で試験的に採用してみようということになり……」（『戦争巡歴』）と述べている。「PK組織」とはナチス・ドイツが設置した宣伝部隊のことだが、国家戦略的に軍隊の一部として訓練、整備したもので、報道班員とは構想、実態とも懸け離れている。第4章で、松崎新一氏は日本映画社の報道班員としてインパール作戦に従軍した時のこととして「最後は『戦場報道班員』という立派な名前に変わった。これも恐らくドイツをまねたのだと思う」と証言している。

また、派遣総数と犠牲者数については「報道陣だけでも950、960名」「241名の戦没者」との試算が示されたことがある。これから推定すると、（報道班員以外も含まれているが）派遣された3割近

くが犠牲になったことになる。報道機関の中では同盟通信の犠牲者が最も多かったとみられ、本書の第5章で山根英夫氏は「私の手元にある『同盟南方会会員名簿（1974年作成）』によると、南方地域と海域だけで53人が殉職している」と記している。

報道班員の報道

報道班員の戦地からの報道は各新聞紙面に署名入りで掲載され、戦況を生々しく伝える長文の記事も目立った。

同盟通信の配信記事をまとめた「同盟旬報」と、43年1月から名称が変わった「同盟時事月報」には「大東亜戦記」と銘打った連載特集が掲載されている。特に「時事月報」では南方、北方の激戦地に派遣された報道班員の詳細な戦況報告がタイトルカット付きで大きく扱われている。太平洋戦争中最も壮絶、悲惨な戦いの一つとされるガダルカナル作戦についても43年2月以降の月号にわたって、報道班員の報告や現地特派員の記事、軍幹部からの聞き取り記事などで取り上げられた。兵士の奮戦、苦闘をできるだけ英雄的に美化して描こうとする傾向は否定できないものの、詳細、リアルに記述すればするほど絶望的な負け戦であることを読者に悟らせる内容になっている。兵士が飢餓にさらされる状況を「ガダルカナルは餓島に通ず」とした表現も見られる。

43年3月号には「ガダルカナル島戦記」と題した、陸軍報道班員の記事の一節にこんなくだりがある。「草原の中に缶詰がいくつもいくつも転がっていた。敵は撤退して一人もいない、と見極めをつけた少尉は小川のとりに部下を誘導してきた。『これはありがたい。ルーズベルト給養だ』と缶詰を開けて牛肉を食い、あるいはミ

ルクを飲み、コーヒーを飲んで英気を養った。何しろガ島上陸以来の栄養分だ」。状況がリアルに伝わることは間違いないが、果たしてこれが国民の戦意を高揚させることになるのだろうか。

このほかアリューシャン列島防衛戦、ニューギニア戦線、アッツ島玉碎、ブーゲンビル島沖航空戦などが報告されているが、いずれも日本軍の敗北、後退を示す戦いであり、小説調、講談調で勇ましさを強調する記事の裏に悲惨さを隠せず、検閲はどのように行われていたのか疑問さえ感じさせる。

この長文の「大東亜戦記」も44年3月号からは姿を消した。戦局のあまりの悪化に戦意高揚を図るような記事の取材、報道そのものが難しくなったのだろうか。

報道班員の証言

本書には報道班員に関する証言や回想が数カ所にわたって登場する。

1936年の同盟通信発足から日中戦争期を扱った第4章では、「38年」4月になって（徐州作戦に従軍するため）『済南に行け』という社命があった（喜多原星朗氏）、「大行山脈を越えて揚子江に沿って漢口に進撃する陸軍部隊に従軍する同盟通信社の報道班は、記者1名、写真班1名、それにオペレーター1名の計3名が1組になって、それに無線機1機を持って、各連隊に1班ずつ配置されていた」（秦蔵夫氏との記述が見られる。菊江栄一氏は、昭和14（1939）年1月に広東支局から海南島の海口支局に派遣され、海軍機に同乗して南寧爆撃を取材したことなどを回想している。いずれもその後の制度的な「報道班員」とは別の、社から特派された従軍取材班のことと

みられる。

また、秦氏は「昭和14（1939）年春から夏にかけて海軍省が記者クラブ黒潮会会員の大連戦線視察団を編成実施した」と、当時の軍による報道対応を証言しており、この時期の戦局にまだ余裕があったことをうかがわせる。

太平洋戦争期を扱う第5章では報道班員や特派員としての厳しい従軍経験がさまざまに語られている。

岡崎亀市氏はミッドウェー海戦（42年6月）に報道班員として従軍した。「全滅した機動部隊の主力ではなく、（途中反転してガム島に逃れたミッドウェー攻略隊だったので命拾いした」とし、軍から「敗戦記は一行も書くことならぬ」と厳命されて「30年間、それを守ってきたのだから同盟記者も忠実なもの」と書いた。

42年8月から半年間、ソロモン海戦に報道班員として従軍した牧島貞一氏は海軍側から見たガダルカナル作戦について「ミッドウェーの敗戦は『極秘』のベールに包んで、国民の眼をくらませたが、ガダルカナル放棄は、ごまかせなかった。国民が『日本は負けている』ことを事実を持って認識したのは、このガダルカナル撤退であった」とした。やはり海軍報道班員としてニュース映画撮影を担当した潮田三代治氏はガダルカナルから撤収してきた将兵を艦船に収容した模様を回想している。「皆、ほお骨が出て体はがりがり。将校の一人が戦線の様子をぼつりぼつりと語ってくれた。悲惨、まさに地獄図絵そのものだった」

43年10月から44年5月までインパール作戦記録映画班の録音技師としてビルマ（現ミャンマー）に入ったという松崎新一氏は「ジャングルで道はなく、ちょっと横にそれようものなら、英印軍が仕掛けた



広東省珠江で殉職した同盟通信映画部、花房末太郎カメラマンの現地慰霊祭。右奥腕章姿は現地取材キャップの栗林農夫＝1938（昭和13）年11月

爆弾がさく裂。（中略）食料・弾薬の補給がつかず一日一食から一日半食。そのうち配給がゼロになった」と証言。

44年8月、玉碎の島グアムで報道班員として従軍した報道班員らは島内のジャングルを逃げ回った末に追い詰められたカメラマンは自決、投降した記者は米軍に捕らえられてハワイに連行されて、日本軍の投降を呼び掛ける放送をさせられた。

元同盟通信社会部長の佐藤喜一郎氏は著書『最後の記者馬鹿』（中央公論社）で「報道班員として前線へ出たいという志願者が多かった。私は志願者から、陸軍がいいか海軍がいいか、どの方面を望むか、などあらかじめだいたいの条件を聞いておいて、なるべく希望に沿うようにして出してやった。そのほかに陸海軍の報道部で勝手に指名指しでクラブ員を前線へ送るのもあった。私はずいぶんたくさん記者を戦線に送り出したが、中に3名ほどついに帰ってこない同僚があった。本人の希望を入れて派遣したのには違いないが、どうしても自分の責任のような気がした。残念でならなかった。私の長い新聞生活中、最大の悲しみだったとともに、あきらめきれない終生の恨事である」と心情を吐露した。

また、続いて次のようなエピソードを紹介している。

陸軍報道班員として従軍の経験を持つ社会部の記者が海軍担当になったものの、「海軍クラブでは肩身が狭いので海軍報道班員として海に出たい」と佐藤氏に申し出た。その機会が来たので佐藤氏が打診したところやや浮かない顔つきであることが気になったため「無理に出なくていい」と言ったところ「明日の朝まで待ってください」とのことだった。他の部員に聞くと、記者の妻が心臓病で寝たきりであることが分かり、他の希望者に振り替えようと考えていた

が、その記者は翌朝「是非やってもらいます。女房も行くようにすすめてくれましたから」と晴れ晴れとした表情で言った。その後だいたいぶたつてからこの記者は台湾沖で乗っていた駆逐艦が爆撃され戦死したと聞いた。

むすび／戦争報道の課題

戦争報道における記者と軍との関係は常に緊張をはらんでいる。戦局を有利に運ぶために報道を利用したい軍と、事実を正確・迅速に伝える記者の役割は往々にして矛盾する。その帰趨を決するのは国民の意志、監視、判断ということになる。

ベトナム戦争では、戦争の意義に対する国民の批判を背景に歴史上初めてテレビが戦場の実態をリアルに映し出した。米側に不利な情報や戦況報道を抑えきることができず、圧倒的な武力を誇ったはずの米軍が敗退する大きな要因となったとされる。

しかし、日中、太平洋戦争期の日本では、報道機関と軍の緊張関係も、真実を知ることに対する国民の強い意志も不足していた。同盟通信社をはじめ報道記者を支配していたのは強い「愛国心」と国家、国民への奉仕の信念、記者という職業への誇りだった。本解説の前の証言「今も口ずさむ『報道戦士の歌』」には、当時記者仲間と共に歌ったという「報道戦士の歌」の歌詞が記されている。「従軍服を身につけて 進む火のなか弾の下 いのち捧げし報道戦 武器は執らねど愛国の 熱い血潮は沸きかえる」。

「国益の守護」と「真実の報道」はどちらが優先されるのか、そもそも矛盾するものなのかは、民主主義や自由な報道の価値がコンセンサスとされる今も必ずしも自明ではない。

戦時中の報道班員や従軍記者の苦闘、奮闘を後知恵で評価するのはなく、痛切で貴重な歴史的教訓として継承し自問自答することが必要なのではないか。

(飯岡志郎)

第3節 海外の同盟記者

北千島従軍記

西井武好（元同盟通信写真部）

「千島鳴くキスカよさらば、アツツ思えば胸うづく…」。昭和19（1944）年3月、小樽港から北千島へ向かう輸送船の中で、陸軍部隊の兵士たちの間で、アツツ玉碎とキスカ撤収をしのぶ追憶の歌が歌われていた。われわれ北方方面軍陸軍報道班員十数人も、この船に乗り合わせていた。

これより先、小樽港に停泊していた輸送船は2隻。1隻は「伏見丸」という新造船で、見るからに軽快な格好よい船だった。もう1隻は「日振丸」という老朽船で、船体は「伏見丸」より大きかったが、停泊している時から船は左舷に傾き、いかにも速力の遅そうな船だった。報道班員ははじめ「伏見丸」に乗船することになっていた。ところが、いざ出港直前、「日振丸」に乗りかわることになった。全員で輸送指揮官のところへ交渉に行った。「伏見丸」は狭い。報道班の皆さんに窮屈な思いをさせたくない」と説かれ、しぶしぶ「日振丸」に乗ることになった。ところがこれが運命の別れ目、となった。

3月末、両船は小樽港を出港、途中大湊港に寄港、そこから駆逐艦2隻に護衛されて北の海に向かった。3月末から4月にかけての北方海域は、ものすごい濃霧の季節である。津軽海峡を出る頃、もう僚船の姿を見ることはできない。

やがて船は択捉島（えとろふ）の天寧（てんねい）に着いた。先着しているはずの「伏見丸」の姿は見えず、「日振丸」だけが到着した。「伏見丸」は潜水艦の攻撃を受けたとのことだった。後で聞いた話だが、そのころ札幌支社では同盟通信をはじめ朝、毎、読、北海道新聞各社間で北千島従軍報道班員の合同慰霊祭が計画されていたという。

千島に着いてから、報道班員は各社ごとに島々に点在することになった。同盟はペアで2組いたが、第1組の山田正作と佐野誠一の両人は択捉島に残り、私と曾我部元斉はウルップ島（得撫島）へ行った。

ウルップ島には師団司令部があった。4月というのに残雪があり寒い。白樺林が多く、ハイマツ、シャクナゲなども群生していた。兵舎はみんな丸形テント、中央に5層ほどの支柱を立てロープを放射線状に張っている。真ん中にストープがあり、燃料は白樺。白樺はナマ木でも油があり、よく燃えた。

ウルップ島での取材を終え、こんどは北のマトウア島（松輪島）へ行った。便船が出るたびに、乗船許可を取り、島伝いの航行だった。途中シ

● 中国・満州などの同盟通信取材網＝1944（昭和19）年4月現在



- は総社
- は総局／支社
- は支局
- () 内は現在の地名
- 日本国内の支局は除く

ムシル島(新知島)に下船して待機中、日比谷公園角の交番に勤務していた大金松次郎巡査が私の前に現れた。「同盟通信の記者が来ていると聞き、やって来た」とのこと。彼はよく市政会館の地下室にあった同盟写真部に来ていたため顔見知りだった。また、京都支局勤務の入江一夫君に会ったのも、このシムシル島であったと思う。

さて、マトウア島に着いた。船はトド湾という小さな入江の湾に入った。島は周囲50^キぐらいあろうか、中央に松輪富士と呼ぶ富士山形の山がある。裾野が広がり円形の島を形成していた。南部は断崖絶壁、北東部がやや平地になっており、ここに小さい飛行場があった。

松輪富士は活火山で火口から白い煙をはいていた。標高1300^{メートル}ぐらい。頂上まで登ったが晴れた日など遠くカムチャツカ半島、パラムシル島(幌筈島)付近がかすんで見える。すぐ隣にラシヨフ島(羅処和島)、オネコタン島(温補古丹島)、シャシコタン島(捨子古丹島)といった島が、きれいな北の海に浮かんで見えた。島には白樺林は少ない。ハイマツ、シャクナゲの群生がほとんど。ここは昔からキツネの養殖場となっていた。金ギツネ、銀ギツネなどよく見られた。

食糧は玄米と乾燥野菜ばかり。19年といえは食糧事情はどん底の時代であり、辺地の戦場では、精いっぱいというところだろう。唯一のタンパク源はトドの肉ぐらいのもので、これも固くてあまりうまくなかった。ある夜のこと、はるか東方海上からものすごい艦砲射撃の音が聞こえてきた。兵隊は武装し位置についた。われわれは山の横腹の壕の中にはいった。艦砲射撃はかなり長い間続いた。

19年の夏、サイパン島が米軍の基地となり、もはや北方からの日本攻撃の必要はなくなったのか、やがて夏が過ぎ、北千島にそろそろ雪が舞い落ちるころ、われわれ報道班員は島を離れた。大型輸送船はすでになく、せいぜい50^トぐらいのチャーター漁船で島の沿岸伝いに潜水艦の機

銃攻撃を避けながら根室港に帰着した。

(「新聞通信調査会報」第306号 1988年5月1日発行)

従軍で強行軍の厳しさ味わう

藤田芳雄(元同盟通信太原支局)

同盟通信太原支局で初めて従軍したときのこと。戦いは遠く去りにけり、というほどの感傷ではないが、お恥ずかしき記録。これも戦後22年、敗戦に終わったから書けるのだが。

昭和18(1943)年、山西方面軍の春季掃共作戦が山西省東南部沢州、潞安から河南省境にかけての天険・太行山脈に展開された。かわい子には旅で、ついた部隊が連隊だった。初陣にもめんどりと張り切ったが、兵隊も音を上げる強行軍。谷を渡り、山をよじ、岩に臥し、半煮えの飯ごう一つが3日分で、取材どころか、鉛筆握る力も失せた。血豆の足を引きずりながら、息も絶え絶えについていくのが精いっぱい。頼みのポータブルトランクはロバに蹴られて穴が開いた。アンテナ張ってキーたたけど虚しく、オペさんと膝を落として天を仰いだ。

「清室空野」の八路軍地区を通過しただけの討伐に泰山鳴動何とやらで、ただ非情な戦争につきものの、行軍の厳しさを味わったにすぎなかった。

それでもたそがれの山あいに、消えていく本隊に隔てられて、危うく敵地に取り残されそうになったり、弾丸に当たってこのまま死んだ方が

いいと、何度も真剣につぶやいたものだ。その苦行の中で、名の知れない美しい花の咲く清らかな谷川、こつぜんたる湧泉のほとりに横たわる氷塊、人を近づけない絶壁の大瀑布^{ばくふ}などが、強い日差しの下で、華北の山中とは信じられない秘境をしのばせた。今も白日夢のように鮮烈に浮かんでくる。戦争の幻影を追い払うように：「書かざる記者」はこの後、しばらく非才にむち打った。

〔新聞通信調査会報〕第55号 1967年7月1日発行

内蒙古・包頭^{バオトウ}で迎えた正月

福岡誠一（元同盟通信南方総社長）

海外で送った正月の数は十指を屈するほどもあるが、昭和18（1943）年に内蒙古の包頭で迎えた正月ほど、今も鮮明に私の記憶に焼きついている正月は、ほかにひとつもない。それは多分に、その元日をいっしょに送った人物のせいであるらしい。

私は、前年の12月に、北滿の東安を中心に行われた耐寒報道演習に参加したのち、足を華北に延ばし、初めて内蒙古の土を踏んだ。途中、大みそかに日帰りで訪れた大同^{だいどう}の石仏寺の洞窟（雲岡石窟^{うんこうきょく}）は私に強い感銘を与えたが、当時スベン・ヘディンの探検記を読んだばかりだった私の心は、遠く蒙古の平原のかたに飛んでいた。

大同を夜にたつて包頭に向かう途中、百靈廟^{ひやうれいびやう}の辺りにくると、当時なお多くの包^{バオ}の集落が残っていると知って、何度途中下車しようかと迷っ

たかれない。しかし、包の集落は駅から何十^キか離れていたし、大阪へ帰任を急ぐ私にはとうとう下車の決心がつかなかった。

元日の早朝に着いた終点・包頭駅頭はきれいに晴れ上がった大陸天気、太陽がキラキラと輝いていた。見ると人影もまばらなプラットホームに、最近まで大阪の西部軍司令部にいた森茂樹少将が軍装で立っている。奇遇に驚き、とつさに「やあ、しばらくでした。どなたかお迎えですか」と、正月のあいさつになっていないあいさつをしてしまった。

「いや、あなたを迎えにきたのですよ。おめでとう」というのが森少将の返すあいさつであった。さすがに私は恐縮した。張家口^{ちやうかこう}から青木啓君あたりが知らせてくれたものらしい。森少将は、西部軍司令部で報道関係を担当していたし、非常に好ましい人柄であったから、私は懇意に願っていたことは確かであるが、それにしても、元日の早朝から単身で私を出迎えてくれるとは。

こうして、私は森少将の好意で包頭の見学をさせてもらった。包頭は文字どおり包の集落の始まるころではあったが、もはや包の影すら見る由もなかった。私の思いは遠く五原^{ごげん}のかたに馳せ得るばかりであった。その上、夜は森少将の招きで二人きりの会食となった。その席に現れたお酌が、当時、もはや内地でもお目にかかりにくくなっていた黒の裾模様に稲のかんざしという正装の芸者衆であったりした。これでは、私のモンゴルへの幻想は湧き上がりようがなかった。しかし、私は悔いなかった。森少将の温かい心情に触れることができた。スベン・ヘディンの幻想以上の収穫であった。森茂樹氏は私には軍人ではなく温かい人間であった。

〔新聞通信調査会報〕第49号 1967年1月1日発行

綿花生産地で買い付け状況視察

宮城春生（元同盟通信済南支局）

小生が北支総局（北京）へ転勤を命ぜられて着任したのは昭和18（1943）年3月中旬であった。それまで小生は同盟通信の創立当初から約6年間外国経済部勤務で、朝6時に出勤、ロンドン、ニューヨーク、シカゴ、ボンベイ（現ムンバイ）など世界各地の主な株式、商品、外国為替相場などを入電する傍らから翻訳して、午前8時ごろまでには、和文タイプ通信の印刷発送ができるようにする忙しい仕事であった。

北京は鈴木幸次郎総局長の時代で、小生は塩見恒明経済部長の下で先輩の永峰、杉田両氏の指導を受けながらデスクの仕事をした。着任した日の夜は鈴木さんが「君は東京から来たのか。ではまず胃袋のしわを伸ばしてやろう」と、数人の先輩連と一緒に王府井ワンフーヂンのさる飯店に案内されて結構なジンギスカン料理をごちそうになった。

晩春から一足飛びに初夏に移り変わる北京の風景は、全く広大な花壇の中に市街ができていくような感じで、日曜日などには、よく先輩たちと天安門、故宮、天壇てんだん、景山、北海公園、さては西北郊外の万寿山と昆明湖で有名な頤和園いわえんへと出掛けた思い出がある。

華北の冬によりやく慣れた頃、翌19年の春に済南支局（赤羽三千彦支局長の秋元記者が内地に帰るので、その後任として小生が転任した。済南市は、農産物、毛皮類の集散地として重きをなし、奇麗な水が豊富に湧き出るので中国ではまれな生水の飲める都市でもある。

当時済南では、日本商社の綿花、穀類、皮革、毛皮などの買い付け活動も活発で、初秋のある日、在済南日本人記者団数名は東洋棉花の好意

で同社の綿花買い付け状況視察のため、綿花生産の中心地として有名な高唐県を訪れた。買い付けは県城周辺で行われるので済南から汽車で2時間くらい行った小さな駅で下車。そこから商社の綿花買い付け用トラックの荷台に乗り、6時間余もかかって県城に着くと、日も暮れて暗い夜であった。途中は、あの『麦と兵隊』の文句ではないが、行けども行けども麦畑と綿花畑。広大な農地の展開に今更のように驚いたものである。

（「南船北馬」創刊号 1981年11月発行）

敗戦後、青島市の寛大な措置

宮城春生（元同盟通信青島支局長）

昭和18（1943）年3月中旬に北支総局（北京）へ転任した。総局で使っていた送受信用の大型真空管が不足がちであったため、頼まれた真空管を大きな段ボール箱に数個詰めこんで、割れないように大切に提げて行った。東京駅を3月15日昼すぎの急行で出発、北京駅に着いたのは18日の午後であった。当時の総局長は鈴木幸次郎氏で、経済部長は塩見恒明氏であった。

翌年春、済南支局の秋元記者が内地に帰任したので、その後任として、5月1日付で同支局へ転任した。支局長は赤羽三千彦氏であった。済南は、津浦鉄道しんぽで天津から400キ近く南下した地点にあって物資集散の要衝の地を占めていたが、未経験の取材記者としてようやく慣れてきた

11月中旬に、私は3週間の教育召集を受け、袁州部隊に入隊した。

帰任早々に華北総局から呼び出しを受け、北京に行ってみると、鈴木幸次郎総局長より「実は植松(孝義)青島支局長が近く内地に帰任することになったが、後任者は総局内で探す以外に方法がないので、是非引き受けてくれ」という話があった。翌20年、青島支局に2月1日付で着任した。青島は1898年にドイツが租借、第1次世界大戦後は、国際連盟の委任を受けた日本の統治下におかれていた。

青島支局に着任して、最初に手掛けた仕事は、通信購読料の引き上げであった。月額購読料は和文も華文もまちまちで、高いところで600円(華北連銀券)、安いところは300円から400円どまりであった。総局からの通達もあつて独立採算制に近づけるためには、最低でも倍額に引き上げる必要があつた。多少購読者が減つても、その方が経費の節約になった。大商社や邦銀などの各支店では、当方の苦境を了解して値上げに応じてくれたが、その他はわずか100円、200円の引き上げも容易ではなかつた。青島支局では、部数は少なかつたが、英語のうまいタイピスト嬢を雇つて、ガリ版刷りの英文通信をドイツ系商社などに終戦直前まで配達した。

支局では玉音放送を全員編集室に集まつて聞くことができた。当日、青島市人民政府当局の寛大な措置により、数万にも及ぶといわれた日本人居留民は、一切の事業活動を即日禁止されたが、他の都市のように収容所に入れられることもなく、帰国の日まで各自、おのおのの住居で、支局員の場合は支局の建物内で、生活を続けることを許された。ことに館陶路20号の同盟支局の入り口には、その日から毎日、市政府当局より派遣される2人の銃を持った警備員が歩哨に立ち、この状態は支局員ならびにその家族の内地引き揚げの日まで続けられ、一同は不安もなく日々を送ることができた。

同盟青島支局接收のため中央通訊社代表の来訪を受けた。代表は地元華字紙記者数人を帯同して来たが、通訳がいなかつたのでちよつと困つたものの、英語で話を進めることとした。詳しい支局の財産目録を作成して待っていたので、それに基づいて話を進めるうちに、先方は現金(確か30万円余りだった)も全部接收すると言ひ出した。当方としては、全額接收されては明日から支局員家族が食えなくなるし、一同の帰国が何カ月先になるのか全然見当がつかないから、取りあえず当面の食事代としてその半額を借用させてもらった。しかし残留が長引く場合は残りの全額も借用に行くからということにして、その日の交渉は終わった。翌朝の華字紙には小さな見出しで「同盟社青島支社の接收、極めて友好裏に完了」という記事が出ていた。

民間人の乗船は、12月後半に入港する第3船以降ということになった。第3船の青島出港が12月19日、LSTは2千ト級の大型船で、乗船した引き揚げ者は1100名余り、鹿児島入港は22日であつた。

(新聞通信調査会報)第291号 1987年2月1日発行

44年冬の深夜の北京駅

黒沢英一(元同盟通信華中総局英文部)

太平洋戦争がようやく終幕に近づいていた頃の1944(昭和19)年冬、同盟本社海外部から、華中総局(上海英文部に転任することになった。戦況は不利であり、国内政治社会の暗澹たる様相には、すでに「革命前

夜」的機運が、動いていたようにも感ぜられた。ヨーロッパでは、米英仏連合軍が、北仏ノルマンディー上陸作戦を開始していた。

平常時の「長崎―上海航路」は、その周辺海域に米軍潜水艇出沒のため停止されていた。これに代わって下関―釜山航路から京城（現ソウル）、平壤、鴨緑江、奉天、天津、北京の鉄路によることになった。東京にいながら北京までの直通急行列車の座席券が確保できたことは、それだけでも当時の日本人を安心させるものだった。長年にわたって朝鮮半島と満州を占有していた古き日本人の「感覚」だったのであろう。

釜山をたった北京行特急列車は、全区間をほとんど時間通りに走ったようだ。途中の停車駅の記憶は、あまりない。平壤は寒かった。鴨緑江鉄橋通過も今から思えば歴史的な体験となった。安東も奉天もはつきりとは記憶に残っていない。万一を考えて、数日分の食糧も用意していたので、どこに着いてもプラットホームには降りなかった。山海関だけは鮮明に記憶している。ひなびた小駅に停車中、車窓から万里の長城の一部らしいものが展望できたからである。悠久たる中国史の世界が思い出されて、感慨なきを得なかった。

私の指定席は欧州スタイルで、二人用の個室になっていた。奉天まで同室だった日本人の乗客は満鉄関係会社の役員で、長年の海外生活からか、日本人離れした趣があった。後で分かったのだが、私が喫煙しないので、最後まで自分も一本の紙巻にも火を付けなかったほどだ。その中年の紳士が、無造作に座席の片側に脱ぎ捨てた冬オーバーは、表地に柔らかなて軽いカシミアを使い、裏側には銀狐の尾だけをぎっしり並べた珍しいものだった。思わず「立派なものですね」と口に出たのが、私たち2人の奉天までの「対話」の始まりだった。

第2次大戦直前のヨーロッパ、アメリカを慌ただしく駆けまわった私の旅の思い出話に、じっと耳を傾けていたこの紳士は、やがて太平洋戦

争の当時の断末魔的状况になると、深く眉を曇らせて、「何事も潮時というものがあるからね。」使い古した黒いスツークース一つで彼は身軽に奉天で下車した。

北京駅に着いたのは深夜であった。到着プラットホームは、そのまま駅前広場の一部になっていて、そこには雨風をしのぐ屋根もなく、改札口もない。階段もない。陸橋もない。照明灯もない。駅員も見当たらない。待合室も事務室もどこにあるのか暗くて分からない。釜山では満員だった車両も、奉天以後は急に空席が目立ち、北京では私の車両から降りたのは私一人。重いトランクを運んでくれる赤帽もない。

私の旅路は、本社海外部から華北総局に連絡済みで、当然同僚の出迎えを期待していたが、それも見えない。どういう行き違いがあったのだろう。広場は暗い。すでに12月に入っていて北京は寒い。電話ボックスも見当たらず。いつか人影も消えた。仮に誰かいたとしても、私は中国語を話さない。長年海外で暮らしたといっても、それは英語が通用する地域だったのである。ここは全く違う。万事休す。冷たい戦慄が全身を走った。夜は深々として更けわたる。

私の余命はこの瞬間、10年は短縮したように感じた。ふと気がつく、暗い広場の中央あたりに、人力車が30台ぐらい、キチンと2列に並んでいる。その一つ一つに、黒い木綿服を着た車夫が腰を下ろしている。タクシーはない。この時、8年ほど前の香港旅行を思い出した。そこは英領であり、車夫も片言の英語を話す。ここ北京は日本軍占領下である。ここ数年、多数の日本人が往来したであろう。釜山から北京まで、全線の治安が完全に維持され、時間通りに長距離列車が運行されていたのも「日の丸」の力かも知れぬ。

重い荷物を引きずるようにして最初の車夫に声をかけた。「乗せてくれ」（日本語である）。車夫は立ち上がった。2人はあろうという大男である。

顔は穏やかだ。「トンタンツホートン」―私は大声で叫んだ。同盟華北総局の住所である。その中国風発音とアクセントは、本社の先輩から親切に教えられたものだ。それ以外の中国語は一切知らない。車夫は、隣と同僚車夫に振り向いて、ポソポソと相談していた。車夫はぬうーっと立ったまま、じいっと私を見た。「トンタンツホートン」―私はイライラして、もう一度大声でそう叫んだ。他の中国語を全く知らないのだから仕方がない。車夫は無言でうなずく。「分かった」という表情だ。彼は重いトランクを片手で軽々と車に積みこみ、私に「乗れ」と身振りした。私には一切中国語を使わない。私が全然話せないのを見破っているらしい。

中国の人力車は、日本のとは少し形態が違う。かじ棒がやたらに長い。車夫はこれを高く上げて走るから、客は用心しないと、後ろに振り落とされてしまう。大男が大腿で走る。目が回るように速い。広い大通りをカラカラと寒い音をたてて、飛ぶように進む。人通りはない。車もない。街灯もない。

やがて直角に左折した。今度は少し狭い。両側とも黒い土塀で、高さ5^{メートル}はあるだろう。灯火は一切見えないから心細い。やがて、黒い門が、固く閉まっているところで止まる。脇には小さなぞき窓があり、呼び鈴のボタンもあるらしい。車夫はそれをよく知っている様子だ。看板も灯火も見えず、どこの事務所か分からない。やがて窓口が開いて、中国語で応答があった。車夫は何やら告げている。

「同盟通信の者だ。東京から来た。早く中に入れてくれ」。私は日本語で叫んだ。くぐり戸が開いて、私は小部屋に入った。車夫は親切に、トランクを運んでくれる。門番らしい男に、料金の支払いを身振りで頼む。今までの恐怖と緊張が抜けて、私はそのまま床に膝をついて、動けなかった。

翌朝、総局編集室に総局員一同がそろったころは、もう前夜の「出来事」が知れ渡っていたようだ。佐々木健児総局長は、一同に向かって「夕べ駅に出迎えに行ったのは誰かね」と尋ねた。答える者がいないのを確かめると、それ以上は何も言わず、私を招きよせ、「無事で何よりだったね」と喜んでくれた。「奇跡的でした」。「いや、そうでもないだろう。永年海外生活をした君には、自然に身についた何かがあるのだよ。なまじっか、舌足らずの中国語など、話さなかったのが、かえってよかったのだよ」

総局員らの手落ちには、重く責任を感じるらしい佐々木総局長は、私を厚くもてなしてくれた。いよいよ任地の上海に出发するにあたっては、途中の天津、南京、及び到着地上海の各総支局に、それぞれ、丁寧に連絡してくれたようだ。（小著、炉辺随想第二集『続この道』に載せた一章中の一部を本号のために書き改めたもの）。

〔南船北馬〕第5号 1985年9月発行

親日中国人に日本人警官が暴言

杉田栄三（元同盟通信華北総局経済部）

太平洋戦争たけなわの昭和18（1943）、19年の頃。当時私は同盟通信社華北総局の経済部記者であった。在北京日本大使館をはじめ北支那開発などのいわゆる国策会社、日本商工会議所、中国側機関では新民会、合作社など日中双方の経済関係機関を受け持ち範囲として、経済記事の

取材をするのが私の日常の仕事だった。

戦局はすでに敗戦に向かって下り坂を転がり落ち始めており、ガダルカナル島からの日本軍撤退、アッツ島の守備隊玉砕、マキン・タラワ島の守備隊全滅、欧州戦線でのイタリア降伏、米軍のマーシャル群島上陸、そしてサイパン島陥落の悲報が相次いだ。私が外回りで入手する情報も、敵ゲリラの妨害でどこその鉄道が不通になったとか、治安の悪化で穀物や綿花の収集が進まないとかいう、記事にはならないオフレコの情報が次第に多くなってきた。それでも戦局の悪化をひた隠しにしようとする作爲があつたためか、北京市内の空気はまだまだのんびりしたものであつた。

物価が日一日と高くなるのは閉口したが、市民生活は概して平穩で、取材には洋車に乗って飛び回り、仕事の合間、合間には中南海公園の茶店で、ジャスミンの香りの高い中国茶をすすったり、夜は夜で東安市場に向いて烤羊肉をついたりで結構のんきな日々を送っていた。

私が取材対象とする中国側機関のなかに北京市公署（市役所）があつた。市公署はいうまでもなく北京の市政を司る役所だが、市政の実権は日本側が押さえていたから、いつてみれば日本側の傀儡機関に過ぎなかつた。

その市公署の経済局長に紐さんという人がいた。彼は日本の大学を卒業し、日本語はペラペラ、奥さんは日本人ということで、親日家のエリート官僚というところである。彼との出会いは友人の紹介によるものだが、市公署というところは私にとって決して良い取材源ではなかつた。その理由は前記のとおり、同署には施政の実権はなく、記事になるような情報が出ることはほとんどなかつたからである。しかし私は紐さんの人柄が好きで、彼に会って雑談を交わすのが楽しみでよくよく彼のところへ足を運んだものである。

18年の夏も終わりに近く、街路の槐樹の花が一斉に咲きそろう、天下

に知られる。北京の秋の到来も間近いある日のこと、私は例によつて別に用事もないのに、市公署に紐さんを訪ねた。応接室で向かい合いに座った彼は、いつになく不機嫌な顔付きで、顔色もあまりよくない。「体の具合でもお悪いのですか」という私の問いによく重い口を開いて、ボソボソと次のようなことをしゃべり始めた。

それによると、ごく最近のこと、彼は日本の領事館警察から火急の呼び出しを受けた。何ごとならんと領警へ駆け付けてみると、用件は全く個人的なことで、彼の一家が日本人の居留民にだけ与えられている特権の米の配給を不正に受けていることについての取り調べだったのである。紐さん一家が日本側から米の配給を受けていたのは事実だが、それには訳があつた。それは最近彼の奥さんの父親が娘に会うために、はるばる日本から北京に来訪し、紐家にしばらく身を寄せていた。父親は日本人で、しかも長期滞在客だから居留民並みの米の配給があつたのは当然である。しかしその父親が滞在を終えて帰国した後の処置がいけなかつた。本来なら直ちに配給返上の手続きをとるべきところ、もらつて困るものではなし、ついズルズルとその配給を受け続けていたというのである。

取り調べに対し、紐さんは素直にその非を認め謝罪したが、取り調べに当たった係官は、それには耳を貸そうとせず、紐さんを泥棒呼ばわりまでして散々に暴言を浴びせた上でやつと釈放されたという。顛末を語る紐さんは、その時の情景を思い出し、悔しさがこみ上げくるのか、その声は次第に激し、ついには涙さえ浮かべて身を震わすのである。

親密というほどの間柄でもなく、言ってみれば敵国人の新聞記者の私に、紐さんほどの紳士がこれほど取り乱した所作を見せるのには驚きもし、このことがよほど悔しかつたに違いないと思えた。この時の彼の心情からはすでに親日感はなく失われ、日本、あるいは日本人に対する憎悪が煮えたぎっているように見てとれた。中国人はとりわけ面子を重ん

じる人種だとはかねがね聞き及んでいたが、その実証を目の当たりにする思いであった。

訴えを聞き終わった私は慰めの言葉もなく、あいさつもそこそこその場を辞去したが、暗い気持ちで社に戻る道すがらつくづく思ったことである。彼ほどの教養もあり、社会的地位も高い一人の有力な親日的中国人を、こんなことでとうとう反日陣営に追いやってしまったのか。しかもその誘因は、日本の侵略的帝国主義とか軍部の横暴とかいう次元の高い？理由からではなく、第三者的にみればたかが一警察官の取り調べの言動にあったとは。

〔「南船北馬」第3号 1983年1月15日発行〕

保定でイナゴ退治に参加

佐藤俊司（元同盟通信華北総局）

太平洋戦争時代に私は軍隊生活も知らず、戦争体験もなく過ごしてきました。それは、終戦直前に同盟華北総局（北京）を拠点として華北の地を転々としていたことと関係があるように思います。戦時中の華北、特に都市部は治安も悪くなく、暮らしぶりはやや食糧不足といったところで平穏なものでした。

昭和19（1944）年、保定在勤のころ、その年の天候は良く、農村ではイナゴが大発生しているというので、県知事ら一行とともにイナゴ退治に参加しました。当日は馬に乗り、30分ほどでもう郊外は見渡す限り

の大地である。いよいよ目的地に着く。まず100メートルの溝を掘り、その堀に向かって農民が棒かほうきで地面をたたきながらイナゴを追っていく。イナゴの大群が堀に落ちたところを一斉に土をかぶせて仕留めるのである。成果は上々であった。私はこんな平凡な体験を今でも忘れることができない。

〔十五年のあゆみ〕 1989年3月31日発行

石門で経済通信発行

大沼太（元同盟通信天津支局）

昭和17（1942）年秋、私が天津市日本租界淡路街にあった同盟通信社天津支局で、雑穀市場と経済週報を担当していた頃、石門（石家荘支局長の渡辺銈氏の訪問を受けた。石門と天津ではかなりの距離がある。渡辺さんは「大沼君、君が出してくれた経済通信のおかげで支局の収入はすばらしく伸びた。感謝の意味で今夜は一席設けたい」ということだった。聞けば北京での支局長会議の帰途天津支局までわざわざ立ち寄られたとのことだった。

私（当時23歳）が経済通信を石門の現地で発行できたのも、15年ごろ、当時の松井善四郎支局長に「石門地方は、北支綿の集散地だから綿花を中心にした商社を対象にした経済通信を発行しては」と進言したのに始まる。松井支局長は「俺は社会部畑で経済通信はとんと不案内だから、君に全部任せる」ということから現地発行が始まった。

支局の仕事は、日曜、祭日、時間外手当など皆無の文字通りの艦隊勤務で、中国人のオペさんが早朝から本社のローマ字放送を全部受信していた。経済関係のニュース、数字は捨てて、専ら時局向けの戦況、政治、外電などをガリ版印刷。邦字紙（石門日日）、華字紙（石門新報）、軍関係に配布し、その合間に師団司令部の戦況、討伐の発表物を軍用電話で送稿していた。

当時の石門市には三井、三菱、東棉、日綿、江商など大手商社の出先があった。経済通信のスタート時は購読料1部月額20円、5社で100円の収入を想定。これから逆算して人件費、用紙代などを20円ぐらいに抑えようと思った。

16年は、石門支局としては大変な年だった。松井支局長は既に本社に転勤し、後任支局長が決まらないまま、臨時支局長とし前田廉氏、小暮光三氏らが2カ月ぐらいで北京の総局から臨時在勤していた。石門市は河北省の京漢線（北京―漢口間）が山西省太原に入る軍事、交通の要衝で日本領事館もあったが、夏は落雀の地といわれるほど暑く、砂ぼこりも激しい土地。夜は支局の壁に流れ弾が飛んでくるといった、厳しい土地柄か、臨時支局長は誰も腰が落ち着かない所だった。

〔新聞通信調査会報〕第291号 1987年2月1日発行

最後の従軍記事は洛陽占領

波多尚（元同盟通信ハノイ、サイゴン支局長）

私が同盟記者として最後に書いた従軍記事は昭和19（1944）年5月、河南作戦と称して京漢線（現京広線）南北打通を呼号し鄭州から瀋陽（当時奉天）に軍を進め、西安をおびやかした作戦の報告であった。太平洋戦線が後退を続け、中国戦線は半ば忘れられて兵も装備も老化し、山西の毛沢東軍がうごめき出し、重慶に蟠踞する蒋介石軍に代わって蒙古の彼方のソ連軍の北京指向が現実の問題として話題に上り始めた頃である。北京を足場に経済問題、文化問題に何か希望と潤いを求め探していた私は、「洛陽の紙価」に心をひかれて行ってみる気になった。5月の初めごろ、やっと占領直前の洛陽の城外にかけつけた私は、幾晩かを南の郊外の丘陵地を回りながら、鍋底のような低地で城壁にとりまかれ、整然とした碁盤目のような、しかし思いのほか小さいオモチャのような中世都市を遠望した。

「ローヤン（洛陽）へ、ローヤン」と兵隊たちまで皆で楽しみにして来た中国史の代表的な都がこんなオモチャみたいなものだったのか―と城外の麦畑の中で、瞬く星空を仰ぎながら、何人かの各社記者と時折弾丸が頭上や身辺を飛び交うのを聞きながらまどろんだことがある。

翌朝、城内の掃討が済んだというので記者団だけで洛陽市中を見て回った。静まり返った人っ子一人いない市街、整然として何一つ荒らされていない。わずかに中国兵の死体が街角か、あまり目立たない所に転がっている。街路は両手を広げると届きそうに狭い。自動車どころか自転車でもスピードは出せない。特に大きな建物も目につかぬ。「紙価」を

支配した本屋らしいものも急には見いだせぬ。廃虚でもない死の街、洛陽は静寂の中でどうにもイメージと溶け合わなかった。

帰り際に軍の報道部長にリポートを検閲してもらったら感に堪えない顔をして褒めてくれた。従軍記者一般のとはどこか違っていたらしい。その後、この中佐は2度も葉書をくれた。

〔南船北馬〕創刊号 1981年11月発行

残念だった伊大型客船の自沈

豊田治助（元同盟通信中支総局）

私は昭和17（1942）年10月、同盟中支総局（上海）から大阪支社経済部に転勤することになったので、シドニー支局赴任以来、4年半ぶりに大阪へ帰ることができた。ところが、翌月のある日、古野社長から急いで上京せよとの指示があり翌日、本社の社長室で古野さんにお目にかかった。お話の内容は次の通りであった。

「君は苦勞だが、海軍へ出向してもらうことになった。任務は、君が豪州でシドニー支局長を経験したことが理由なのだが、海軍の豪州作戦要員ということになる。しかし自分のみるところでは、日本はジャワ、スマトラまでは南進できたのだが、その南側の豪州大陸まで出て行くことは、兵站線が長すぎてとても無理だと思う。従って君が海軍で勤務する期間もそんなに長くはならないだろう。今日の午後、軍令部の人が2人、帝国ホテルで、君に面接したいと申し入れてきているから、その時

刻に行って、豪州事情を説明してきてもらいたい」
社長の温情のこもったお言葉を、私は深い感動をもって承った。

こうして18年3月から軍令部の第8部第11課（対豪州作戦室）に出向して海軍囑託となった。4月から上海海軍武官府の渉外課に配属されたので、福岡から空路赴任した。私としては、思いがけなくも、終戦の翌年2月の引き揚げまで、二度目の上海生活が始まることになった。従って在滬（滬は上海の別名）の期間は、同盟総局が2年半、上海海軍が2年余と楊樹浦の同盟合宿が半年で、合算すると5年半の長きに及んで上海に在留する巡り合わせとなった。

18年9月9日の払暁、四馬路のハミルトンハウスの私の宿舍の電話がけたたましく鳴ったので飛び起きた。同盟英文部の平野さんからの緊急連絡であった。

「今、外電（連合国側・放送）で、地中海方面艦隊司令長官、カニンガム海軍大將が次のような布告を発表しました。『イタリア、バドリオ政權は9月8日、リスボンにおいて連合国側と休戦協定に調印し、無条件降伏した。従って、イタリア海軍所属のいかなる艦船も、速やかに連合国の港灣に退避するよう指令する。万一、この措置をとることが不可能な場合には、その場において自沈すべし』」

かねて、ヨーロッパにおける戦局は、この年に入って、独伊両軍にとつては、予想以上に不利な局面に陥っていたので、上海海軍武官府渉外課（情報収集をその任務の一部としていた）は、おそらく、イタリアが日独伊三国の枢軸から、いずれは脱落するだろうとは予測していたのだが、そのような事態がいつ起きるかは、的確にはつかめていなかった。

この平野さんの電話は、私の時計では、時差の関係上、9日の午前5時を少し回った時刻であった。私はすぐに、日常指示されていた連絡ルートに基づいて日本海軍にこの緊急情報を通報した。着替えて、夜明

け前の人通りの少ないバンドを英商ジャーディン・マセソンの豪壮な社屋を接収した武官府まで歩いて行った。渉外課には既に、課長の中佐以下数名の課員が集まってきていた。私は同盟の英文部へ行って、イタリア関係の続報を入手するよう命じられた。

当時の同盟中支総局は、バンドの南京路に近い、ノースチャイナ・デリーニュースを社屋としていたので、7階の英文部まではそんなに時間はかからなかった。続々と入電してくる情報の中から、重要なものを電話で連絡し始めた。ちょうどそのとき（正確には午前7時直前であった）、同盟の若いボーイ（中国人）が、「シーサン（先生）！ イタリアの船が傾いてきたよ！」と叫んだ。私は英文部の部屋から、すぐさま黄浦江を見下ろせる窓際まで来ると、なるほど、眼下に見えているコンテ・ヴェルデ号（1万8千トンの巨体）が少し浦東側へ傾きかけているように思われた。これを見た瞬間、やはり来るべきものが来た、という緊迫感が私の脳裏を駆け巡った。

この実況を武官府へ報告し、再び窓際に戻ると、既にこの白色の船体が半ば以上、向こう側へ傾斜していて、パジャマ姿のままの船員たちが甲板から次々に船腹をはいながら逃げ出してくるのが、手にとるように見えた。

右往左往する乗組員の人数は、おそらく100人近くだったと思われる。中には救命ブイを持って川に飛びこむ者や、自力で浦東側へ泳ぎ着く者もあった。ところが、このとき、不思議な光景が展開された。中国人がサンパンをこぎ出し、船員たちに手を貸して救助作業を始めたことである。目的は、やはり商売のためだろうと推測された。しかも時間が経過するにつれて、サンパンの数がだんだん増えてきたのであった。イタリアの客船が完全に黄浦江上に横倒しになったのは、7時30分であったから、自沈に要した時間は約30分ということになる。このほか上海港

で自沈したのは、小型のイタリア海軍の海防艦2隻のみであった。

その日の午後から、日本の陸海軍が捕虜としたイタリア海軍軍人とコンテ・ヴェルデ号の船長以下の幹部乗組員に対し、武官府が中心となって取り調べをはじめ、訊問調書を作成した。その結果、イタリア側の緊急措置は以下のような手順によって進められたことが明白となった。

（1）まず、イタリア本国の海軍省が、上海におけるイタリア海軍駐在武官に対して、連合国側の布告を打電してきたのが、午前6時であった。（2）駐在武官がこの暗号電報を解読して、命令書を作成したのち、自ら車を運転してフランス租界の官舎から、バンドの艦船に到着したのが午前7時前であった。

（3）命令書を受領したコンテ・ヴェルデ号の船長は、直ちに船底の3カ所に設備されていたキングストン・バルブを全開して、浸水させる措置をとったから、この船の傾きはじめた時刻と、私が英文部でこのことを知らされた時刻とが全く合致していたことになる。

このような事情が判明したので、私は切歯扼腕の気持ちを抑えることができなかった。なぜかと言うと、同盟英文部の第一報の受信時刻が、前述した通り、午前5時すぎであったのだから、船長が自沈の命令書を受け取った時刻との間に、優に2時間に近い時間的余裕があったことになる。もし私が海軍へ通報した外電の第一報に基づいて、日本海軍が、イタリア艦船3隻を拿捕する措置を迅速にとっていたならば、これら3隻の自沈は、当然、未然に防ぐことが可能であったことはあまりにも明白だからである。

まことに痛恨に堪えない事件というほかはない。この事件は私の生涯を通じて、最も残念な出来事の一つであった。しかし、この事件によって、「同盟の外電」の声価が高まる契機となったことも、また真実であったといわねばならないであろう。（1985年7月10日）

南京支局社宅の怪談

浦岡偉太郎(元同盟通信南京支局)

僕が上海から南京支局に転勤したのは、国民政府が参戦するという日の朝だった。つまり昭和18(1943)年1月8日のことだ。支局長は中村農夫さん、編集主任が平柳常雄さん。その下に光永広、遠藤晋の両君がいた。そこへ僕が加わったわけだ。上海の中支総局から菅沼不二男さんが南京へ応援に出張するついでに、僕を連れていくてくれたのである。

南京で僕に与えられたねぐらは、牯嶺路の社宅だった。すぐそばには汪兆銘主席の公館があったし、ちよつと離れて国民政府最高顧問、石渡莊太郎さんの公館もあって、静かな、いい環境だった。南向きの社宅は、玄関を入ると10畳敷きぐらいのホールがあって、その両側に、それと同じ広さの洋室。ホールの奥のドアを開けるとキッチン。左側に浴室とトイレ、右側には2階へ上がる階段があって、その上がり口にきれいに内装された8畳ぐらいの部屋があった。つまりホールの右側の部屋の奥隣だ。それが僕に与えられたのである。窓は東と北にあって部屋の中はベッドとデスクと椅子。持ち物はボストンバッグ一つだけ、さっぱりしたものだった。

スポーツのことしか知らない僕だから、平柳さんの指導を仰ぎ、光永、遠藤両君に助けてもらって、僕なりに、よく勉強をしたのである。林柏

生宣伝部長の記者会見は頻繁にあったし、褚民誼だの丁默邨だの、誰だの彼だのと部長級の記者会見が、ひっきりなしにあった。時には汪主席のもあったし、日本側では畑俊六総軍司令官とか、重光葵大使のもあった。そのほか孫殿英だとか、呉文化文だとか、帰順してきた敵将の会見などもあって、なかなか忙しかった。だから当時は夢中で駆けずり回ったのである。

南京に来て一月もたった頃だろうか。夜な夜なうなされて目を覚ますことが多くなった。胸を圧迫されて身動きもできず、息苦しいのだ。パツと目を開くと、別段に変わったこともない。そんなことが度重なるので、ホームシックにかかったのかと思って老酒を飲み、鈍い頭を使いすぎたかなと思って白乾児を飲んでみたが、何の効き目もない。おかしい、おかしいと思いながら、だれにも言わないでいた。

そんなある日、隣室の山本(明)さんが、「夕べは何か変なことがありませんでしたか」と聞いた。「変なことって、どんなことですか」と聞き返すと、山本さんは「ちよつと怪談めいたことですよ」と言うのだ。僕はそのとき思わずゾツとして寒気を覚えたのである。しかし僕はさりげなく「そうですか」と言っただけだったが、それからというもの「怪談めいたこと」が頭にひっかかって、自分の部屋で寝るのに、あまりいい気持ちではしなかった。

その頃は陽気がだんだん暖かくなってきたが、僕は内地から来るとき連絡船が沈没して、無一物で上海へ上がった関係上、着たきりすずめだったから、休みをもらって上海へ古着を買いに行った。総局へ顔を出すと、編集や写真部の連中が「南京はこの社宅にいるんだ」と質問してきた。「牯嶺路」と答えると、「あそこはお化けが出るだろう」と聞く。部屋の説明をすると、「あの部屋は、お化けが出るから、物置にしてあったんだよ」と教えてくれたのである。

南京へ戻ってから、平柳さんに報告すると、「やつぱり出るか」という返事。ヒラさんは、ちゃんと知っていたのだ。ずっと後になってから聞いたのだが、「あいつなら平気だろう」ということで、僕のために内部をきれいにしてくれたのだそうだ。よほど神経の鈍い奴だと思われていたらしい。

それはそれとして、その後も部屋で寝ていると、やつぱり締めつけられるようで、ときどき目を覚ますのだ。窓を開けて寝たり、電灯をつけたまま休んでみても同じことだ。何とか原因を突き止めようと思っていたが、突き止めようがなかった。そうしたある晩のことだ。

夜半に酔いざめの水を飲んでから、うつらうつらしていると、スーッと頭の方から風が入ってきた。外は雨で真っ暗。お化けが出るには、うつつの舞台だ。息を殺し、細目を開けて、じっとしていると、お化けとおぼしき影が、僕の胸の辺りを、そっと押すじゃないか。ここぞと思ったから、死んだ気になって、その手を引っ張った。お化けはびっくりして、ちよつと声を立てたが、そのままベッドへ入って来た。何のことはない。夜這いに来た阿媽だつたのである。

そんなことは、ただの1回きりだったが、その後も僕はよくうなされた。毎朝、裏の墓地でランニングをしていると、よく鉄砲玉の青さびだらけの葉きょうを見付けたが、あの辺は昔から何度か戦があつた所らしい。ついに正体は分からなかったが、ひよつとすると太平天国の乱(1851-64年)あたりで死んだ兵隊の怨霊だつたかもしれない。

〔「南船北馬」第3号 1983年1月15日発行〕

快適だつた2年間の上海勤務

滝口義敏(元同盟通信中南支総局経済部長)

私にとって上海在勤はきわめて快適だつた。1941(昭和16)年12月8日の太平洋戦争勃発を挟んだわずか2年間であるが、当時同盟通信の中南支総局経済部長を担当していた。いっしょに仕事をした仲間には共同通信の渡辺孟次社長のほか、共同通信の外国特信部長になった松原弘雄、論説委員になった水谷啓二、横浜支局長になった山田清一郎の諸君らがいた。本社に中南支関係の経済ニュースを送るかたわら、和文と中国語の経済通信を現地で発行していた。

単身赴任して社の寮に寝泊まりしていたが、手当の軍票を割安な法幣に替えると、生活費はかなり潤沢だつた。仕事を終えて夜になると、フランス租界やヤンジッポ(楊樹浦)のユダヤ人バーなどに足をのばす機会が多かつた。上海の夏は暑さが厳しく、デング熱にやられて、2週間ばかり寝込んだこともあつた。総局長は松方三郎さんで、おいしい中国料理のご相伴によくあずかつた。中国人の友人は高等学校、大学時代の同窓の董君だけで、同君は、金城銀行の秘書長をやり、松方さんとともに豪勢な夜食に呼ばれたりした。

この間、中国の各地にも行ったが、その中で蘇州はやはり美人の多い印象を深くした。漢口から南京まで、小舟に乗って長江を2日ばかりで下つたことも懐かしく思い出される。北京に行ったおり、汽車で張家口、それから大同(だいとう)に行き、その西方の雲崗石仏を参観したが、1ヶ月前後にわたる洞窟内に刻み込まれた石仏群像には心を打たれた。

〔「南船北馬」創刊号 1981年11月発行〕

上海で外電カバ―、不安覚える

平柳常雄（元同盟通信南京支局編集主任）

同盟の中南支総局勤務の辞令をもらって上海に赴任したのは昭和14（1939）年9月だった。あれから43年もたつが、奇妙にあのころの出来事は忘れない。現地には上海が3年、南京が1年余り、あとは兵隊生活で通算6年半もいた。おかげで揚子江以南の要衝はほとんど知っている。

「ドカンドカン」と異様な響きに目を覚ます。総局から社宅への連絡で大東亜戦突入を知る。揚子江に浮かぶ英砲艦を帝国海軍が砲撃したのだった。この日からわれわれ取材記者は本社外信部の出先に模様替えされた。当時外電のことを敵側情報と呼んでいたが、そのうちのロイター電が東京でうまく受信できないので上海でカバーしてくれというわけだ。スタッフは小生のほかに岩立一郎、菅沼不二男の両君ぐらい。一日中テレプリンターとデスクの間を往復した。緒戦は劇的なパールハーバーやプリンス・オブ・ウェールズのニュースと取り組んだが、内心、実は不安を感じたことを今も覚えている。1年ほどたつとガダルカナルや珊瑚海の敗戦が大本営発表とは裏腹に伝えられてきた。外電の仕事をしていると英米情報にうそのないことがよく分かる。記述が具体的だからだ。そうこうしているうちに南京支局転任の辞令が出た。小山武夫君（前

中日ドラゴンズ代表）の後任編集主任としてだった。上海での取材は主に作戦ごとに報道班員として動くことだったが、南京は汪兆銘政権を軸に支那派遣軍総司令部があり、大使館ありで当時としては外地取材の中心であった。スタッフは小生のほか政治の遠藤晋君、経済の光永広、社

会の浦岡偉太郎君というところ。本社からのトップ記事要請に即応できるように配慮した。

18年の元旦、汪政権軍事顧問の柴山中将にあいさつして支局に帰ると赤紙がきていた。そう言えば総司令部で辻政信大佐（作戦参謀）に会ったとき、「近く大作戦をやるから召し上げるぞ」と言っていた。

大作戦とは在支米空軍基地を根こそぎ占領するという湘桂作戦のこと。小生は名古屋の第3師団の参謀部付将校として桂林基地奪取の陽動作戦に参加した。湖南省から江西省にかけて半年ほど駆け回り、最後に柳州を占領して、そこに作られた軍政府に出仕した。そのころ太平洋の雲行きは怪しくなり、支那派遣軍は奥地経営などやっていられなくなった。やがて三角地帯への集結命令が下り師団は鎮江に撤退、小生は命により湖南で雇用した中国人1000人以上を引率して桂林に向かった。鉄道沿いに10日間、敵地を脱出して目的地に着いたときは400人前後に減っていた。任務を終えて師団に戻る途中、漢口支局に立ち寄ったら丁度ご詔勅が入電中だった。

これはまずいと直感、渡河部隊に頼んでイカダで揚子江を下り鎮江に着く。ここで武装解除され復員を待つ身となった。思えば作戦期間の1年半余り、よく生き永らえたものをつくづく思う。この間毎日、戦闘詳報を書きつづり手帳4冊におよんだが、復員の途次、玄界灘にすべて投げ込んだ。博多港上陸の際、米軍に手痛い目に遭うと脅されたので。手帳が無事であればベストセラーにすることができたのにと悔やんだことだった。

〔南船北馬〕第2号 1982年5月15日発行

「神戸丸」の沈没―二百数十人死亡も闇に

浦岡偉太郎^{いたろう}（元同盟通信中支総局）

同盟人の寄り合いに出ると、誰かがきつと、僕のことを「揚子江で泳いだ男」という。いまだに覚えていてくれるのだ。あれから足かけ30年になるというのに。今では人が2、3人も死ねば、新聞はでかでか書く。100人も死んだら、紙面はそれで埋まる。だが、二百数十人もいっぺんに死んだ「神戸丸」の遭難は1行の記事にもならなかった。

僕が泳いだのは揚子江ではない。東シナ海だ。怖かった。恐ろしかった。寒かった。冷たかった。あの、死に直面して漂流した5時間の長かったこと。それは昭和17（1942）年11月11日未明のことだった。

特別3等キャビンの上段ベッドに寝ていた僕は、4時ちよつと前、目を覚ました。もう眠れそうもないので、洗面道具を持って救命袋を肩にかけ、靴をはいてトイレに行った。その時だ。鈍い大きな金属音がして鼓膜が破れたかと思つた瞬間、僕は洗面所の壁にたたきつけられたのである。壁はたちまち水平に倒れていく。僕は起き上がりうとして、もがいたが、体は壁に吸いつかれたまま、グググツと横倒しになつていくのだ。

そのうち、今度は壁が僕の背中を押し上げるのだ。足が床についたところで、僕は洗面所を転げ出た。電灯が消えて船内は真っ暗だった。けつまずいたり、ぶつかつたりしながら、まず甲板へ飛び出した。20秒か30秒のことだつたらう。その間に僕は雷撃を食らつたなと思つたが、爆発音がなかったから不発だったのかなとも考えた。それにしてもショツクが大きすぎる。とつさのことだから深く考えず、とにかくただごと

じゃないと思ひながら、前日乗船したとき、定められた緊急時の集合場所へ駆けつけた。

そこには、もう海軍の下士官がいて「ホー、早いですね」と、褒めてくれた。「神戸丸」はエンジンを止めてしまったが、情性がまだ走っていた。船尾の近くに船影があった。その海軍さんが「あれと衝突したんですよ」と説明してくれた。

寝静まっていた船内は突如として修羅場になった。やがて阿鼻叫喚^{あびきょうわん}が甲板へ流れ出てきた。親を呼ぶ子供の泣き声、子を探す母親の狂乱の声、連れを求め合う悲壮な叫びが甲板を覆つて地獄絵を見るようだ。情性がなくなつて「神戸丸」は止まった。5分たち10分たつたが、船は少しも沈みそうには思えなかった。傾く心配さえなかった。安心したのか、甲板もだんだん静かになつていった。だが、「く」の字型に折れ込んだ左舷の横つ腹から、異様な音をたてて海水の流れ込んでいくのが暗やみの中でもよく分かった。

時間がたつにつれて、少しずつ左舷へ傾きはじめた。20分もたったころだろうか、手放しでは立つていられなくなった。甲板はざわめき始めた。が、船員が来てライフボートを降ろす様子はなかった。不安が募つて、船員を呼ぶ声が甲板中に沸き起こつた。やつと3人の船員がきて1人がボートに乗り、2人がダビットのロープ²¹⁵を緩めた。どうやら海面に達したなと思つたとたん、どうしたことか、ボートは1人の船員を乗せたまま、波のまにまに流れていつてしまった。絶望の嘆声が渦巻いた。

それまではボートで濡れずに助かろうと思つていた僕も「いよいよ飛び込まなければならぬ」と考え直したのである。一服つけて気を落ち着けようとしたが、そのときは、もう手すりにつかまり、足を踏ん張つていなければならなかった。吐く息が1メートルぐらゐも見えた。寒いだろうなと思つたら、飛び込む勇気が出なかった。甲板は騒然として殺氣

立っている。僕は隣のボートに紛れ込んで逃げる気になった。だが、そのボートは超満員。上から上から飛び乗るので、下からは悲鳴があがって、凄惨な生き地獄だ。2基のダビットが、その上から押さえ込みそうになっている。ふと上を見ると、でっかい煙突が目の前にあった。もう駄目だ。

ひと思いに飛び込んだ。ズボンの下の方から、ズイッと水が浸みこんできた。あの太い煙突に飲まれる恐怖を感じて、必死に泳いだ。洋服を着て、救命袋を縛りつけて、靴まで履いているのだから、いくら水をかいても蹴つても、進んでいないような気がして、じれったかった。軍歌が聞こえる方へ泳いでいくと、20人ぐらいつかまって流れている大いかなだ。たどりついて軍歌の仲間入りだ。どのくらい時間がたったろうか。歌い疲れてだんまりになると、ぽつりぽつり脱落者が出る。眠ってこえ死んでしまうのだ。そしていかなだから離れて流れていく。

僕は恐ろしくなって、突然、わめくように猥歌を歌い出した。ところが、これが意外な反響を呼んで、がぜん元氣を取り戻し、大いかなはたちまち「Y歌集団」に変わって、闇の東シナ海にみだらな合唱をまき散らせるのだった。人間という生きものは死に直面していても、こいつばかりは別とみえる。

歌が途切れると、眠りだす者がいる。僕の左のやつがコックリしている。眠ったらそれまでだ。僕は力まかせに殴った。今度は右手のやつが眠る。ポカッと殴る。また歌う。また眠る。そのうちに空が白んできた。右手の2人は若い夫婦で、女の方が白い毛布に包んだ大きな荷物を、いかだの上に載せたまま居眠りを始めた。ゲンコツがとんだ。夫婦は恨めしそうな顔をして僕をにらんだ。荷物が泣いた。乳児だったのだ。ずぶ濡れなのに、毛布にくるまっていたので体温が保てたのだらう。それからも僕は左右に鉄拳を飛ばしたが、いつの間にか自分がうつらうつらし

ているのに気がついた。そうすると人ごとではなくなる。「死ぬな」「眠るな」と言いながら、自分の頭を殴り、ビンタを張った。頬をつねり、耳をねじ上げた。こんな動作を何十回、いや何百回繰り返したことだらう。

朝日がまぶしかった。海軍の練習機が3機来て、2、3回旋回していった。間もなく助けられるような気はしたが眠たい。また殴り、張り、つねるのを繰り返し、気遣いのように大声で「バカヤロー」と怒鳴ったりもした。こんなときの心理状態は、後ではとても理解できないものだ。何気なく遠くへ目をやると、船影が見えるじゃないか。僕は喜ぶ前にまず目を疑った。眼鏡を洗ってよく確かめると、小さな漁船だ。サオやロープで遭難者を引き上げているのがはっきり見えた。もうじつとしてはいられない。僕は懸命に水を蹴った。船名が読めるところまできた。「第一日喜丸 神戸」。200トぐらいのトロール船だった。

助け上げられてホッとして甲板に四つんばいになったら、落ち込むように睡魔に襲われた。「眠っちゃいかん！」という大声と、ものすごいビンタを食らって我に返ると、さっきの海軍さんが立っていた。僕は思わず「ありがとうございます」と言ったが、この心理もあまりよく分からない。

「日喜丸」は救助作業を、随分長くやっていた。僕はそれを見ながら遭難記を書いた。甲板には、死体がマグロのように並べられていた。夕方になってから、救助にきた「雲仙丸」(戦後引き揚げで活躍した船)に移って翌12日朝、上海に到着。濡れネズミで降りていく遭難者の中に、僕に殴られた若夫婦が赤ん坊を抱いていく姿を見た。北四川路の中支総局に現れたら、秦泉寺編集部長がいきなり抱きついてきて「心配させるな、この野郎」と、泣き声でわめいた。

南支総局ビルに機銃掃射

中村信（元同盟通信南支総局経済部）

南支総局に経済部をつくることになり、昭和17（1942）年の暑い盛りに妻と台北經由で広東に向かった。基隆からの老朽貨物船は何度もジグザグなコースをとり爆雷を落としていた。船足が鈍ったのでデッキに出ると茶褐色の珠江を遡行していた。「あの土手に見える並木が楊貴妃や東坡が愛でたという荔枝ですよ」と相客の白水（日本水産）の支社長が説明した。小一時間も川をさかのぼったのだろうか。右舷に愛群大厦の高い建物が見えてきた。広東の波止場に近いのだ。香港のアバデーンは蛋民船で有名だが、あの頃、珠江のデルタ地帯には6万を上回る蛋民がいた。

波止場には総局から迎えの車は来ていない。多分時間通りに船が着かないからだろう。日水の支社長は自分の車で送るといつてくれたが、茶目気を出して人力車に乗った。荷物は失ってなかったがそれでも車は5台となった。私の怪しげな北京語が通じたかのように人力車の列は走り出した。露天のたばこ売り風景に見とれていると、いきなり素足の男が板の上のたばこをわしづかみにして逃げていった。しかし10分と走らないうちに、たばこ売りが馬乗りになり大声で怒鳴っていた。よくあることだと思え、通行人も足を止める者はいない。車夫はわれわれが買い物でもすると思ったらしく、布地を売る店の前では、気を利かせて速度を緩めた。日本では早くから切符制となっているのに、ここには純綿、絹、ウールなどが山と積まれ、次の通りには肉、野菜、果物がこぼれるように並べてある。

しかし一步裏通りに入ると、打って変わった暗さに豹変する。油虫の丸揚げや犬や猫を売る屋台、蛇や猿の入っている檻もある。とある裏通りでは老婆がネズミの尻尾を持って皮をむいていた。いくら悪食の本場でも、着いたばかりのわれわれには刺激が強すぎた。自分の言葉が車夫に少しも通じないと分かると、実のところ心細くなっていた。「どちらに行くのです。ここからは日本人は立ち入り禁止です」と着剣した日本の兵隊さんに呼び止められて、やっと助かった。人力車を連ねた奇妙な着任に総局の人たちはあきれたという表情をしていた。

18年に入ると南支の戦況は釣瓶落としに悪化した。総局のビルはものすごい機銃の掃射を受け、映画館に時限爆弾が仕掛けられて軍参謀長（硫黄島で玉碎した栗林忠道最高指揮官）が危うく難を免れたことがあった。

ジャパン・トレッド・ガイドの資料集めに海南島を一周したことも忘れぬ思い出。海口から榆林に向かう南岸回りのトラック便は積み荷の上に2、3人の陸戦隊員が重機を持って分乗し、5台くらいが1単位となっていた。途中襲われるのを見越しての強行軍なのだ。便乗者は陸戦隊員にはさまって絶えず緊張していた。3日目に着いた榆林は鉄鉱石の積出港として脚光を浴び出した新開地。1万ト級の貨物船が2隻同時に接岸できる立派な港湾設備がやっと完成し、山元から港まで9キロほどの鉱石専用鉄路にスマートな鉱石運搬の特殊列車がピストンしていた。

19年2月、総領事の邦人引き揚げ勧告は、経済部にとっては致命傷であった。酒井隆軍司令官の厚意で妻とは別々になったが上海まで軍の飛行機に便乗することができた。軍の飛行機は女性を乗せたがらないので国民服で男装した妻が機に乗り込むまで副官が何かと気を配ってくれたという。

広東は治安が悪く市内からは少しも出られなかったが、香港、スワト（汕頭）、アモイ（廈門）には手軽に行けた。総局員はみんな浣刺（はつろう）とし

ていて、楽しいことも山ほどあった。機会があれば海南島に渡り、五指山を中心にして山岳地帯からほとんど出て来なかったリー族に会ってみたい。

〔南船北馬〕創刊号 1981年11月発行

広東支局草創のころ

戸国清太（元同盟通信南支総局）

広東と海南島の海口を含めて昭和14（1939）年5月から16年7月まで2年少々でした。また19年5月から20年にかけて、1年ちよつと陸軍報道班員として桂林作戦に従軍しました。懐かしいことに変わりはないが、その程度の滞在期間からいって、また中国を深く勉強したわけでもないで、別に中国かぶれるほどの郷愁は感じていません。

広東時代は自分でもよく耐えたと思うほど精励したと思っています。広東を占領してまだ数カ月しかたっていない14年5月に赴任したので、支局（支局長牛島俊作氏）の態勢も不十分な上、通信発行に必要な人手も整わず、1年ぐらいいは日曜も祭日もなく、一日として休暇なんてとれなかった。当世の甘えた労働条件から言えばウソのようなことでした。

赴任当時の中国戦線は小康状態で、ノモンハン事件が連日華々しく報じられていた。中国戦局について当時、在米中国人作家林悟堂が「日本は沙漠の中をさまよう旅人のようなもので、やがて行き倒れになるだろう」とある雑誌に書いていたのを、いまだに忘れられない。中国人は息の長い見方をするから常に侮ってはならないと、自戒している次第です。

広東支局も市川太郎支局長の後、南支総局に昇格し、横田実氏が総局長として着任されて規模も拡大されたが、私はそれから程なく東京に帰ったので、広東の黄金時代は知らずじまいに終わりました。2度目の渡支の頃は戦局いよいよ厳しく、苦しい思い出ばかりで、いいことなしでした。

〔南船北馬〕創刊号 1981年11月発行

汪兆銘主席と近衛公の一言

小山武夫（元同盟通信南京支局）

太平洋戦争が急を告げていた昭和19（1944）年の5月、私にもついに赤紙がきて、ソ満国境の町・穆稜に駐屯していた第9師団歩兵第19連隊に、35歳の老補充兵として応召した。その後、沖縄、台湾と危ない戦野を転戦し、台北の台湾軍司令部で敗戦の日を迎え、辛くも生還した苦しい思い出がある。軍陣生活の全期間を通じてしばしば強く印象のよみがえった2、3の事項は、いまもって忘れることができない。

一つは17年1月、中支総局長だった松方三郎さんを案内して南京の頤和路にあった国民政府主席公館で行われた汪兆銘主席との会見である。私たちが決められた時刻に、しょっしょな洋風の建物の玄関に至ると、汪主席は既に立っておられ、温顔に笑みをたたえて親しげに応接室に招き入れてくれた。

松方さんは、東京から持参した真珠湾攻撃の記録的な写真多数を主席

に進呈し、それを潮になごやかな歓談となったのだが、最後に述べられた汪主席の次の一言はあまりに痛切だった。「日米開戦の直後、私はお国の大使に言いました。この戦争は間違いです。日本は米国と結んでソビエトと戦わねばならないのです。しかし、こうして開戦した以上わが国民政府はお国に協力します。同生共死ということです」

そう言われたときの沈痛な表情、強い決意と何よりも深い洞察力に私は一瞬、たじろいだり心打たれたりしたもののだが、日本が緒戦の戦果に酔いしれていた時期だけにこの一言は脳裏に深く刻印された。松方さんご自身がどう受けとめられたかは、知る由もないが、この世界観、歴史観はいまだ風化してはいないと思う。

次は、これも南京支局勤務中のことであるが、何かのパーティーの席上、当時外交部次長だった周隆庠氏（敗戦時は行政院秘書長）から、「中国人は2人だけでは和平を語るが、3人以上寄ると抗戦を語る、ということですよ」と教えられた一事である。この比喩は、軍陣でも銃後でも、日本人に置き換えられる。いわば本音と建前を使いわける公式だった。心を許す者同士でなら敗戦の不可避な現実を語り合えたのだが、3人以上となると必勝の信念を声高に叫んでむなしく日を送ったわけである。

もう一つ、これは応召の2カ月前の3月21日、湯河原の静養先で会見した近衛文麿公。この時点で日本の敗戦は必至の情勢にあり、「いずれの日にか戦争の功罪が問われるときが来るに相違ないと思われる。その場合、公はどう考えられるか」と思い切って尋ねた。こんな会見をやっていたことが東条英機首相の憲兵政治の網にかかり、それが最後の大動員へ組み込まれた理由と思われるが、それはともかく、公はちよつと間を置いて「棺を蓋（おほ）いて後（おの）にという以外にないだろう」と、寂しく笑って答えられた。

19年の秋に汪主席、翌年の末に近衛公のそれぞれの死を知ったとき、

歴史の変転の恐ろしさを思い知らされた。

〔南船北馬〕第2号 1982年5月15日発行

南方特派員団を高雄港に案内

伊庭英雄（元同盟通信台南支局、旧姓・紀川）

台湾・台南駅下りホームで台北発高雄行き列車の到着を待っていた。昭和16（1941）年12月6日の早朝である。前日、大滝鹿次台南支局長から「本社特派員が高雄集結地まで行くので、その案内を頼む」と申し渡されていた。当時はまだ高雄支局がなかったので台南支局がカバーしていた。

支局長の話では高雄駅まで行けば新聞社のトラックが駅まで迎えに来ているはずだから、それに同乗して目的の地まで一緒に行ってくれ、とのこと。特派員諸氏の顔はもちろん、氏名、人数、装備など何も知らされていない。定刻よりやや遅れて列車は到着した。超満員で、通路はもちろん網棚にもリュックサックなどの荷物がぎっしり。1人の若い内地人らしい人をつかまえて「同盟通信の人はいないか」と尋ねると「同盟なら中にいるよ」と教えてくれた。高雄までの約1時間、私は「同盟特派員」の人数が全部で25人、本社はじめ福岡、台北各支社、中支総局（上海）などからも来ていることを知った。

やがて高雄駅に着く。この駅は新しくできた駅で、将来の開発を見越したものか、街から遠く離れた田んぼの真ん中にあった。駅前には、す

でに他社の社旗を掲げたトラックが3、4台並んでいたが、支局の頼んだトラックは見当たらない。新聞社に電話したが、あやふやな返事ばかりで埒が明かない。集結時間の制約もあり一刻も早く目的の宿舎に到着しなければならぬ。思案の末、駅前を路線バスが発着しているのに付き、ともかく街に出ようとバスに乗ることにした。しかし重いリュックを担いで二十数人も乗るのは無理、諦めた半数の人たちは数々の道を歩き出した。

高雄港に面した旗後の旅館街の入り口には衛兵が立哨し、出入りの人をチェックしている。報道班としての手続きを済ませ、指定の宿舎に入ると、宿舎はすでに他社の連中や軍人などでいっぱい。窓から見る高雄港内にはおびただしい数の船舶が停泊している。多分輸送船だったのだろう。沖には護衛艦らしい艦艇も望まれ、空には警戒機が2機、3機低く舞っていた。

台南から私に應對してくれた人は、他の同僚から「福田さん」と呼ばれていた。この人は私に昼食をともしようと誘ってくれた。いつの間にか私は報道班集団と軍人との会合の中に座っていた。ここで「サイゴン（現ホーチミン）組」「フィリピン組」などの言葉が軍人の口から出たのを聞いた。意外に思ったのは「フィリピン組」であった。当時南方戦線は仏印、バイアス湾上陸作戦はあったが、比島方面は一般には全然考えられなかったからだ。

やがて最後の徒歩組が到着するのを待って、私が宿舎を出ようとしたとき、1人の将校が近づき、私の腕章を見て「君は同盟の人か。今ここに『信ちゃん』がいたようだが、どこにいるか」と尋ねられた。「信ちゃん」なる人は知らなかったが、同盟の部屋を教えた後、支局へ帰るべく高雄駅へ急いだ。「信ちゃん」とは後で知ったが、岩永信吉氏のことであつた。

チャンドラ・ボースの死に遭遇

平野正一（元同盟通信台南支局）

昭和15（1940）年9月、台南で召集解除となり、翌16年1月、地元新聞社から同盟通信社台南支局に入社した。当時大滝支局長と、新聞社でも私の先輩であった伊庭英雄さんだけの支局であつたが、その後、畑敬、門奈正雄の両君が増員となった。

19年5月、支局で一番早く2度目の応召をしたが、その後、支局の皆さんも全員召集となった。2度目の部隊は迫撃砲部隊。台北で編成され、基隆から船で花蓮港に上陸した。太平洋を眼下に見下ろす小学校跡に入つたが、フィリピン方面からの偵察機が毎日のように頭の上を北上、南下するのにただ手をこまねくばかりだった。

戦況の進展とともに東海岸から西海岸北部の桃園地方に転進し、水際作戦に備えて地雷を持って戦車に飛び込む訓練や、救急法、陣地構築が続いているとき、思いもかけぬ軍司令部への転属命令に接した。着任してみると初年兵時代の上官が部屋におり、「速記がいるようになったので、だいぶ探した」とのことであつた。

沖縄が落ちると爆撃はますます激しくなり、B29の爆弾が司令部の建物を直撃するようになると、司令部の大部分は奥地の防空壕に移ったが、私たちは破壊を免れた建物の一部に残った。

重大発表の日、爆撃から残った司令部跡で威儀を正してラジオを聞いた。雑音がひどく途切れ途切れの玉音はとても速記の文字にはならなかったが、速記者としては生涯を通して最も記念すべき1ページとなった。戦後処理その他で私の召集解除は皆より四、五十日遅れたように思う。台北飛行場で事故に遭ったインドのチャンドラ・ボース氏の遺体が陸軍衛戍病院に運ばれたとき、私どもも病院に駆けつけたが、運び込まれる担架の上の、白布に包まれた遺体が、やたらに大きかったことが記憶に残っている。

〔新聞通信調査会報〕第320号 1989年7月1日発行



チャンドラ・ボース

座談会

太平洋戦争と南方（第1部）

1963（昭和38）年9月18日

（出席者）

福岡誠一

（南方総社長）

福田一

（南方総社次長）

蠟山芳郎

（ビルマ支社長心得）

岩永信吉

（昭南支社編集部長）

小椋留吉

（サイゴン支社総務部長）

前田雄二

（ハノイ支社編集主任）

万喜久太郎

（ジャカルタ支社マレー文主任）

佐々木健児

（中華総社総社長）

藤井信次郎

（地方部長）

板垣武男

（経済局長）

篠原滋

（静岡支局長、1941年12月時点は南京支局）

（注）役職は同盟通信社の1945（昭和20）年9月時点。南方総社はシンガポール（当時は昭南と呼ばれた）に置かれ、昭南、サイゴン（現ホーチミン）両支社を管轄。

❖ ❖ ❖

福岡

1942（昭和17）年2月のシンガポール陥落の時にいた人、いま

すか。

前田

私がいた。篠原さんが火事を出した。

福岡 上陸したのはゲマスという所だったそうだが、どこですか。

篠原 クルアンに入る前の所。マレー半島にいた英空軍が最後の兵力を結集して反撃してきた。そこで反撃し、後の者を全部（シンガポール島内に撤収させるための援護反撃なんだ。そこで私が火事を起こした。

福岡 追放とか何とかという問題がありましたね。

篠原 略式軍法会議で山下兵団から退去を命ぜられた。その後、前田君と交代した。

福岡 そこから始めますか。

前田 大東亜戦争が始まった当時のサイゴン（現ホーチミン）は、41年12月2日に今のマレー上陸部隊に従軍する同盟班が最後の出発をしている。これには井上達君をキャップに永井皓、稗田清基君がいたと思う。写真は大阪の小路春美、無電が誰だったかはっきり記憶しないが、全部で十二、三人のグループで出た。それが一番の大部隊だった。キャッチしたのは11月20日ごろ。山下兵団の参謀連中が帰って来ていた。戦争の気配が非常に濃くなっていた。しかし、どこをやるか、さっぱり分からなかった。あの当時、昆明作戦とか、陽動的なことをやっていた。それで各社ともハノイの方に記者を集結させなければいけないと考えていた。昆明とシンガポールでは無電の力が違う。無電をどこへやるか分からなかったが、とにかく準備しなければならんということで一体どの程度の距離を考えればいいのか質問した。「オダカ」という少佐がテーブルの上に地図を出し、鉛筆みたいなものでぐるぐる回した。それがちょうどシンガポールの距離。昆明、ハノイよりずっと遠いのでシンガポールとはっきり分かった。

慌てて飛行機で南支総局（南支総局は広東省広州市に置かれ、当時ハノイ、サイゴン支局は南支総局の管轄だった）の総局長をしている横田実さんに相談に行った。シンガポールだからすぐ無電機はじめ従軍部隊を編成しなけ

ればならんという話をして帰って来た。広東から東京までの連絡は全部横田さんがやってくれた。横田さんは、南支総局にいた連中をかき集めて船に乗せ、サイゴンに送り込んだ。着いたのが確か12月1日。翌日、輸送船が出るというので、井上君らを送り出した。

福岡 サイゴン支局が開設されたのはいつですか。

前田 ハノイ進駐⁶⁴が大東亜戦争の始まる前の40年。3カ月ぐらいハノイにいて南部が怪しいというので、支局をこしらえたのは大東亜戦争が始まった年の3月か4月ごろだ。私と井上、無電の葛原（麻睦）、写真の小路（春美）、映画の八住さんもいた。

福岡 ピンさん（福田二）が行ったのは。

前田 その後だ。12月2日に一行が（サイゴンを）出たのだが、そのときはまだ見えていない。

篠原 8日朝、サンジャック（現ベトナム・ブンタウ）に来了。私はピンさんに同行した。当時、軍司令部は、前田君の話に出たように南京に向けて盛んに昆明作戦をやるんだと言っていた。ハノイから中国に入り、昆明を攻撃するというものだった。援蔣ルート²¹⁶を遮断しなければ、中国の抗戦力を弱体化できないからそれをやるんだという時期があった。南京支局長だった福田さんが、南方作戦の同盟側の司令官ということで、急きょサイゴンへ行けということになった。（南京支局にいた私も付いて行けということになった。飛行機がないのでいったん広島まで帰り、広島から「諏訪丸^{すわ}」という台湾航路の船に乗ったら、寺内（寿一）元帥がいた。11月下旬だったが、日時ははつきりしない。寺内さんは基隆^{キールン}で下りて飛行機でサイゴンに行ったが、われわれはそのまま船で行った。12月8日の開戦の朝、サンジャックに着き、船内の司令部から開戦の話を聞かされ慌てて上陸し、突っ走ってサイゴン支局へ行った。

前田 そのときはいろいろな人が来た。東京本社から直接来たグループ

もあるし、南京から来た福田・篠原組、広東から来た組、ハノイ経由で来た連中もいた。2日にマレー上陸部隊従軍班が出た後、3日にボルネオ上陸部隊が出て太田恒弥君と無電が1人付いて行った。サイゴンの駅に送った記憶がある。6日、タイに進入する部隊が発した。それに誰が付いたかはっきりした記憶はないが、それにも1個班が付いた。大体、それぞれの作戦に出動した部隊には従軍班が出ている。その間、岩永信吉君も来たし、井上勇君も来る。ハノイからも来るし、いろんな人が集まって12月8日は大変な騒ぎだった。

福岡 篠原君は南京を出るとき、広い範囲の作戦があることを知っていたのか。

篠原 どういう形で南方作戦が展開されるかは分からないが、かなりのスケールのものだということは分かっていた。

福岡 向こうでは何で行かれたのですか。

篠原 トラックで陸地を行った。着いたのが昼ごろだったか、すぐ総軍司令部の発表を聞きに行った。

岩永 私の組は篠原さんの「諏訪丸」のすぐ後をついて行った。

福岡 上海からか。

岩永 上海に寄ったのが11月23日ごろで、とにかく何でもかんでも東京へできるだけ速いルートで帰れという命令を受けた。その晩、海軍報道部へ送別会があるから来いというので行った。僕の送別会だと思っていたら読売のオガタ君のだった。下座に回って「今は私のために……」とあいさつした(笑)。4、5人いて「何だ君もか」「君もか」ということになった。飛行機がとれないので、船で東京へ帰り、同盟に行ったら50人ぐらいの前線行きの人たちが一堂に集められていて古野さん、松本(重治)さんのアジ演説を聞かされた。古野さんが、やりたくはないけれども、戦い抜くこと以外に日本は生きる道はないのだということを言われ、そ

の話の筋から相手は米、英、オランダなどが入るらしいことが分かった。

福岡 いつごろですか。

岩永 11月25日だと思う。翌日汽車で宇品(広島県)へ行った。行くときに「従軍服を着ない。なるべくスーツケースか風呂敷包み。同僚と同じ汽車の箱に乗らず、違った箱を選ぶ。みんなばらばらになること」などの注意を受けた。秘匿するためだね。宇品からブエノスアイレス回りの南米航路(の船)で基隆まで行き、台北で従軍服に着替えて高雄へ行った。その晩「ハルビン丸」に乗って、12月8日の朝サンジャックの沖に着いた。私の部隊はトラックではなく、サンパン(小型船)でサイゴンまで行った。随分時間がかかり、着いたのは真夜中だったと思う。

前田 12月8日は、われわれ支局にいた者は一睡もできなかった。いろんな人が着くし、戦争そのものはどんどん進んでいるし、全く眠れなかった。

福岡 蠟山君はいつ出たの？

蠟山 僕はずっと後です。インドにいたから。

万 私は軍へ連れて行かれ、麻布3連隊で訓練を受けた。

福岡 どういう訓練か。

万 「気を付け」に始まって「右向け右」などだ。大宅壮一とか松井翠声、マンガ家の横山隆一、飯田信夫という音楽家もいるめちゃめちゃな編成で、一つの部隊として船に乗ったり下りたりするのに必要な初歩の軍隊的訓練だ。皆ブーブー言いながらやっていた。

福岡 宣伝班が組織されたのはいつごろ？

万 開戦後だ。私が徴兵されたのが12月20日ごろ。

篠原 ドイツが宣伝中隊で成功したのを見習って陸軍がそういうものをつくった。私どもがサイゴンに行くとき乗った「諏訪丸」には宣伝中隊、PK部隊が乗っていた。フィリピンに行く部隊とマレーに行く部隊で、

フィリピンに行く部隊は基隆で下り、「諏訪丸」にはシンガポールに行く部隊が残った。

福岡 あの時、PKという言葉がよく使われたね。

前田 サイゴンにはその連中も来た。同盟通信の特派員、海軍報道班員、陸軍報道班員などが一緒にやって来た。誰がどうなっているのか、ごった返して訳が分からない。軍人もいた。宇多中尉もいた。寺内の軍司令部の報道将校だったから、非常に都合がよかった。斉藤桂助が海軍にいた。

福岡 軍人であることを秘匿して、かなり後まで仮面を脱がなかったのがいた。同盟の囑託とか何とかの名目でいた。名前は忘れたけれど。仮面を脱いだら中佐だった。

蠟山 稲尾という大尉と斎藤という中尉がいた。外信に1年前から来ていた。小林一三さんが団長になったとき、同盟の特派員として付いて行った。向こうで調べて帰って来たわけだ。戦争が始まる直前にはいなかった。後になって僕がシンガポールに寄ると、2人とも総軍にいた。中野の学校を出た人だった。

福岡 マレー作戦に戻ると、その時出た連中はコタラジャ(現インドネシアのバンダアチエ)へ行ったのだろうか。

篠原 シンゴラ(現タイ・シンクララ)へ一緒に上がった。

前田 敵前上陸している。2日にサイゴンを出ている連中は、乗用車を1台使っていたが、これでは器材の運搬に具合が悪い。バンコクでイギリス製の素晴らしいトラックを買ったら、これは非常に有効だったね。

篠原 僕がそれをもらい、前線班はシンゴラに上陸した。総軍司令部の命令でさらに班が分かれるのだが、軍司令部と行動を一緒にする指揮班をもう一班追加せよという命令だった。そこへ私が行った。永井君がバンコクで買ったトラックを汽車に乗せ、シンゴラまで持って行き、部隊

を追った。マレーに入りアロースターを横切って、ペナン川の方に出る。その途中がジットラライン²⁰⁰で、敵は途中に防衛陣地を持っていた。

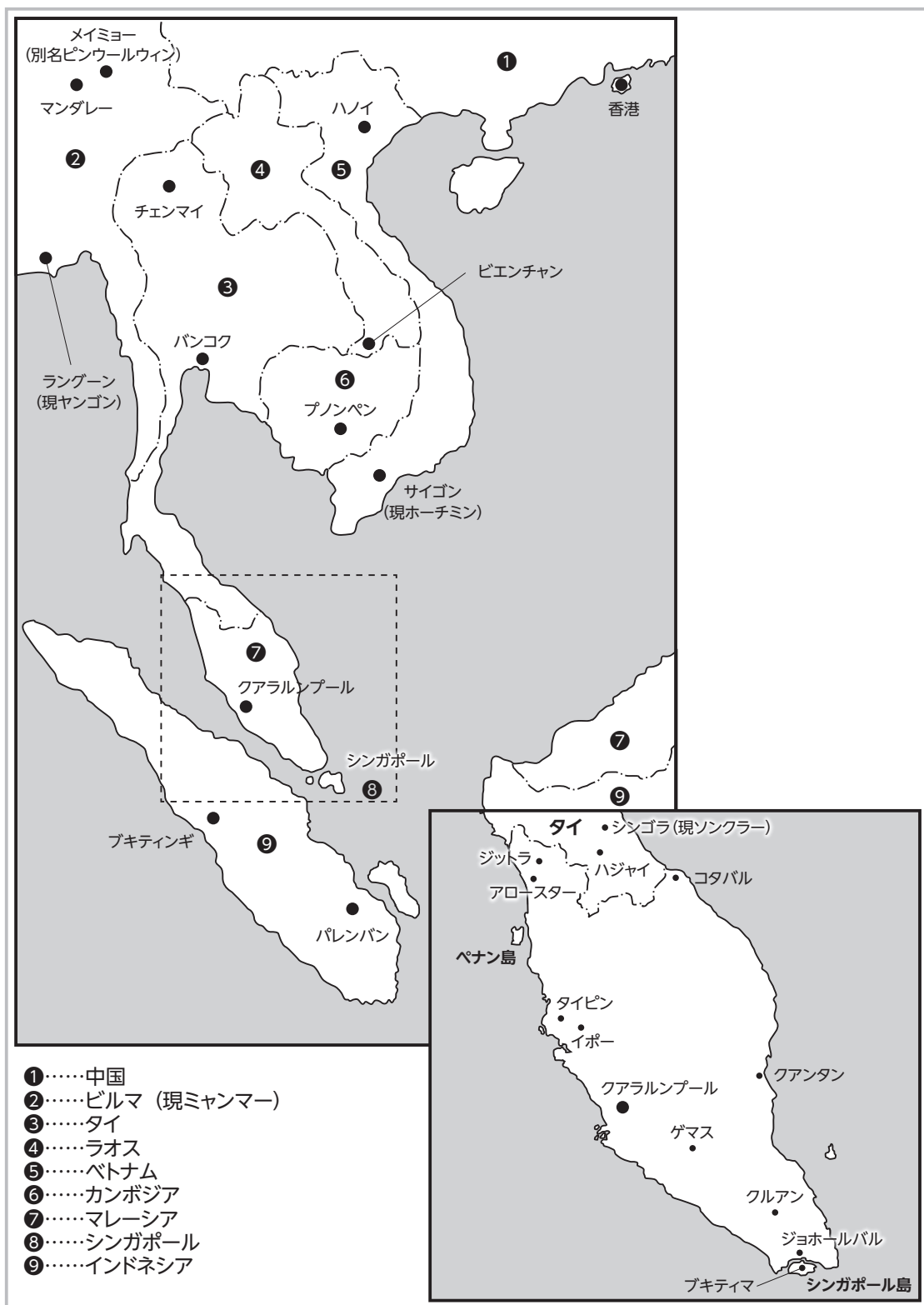
敵前失火で追放

福岡 上陸したのはずっと北の方ですか。

篠原 シンゴラを横切ってペナンの方に出た。陀美^{たくみ}造少将指揮の別の部隊はコタバルへ上がった。本隊の方は5師団を先頭に国境線、ジットララインを突破してアロースターに入った。年が明けてアロースターからタイピン、イポーと下り、クアラルンプールで態勢を持ち直し、新しい進撃が始まった。ゲマスというところで英軍は、半島の全軍をシンガポール島内に撤収させるため、1部隊で援護をやっていた。盛んに反撃し、チャンバラをやった直後に山下司令部は前進した。私どもも司令部の横にいた。なかなか激しくて始末が付かず、とうとう激戦のまま深夜になった。バンコクで買った大きな2ト車にほろを掛けて、中に発電機を据え付け、その電気でサイゴンに無線で戦況を打っていたが、発電機にガソリンを注ぎ足さなければならなくなった。ガソリンのガスがほろの中にこもっているところへ、ろうそくをつけて注ごうと思い、タンクの口を開けたらガスが引火し、火事になった。バンガローの玄関口にトラックを乗り入れてコードで室内に引っ張っていたから、火はバンガローにも移ってしまった。

丘の向こうの家には山下奉文将軍がいる。悪いことにシンガポールの英空軍が全力を挙げてわが方の司令部を爆撃するという情報が入っていた。火は消さなきゃならんし、敵とチャンバラはやっているというわけだ、えらいことになってしまった。兵隊も来て消火に努めてくれたが、2時間くらいでトラックも家も焼けた。敵の空軍が襲撃することが分

● 東南アジア要図



「新聞通信調査会報」第273号（1985年8月1日発行）より
 （国名は現在）

かっているときに火事を出したわけだから、軍の法規上は敵前失火罪で非常に重い罪だ。幸い敵の飛行機は、まだクアラルンプールにわが司令部があると思い、こっちは何のことはなかった。トラックには当時の機械力、技術の粋を尽くした1詰の発電機を積んでいて、シンガポール占領後使おうと思っていたが、みんな焼けてしまっただけでえらい目に遭った。

福岡 略式軍法会議があったのですか。

篠原 翌日、責任者が山下兵団のところへ行って退去を命ぜられた。

(福田氏参加)

福岡 南京を出るとき、作戦の目標は分かっていたのか。

福田 若干分かっていた。いよいよそう思うことだと思っていたが、東京へ来て「ハハーン、そうか」と分かった。政治部長をやっていたから陸海軍の動き、空気はよく知っていた。だからいよいよ始まるのではないかという感じで帰ってきた。帰って来たらサイゴンに行けという社命だ。

福岡 具体的にシンガポール作戦とかいうようなことは。

福田 まだシンガポール作戦とまではっきり言わない。南方作戦、シンガポールに総軍ができるということぐらい。しかし言わなくても、シンガポールをやらないわけにはいかない。相手がイギリスだから。嚴重にしているようで案外、皆知っていたね。

岩永 先ほど古野さん、松本さんがアジ演説をしかけた話をしたが、その時、既にマレー半島とか、フィリピン群島という言葉を使っていたね。

週に4日は暮の相手

藤井 福田さんが支那から内地へ戻ったのは速かった。

福田 10月末に帰って来て、いっぺん南京に戻ってまた来た。打ち合わ

せをして宇品から行った。

藤井 出先は漠然と分かっていたね。僕は上海で写真を扱っていたが、カメラマンがどんどん抜かれる。文句なく集結させるので、これはどうも悪いこと、何か新しいことがあるということは相当早くから分かっていた。具体的ではないが、ぼんやりと。

篠原 (福田さんは)「諏訪丸」では寺内元帥と暮を打った。

福田 新体制運動²¹⁹というのが近衛文磨さんのときにあった。そのとき、政治部長をしていたものだから軍で政治関係の講演をしてくれと言われ、講演に行ったことがある。行ったら寺内さんが、確か現役ではなく、役には就いていないので暇だったのか、講演が終わったらつかつかとやって来て、「今の話は非常に面白かった。もう少し話を聞かせてくれ」と言われ、2人で20分ほど話したことがある。そのときの細かいことを向こうもよく覚えていたから、「諏訪丸」に乗っても暮の話が出たり、非常に好意的に見てくれてたね。

福岡 福田さんの総司令官との暮の話は、外へ知れ渡っていた。僕と福田さんは名前に「福と一」がついているので、軍の連中はよく間違えた。

福田 本当に僕は閉口したよ。1週間に4日はお相手せにやならんのだからね、シンガポールに行つてからは。サイゴンの時分はたまにだから報道部に対して圧力を加えることがあり、「ちようどよいわい」とまだよかった。だがシンガポールでは1週間に4度、車で迎えに来るのだから行かないわけにはいかない。

福岡 寺内は料理屋へ行かなかった。シンガポールでは、海軍も陸軍も料理屋を相当持っていたが、絶対行かない。ダマウントハウスの官邸に閉じ込められた。ほかの兵隊は行くので元帥は1人になってしまふ。その犠牲になったのでは。

福田 寺内さんに「あなたは国のためにここまで出て来られて、太閤秀

吉が小田原城を攻めたときに、茶の湯の宗匠やら何やらを連れて行ったようなもので、わしは茶坊主ですよ」と言ったら「何でもっと負けないんだ」。それは別で、さんざん負かしてやったよ。

藤井 当時のあなたは実力四段ぐらい。

福田 碁を打つのがたくさんいた。(寺内さんは)よく将官連中を招待し、僕が行っても仲間に入れるんだよ。そうすると将官は皆変な顔をする。秘書官でもないのが平服で入っているからだ。しゃべろうか、しゃべるまいかという顔をしている。すると「これは同盟通信の支局長の福田君という人で、わしの碁の先生だ。どんなことがあっても秘密は漏れないから自由にお話してください」と紹介してくれる。皆安心していろんなことを言っていた。こちらにもニュースにするつもりはないが、あの時分の問題をいろいろしゃべっていた。支局に帰ってもそのことは一言もいわない。あの時分、持ってきてもらうにもならなかっただろうね。

福岡 同盟のためには直接的にもいろいろな便宜を。

福田 ある程度けん制になっていたと思う。

福岡 同盟全体がどのくらいやりよかったか。そういう点では腹の決まった立派な将軍だったね。

福田 立派な将軍だ。僕が知ってからの寺内さんは、お世辞は言わないし、陸軍の主流には乗っていなかった。南方軍総司令官としては立派なものだったね。考え方も立派だ。偉いと思ったのは二つあるが、特に感じたのは、アンコールワットへ付いて行ったとき。宴会で僕が隣に座り、フランス式からぶどう酒が出る。僕は酒飲めないから赤ぶどう酒は飲んだが、白ぶどう酒は飲まないで置いといた。そうしたらえらい声で怒鳴ってね。みんながいる前で「君は何だ。飲まない酒をなぜ注文した」。びっくりしてね。そう言うってから「ものを無駄にはいけないよ」と。どうも俺を利用して軍人どもに言ったのではないかと今思うけれども、

びっくりしてしまった。僕はその一喝で、ある程度悟った。それ以来、ずうずうしくなった。ある意味で、なるほどと思ってる。気合というものが分からなかったが、それから分かったような気がした。

もう一つ教えられたのは、たばこをのまないこと。どういうわけでもないのかと言ったら「6年前にやめた。体によくない。君らも俺らの年になると体に何かあったらやめた方がいいよ。これはいいものだよ」。寺内さんは56歳のときやめたが、僕もちょうどそのときやめた。確かにこれはきくね。多いときは70本ぐらい一日にのんだが、すっかりヤニがとれたらしい。今そのせいではないかな、活動できるのは。そんな気がする。寺内さんに教えてもらったおかげで。

前田 私は篠原君が火事を出して交代したわけだが、福田さんに呼ばれて、お前が代わりに行けということになった。篠原さんは上陸以来、参謀部にくっついていいから良いニュースを取っているが、こっちは新しく来たものだから分からない。軍の前線がだんだん進んだら福田さんが後ろからやって来た。前線に来るとは夢にも思っていなかった。従軍服に身を固めて来たときには驚いたし、気合いがかった。

福田 今言うがね。設営が一番大事なことで、責任者が行って軍といち早く交渉して宿舎や自動車を編成しなければならなかったので、前線に出た方がよかうとなった。前線に出たのはそのときだけだ。思い出すのは、日本の飛行機がシンガポールを爆撃して帰って来て、見ると日の丸が弾で撃ち抜かれている。丸のところが無いんだね。もう一つ印象的なのは、毎日毎日、パイ缶(パイナップルの缶詰)ばかり食べなければならぬことだった。あれには驚いた。塩のありがたみが分かった。甘味だけではとても生きていけないものではないと。パイ缶が山のようにある。メシは塩を付けて食べた。塩がいかにうまかったか。梅干しがあつたらよかったと思った。パイ缶ばかりには弱った。

あの当時の一番新しい42年型フォードを軍からもらった。それをサイゴンへ持って帰った。マレーを縦断し、その時分のタイの鉄道は貨車ばかりだから、上陸したシンゴラの近所の駅から車を貨車に積んで車の中にいた。のろい汽車だった。車の中で一晩寝たけれども、あまりいいものではないね。バンコクで降りてサイゴンに持って帰った。

篠原 いい車だった。グリーンで、アメリカでも初めてハンドルにギアが付いた車だった。輸入税を出せというので後で大分もめた。福田さんが転進された後だけど。

福田 篠原君が行ってニュースも打つし、うまくやってくれるだろうと思って期待していたら軍から怒られてね。あれ(火事)には弱ったよ。ニュースは確かにうまくやってくれたけれども、ああいうことが起こるもんだよ。

福岡 作戦に戻るが、日本の兵隊は自転車部隊で、非常に速いというので評判になったけれども、こっちは車で付いて行ったのか。

マレー作戦は橋の戦争

篠原 そういうわけだ。自転車でさっさと出て、ある地点まで行くと当然敵に遭遇する。自転車を置いて戦いを展開し、収まると後からトラックが付いて行って自転車をみんな収容する。ある所まで行くと、また自転車で行くという跳躍前進。一部隊が自転車であり、次の自転車部隊というような。敵が組織的な抗戦をやっている段階は、そういうことを繰り返した。タイピンに入ったときだが、自転車部隊が川のそばに自転車を据え付けて、川を挟んで対峙して攻撃を始めている。向こうが退却した時、部隊は川を渡って向こうの町へ徒歩で前進するが、私どもは乗用車で一番とっ先まで付いて行ったので、架設の橋を一番先に渡ってタイピ

ンの町に入った。敵がいなかったからいいが、兵隊よりも先に紛れ込むという結果になったことがある。

福岡 当時、橋を架けるのが非常に速いというので評判だった。

篠原 マレー作戦は橋の戦争。

福岡 24時間か48時間で架橋をやったそうだね。

篠原 イポールの南に随分大きい川があり、その鉄橋をいかに確保するかというのが、マレー作戦前半における最大の命題だった。最小限の破壊にとどめて、それを利用して突進できたらシンガポールの防備が十分固まらないうちにできるので、その川の橋の問題で入念な作戦を立てた。結果的には爆破されたけれども、橋脚と橋脚の間に折れ込んだだけなのでつなぐことができた。架橋の材料を優先輸送し、橋だけはうまくいった。「橋の戦争」といわれ、うまくこなしたのでスピードが出たと思う。

板垣 チャーチルの回顧録『第二次世界大戦』を読むと、「どうして西側から日本の軍隊が上がって来るのだろうか。サンパンとか小さい舟艇を利用して奇襲する。そして撤退作戦にもそういうものをやる。沈没、焼却しないのか。西側の作戦とは何か」と言っている。

前田 それが一つの特徴なのだが。ペナン川を舟艇で渡り、こっち側から上陸して向こうでそれを降ろし、敵の背後に迂回^{うかい}して上陸作戦を展開した。

板垣 マレー作戦の当時は見当がつかなかったらしい。

福岡 半島が狭いということもある。

板垣 インド洋の方から来て、何のために西側がやられるのか非常に不思議がったということをチャーチルは言っている。イギリスの軍司令部は分かっている。ああでもない、こうでもないと言っている。チャーチルが怒って手紙を書いている。インドの方に艦隊があつて、それから上陸作戦をやっていると思っていんだね。

佐々木 軍人が言っていたけれど、あれは新しい作戦ではなく、労少なくて戦果を上げている。辻（政信参謀）の作戦だが、日本軍はそれを復習したのだと軍人は言っていた。

篠原 ペナンである程度、舟艇を押さえたのもよかった。日本がトラップに積んで陸送して降ろす。折りたたみ舟艇でエンジンを付ける。もう一つは、ジットララインを越して向こう側へ行ったときは、われわれ先遣部隊は乗用車一台しか持っていなかった。ところがアロースターの町に入ると、自動車馬に食わせるほどある。新品で、同盟もそれぞれ自分の自動車をもらって行動できるくらい自動車があった。

福岡 イギリスは慌てたのだろう。ビルマへ行ったときは、自動車を焼却して残骸が道端で燃えていた。河原には3千台ぐらいの自動車の燃えた残骸があった。イギリスは後では自動車を焼いたけれども、マレーのときはそんな余裕がなかった。シンガポールを占領した時は一緒に行ったのか。

前田 私が一足先に入った。会見の場所には1日遅れた。14日だから。

福田 15日に入った。

前田 誰か一緒に来て来たね。本隊が福田さんと上村さん、その前の司令部に私と井上君、そのほか同盟部隊は永井、津吉、稗田、猿橋、田浦など。記者は十五、六人がそれぞれ自分の班を持って前線を固めていた。

福田 15日には上村君と2人入っていった。ジョホールに待機し、橋が通れた。

福岡 シンガポール島の攻略は。

福田 橋を通って入った。すぐ架けてしまった。速かったね。陽動作戦をやって、近衛部隊が川に油を流して燃やした。そしてこっちの本隊が右手の方から上陸を決行した。

福岡 渡河点はかなり幅が広がったのでは。

前田 渡河する前にジョホールの王宮に随分弾が来た。

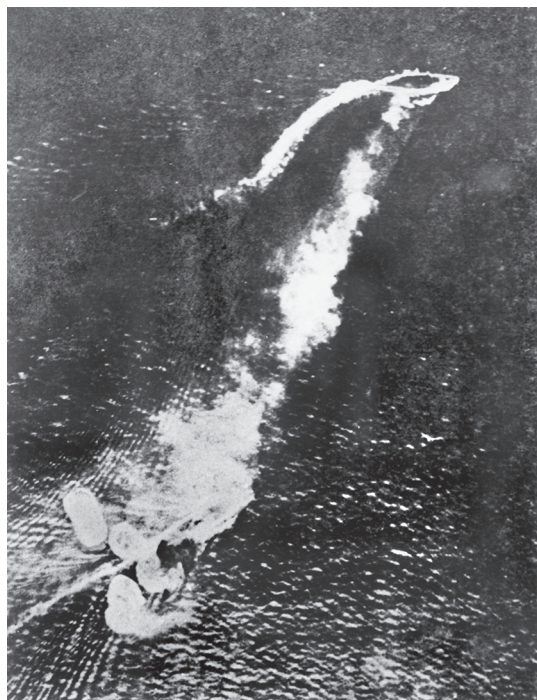
福田 僕が行ったときは弾が来なかった。前線部隊が相当進んでいて対岸にはいなかった。私は10日にサイゴンを発ったと思う。

前田 渡河したらブキティマで猛烈な反抗にあった。

岩永 ブキティマで連絡員が1人死んだ。

板垣 またチャーチルだけど、第2次世界大戦で最も衝撃を受けたのは「プリンス・オブ・ウェールズ」がやられたことだと書いている。第一報を受けたとき、「何でやられたかは分からないが、多分飛行機ならん」という電報をもらった。何に撃沈されたか、どういう方法で撃沈されたのか、潜航艇に砲撃されたのか、電撃されたのか沈んだので分からないと書いている。

福田 生存者は1人もおらんし。後で分かったが。



マレー沖海戦で日本海軍航空隊の攻撃を受け、火煙を上げる英戦艦プリンス・オブ・ウェールズ（下）と傾くレパルス（上）＝1941（昭和16）年12月10日

蠟山 軍艦がイギリスを出て極東に来るということは大体分かったが、どんな軍艦が来るかは分からなかった。僕はボンベイ(現ムンバイ)に行っており、そこに寄るか寄らないか分からないが、来たらお前のところまでどんなものが来るか捕まえろというので随分武官が来た。

福岡 寄りましたか。

蠟山 結局寄った。その時の武官は随分ほめられた。ジェーン海軍年鑑を見て、頭の中に入れた。ボンベイのすぐそばにインド門というのがあり、そのすぐ前のホテルでお茶を飲んでみると、外港が全部見える。そうしたら2隻大きな船が来ているんだ。武官がぜひ見て来いと言うので、ジェーンを切り抜いて見た。

小椋 あのときの写真ぐらい見事な写真はなかった。「レパルス」と「プリンス・オブ・ウェールズ」の2隻が空中爆雷を受けて必死になって急カーブをしている。それを上から日本軍が撮った写真が、当時では一番いい写真だった。見事なものだった。

前田 偵察機が1機、終始写っていた。

福田 ミッドウェー海戦ごろから寺内さんのところにしょっちゅう行っていた。昭和18年にいっぺん内地へ帰りたいから許可してくれと言ったら、寺内さんのトランクを持って行ってくれと言われた。僕が「トランクは軍用機で持って行ったらいいではないか」と言ったら「俺がそれをやっては際限がないんだ。同盟機ならいい。君の荷物は」と言うから、「トランク一つだ」と言った。「一つだけ持って行ってくれ」ということで平塚の家に届けたことがある。中に入っているものを後で寺内さんに聞いたら、皆買ったもので、決して没収したものではないと言っていた。そういうところに寺内さんの清廉潔白な武士気質が出ていた。軍用機では送らない。いろんな問題があったときだからね。

岩永 ガダルカナルが始まったのが18年だ。

空襲下でも囲碁

福田 僕らは第一線にそう出ていなかった。マニラへ行くとき、軍用機に乗ったらえらいスコールに遭い、いくらたつてもやまない。あの時分は川を見つけ、川に沿って上がって湾に出るとか、そういう飛行しかできなかった。電探(電波探知機)なんてない。いよいよ駄目かと思ったことがある。

もう一つ、マニラの初空襲の時。前の晩に寺内さんに会ったら碁を打とうという。官邸でばかり打つてもうまくないから、たまにはマニラホテルのロビーで、すしでも食いながら打とうということになった。当日は爆撃を食らい、大変な騒ぎになった。寺内さんに「今日はいろいろあったからやめておこうか」と言ったら「いや、決めたことはやるんだ」という。その夜、6時ごろ行ったらちゃんと盤を出して碁を打った。船が十何杯も燃えている。猛火事で、それを見ながらすし食って碁を打った。みんなが動転するとか、気落ちしてはいけないという気もあつたろう。平然とやっていかなければいかんということだったと思う。ああいうときの姿はさすがに偉い。空襲を受けてもあの人は防空壕に入らない。剣持って「おお来たな」。そこら辺に寺内元帥の面目躍如たるものがある。

あの空襲の翌日は大変な騒ぎだった。カネが天から降って来た。調べてみたら、爆撃された船に軍票が積んであり、爆撃で破裂した拍子に天に吹き上げてしまい、次の日降って来たわけだ。これは珍談中の珍談で、驚いた。

福岡 寺内さんはマニラではどこにいたのか。

福田 マニラホテルではない。そういう所はあまり使わない。かなり住民対策も考えてやっていた。無理のないように。

板垣 シンガポールの日本品ボイコットの理由になった華商の虐殺記事が新聞に出たら、どこかの新聞に「それは俺がやったが華商ではなく、インド人だ」という投書が載った。華商虐殺というのはなかったのか。

福田 投書は僕も読んだ。趣旨はチャンギの監獄のそばに埋めたものではなく、そうではないという記事だ。あれは見当違いで、われわれが聞いたところでは、埋めたとは思えない。もし何人かやったとしても、海に沈めたか、そういうことはあったかもしれない。

福田 そんなことをやっているのとまがなかった。何千人なんて大変だ。もしあるとしても一桁に達しない。

福岡 無論そうでしょうね。

福田 軍の機密ということもあったからね。

岩永 私は陥落4日目ぐらいに「北斗丸」という船で行ったのだが、参謀の記者会見があった。一緒にいたのが津吉君で、参謀は渡辺渡（わたなべ）だった。シンガポール施政の根本方針という談話の中で、「華商というものは敵性であって米英、蒋介石に忠誠を誓った連中だ。こいつらに対しては徹底的に弾圧政策をとる。大体生かしておくのは日本軍の慈悲だ」と何の同情も慈悲も示さないものすごいものだった。

福田 それにしても何千人も処理することはできない。

篠原 誰か、参謀個人の意見でやったのかもしれないが、マレー半島を南下する山下兵団の軍規は極めて厳粛だった。ゲマスへ初めて入ったとき、逃げ遅れた小さな女の子を軍の通訳が暴行したが、直ちに軍法会議に掛けられ、厳重な処罰を受けた。支那事変で南京が陥落すると、捕虜に日本的な手荒いことをした。それがえらく国際的に悪い反響を及ぼしたのを軍も肝に銘じており、その後のことだから、それほどでないとと思う。

福田 それは威圧したんだ。ある程度やったことは事実だ。

岩永 ボーイがいたので連絡員にもらって来た。

福岡 日本語のうまい坊やで感心していたが、ある時「おやじはどうした」と言ったらもじもじし、結局、日本軍に殺されたというので弱った。

板垣 ケース・バイ・ケースで、華商だから殺したということはないだろう。

福田 そんな軍政は下の下で、そんなことはできない。人を何百人も処理するのは大変なことなんだ。10人か20人でも大変なんだから。

福岡 シンガポールにいる間は気がつかず、後で驚いたのだが、監獄に日本の兵隊が500人以上いた。中佐以下500人の受刑者がいた。みな占領時代にしたやつで、それぐらい厳正だった。

前田 辻参謀が記者団との会見の時、30分くらい遅れてやって来た。司令部の人が、辻さんは絶対に時間に遅れない人なのにおかしいと言っていたが、右手が真っ赤にはれている。「どうしたのか」と聞いたたら、「実はシンガポール市内を視察したけれども、どうも将校で悪いことをしているやつがいて、それをひっぱたいてきた」と言う。全部で50人ひっぱたいてきたそうだ。兵隊でなく将校だ。「兵隊の前で将校を懲らしめることが必要だから」と言っていた。50人はオーバーかもしれないが、それが占領当日。極めて軍規は厳しかった。

藤井 どさくさ紛れに死んだものは日本軍にやられたということになっているのだろう。

福岡 華商の対日感情は悪くなかった。ひどいことをしたらそうはいかない。

福田 ああいう所へ出ている華商は、相当性格の強い人が多いと思っていた。

福岡 後で分かったが、シンガポールにいた華商の大部分は日本の中華作戦時、家族全員、家財道具を積んだジャンクで上海から南へ逃げた連

中で、華商の中でも冒険心の強い、頭脳の優れたより抜きで、普通の華商だとなめてかかったら大変だ。より抜きの支那人だから。

福田 同盟に置いていただいたことは大変役に立った。ものの見方が日本だけで見ないで、世界でいつも見ているからね。大した勉強になった。岩永 うちで使っていた人は皆勉強になったと言っているそうだ。

福田 われわれは向こうへ行っても何ら恥ずるところがないし、本当にそういう意味ではいい。

福岡 同盟はなるべく表街道を行かなければならんということで僕は押し通した。いろいろあったが、同盟人としてはハイウエーを行かなければならんと思っていたし、今考えても正しかったと思っている。

福田 そういう意味で顧みてやましいことが一つもないね。今行っちゃ懐かしいという思いはあるが、嫌な感じはないね。いじめたこともないし、助けたことはあっても。

福岡 戦後だいぶたつてから、僕に借金を申し込んできたインド人がいた。

福田 シンガポール時代、朝鮮の人で連絡員として使っていた金と鄭という人がいた。金さんは（現在 相当大きな仕事をしているようだね。鄭君も僕が向こうへ行ったら金さんの家に案内してくれ、えらいごちそうしてくれたよ。ああいう人は懐かしいね。寄って来てくれるからね。何一つ悪いことしていないから、お互いが善意で付き合ったから。

福岡 多少の例外はあるが、全体として同盟ぐらい社員がきれいな生活をしている社は他にないと思う。僕ら自分でもちょっときつすぎるなと思ったぐらいだから。

福田 確かに厳しすぎたよ。こっちもその一翼を担った方だが。

（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」）

仏印進出からシンガポールまで

前田雄二（元同盟通信ハノイ支社編集主任）

仏印（フランス領インドシナ）へ同盟が進出したのは、昭和13（1938）年9月、大屋久寿雄^{くすお}が特派員として駐在したことに始まる。大屋の駐在は、同盟の仏印への関心というよりも、重慶から昆明を経てハノイに脱出して来た汪精衛^{わうせいゑい}（汪兆銘^{わうせうめい}）と連絡を取る政治的任務の方に重きが置かれていた（原注¹¹この間の事情は松本重治^{しげはる}氏が詳しい）。汪精衛はハノイで初めて日本側と接触して、日本政府の真意を確かめ、東京入りする決意を固めたのだが、大屋はこの日本側機関と協力して、汪精衛との秘密連絡の役目を務めた。

2代目の仏印特派員は私で、昭和14年7月にハノイに入った。当時、支那戦線は北支、中支、南支と圧倒的な日本の勝利で、海岸線は全部日本²⁰の制圧の下に置かれていた。そこで、北部仏印のハイフォン、ハノイから広西省、雲南省への交通輸送路が、蒋介石政権にとって重要な意味を持ち始めていたので、同盟の関心はこの援蒋ルート²¹に向けられたのであった。しかし、仏印当局の検閲は厳重を極めたので、私は香港支局に本拠を置いて、時々仏印にロービングするという取材方式をとった。2回目は同年11月から約1カ月半、日本軍の広西作戦²²と前後してハノイに入り、作戦の及ぼす仏印への影響をみた。3回目は15年4月から1カ月、日本が仏印当局に強硬な援蒋ルート禁絶の申し入れをした機会に、ハノイから初めてサイゴン（現ホーチミン）、ユエ（フエ）と南部、中部仏印に足を延ばし、仏印の全貌を日本に伝えたが、これは日本の新聞に仏印が紹介された最初の記事になった。

この間、日本軍の北部仏印進駐²²の準備が進められ、6月には西原^い（二）^{きく}少将を団長とする使節団がハノイに入り、カトルー仏印総督との間で、援蔣ルート禁絶を中心とする日仏印軍事協定交渉を始めた。西原使節団には、当時帰国中だった私に代わって、本社から社会部の菱刈隆文が同行して報道に当たった。やがて交渉が成立し、日本軍は9月に陸路広西省境と海路ハイフォン港から進駐を始め、ここに日本の南方進出の第一の足場が築かれたのであった。

東京本社では、この新事態に対して出版部長兼企画部長の波多尚^{ひたし}をハノイ支局長に任命、私とともに、進駐と同時に空路仏印に赴任させた。ハノイ支局はデロルム街25号に設けられ、進駐部隊と一緒に入ってきた記者井上達をはじめ、中村喜八郎、窪添らの写真、映画、無電技師などが10名以上駐在し、仏印事情の報道を行う一方、ハノイを基地とする日本軍による昆明その他、雲南省攻撃の軍事記事も豊富に送稿された。

北部仏印に足場を得た日本軍の南部仏印への関心は次第に強くなった。それに応じて、私は翌16年2月、井上達とともにサイゴンに入って支局を設営した。この頃、日本政府は、仏印とタイの間の国境紛争に対して居中調停^{きゅうちゅうてい}を行い、仏印領の一部をタイに割譲することを条件に、両国間に停戦協定を結ばせた。私は日本の停戦監視団に同行して国境地帯を視察するとともにカンボジア事情を紹介した。その間、日本軍の南部仏印共同防衛協定が成立して、7月末には、日本軍はサイゴンを中心とする南部仏印に進駐し、一部はカンボジアにも進駐した。

北部仏印進駐の場合は、まだ「援蔣ルート禁絶」という支那事変処理のための軍事目的があったが、南部仏印となると、支那事変とは直接関係のない軍事行動であり、しかも「仏印を外部勢力の侵略から守る」という進駐声明は英米を刺激し、日本と英米間の外交関係は急速に悪化した。そのため南部仏印における日本軍の動きは世界の関心を引き、英米

仏独各国の特派員がサイゴンに集まり、同盟もまた波多尚をサイゴン支局長として、私や井上の常駐記者のほかに、大屋久寿雄、高田秀二^{ひでじ}の臨時在勤記者を送り、さらに写真、映画、無電部員を常駐させて陣容を強化した。当時、ハノイ、サイゴン両支局とも、広東の南支総局の管下にあり、東京との無電連絡は広東中継で行われていた。

そのうちサイゴンは、次第に大東亜戦争の基地としての性格を深め、10月から11月にかけて、軍首脳部の動きはただならぬ気配をみせはじめた。サイゴン支局は南支総局および東京本社と暗号による無電連絡で、軍の動きに即応するため、極秘裏に従軍記者団の派遣と無電機の補強を要請し、同時に私は広東に飛び、横田実南支総局長と軍の動静についての詳細な打ち合わせをした。

軍は動きをカムフラージュするため、昆明進攻作戦を行うような擬態を示していたので、ハノイで従軍手配をしていた社もあったが、同盟支局はあくまでタイとシンガポールを攻撃目標と想定して手配を進めた。軍はこうした同盟の準備活動に神経をとがらせ、軍情報の漏えいを恐れて、11月下旬には同盟の無電室に立ち入り捜査を行ったこともあった。しかし同盟支局は、準備活動がフランス人や現地人に漏れないよう細心の注意を払い、従軍記者の宿舎を市内に分散し、その人数が分からないようにし、無電機や前線への携行物資の輸送や集積は、夜間や早朝に現地の使用人の手を使わず、日本人の手によって行った。

11月下旬には、新しい軍司令部がひそかに設けられ、山下奉文中将の肩章を外した姿もサイゴン空港に見受けられた。また12月に入るや、参謀や高級将校が続々到着し、その中には軍情報将校の大森吉五郎^{きちごろう}中尉（同盟から応召）や軍報道部の宇多武次大尉がおり、同盟支局は直ちにこの人たちと接触を保った。この覆面の軍司令部こそ、寺内寿一元帥の南方総軍司令部だったのである。

かくて広東から11月30日に到着した稗田清基、永井皓、武田明らの記者、写真、映画、無電、連絡員の一行に、ハノイから着いた写真の知久義雄、それにサイゴンで待機していた写真の小路春美しんみその他を加え、井上達をキャップとして従軍記者団を編成し、12月3日、シンガポール攻撃部隊とともに輸送船でサイゴン港から送り出した。一行は記者3、写真3、映画2、無電3、連絡員5の計16名という大部隊で、これだけの部隊を作戦部隊に最初から同行させたのは同盟だけであった。

12月7日朝には、徳永康信以下3名の従軍班が同盟仕立てのトラックで、タイへの進駐部隊に同行して陸路カンボジア経由で出発し、ボルネオへの従軍班もカムラン湾で集結中の船団に乗り込むべく、汽車でカムラン湾に向かった。こうして南方作戦開始に備えて、打つべき手を全部打ち終えた12月8日、大東亜戦争開戦の宣言が発せられた。

コタバル上陸を速報

タイへの進駐部隊のサイゴン出発によって、サイゴン支局は新事態が発生するのは7日夜半との見通しをつけ、7日夕刻から非常態勢に入った。数日前に到着していた井上勇はアメリカの短波放送の傍受にかかり、井上達は軍司令部との連絡、無電は広東とバンコクと、それぞれ1時間に1度ずつ連絡を取り続け、私がデスクに座って徹夜の警戒を行った。ようやく東の空が白くなり、一同強いコーヒーで眠気を払っているところに、短波が真珠湾攻撃の第一報を伝え、同時にサイゴン軍司令部から、タイ進駐とマレー進攻部隊のコタバル上陸の発表があった。これはサイゴンから広東経由でつながり放しにした無電で東京デスクに打電され、全国に号外の鈴を響かせたのである。

12月8日は早朝から、本社や中支総局から派遣された社員が相次いで

支局に到着した。前線総指揮の任務を持った福田はじめ一と、それに南京から同行した篠原滋を第一便として、田浦義光の一行、永由君人、松崎繁など。さらに夜に入って岩永信吉、陸軍報道班員の藤本有典らの一行が着いて、支局はこれらの人たちが急激に膨れ上がった。

サイゴン支局長兼務になっていたハノイの波多尚も着任。さらに9日以後には、津吉英雄、小関藤一郎、海軍報道班員の斉藤桂助、村上達も姿を現し、会計担当の上村藤吉も着任した。その他記者、写真、映画、無電、連絡員多数が輸送船や飛行機で次々に到着し、サイゴン支局は大東亜戦争報道の基地として非常な活況を呈した。この間、10日にはサイゴン近郊を基地とする海軍航空隊が、マレー沖で英国極東艦隊の「不沈戦艦」プリンス・オブ・ウェールズと「レパルス」を撃沈するという大戦果が上がり、サイゴン支局自身が直接戦況取材を行うこともあった。

一方、コタバルに上陸したマレー作戦軍には、12月3日にサイゴン港を出発した同盟の従軍班が部隊本部にピタリとついて盛んに戦況記事を打電していたが、サイゴンはさらに篠原滋を従軍班の総指揮者に任命。篠原は11日に空路バンコク経由で前線に向かい、15日にはアロースターで従軍班に合流した。

以後、篠原、井上が山下中将の第25軍司令部について本部となり、稗田、永井、それにタイ進駐部隊とともにバンコクに入り、さらに同盟トラックを駆って追及した徳永らが、それぞれ従軍班を編成して、近衛1911などの各師団について前線に出るといった態勢を取って前進を続けた。

ところが、前線本部がゲマスに宿営していた1月18日の夜半、司令部付近に陣取っていた同盟のトラックが連絡員の不注意から火事を起こし、炎は付近の住宅に燃え移って2時間にわたって夜空を焦がした。英軍重砲の射程内であり、英軍機が盛んに飛来していた前線では当然嚴重な灯火管制が敷かれていた。そこにこの火災を起こしたのは、敵に攻撃目

標を示すようなものであって、これは司令部の激怒を買った。幸い英空軍の来襲がなく事なきを得たが、篠原は、敵前失火罪の責任者として、作戦区域外に即刻退去を命ぜられた。

当時サイゴンに到着していた南支総局長横田実は、この出来事を知ると、直ちに同盟機で前線に飛び、クルアンに進出して司令部に出頭して、同盟の失態をわび、篠原の復帰を懇請したが、受け入れられなかった。そこでサイゴンは私を篠原の後任に決定、私は横田と折り返しに同盟機でクルアンの前線本部に入った。この頃は津吉英雄も前線に入り、田浦義光、猿橋進も航空隊とともに到着、同盟の前線部隊は二十余名の大編成になっていた。その後、司令部がジョホールバルに達し、福田一も追及し、同盟は全力を挙げてシンガポール攻略戦の報道に当たった。

ブキティマ戦で殉職者

しかしシンガポール島に上陸してからの英軍の抵抗は猛烈を極め、ブキティマの激戦は多くの戦死者を出した。毎日の柳記者、朝日の岩崎連絡員が戦死し、19師団(牟田口部隊)に従っていた同盟の鯉江正木連絡員(広東採用)も、2月11日未明に砲弾の破片で右足首をもぎとられて戦死した。この頃は師団司令部に出ている各従軍班は一斉に後退し、軍司令部の戦闘指揮所とともに前進した福田、前田、井上の本部班と合流していたが、2月15日、シンガポールの英軍はついに白旗を掲げたのであった。

英軍降伏の調印は、ブキティマのフォード工場で行われたが、山下奉文とパーシバル司令官の通訳として現れたのが、陸軍報道班員の菱刈隆文だった。その後、菱刈は、報道部に所属した報道班員とは別扱いで、

軍司令部に直属して重要な役割を務めた。

シンガポール陥落後、同盟は軍司令部付近のレディスヒルに支局を設け、私を野戦支局長とし、福田一はサイゴンに帰った。

住宅は支局周辺に10軒余り持ち、取材送稿の傍ら、ガリ版通信の発行を開始した。占領後約1週間で市内の粛清が完了するや、直ちに市内ビジネスセンターのオランダ商事ビル内に支局を設営した。占領当初、シンガポールに集まった社員は、前田、井上、津吉、稗田、永井、徳永、田浦、猿橋、斉藤桂助、秋山如水、渡辺正治、荒尾達雄、黒沢俊雄、今井幸彦、岩永信吉、堂上、吉沢、その他の記者と、知久義雄、小路春美、武田明、森武二郎、小川三郎らの写真、根来、三木、栗田源久らの映画、板垣重太郎、葛原麻睦、吉田松治、その他ガリ版書き連絡員などであった。また海軍報道班員として従軍してきた石川達三、従軍記者として来た改造社社長山本実彦の両氏の世話は同盟で引き受け、それぞれ住宅を1軒ずつ提供して活動の便宜を図った。3月中旬、井上勇が昭南(占領後に日本が改名)支局長として着任し、私はシンガポールを去った。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

インパール作戦の前線支局へ

早川仁三(元同盟通信タイピン支局)

印緬作戦(インパール作戦)が始まる少し前、前線のメイミョー行きを命ぜられた。同地に同盟本社から萩原忠三さんが慰問に来てくれた。終戦

の翌年マレーシアから日本に引き揚げ、本社の萩原さんのところへ挨拶に行ったら「君は死ぬ要員だったんだ。だから僕が慰問に行ったんだ」といわれ、なるほどと感じたこともあった。

ビルマ(現ミャンマー)は日本の運命を決する戦いであつたのと同じく、自分の運命を決するときでもあつた。メイミョーで酒ばかり飲む生活をしているうちに黄疸^{おうだん}になり、軍がラングーン(現ヤンゴン)の陸軍病院に入院しろとトラックを出してくれた。三日三晩かけてラングーンに帰還した。折も折、めつたにこない同盟機が飛んできた。南方総局の計らいで同盟機に乗ることができ、ビルマを脱出、幸運にも現在なお生き永らえている。

昭南(現シンガポール)の南方総局に戻つた後、新たにマレー派遣軍司令部がタイピン市に設置されたのと同時に、同盟支局が同地に開設され、我妻繁夫支局長に従つてタイピン支局勤務となつた。マレーからシンガポールの収容所生活の約半年間、連合軍が貸してくれたラジオでBBC放送を聞き、邦人向けのガリ版刷り「ニュース」を出したりで、波乱に満ちた戦時中の同盟時代は、私にとって忘れられぬことばかりである。

(新聞通信調査会報「第273号 1985年8月1日発行」)

混乱もなく収容地カンエンへ

岡本輝磨^{てるま}(元同盟通信ハノイ支社)

同盟通信ハノイ支局勤務を命ぜられ昭和17(1942)年12月着任しま

した。支局での仕事は日本語版ニュースの発行と取材。支局長の前田雄二氏とは終戦まで生死をともしました。終戦時のベトナム人の日本人に対する態度は温かく治安も平穏でした。これは日本がベトナムの独立に協力したことなどによるもので、終戦による混乱はありませんでした。同盟ハノイ支社(支局から支社に昇格)の諸施設は中国軍に接収され、支社員は陸路と河川路の2ルートで日本人の収容地カンエンに集結することになりました。私は日本人の衣類などの財産を運搬する班の一員に選ばれ、日本人会の佐藤さんたち数人とジャンク2隻で10月初め川を下つてカンエンに無事到着しました。

(新聞通信調査会報「第273号 1985年8月1日発行」)

サイゴンで「同盟ニュース」発行

永田君人^{ながよし}(元同盟通信南方総局編集部長)

白紙^{しろがみ}徴用^{ていよう}されて宇品^{うじな}から乗船、昭和16(1941)年12月8日の日暮れ、サイゴン(現ホーチミン)に上陸した。ジャワ作戦^{さくせん}が終わつた17年5月ごろには、同盟のサイゴン支局を訪ねることが多くなつた。支局長は福田一^{いち}さん。ピンさん(福田氏のこと)は寺内寿一総司令官の暇な時は招かれて囲碁の相手をしていた。その関係も役立って総軍と同盟、またその出先機関と各支局も密接な連携が保たれた。

その頃、本社編集局長の松本重治さんが現地を激励に回られた。サイゴン支局は前線への記者の配置、交換の基地としての役割に懸命だった。

電波で受ける東京発同盟ニュースは、当時召集の宮本英夫君（電通から朝日、帰国後朝日）が毎日決まって来局、その日の電文を一枚のワラ半紙にきれいに収めるよう整理、自らガリ版を切って印刷し、その束を総軍に持ち帰っていた。

これを見た松本局長は「同盟のニュースを、陸軍だけに見せているのは、現地支局の存在価値を軽んずるものである。同盟のニュースは、陸軍はもとより海軍、大使館また日本内地から出ている商社などにとって情報として役立つものである。至急同盟ニュースをプリントして出すよう手配してくれ」と言われ、シンガポールに向かった。私も支局に来ていたので、すぐやりましょう、と言った。

私に一つの考えがあった。地方支局から本社を経て従軍していた篠原滋君がサイゴンにいる。彼は地方支局でガリ版を切ったこともあると聞いたので、その経験を生かし、それに前線から引き揚げてきた記者や連絡員、また内地から来て配置未定の人たちを活用すれば結構、仕事はできると考えたからである。

すぐ発行趣旨を書き、1日2回配達、料金1カ月20円。料金のところ
で福田さんは「高すぎないか」と言っただけでOKとなった。翌日福田支局長は私を連れ、養田総領事を訪問、了承を得、まず一口を契約、順次得意を広げていった。電信受信所は活気づいた。支局とは別の所にあったが、2階が受信室、階下がガリ版書き、印刷所となつて大勢が入り込んだのにぎわった。松本局長が1週間後、シンガポールから帰国の途に立ち寄られたサイゴンでは立派なプリントの「同盟ニュース」が発行されていた。

18年の初め、軍当局から、同盟の記者は徴用を解くが現地勤務だという命令があった。これより先、同盟は17年7月に南方各支局を統括する南方総局をシンガポールに開設し、18年2月には南方総局管下に支社制

を敷き、同4月には福岡誠一氏が専任の南方総局長に任命されてシンガポールに赴任した。

私は南方総局の編集部長となり、初めにやった仕事は総局管下の支局からニュースを全部総局に集め、東京本社向けと現地向けに捌いて各支局に送る、いわゆるブロックニュース制の実行だ。本社発の記事は皆自分で整理、見出しをつけて、ガリ版に回し同盟ニュースとし、総軍及び現地の日本商社等と契約して配布した。

（新聞通信調査会報」第273号 1985年8月1日発行）

「陣中西貢新聞」を發行

山根英夫（元同盟通信サイゴン支社）

外地抑留期間を含めても、わずか4年余であった私の同盟時代は、大
学を出たばかりの多感な時期であったからでしょうか、南方での経験が、
その後の私の人生に大きな影響を与えました。その一つは、終戦の少し
前に西貢（現ホーチミン）で新聞の製作を経験したことでした。昭和19（1
944）年の暮、同盟が担当した「陣中西貢新聞」との出会いです。

主幹兼編集長は当時、昭南（シンガポール）の南方総社編集部長であつた殿木圭一さん。編集スタッフにはバンコク支局の藤本有典さんと、昭南の編集部から未熟な私が加わりました。サイゴン港近くのインドシナ銀行ビルにあった同盟サイゴン支社に近い、華僑街の空き工場が社屋と工場でした。新聞とはいっても、タブロイド判の半ペラ2^{ページ}。一面を藤

本先輩、2面を私が担当するということで、東大新聞の編集経験があった殿木さんの指導でスタートしたのは、20年1月の初めと記憶します。

この3人に日本人の印刷技術者2人が加わり、さらに新聞整理と印刷の熟練者だという兵隊さん2人が手弁当で毎日手伝ってくださいました。ところが、この整理の熟練者、中年の上等兵殿が、後に朝日新聞東京本社で整理部長、編集委員、取締役を歴任された宮本英夫さんだったので、宮本さんから教えられた新聞整理の極意を、大切な財産として私は今も残しています。

なにしろ機械は旧式の平版印刷機でしたから故障が多く、5千部を刷るのに2、3時間もかかるうえ、その騒音に悩まされたことを思い出します。小紙とはいえ、一応日刊が建前でしたから、仕事は楽ではありませんでした。見よう見まねで文選、植字、解版までやったものです。

連載小説は「姿三四郎」。これは兵隊さんや在留邦人から大人気を博しました。新聞編集のイロハも知らなかった私でしたが、その私が今行政広報の専門家面をして広報紙づくりや、文章表現の講義ができるのも、実はこのときの経験が基礎になっているのです。

20年3月9日、「仏印処理²⁴」という名で、在仏印フランス軍の武装解除が行われました。その翌日、3月10日付の1面トップの大見出しだけは、今も忘れはしません。それは「軍、昨夜行動を起す」。この大見出しは未明、遠い砲声を聞きながら、みんなで練りに練ったものでした。

この新聞は終戦後、マウントバッテン伯爵下の東南アジア連合軍が進駐してからは「西貢通信」とタイトルを変え、タブロイド判半截、ベタ組み追い込みのスタイルで東京ニュースだけで発行されました。私は緑十字の腕章を巻いて毎日、抑留所から通勤し文選、植字、印刷まで全部を日本人スタッフだけで作ったものです。

〔新聞通信調査会報〕第273号 1985年8月1日発行

仏主権下で軍機関紙装う

殿木圭一（元同盟通信サイゴン支社、陣中西貢新聞主幹）

「陣中西貢新聞^{サイゴン}」という新聞があった。同盟通信社がサイゴン（現ホーチミン）で出した邦字のタブロイド判日刊新聞。1945年1月創刊。終戦後は、編集を見出し1本の通信形式に切り替え、「同盟通信」と題字を変えて発行した。さらに東南アジア連合軍心理作戦部隊が到着し、その傘下に入ることに、「西貢通信」と改称して、日本人が一人残らず引き揚げるまで発行した。

軍の機関紙ではないのになぜ陣中新聞を名乗ったのかというと、これには訳がある。当時サイゴンは仏領インドシナ植民地政府の主権下であり、定期刊行物を発行するには登録して所定の手続きをとらなければならない。この新聞は日本の軍のもので一般紙ではないという外見を装って、その手続きを免れる。そういうずるい考えから出たものである。

日本が占領した各地で邦字新聞が出ているが、サイゴンは新しく南方総軍の所在地になったのでそれがない。ところが当時戦局は日本に不利で、新聞発行に必要な資材、人員を日本から送り出せるような状態になり。そこで軍は緊急措置として同盟に一切を任せた。同盟は内地から活版印刷関係技術者を2名送り出しただけで、資材はすべてシンガポールの昭南新聞会²⁵から供給を受けた。

サイゴンにも毎日のようにサイパン島からの米軍機の爆撃があったが、酷暑の中、新聞は1日も休まず出した。末期のスタッフは無線技術者、印刷技術者を含め総勢8名。日本軍が武装解除された後は、連合軍が派遣したグルカ兵部隊が8名の警備に当たった。

日本のニュースが主であったが、地元ニュースのほか安南語（ベトナム語）の手引や連載小説もあり、解説記事執筆にはサイゴン駐在の各社記者も協力した。発行部数は当初3千、東南アジア連合軍が来てからは紙を融通してくれ部数は倍になった。

〔新聞通信調査会報〕第368号 1993年7月1日発行

ビルマ前線基地に碁盤と碁石

小路春美（元同盟通信ラングーン支社）

昭和17（1942）年8月、シンガポールからビルマ（現ミャンマー）に応援に行きました。高崎修さん（カメラ、後に時事通信）と記者3名で。ラングーン（現ヤンゴン）には作戦部隊に従軍した野間正二カメラマンがいました。一緒に従軍した川井弘彦さんは先に帰国し、野間君が残った。大阪以来の再会だった。

夜になるとお隣のインドから空襲があるので市内は復興はしていません。間もなくバー・モー博士の中央政府長官就任などがあり、平和な月日が流れていった。前線支局はラングーン支社になり、人員も増員されてにぎやかになりました。一緒にテニスを楽しんだり、囲碁のまね事をした岩崎正雄さん、小松武雄さん、鈴木四郎さんなどの顔が思い出されますが、当時の人達はいぶくなく寂しいかぎりです。小松さんとは雲南省の前線守備隊に行き、鈴木さんとはトンギー飛行場へ行き、英軍機の襲撃に遭ってびっくり。約1年ラングーンにいましたが、

今から思えば楽しい思い出ばかりが浮かびます。前線基地だったラングーンにどうして碁盤とか碁石があったのか、不思議に思います。

〔共同通信社友会会報〕第42号 2001年3月31日発行

現地召集でビルマ戦線へ

小山正美（元同盟通信ラングーン支社）

インパール作戦が失敗に終わって、日本軍が守勢に立たされるようになってから敵の攻勢は日増しに熾烈（しれつ）になってきた。ラングーン（現ヤンゴン）への空爆機もB24から新鋭のB29に変わり、白昼堂々、四、五十機ずつ2波、3波に分けて軍司令部その他の重要施設を思う存分爆撃し悠然と去って行く。わが方は飛行機一機飛ばず、高射砲も沈黙の状態ですすべもなく、じっと見守っているありさま。

このような情勢下にあつて、突如ラングーンの商社に赤紙が来た。軍は1次、4次と短期間に約3千人といわれる商社員全員を召集する計画を実施に移したのである。

同盟通信ラングーン支社に第1次召集があつたのは昭和20（1945）年3月7日。人員は2人。うち1人が私であつた。もう1人は戦争経験のある松岡義秋上等兵で入隊は3月15日。初年兵の私は基礎訓練を受けなければならなかつた。普通3カ月かかるそうだが、時がただけに1カ月足らずで卒業、前線へ出ることになる。前線といっても場所は敵が好んで爆撃に来るミンガラドン空港周辺。そこで半月間に何十回という爆

撃を受けたが、幸い怪我もなく終わった。

4月27日夜、空港の西を南北に走る鉄道のインセン駅から、爆弾や弾薬を満載した長い貨物列車で南へ走り、ラングーン駅経由でペグーへ向かう。途中敵機の襲撃を受けたが事なきを得た。ペグー着は遅れて翌朝になった。駅前に枝を空いっばいに広げた大木があり、その下に真新しい軍服、軍帽、軍靴、靴下、ゲートル等々が山のように放出されていた。雨季を間近に控えて、上から下まで装束を一新して近くのゴム林で飯ごう炊さんし、夜になるのを待つ。

ゆっくり休養して夜、ペグー出発。マンダレー街道をパヤジへ向かって行軍中、敵英印軍がワウへ入ったとの情報。直ちに街道の西側に降り、西へ向かって進み、パヤジの南に当たる小高い丘の林の中へ部隊全体（この時は大隊になっていた）が退避したのは深夜だった。明くれば4月29日（天長節）、曇天。ワウに入った英印軍がペグーへ向かって南下するため、早朝から無数の敵偵察機がひっきりなしに低空で飛び回り、東の方マンダレー街道上では敵の戦車（新鋭M4）や装甲自動車（ゴウゴウ）と音を立ててペグーへ移動中。

日が暮れて辺りが静かになったとき、「これから名前を呼ばれた者は前に出るように」との声。わが部隊の者の名が次々と呼ばれている。そのうちに私も呼ばれた。全部で27名。隊長は「われわれはこれからマンダレー街道上の敵戦車または装甲自動車を襲撃する。手榴弾を各自に2個渡す。一つは敵襲撃用、一つは自爆用である。3人が1組になり、1列縦隊で進む、各組の間隔10^{メートル}、街道に近づいたら匍匐前進、日ごろの訓練を発揮する絶好の機会である」。説明とも檄ともとれる言葉で締めくくった。

時間を見計らって出発。マンダレー街道上には戦車とも装甲自動車ともとれるそれらしい黒い物体が点々と見える。次第に近付き匍匐前進に

入る。ところが近付くにつれて、戦車、装甲自動車に見えたのは、街道の両側に立っている並木と分かってきた。私は土手のように高くなっている街道を越える時、首を左右に動かしてよく見た。何もなかった。

われわれは敵の部隊と部隊の間を通過したことが分かった。幸運に恵まれたのだ。示し合わせた50^{メートル}地点に集まる。隊長は「われわれは助かったのだ。行く先は分かるとるな、モールメンからタイ国だ」

東に向かって一晩中歩き続け、夜明け前、白いパゴダのある村の近くで仮眠、夜明けとともに村へ入る。村では村長はじめ村中で大歓迎。女たちは果物をたくさん持ってきて来る。われわれの街道突破を知っているかのようなだった。

敵部隊がまだ来ないうちにシタン川を渡って安全圏に入ることができた。同盟の第2次召集者4名は全員、シタン渡河点で戦死した。

ところが先を急ぎ過ぎたのが裏目に出た。すぐ前に行く部隊から部隊名を開かれ、ラングーンで召集された商社員の「蘭部隊」と答えたところ、そんな部隊が先を争って後退する必要はないと、ビルンまで行ったのをシタン川の線まで戻されてしまった。以後シタン川に続くマルタバイン湾沿岸の警備、工兵隊の鉄道線路補修手伝い、数次にわたる反乱ビルマ軍討伐などがあり、再びビルンへ行ったときお目にかかったのは、敵機が落とした「ソ連対日宣戦布告」の伝単（宣伝ビラ）だった。これが8月8日。タトンで終戦、召集解除。モールメンから1週間かけ、同盟マン最後の泰緬鉄道通過者となり、ボロボロの服装で、しかしすり傷一つ負わず9月7日、無事にバンコク支社に到着した。

（共同通信社友会会報」第43号 2002年3月31日発行）

終戦近づき支局にぎやかに

平山庫四郎（元同盟通信バンク支局）

私が盤谷^{バンコク}に行ったのは昭和18（1943）年7月。19日に羽田を出発し同夜福岡泊。翌20日、福岡から上海で給油し同夜台北泊。21日は海南島の海口で給油しナトラン泊。22日正午すぎ、盤谷ドムムアン飛行場に到着した。東京―盤谷は3日かかった。

支局所在地は中央ナレー路。敷地は1500坪（約5千平方メートル）。事務所1棟（約1500平方メートル）、受信室2棟30坪。ほかに市内サート路に宿舎2棟。歴代の支局長は須藤宣之助、水野政直、久野茂男、牧内正男。支局長のほか編集10人、総務1、電話2、タイ人1、発送などの人員がいた。ニュースは和文、英文、タイ文で発行した。

支局は軍の施設や日本人街等から離れていたため、敵機の直撃を受けたことはなかったので、日常安心して仕事をすることができた。しかし当時現地では盗難が横行し機材の管理、保管は大変であった。

終戦近くなって軍の一部が庭に防空壕^{くわうこう}を構築、受信機を設置したり、ラングーン（現ヤンゴン）支局員十数人が同方面の兵の撤退と同時に合流するなど支局はにぎやかになった。

8月になり敗戦の色が濃くなるにつれて職場は沈滞したが、「阿南^{あなみ}惟幾^{これ}大将あくまで本土死守」の情報で興奮させられた一場面もあった。

終戦で天皇陛下の詔勅が放送されることになり、司令官以下将校が支局に参集して支局の機器で放送を聞くという一幕もあった。市内では終戦と同時に華僑その他の小競り合いがあり、夜間など銃声が聞こえることもあった。数日後邦人はすべて仕事をやめて住居地に軟禁されたため、

支局もこれに従った。社員22人。家主が疎開先から帰り、受信室1棟を明け渡したが、支局員の寝起きに支障はなかった。その後、盤谷の上流約40キロのバンポアトンの集落に在留邦人約3千人とともに強制移住させられ、ここで約10カ月間過ごした。

21年6月、同盟社員はバンポアトンからその他の邦人と共にLSTに乗船、内地への途についた。途中船内でアメーバ赤痢がまん延して困ったが、17日間で無事鹿児島に上陸した。

（新聞通信調査会報」第273号 1985年8月1日発行）

タイピン支局開設から終戦まで

我妻^{あづま}繁夫（元同盟通信タイピン支社）

昭和19（1944）年に入ると戦局は次第に緊迫化し、マレー担当の軍は司令部をマレー半島中部のタイピンに移した。同盟は19年1月、同地に支局を開設。私のほか小関順平（編集長）、早川仁三、東英敏、増田孝彦（編集）、斎藤子之吉（電務）、同盟の「南方現地経済調査会」から派遣された浦敷調査員（東洋紡績）などがいた。

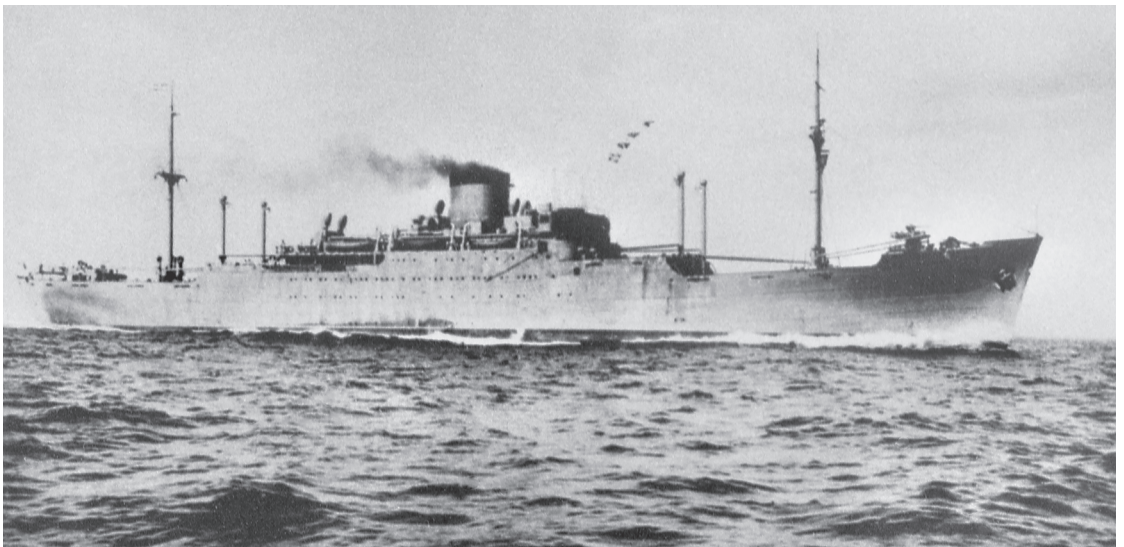
支局開設と同時に通信発行業務を開始した。支局内の空気は闊達^{かつたつ}、仕事は円滑に進められた。現地採用の社員向けに日本語教室を開設。日本語担当のインド人教師を委嘱、日本語を習得させた。少年少女の習得の早さは顕著で仕事や意思疎通の上で、われわれ日本人との間に何らのわだかまりも生じなかった。

宿舎の中国人阿媽^{アマ}には日本人社員が常にやさしく、紳士的態度で接触したため、親近感を強くしたようである。このことはわれわれがタイピンから十二、三^キ離れたサラノース収容所に収容されていた約4カ月の間に、彼女らが夜陰に乗じて厳戒網を突破、2回にわたり、卵、黒砂糖などを差し入れに来てくれた事実が証明するだろう。中国人の義理人情の強さを身に染みて体験した。

19年3月、支局は支社に昇格、これに伴い人員も順次増加。柳迫富士夫、中川原一夫、金井義元、吉田良好、太田誠、勝尾信一、渡辺政治、宗久仁の諸君を迎えたが、太田君はイポー分局に赴いてもらい、東英敏君とともに取材ならびにペラ新聞(英字、華字、マレー語)の監督、指導に当たってもらった。東英敏君は終戦後、マラリアに冒され、不幸にして同地収容所で還^{かえ}らざる人となった。勝尾信一君はタイピンで胸部を思い、ペナンの病院で加療していたが、戦後帰国の船中で病没された。元氣だった金井義元君は内地帰還の命が出て、タイピンを去り、軍用船「阿波丸」²⁶に乗船、台湾沖で船と運命をともにした。以上の3君は南方の地で、私と苦楽をともにしたにもかかわらず、内地で再び顔を合わせることはできなくなったことを心から残念に思っている。

戦後、マレーは大きな混乱を見なかったものの、いわゆる共産匪賊^{ひでく}の台頭があったことは事実である。終戦直後、マラッカ新聞の報道並びに終結方針指示のため柳迫君を危険な情勢下マラッカに派遣したが、同君はその大胆かつ細心な行動でその任を全うしてくれた。

20年9月、タイピン在住の市民はサラノース収容所に入ったが、その数は二百数十人であつたろう。日本人会が結成され、選挙で役員が選出されたが、たまたま私が同盟の長であつた故か、会長に選出され、サラノース、シンガポールのジュロン収容所、そして21年2月11日に広島県大竹港に「朝嵐丸」で帰着するまで、その任に当たった。



阿波丸

シンガポールで新聞発行

本間文吉（元同盟通信シンガポール支局）

同盟通信社がマレー、スマトラ地区で新聞を発行することになり、1943（昭和18）年1月、昭南新聞会が組織され、3社以外の日経、東京中日、北海道、河北、西日本など各社が加盟して人材を派遣した。

ある日、古野伊之助社長から呼ばれ、「君は記事のメーキャップが得意というが、昭南（シンガポール）へ行って新聞を作ってくれ。現在井上（勇）君がやっているから、それを引き継いでくれ。詳しいことは伊藤（正徳）君（昭南新聞会会長）にきいてくれ」と言われたので、伊藤さん、小野敏夫さん（同理事長）に会って、羽田をたった。

新聞社では黒沢、猿橋両君が活躍していた。同盟の通信を編集して、兵团や在留邦人に情勢を知らせるのが目的だった。軍政監部のクラブから市役所へ回り、そこでジョホールバルから昭南島へ通じる水道の復旧工事に、マレー人、中国人、インド人、ユーラシアンの4民族が協力したという話を聞いた。「これはいける」と4人の責任者を集めてもらい、当時の状況や談話をとり、かなりの行数で紙面を埋めた。小野理事長が軍司令官に呼ばれ、「この種の建設的な記事を多く掲載するように」と大いに褒められ特賞30円をもらった。

19年に北部マレー・タイピンの馬來新聞へ転じそこで終戦。兵团と行

動をともしサラノース收容所へ行った。丘から丘へゴム林が続き、われらにはゴム乾燥工場が割り当てられた。降伏式の日。持ち物は全部小舎に置き、ゴム林の中に全員が1列に並ばされ、ハンカチの上にポケットの中のものを出して待った。ラッパが鳴り、小高い道にユニオンジャックが揚がり、英軍司令官一行の車が着いた。

その後、持ち物検査はしばしばあったが、幸いに十数枚のスケッチは没収を免れた。道路づくり、薪拾い、野草採りが日課だ。数カ月の後、昭南ジュロン收容所へ移送され、そこでペナン組に会った。帰る日は、真夜中に收容所を出て「朝嵐丸」に乗船、21年2月11日大竹港（広島県）に上陸。寒い日だった。

〔新聞通信調査会報〕第273号 1985年8月1日発行

貨物船雇い、コメの買い出し

高野太一郎（元同盟通信南方総社通信主任）

昭和19（1944）年3月末、シンガポール転勤の辞令を受け、下条徹男（資材部と、雁ノ巣（福岡第1）飛行場から双発機で出発した。事務所に出勤して福岡誠一総社長から早速ガリ版刷り通信発行の仕事の言い渡される。定時に内地から無線送信される電文を漢字交じりの普通文にし、見出しをつけて謄写版原紙に切って印刷。1日数回発行、各機関などに配布する。この仕事を約半年続けたのち賄い方となる。毎朝早く市場に買い出しに行き生鮮食料品を仕入れ、社員宿舎に届ける。

福岡総社長、酒井井平（金沢人）秘書がサイゴンに転任。ポン友の下条君はビルマ（現ミャンマー）に従軍して一抹の寂寥（せきりょう）を感じる。

20年2月初旬、総社長から米の買い出し命令を受け、10ト余りの貨物船を雇い7日朝、シンガポール沖合のカリムン島に向け出帆、午後同島着。4日間停泊して予定数量を買いつけ、満船で11日出帆し、正午ごろ港外に到着した。編隊爆撃機のごう音に、ふと空を仰ぐとB29の空襲である。

8月17日ごろ総社長宿舎に集結し、共同生活を9月下旬まで続けた後、ブキティマのキャンプ場に移り雑役に従事。11月末、帰還第1船の「大安丸」で大竹港（広島県）に上陸。

〔新聞通信調査会報〕第273号 1985年8月1日発行

昭南の陽気な娘たち

田中理（元共同通信論説副委員長）

（編集者注）以下は筆者が元同盟通信職員の前沢幸子さん取材してまとめたもの。

「番茶も出花の陽気な娘たちであった」。昭和18（1943）年冬から敗戦翌年の春にかけて、昭南（シンガポール）の同盟通信南方総社で勤務した女性たちのことを、前沢幸子さんは自分自身も含めてこう描いている。

18年11月、広島県宇品^{うしな}港発の「高砂丸」に乗ったのはタイプの浦野多美子さん、寺尾寿美子さん、交換の保立文江さん、小山重子さん、宮内くにさんとローマ字放送の前沢さんの6人である。

日本軍の占領地域拡大に伴い、同盟南方総社も東南アジア一帯に広がった取材、通信網の総括・発信基地として、また本社との中継基地として、充実が急務になっていた。交換の場合は、現地人養成の目的もあった。前沢さんは当時の自分を振り返って「別に軍国少女だったからじゃないですよ」と言う。入社して1年。日ごろから地方支局に出て取材の勉強をしたいと言っていたら、「行き先が南方でも行くか」と言われ、おうむ返しに「行きます」。ご両親からも強い反対はなかったという。

12月3日、昭南着。途中、米潜水艦の攻撃で船団中の1隻が沈んだ。同盟女性集団の乗った「高砂丸」が、南方定期便の最後の船になった。南方総社長は福岡誠一さん。女性6人は総社長宿舎と同じ敷地内の1棟をあてがわれた。福岡さんは自身が甘党だったこともあって、管内支局へ出掛けると、必ずチョコレートやケーキを手土産に持って帰ってきた。

前沢さんは「私たちは庭続きの福岡邸を徒党を組んでは急襲したものである」と親愛の情をこめて回想している。女性たちが福岡さんに奉った愛称は「ブルドッグ連隊長」。田河水泡^{たがみずはう}の『のらくろ』に登場するあの親爺である。福岡さんのアイデアで「おしるこ会」が定例で開かれるようになった。あんこも餅も本物。市内で市販されていた。男子社員も参加も自由。宿舎の広い庭で開かれた「おしるこ会」に集まった大勢の人の写真が残っている。

着任間もなく宮内さんが病気で急死することがあったけれども、フランス人が住んでいたという小ぎれいな宿舎の暮らしは快適だった。2人



1944 (昭和19) 年正月、おそろいの作業服姿で勢ぞろいした同盟通信南方総社の女性職員。左から浦野、保立、寺尾、宮内、小山、原沢の各氏

1部屋が保証され、通勤用の自動車1台。それに阿媽^{アマ}さん3人が付いた。総社勤務の岩永信吉さんが訪ねてきて、ピアノを弾いてくれた。学徒出陣でビルマ(現ミャンマー)前線に向かう途中の将校が立ち寄って「もういないから」と岩波文庫を置いていったこともある。厳しさが増していた日本内地に比べれば、衣食住とも十分だった。「着るものは薄着で済むでしょう。靴を買ったかな」と原沢さん。

もっとも昭南は戦地である。夜の個別行動は絶対禁止。出退勤は自動車でまとまって行くから、昼間も1人で好きに動き回るわけにはいかない。それに憲兵の姿がいつも見え隠れしていた。一度、写真部の角田匡さんに連れられて中華街へ行った。すると翌朝、憲兵が総社へやって来て「昨夜、お嬢さんたちが街を歩いていましたね」と嫌みを言った。

みんなで時々、映画館へ行った。『愛染かつら』がかかっていた。この映画の封切りは13年だから、相当カビが生えている。映画では、軍が英側から押収した『風と共に去りぬ』を見た時の驚きを今も鮮やかに覚えていた。

治安の警戒意識が張り詰めていたし、後半期に入ると島南端の砲台が空襲で破壊される事態にもなった。しかし昭南は特別市制が敷かれ、軍の直接統治でなかったことも手伝って、とげとげしい空気はなかった。

男性絶対優位の占領地暮らしでは、満たされぬこともあったと思う。ただ昭南の日本人社会では「同盟のお嬢さんたち」という呼び名が行き渡って、箱入り娘的な存在になっていたし、原沢さんは「何よりも、総社の雰囲気はすごくよかった」と言う。

敗戦は昭南にいても予感できた。敵側の短波放送を聞いている人がいたし、ビルマ前線から泥まみれの姿のまま帰ってきた同盟の特派員が、興奮した口調で「東京へ帰って『飛行機を前線へ送れ』と演説してくる」とまくし立てるのも聞いた。

英軍が進駐してきて日本人は市内から退去して集結するよう命じられた。ゴム林を切り開いて、にわか仕立ての収容所ができた。スマトラやボルネオ（カリマントラ）から来た人も入って、住民約1万人。うち女性は、同盟はじめ銀行、商社で勤務していた人も合わせて、集落の真ん中にとまって居住し、取り囲むように男性の居住区があった。英軍から割り当てられた炊事や農作業は、男性が引き受けてくれた。内地へ引き揚げるときも、英軍は女性のために駆逐艦1隻を用意し、ボルネオで子連れの女性を乗せて帰った。広島県大竹で上陸、原沢さんは共同通信に復帰し、文化部で仕事をした。

昭南で足掛け4年の生活は、少なくとも「もの」では恵まれていた。社も女性の海外勤務に気を遣い、南方総社次長の福田一^{はしめ}さんが事務打ち合わせで一時帰国した時、留守家族を集めて現地の模様を説明した。「戦時中の方が、女性が自由に活躍できる場に恵まれていた。あらためて同盟の大きさを感じます」と原沢さんは述懐する。

原沢さんは戦後、藤原ていさんの『流れる星は生きている』を読んで「申しわけない」という思いにかられた。「それからというもの、口にチャックをかけて、自分からは昭南の話をしたことがありません」

だが「昭南の陽気な娘たち」にも心の痛む思い出はある。20年4月、「阿波丸」で日本に引き揚げるようになっていた。直前になって乗船中止になったが、この船に乗った同盟社員2人は帰ってこなかった。同盟時代、北京の華北総局、上海の華中総局にも女性社員が昭南とほぼ同数いた。この人たちにも、それぞれの歴史があったはずである。

（「新聞通信調査会報」第426号 1998年5月1日発行）

同盟だけに事務所設置許可

高倉正夫（元同盟通信プキティンギ支社編集主任）

太平洋戦争中、日本の占領地区に多くの同盟支社ができ、敗戦とともに消滅した。スマトラ島だけでも、プキティンギ支社のほか、パレンバン、メダンなど数カ所に支分局があった。

プキティンギはスマトラ島の中央部に位置し、熱帯地方にありながら、高地のため気温は20度前後、日本の避暑地を思わせるスマートな都市だった。同盟支社は高台の住宅地にあり、道路を隔てて2カ所に分かれ、上手が事務所と住居、下手が住居専用となっていた。

支社の構成は、支社長、編集部（主任、取材記者、日本語通信要員数人）、マレー語部（主任、現地人要員数人）、連絡（日本人オペ2人ほか）、写真1、総務1、ほかに現地の使用人など30人ほどの世帯だった。私は、開戦前はバンコク支局員で、昭和19（1944）年9月、プキティンギ編集主任として赴任。終戦、抑留を経て21年4月に帰国した。

プキティンギには、軍司令部、軍政監部があり、スマトラ全島の軍事、政治、経済を管轄していた。狭い市域に占領の中枢が集中していたので、軍、軍政関係以外は、ほとんど締め出され、報道関係では同盟だけが居住を許可されていた。スマトラ新聞（昭南新聞会所属で同盟が管轄）、朝日新聞その他各紙の支局は、車で1時間以上かかるパダンに居を構えていた。従って取材、報道、宣伝活動は全く同盟の独占状態だった。商社支店の多くもパダンにあった。

支社の業務はまず取材送稿。毎日午前中、支社から車で5分くらいの軍司令部へ出掛け、参謀部、情報部、宣伝部、軍政各部を回る。

時々、各部隊、各種学校、現地の村落なども訪れる。送稿内容は軍政関係、経済、社会、風俗などが主なものだった。

日本語通信は、連絡部で受信した同盟ニュース（ローマ字）をガリ版印刷して軍関係を中心に配達、またスマトラ新聞へも現地記事とともに送り、同紙の主要記事となっていた。マレー語通信は、英語で受信した同盟電を現地要員が翻訳、またスマトラ関係の記事や、広報記事は、主としてマレー語主任がマレー語に訳してタイプしていた。これらの通信は、マレー語新聞に提供され、また軍の宣伝活動にも利用されていた。

ブキティンギには空襲もなかったし、物資は不足していたが、贅沢を言わなければ特に困ることもなく、まずまず平穩に過ごしているうちに終戦となった。支社員の一部は、そろそろ治安の悪くなってきた市内に残って日本語通信を発行して軍関係に配布、他の者は郊外の民間人キャンプに入った。

その後シンガポールのジュロン・キャンプに送られたが、そこでも「同盟通信」を発行した。とにかく通信を出そうということで、同盟海外放送が受信できなければNHK放送を速記受信して通信を発行した。これは支社長の近藤公一氏の執念みたいなもので、同氏のお膳立てに乗って実務を担当した私も、その通信社魂には感動させられた。帰国までに数年かかるとか、帰国すれば男子は全部丸坊主にされるとか、いろいろデマが飛んだが、「同盟通信」が抑留所の各棟で朗読または回覧され、最小限度の情報を伝えたことは、日本人社会にいくらかは役立ったと思う。

〔新聞通信調査会報〕第273号 1985年8月1日発行

飢えと熱病の北ボルネオ戦線

内海裕士士（元同盟通信アピ支局）

昭和19（1944）年12月、北ボルネオの要地アピ（現コタキナバル）市街への空襲は本格化した。ボルネオ守備陸軍の司令部や航空基地があった。月末ごろには、市街地はあらかた消滅し、同盟支局は背後の山並みの一つの頂上に移転した。

そばの谷間は爆撃行の通路であった。20年初頭、軍はアピ上陸に備え、邀撃態勢をとる。司令部は奥地ザボン農園へ移動を始めた。それより先、同盟支局閉鎖も決まったようで、牛島俊作支局長は南方総局へ帰任、次いで私も帰任が許された。ところが新任司令官は既定方針を変更し、同盟記者の再派遣を総軍に要請、しかも矢の催促だった。私はシンガポールから再びアピに戻った。アピに戻るや原稿は一切送信できないと厳命された。新聞記者がいると有力部隊が存在するとみられるため、敵の攻撃がひどくなる、という理由。われわれは、じっと耐えてゆくのだ、という。

北ボルネオ戦線は飢えと熱病との戦いに終始した。押し寄せてきた豪州軍とはボーフォートで膠着した。ザボン（農園名）とアピの間である。走る一本の鉄路を南北に挟んで対峙。ほぼ南側がザボン、北側がアピになるだろう。そして鉄路の左側は100メートル幅の急流、右側は峻険の連なるジャングルだが、兵がぎっしりいた。

リュックを背負い4日がかりで前線の作戦本部を訪ねる。T大佐が大喜びで迎えてくれた。駐ソ連大使館付武官だった大佐は、巧みな話術と内容豊富な話をしてくれた。翌早朝、軍曹の案内で最前線に到達。敵陣

バリック・パン支局始末記

村川武躬たけみ（元同盟通信バリック・パン支局）

は指呼の間だ。敵白砲の砲撃の真つ最中だった。1分間隔で着弾の絨毯攻撃で、1ブロック15分くらいで移動していった。1ブロックは50分四方くらい。着弾跡は20センチくらいの深さにすぎないが、破片が四方に飛散し殺傷力は相当だった。ポーフォート最前線の戦闘隊長は大尉。大変歓迎してくれた。夜、斬り込み隊志願の兵が隊長室に三々五々集まった。

「夜間、敵陣を横切ってこちらへ何人かが到着した。アピからザボンへ移動する途中、敵が押し寄せ戦闘になったため、苦心して突破してきた人たち。敵は1週間くらいで滑走路や幅50メートルの広い道路を作り空陸の作戦行動は自由、川も砲艦が遡行している。映画館を作り娯楽映画を兵隊に見せ、現地人はいない。懐中電灯を一人一人が持っていて夜の散策も自由。戦闘地帯を部隊が移動するときは足跡を残さないよう穴を掘ってゴミを埋めている。しかしチョコレートを分捕ってきたものもあるよ」と笑った。隊長は、もはや斬り込み出撃を許可しなかった。

私は前線視察後にアメーバ赤痢で倒れた。東京発信の終戦のニュースをオペレーターの井上君が持ってきてくれた。なぜか涙が出て止まらなかった。軍医大尉が来て私に退院許可を出してくれた。井上君と2人で斎藤隊（通信隊）に向かったが満足に歩けなかった。足の太モモが片手で握れるくらい細く肉が落ちた。

（新聞通信調査会報」第321号 1989年8月1日発行）

オランダ領ボルネオ最大の都市と言っても石油がなかったら、名もない一寒村にすぎなかったろう。港に面した丘陵地帯に林立する石油タンクと、丘陵の斜面に沿って建てられたバンガローの赤い屋根。そして赤道直下の強烈な太陽を受けて、どろんと沈んだ静かな入り江。その海岸通りの砂地に並んだ建物の一つが、同盟通信バリック・パン支局だった。戦争さえなければ、死んだような静かな浜辺であり、月見草を思わせる、もの憂い環境でもあった。この支局で在留邦人へのガリ版を切っていたのは、支局長村川武躬、青木主雄オペ、内田啓明記者（現共同通信解説部次長の3人。

昭和19（1944）年の春までは、戦争から置き忘れられたような平穏な日が続いたが、夏ごろから夜になると様相は一変した。モロタイ失陥までは1日置きだったのが、それ以後は毎晩の空襲定期便となった。20年になると、昼も戦場となり無線アンテナの張られた同盟支局も銃撃の目標となり、無線室と食堂が銃弾を浴びた。潜水艦の脅威を脱して、やっと港口にたどり着いた食糧輸送船は、われわれの目の前で次々と爆沈され、外部からの食糧は全然入らなくなり、野草に飢えをしのぐ日が続くようになった。

白い霧がよんでいる6月30日の早朝、重軽巡洋艦、駆逐艦、掃海艇、魚雷艇など五十数隻の連合軍艦隊が突如、バリック沖に灰色の姿を現すや、無気味な砲口をらんと光らせた。

いよいよ上陸作戦開始だ。かねて覚悟していたこととはいえ、いろん

な想念が、頭の中を駆け巡る。4、5日前のことだった。マカッサル支社の上村邦之丞記者が猪伏清支社長の特命を受けて、水偵(水上偵察機)で飛んできた。「村川、お前は死んでくれ」。上村記者の表情は、いつもと変わらぬにこやかなものだった。

敵艦隊が一斉射撃

急いで司令部に連絡に行ってみると、既に根拠地隊司令部は、われわれを残して全員が退去し、同盟通信だけが敵艦隊の前に露出した形になっていた。敵は夕方から、一斉艦砲射撃を開始した。われわれも退去しなければならぬ。ドラム缶を庭に持ち出し、古野伊之助社長の写真をはじめ重要書類の焼去、地下無電室の破壊、現地使用人の始末など済ませると、砲撃に追われるように、ジャングル内の司令部と通信隊の後を追った。7月1日の夜のことだったが、バリック全市を燃え尽くした紅蓮(ぐれん)の炎は、20年を経た今日でもありありと目の底に残っている。

「敵上陸の際は、一斉に石油を放出して湾内を火の海とし、敵の上陸を阻止する」と自信満々だった司令官。鎌田道章(みちあき)中将以下参謀連はその余裕もなく、われわれ非戦闘員を危険な海岸地帯に置き去りにして、安全地帯に逃げ出していたのだ。数十万リットの油が夜空に高く、広く燃えさかり、その火柱の上には真つ黒な煙が白い月を覆っていた。敗走する2万の日本人と原住民を、恐怖のどん底にたたき込むに十二分な舞台装置だった。

バリックパパンは、根拠地隊と海軍燃料廠(しょうじょう)が主体、鎌田中将をキャップに1万5千人を擁し、これを守る高角砲隊、約千人の陸軍独立歩兵大隊(部隊長・山田少佐)、1000人前後の在留邦人(商社その他)など総計2万人程度。2万の部隊といっても、陸上戦闘の能力を持っているのは、陸

軍の山田部隊だけ。大部分は現地召集の予備役を除き実戦の経験もなく、兵器も貧弱なものだった。三八銃は二、三十人に1丁、竹やり同様の木の先に手製のやりをつけ、腰にはマッチで点火する現地製の手榴弾(しゅうりゅうだん)2個、これが兵隊の全装備である。最新鋭装備の米豪軍に抗するにはあまりにもひどかった。

連合軍が上陸して2週間もたつと、弾薬も食糧も欠乏し、友軍の士気は急激に低下していった。敗走道路は間断なき銃爆撃にさらされた。その中を3人、5人と敗走兵はあえぎあえぎ安全地帯を求め、マラリアやアメーバ赤痢(しょうすい)に憔悴(しょうすい)した体を引きずりながら、後退していくのだった。わたしたちもその群れと一緒に、40トワの無電機を、細い肩の肉に食い込ませながら「これだけは絶対に手放さないぞ」と互いに励まし合い、よろめく足で支えていた。

蒼茫(そうぼう)として暮れゆく細い道路脇には、体を折ったようにゆがめて倒れている兵士の姿が続いていた。中にはズボンを脱ぎかけたらしく、痩せこけた骨だけの大腿部(だいたいぶ)を露出させ、血便にまみれている姿もあった。近づいてみると無数の黒い蠅(はえ)がブーンと音を立てて飛び散り、マラリア特有の熱っぽい悪臭を放っていた。

こうして、われわれ3人の同盟マンは、無線機をしつかりと抱き合い、病苦と肉体の衰弱と戦いながら、マハカム地区に入った。そこは、昨日まで過ごしてきたジャングル地帯とは打って変わり、砲声も爆音もなく、電灯の光さえあった。死臭に満ちた戦場が、すぐ近くにあるとは思えない静けさだ。そこでわれわれは、久しぶりに待望のキーをたたいた。相手はマカッサル支社。私はたまっていたものを吐き出すように、一気に書きまくり、青木オペは懸命にキーをたたき続けたが、30分たつても応答はない。せっかく電源を得ながら、連絡のとれない悲しさ、悔しさ。しかもそれが無電機の故障と分かったとき、今までこの日のためにと生

き抜いてきた精神力も一遍に崩れ去るかに思えた。

ビラが日本降伏伝える

戦闘の実相をこの眼で見、この手で書き、国民に報道するという私の任務もこの日で終わった。無線機を使えない悲しさ。的確な情報は分らなかったが、8月10、12日、敵機のビラは日本の降伏を伝えた。白旗を掲げるか、自殺攻撃をかけるか。司令部は1週間を費やして、ようやく20日すぎに停戦を命令した。もしこの停戦命令がもう1週間も遅れたら、おそらく3人は報道班員として、首狩り族の住む奥地へ奥地へと転進を続け、短い一生を終えたことであろう。

これから、われわれの捕虜生活が始まった。わずかな米と塩、軽くなったリュックを背負って、虚脱状態の3人はトボトボと集結指定地テングロンに向かった。ここはマハカム川の中流に沿った美しい土侯の城下町、空気はさわやかに澄みわたり、森の中や物陰まで明るい。露にぬれた芭蕉の緑が、白い道の両側に漂っていた。戦場の悪夢を断ち切るような、その静かな町の木造家屋がわれわれに割り当てられた家だった。そこにはタラカン島から脱出し、数百^キのジャングルを生き延びてきたタラカン支局員の2人が住んでいた。その1人は堀内軍平記者、もう1人は水野オペである。

21年5月、帰還船リバティー²²⁸はマハカム河口を出発した。船底に身動きもせず2週間、平穏な航海を続け、名古屋港に着いたのが5月30日。各新聞社の記者が船上のわたしたちを取り巻いた。船上から見る故国の山河は、生きてきた喜びを祝福してくれるかのように美しく輝いていた。わたしたちは敗戦にあえぎ、天皇制の揺らぐ祖国の土に躍りあがったのだ。

〔新聞通信調査会報〕第6号 1963年6月1日発行

軍が日本人の身辺調査、マカッサル支社

猪伏清^{いぶし}（元同盟通信マカッサル支社長）

マカッサル湾の青緑の静かな海面をブラウ（インドネシアの帆船）が滑って行く。そろそろ昼飯昼寝の時間である。空襲警報が鳴った。もう大きいやつが落ちている。恐ろしい炸裂音が近づいてくる。支社のあるこの海岸通りは危ない。早く逃げるんだ、壕へ飛び込むんだと、頭は至極慌てているのに、体はばかに落ち着いているから妙だ。電訊・ガリ版を切っていた仲間はずっと飛び出して、自転車で鎌倉通りを宿舎の方へ一目散。支社の扉を閉め、慌てて前のたこつばへすっ飛んだ。頭の上に敵機が来ている。ここではやられる。じつと一人が入っているのが怖くなって、たこつばから飛び出し、自転車で宿舎の方へ。右手の太木の下にある大きな防空壕は満員だろう。素通りして一気にペダルを踏んだ。助かった。仲間皆無事。改装間もない支社は直撃弾を食らってぺしゅんこ。昭和19（1944）年8月末のこと。

通信機材、用紙、印刷機その他は、3カ月前に設営した第2の社屋に疎開済み。この日も若い仲間は常と変わらぬ元気で、東京本社、南方総社や管下各支局と交信のキーをたたきガリ版を切った。この夜空襲なしとみて、降るような美しい星の下で、涼しい海風に頬をなぶらせながら、ロカ高原醸造の名酒「雄魂」とマカッサル名物の合成酒「林正宗」を

五十嵐哲雄などの面々と屈託なく飲んだ。

その翌日、通信配達係のインドネシア青年Gが姿を見せない。大木の下防空壕が直撃にやられ、逃げ込んでいた者は一人残らず死んだらしい。いま兵隊が掘り出している。Gのかぶっていた同盟マーク入りの紺のキャップが、大木の枝に引っ掛かっていた。夜、掘り出した死体は海岸通りプールわきの建物に全部収容された。田中盛文、京谷などと検視にゆく。Gの死体がない。直撃で吹っ飛んだのか、まだ埋まっているのか。

Gの女房がやって来て「うちのが帰らないのですが」という。「社も探しているのだが、どこへ行ったのか分からないので弱っている」「どうなるのでしょうか」と聞く。死体がないので、空襲で死んだとは言えない。「社も行方を探してあげるが、お前さんも探さない。どうなったか分かるまで、Gの月給はあんたに払うようにするから、その点は心配しないように」。「テレマカシ」(ありがとう)と礼を言って帰られたが、何かやり切れなかった。こっちは敵に空から殴られ放しで、どうともならんのだから、こんな切ない気にもなるのだろう。

マカッサル市内は危ないと言うので、受信・印刷所を郊外のスングミナサへ移し、市内の第2の社屋で取材・交信をやることにした。空襲はひどくなる。たった2、3機で、毎夜毎晩やって来て眠らせない。宿舍横の壕でじっと息を潜めて帰ってくるのを待つだけ。当たりませぬように。郊外のカンポン、カンポン(村々)で大きな火事が起こったり、鎌倉通りの市長宿舍が爆砕されたり、同盟宿舍の天井が爆風で穴が開いたり、全く神経戦を一方的にやられているばかりだ。よいニュースは入電しないし、戦勢は日々に悪し。セレベス千早作戦といったものが日程に上りそう。山に籠城して一日でも長く敵をセレベスに引き付けておこうというわけだろう。ここでは勝利の望みはなく、死ぬことだけをみつ

めて、立派に戦い抜こうとする以外に、逃れる道はなさそうである。

『葉隠』にいい言葉があった。「武士道とは死ぬことと見つけたり」。同盟マンは最後の最後まで生きて「報道報国」だ。死んではニュースは送れない。だが、生は難く死は易しともいう。生死は論の外、敵はまだセレベスに上陸してはいない。今のうちに死ぬ間際まで、ニュースが送れる用意をするのが本当だろう。

こんな時に、精油所しかない一番危ないバリックパパンへ行ってくれる村川武躬(たけみ)が着いた。これで栄養不足と睡眠不足で病んでいた八木久が、米のあるバリ島のシンガラジャへ行ける。畑敬はアンボンで頑張っている。海と夕陽は美しいが、アンボンはいどい所だ。何にもない。あるのはサソリとレプラの標札と空襲だけ。マカッサルだけが、まずはよい所。米も魚も酒も女もある。

敵は海軍軍政地区のどこを一番に狙ってくるか。まず石油のあるタラカンとバリックだろうとは思ってみるものの、皆自分のいる所へ押し寄せてくるような気がする。

マカッサルにセレベス建設報国団が民間にできた。同盟支社長がその報道部長である。ニュース・情報を伝える役柄だがあんまり民間人にしゃべっちゃいかん。南方で著名な海軍の特別料亭大川隊でぶったりしてはなおいかん。夜、青畳の上で黒塗りのお膳に気のきいたつき出し、刺身、てんぷらなど、こいつで名酒、雄魂を傾け、東京は芳町(よしちょう)あたりから来た軍嘱託の芸者衆のお酌で酔って、団の役員、民間人などを相手にこの戦はもうあかん、負けやとばかり、知ったかぶりの戦況解説をやろうものならことだ。



同盟通信マカッサル支社の様子。大机を囲んで記事作成を急ぐ＝1943 (昭和18) 年 2 月撮影

特警隊から呼び出し

その翌朝、海軍の特警隊²²⁸からお呼び出しがある。まかり出ると、部屋の正面に第1号から第4号までの精神棒が立てかけてある。棒を見てどきどきと体が縮む。同盟支社長という肩書と、特警隊長を兼ねるセサ(先任参謀と仲がよいお陰で、ありがたいことに精神棒のご厄介にならず、嚴重な訓戒を聞かされただけで終わり。

民政府の若い優秀な司政官など2人ぐらい帰国を命ぜられた由。訓戒のあとセサの所へ行くと「戦は悪いが、もう言うなよ」。親切な男である。「スラバヤへ行きたいのですが、飛行機願います」「手配しよう。こういうものがある、見ておくか」。マカッサル在住の主要日本人調査表²²⁹綴りである。

めくってみると、イの一番の欄に名前がのっている。イロハ順だ。原籍、現住所、会社名、職名、品行、南妻の有無、備考といった欄がガリ版刷りしてある。南妻の有無は、マカッサルで決まった女、あるいは仲のよい女性があるかないか、あれば日本人の特要員(慰安婦か、囑託の芸者衆か、現住民何某の娘、混血女性かまで記入されてある。「自由な商売柄、君にしては珍しいね」。南妻の欄には記入なし、特警隊調べである。

空欄になっているのは当たり前だ。ここでは女の恨みは怖い。精神棒ぐらいでは済まないし、第一、大切な報道の任務もできなくなる恐れ十分。艦と航空機のブッサール(親分)が恋の鞘当^{さやあ}りとなつて、派手な騒ぎが起きたり、ブッサールお囲いの芸者衆に惚^ほれたのが不運で、ニューギニアへとばされた士官もあつたぐらい。で、若い仲間と自転車を手を連ねて、外れの悪所へ1時間ばかり走ったり、竹のハシゴを上ったりする。その方が無難だし、スラバヤへ遠征するに限る。しかし誰も彼も

がやれることじゃない。

調査表綴りついでいやなもの、調べるのに時間も人手もかかったろう。戦がここまで来ているのに、何をやってるのか、話にならん。と言って、マカッサルくんだりで、敗戦を食い止め、戦勝への転機をつかむ至極の仕事があるわけなし。まあスパイのつけ入るすきでもなからしめ、軍紀風紀を厳正にして、インドネシアの人心をつなぎ留め日本は勝利するのだと無理にも信心して、インドネシア人にも思い込ませねばならない。埒もないことと笑う者もあろうが、皆大真面目だったのは本当である。

〔新聞通信調査会報〕第7号 1963年7月1日発行

石油の島タラカンに支局開設

岡崎亀市（元同盟通信タラカン支局長）

昭和19（1944）年4月初め、私はバンジエルマシン支局で田中真清支局長から、タラカン支局開設の相談を受けた。マカッサル支社長猪伏清氏から「タラカン支局の開設で支社管内の通信計画は完了する。海軍軍政当局の要請も強い。岡崎を説得して赴任させてほしい」との電報が来た、というのである。

すでに戦局の展望は全くなく、北上を続ける米軍が、タラカン島上陸を試みる日も目前に迫っているというときである。私は一応断ったがマカッサル支社長や田中支局長の立場も考え、同僚の堀内軍平君が同行してくれるなら、という条件付きで承諾し、5月初め海軍の飛行艇で堀内

君と2人タラカンに赴任した。

タラカンはインドネシア北部の港町で、東カリマンタン北東部を流れるセサヤプ川河口にあるタラカン島の南西岸にある。今世紀の初めごろ油田が相次いで発見され、原油をくみ上げる油井が林立しており、日本は海軍の石油基地として戦略上も重要視し、占領以来、海軍燃料廠^{しょう}タラカン支廠をおいて増産に励んでいた。邦人商社も多数進出していた。

支局社屋は海軍民政部²³⁰があらかじめ確保してくれていた家屋を借り受けることにし、ここにはオベの水野秀夫君を常住させ、私と堀内君、他1名の翻訳、編集、印刷要員は、別に近くの家屋を借り受けた。そんな次第で同盟ニュースの配布業務は案外早く開始、警備隊はじめ民政部、一般邦人商社などの期待に応えることができたが、タラカンは原油の産地であつても、米麦、魚介類、肉、野菜など食糧品生産の見るべきものはない。オランダ統治時代からほとんど輸移入に依存していたため、内地の配給制度以上に厳しい統制ぶりで、これにはお手上げのありさまだった。

宿舍の庭を掘り起こしてキャッサバというイモを作った。マカッサル支社から、ときどきコーヒー豆や青いバナナを大きな麻袋に入れ船便で送ってくれた。

食糧事情にも増して厳しかったのは在留邦人の勤労奉仕で、滑走路の修理、整地作業等に連日動員されたのである。毎日のようにタラカン空港が爆撃され、滑走路に大きな穴が開く。それを在留邦人が勤労奉仕で日中30度を越える炎天下に土を運び、埋めてゆくのである。空腹と暑さで倒れそうだった。

ある夜、海軍警備隊から在留邦人に緊急指令がきた。敵上陸の公算が強い。身辺を整理し、直ちに警備隊に集合せよ、というのである。いきなりオランダ軍降伏当時の鹵獲銃^{ろかくじゅう}と実弾を一人一人に渡され「敵上陸は

今夜9時ごろと推定される。指揮者の命令に従い規律ある行動を」と引導を渡された。予定の9時を過ぎても敵襲の気配はなく、銃の操作を気にしながら、その夜は朝まで宮庭で満天の星を仰ぎながら、まんじりともしなかった。

〔新聞通信調査会報〕第321号 1989年8月1日発行

短命だったタラカン支局

堀内軍平（元同盟通信タラカン支局）

緑の丘に幾つとなく立ち並ぶ石油タンクは南国の太陽を受けて白く輝いていた。おんぼろの海軍4発飛行艇で石油の島タラカンに着いたのは今からざっと22年前。「タラカン支局の開設でマカッサル支社管内の支局計画は完了する。戦局苛烈の折から、わが同盟のために決意を望む」という猪伏清支社長命で岡崎亀市支局長のお供をしてタラカンに乗り込んだのは昭和19（1944）年3月下旬だった。ビルマ戦線はこう着状態、ガダルカナル方面では名誉ある転進また転進という時期で、南ボルネオ（カリマンタン）の都市バンジュールマシンのタラカン行きは、離れ小島に流されるように心細かった。

ところが着いてみれば、初めての報道機関とあって島を挙げての大歓迎、特に小松民政部長官（大佐待遇）は報知の元政治部長をしていたとかで、全面的に協力してくれた。おかげで1カ月足らずで官庁街の目抜き通りに「同盟タラカン支局」のカントル（事務所）を開設。水野秀雄オペ

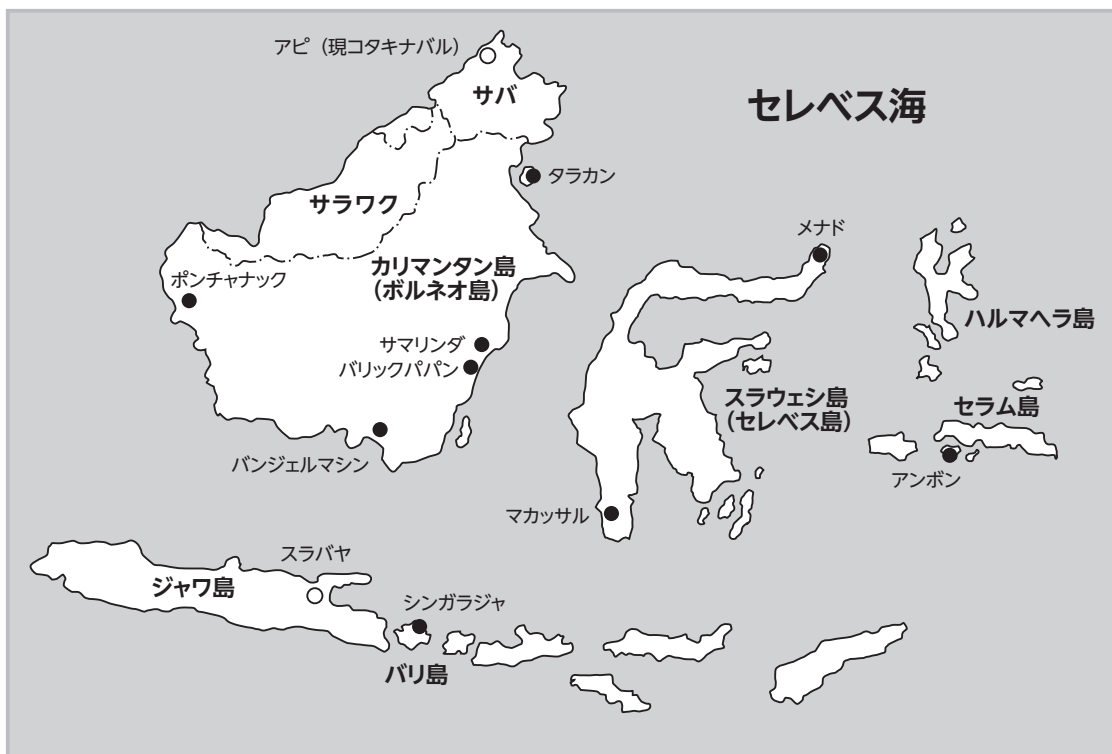
レーターも着任し、邦人3人、現地人4人で1日2回のガリ版通信発行と記事送信を始め、「タラカン発同盟」のニュースは電波に乗ってアジアへ、世界へと流れ出した。

マカッサル海峡の北端、ボルネオ東岸にある小豆島^{しょうどしま}ほどの島には海軍101燃料廠^{しょう}タラカン支廠を主体に警備隊、民政部のほか台湾銀行、東棉、野村殖産など十数社を含め約5千人が在留していた。当時は空襲もなく平和そのもの。夜ともなれば岡崎支局長は、知識の窓をふさいでは南方ボケになると「大英帝国史」を読みふけり、水野オペは超Aクラス、小生はCクラスの麻雀グループにはせ参じる毎日だった。

だがこうした生活も長くは続かなかった。赤いカンナの咲き乱れるのどかな島にも、19年暮れ近くになって空襲の脅威が迫ってきた。年明けとともに30機が50機になり、100機来襲の日が続いた。商店街は焼き尽くされ、海岸に面した丘に林立する石油タンクは焼夷弾の投下で次々に火を噴いた。黒煙は天を覆って終日暮夜のごとく、夜になればぐれんの炎は滝のように丘を流れて海面に注ぎ、文字通り「火の海」となった。こんな凄惨な光景^{せいさん}が幾日も続き、帝国海軍の「燃料基地」は自ら蓄えた油のために燃え尽きるかに思えた。

石田、立川両君がタラカン勤務となって赴任してきたのはこのような時期であった。「おい玉碎しにきたのか」と言う「おお、何でもいい、やりましょう」と力み返った。この期に及んで一体何をやるというのか。ともかくえらく血の気の多い両君の頼もしさが記憶に残っている。

支局員は交代で、防空壕^{ぼうくうごう}掘りや、爆弾でやられた飛行場の修復作業に駆り出された。1ト爆弾を落とされた滑走路の穴を1日がかりで埋めた翌日には、また大穴が開いていた。こんな状況で航空便は絶えて、故国の便りや新聞は来なくなった。船便も途絶えがちで食糧自給体制は強化され、宿舍の芝生は掘り返されてウビカユ（芋の一種）の畑に変わった。



「新聞通信調査会報」第321号 (1989年8月1日発行) より

●は支社局・分室所在地

毎日ジョンゴス(使用人)にひかせていたコーヒーの豆も少なくなった。日毎に厳しくなる生活に追われながらも、通信機の分散や、予備支局の設置など通信を絶やさないためにはみんな真剣だった。

艦砲射撃近しとの情報が流れ出した。海岸の対戦車壕は掘った後から波に洗われていく。それでも海軍さんは掘れと言う。竹やり精神―このばかりしさを口に出せない重苦しい空気の中で支局員の心を支えていたのは「同盟の誇り」ではなかったかと思う。

3月15日、小生はバリックパパン支局勤務となり、マカッサルに緊急出張の岡崎支局長とともに最終船便で水野、石田、立川の3君を残して島を去った。1カ月後に豪州軍がタラカンに上陸、香晴博文海軍大佐のもとで1400人以上が戦死した。かつてこの島からオランダ人を追い払った日本人もまた、3年後にはオランダ人と同じく敗退の運命をたどったわけである。水野君は敵上陸前に民政部とともにボルネオ本島に渡り、支局の最後を見届けた石田、立川両君は敵軍に捕まり終戦を迎えた。以上はおぼろげな記憶をたどっての始末記である。いわば歴史の波間に浮かんだ同盟タラカン支局、それはわずか1年の短命であった。

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

陸海軍の板挟みで苦しんだメナド支局

小栗周二郎 (元同盟通信メナド支局長)

私が支局を開設するためメナドに赴いたのは、昭和18(1943)年の

8月下旬だった。メナドと言えば海軍落下傘部隊²³¹で有名だが、部隊が降下したのはランゴアンという高原の飛行場で、メナドはそこから10^{キロ}以上離れた海岸である。当時の南方旅行者は「メナドは涼しい」と言ったものだが、日本で言えば軽井沢みたいな所に飛行場があったからで、本当のメナドは蒸し暑い所だった。

北セレベス（スラウェシ）の突端にあり、海底電線の中継基地として地図にも載っていたので、相当な都会だと思っただが、行つて見ると、小さな町だった。だが建物は小さいで、小さなデコレーションケーキを眺めるような感じだった。産物はコプラ（ヤシの恵）だけで、ここから船積みしていたらしいが、港がないので船は沖合に停泊したそうである。むしろ、20^{キロ}くらい離れたビートンが天然の良港で、第1次大戦の時、ドイツの巡洋艦エムデンが潜伏していたといわれ、東印度水産という会社がかつお節を製造していたが、こういうわけかオランダ時代から港としては利用されていなかったのである。

最初、単身で行った私は設営に取り掛かったが、同盟は出遅れの形だったので、なかなか支局にすべき建物が見つからなかった。それでも民政部のあつせんで、一番きれいな建物の中央に1室を世話してもらい、事務所だけは片付いた。たった一人の私は、唯一のメナドホテル（オランダ時代にはウィルヘルミナホテルと言った）で後続部隊の到着を待ったが、そのうち河井、池田の両君やオペレーター²³²の西岡君が到着したので支局開設となったのである。事務所は見つかっても、宿舎がないので閉口したが、これも警備隊の好意で解決。次は毎日新聞経営のセレベス新聞が同盟の船舶放送を直接受信していたのを当方の手に移し、そのオペレーター²³³だった水野君は同盟に入社して、その後タラカン支局配置となった。そうこうしているうちに、海軍地域だったここにも、阿南^{あなみ}惟幾^{これが}大將の第2方面軍（陸軍）が進出することになったので、マカッサル支社から富田、

吉田の両君が増援された。

こうして平穏な日が続いたのはわずかな間で、19年3月ごろから北セレベス爆撃が始まり、メナドも壊滅してしまった。形勢悪しと見ると、逃げ足が速いので有名だった陸軍のこと。司令部はすぐに南セレベスに移動したが、このとき、門松参謀は西岡、富田、吉田の3君を報道要員として同行させた。これを黙って承諾した私に対して、海軍側や邦人の一部には「意気地がない」との評判もあつたようだが、「仕方がない」の一点張りで通した。

しかし腹の中では「戦局のヤマは見えているのだから被害は少ないほどよい。残った河井、池田両君には気の毒だが、海軍地域用として開設した支局だから、海軍も商社も残っているのに、つぶしてしまうわけにはいかぬ。陸軍も全部は連れて行けないだし、自分も5人の子供を置いて来ているのだ。目をつぶってもらうより仕方がない」と考えていた。

文字通り廃虚の中で、山かげの空き家に居を構え、現地人才オペレーターを集めて再び通信を発行した時には感謝された。ところが残留陸軍部隊が未教育補充兵を交代で3カ月教育召集したため、池田君は3カ月間ご難に遭った。同じ未教育組でも、私は勘弁してもらったが、毎日新聞支局長の広瀬氏や台湾銀行出張所支配人の山田氏などは2回連続で6カ月の召集を食ったのである。これは陸海軍のあつれきが絡んでいたためである。陸軍側が同盟に好意を持って教育召集に手心を加えたといううわさが立ったので「私は困ったことになった」と思っていた。

ついに最後の日が来た。陸軍が全邦人をシンガポールに集結させる計画だとかで（真偽は分からない）、20年の8月1日に、民政部と電気関係事業の一部を除いて全員が召集されて南下することになった。予備兵長の河井君、3カ月召集の経験を持つ池田君、召集されたことのない私とそろって現地入営となったのである。召集を免除する決定権は海軍側が

握っていたのだが、陸軍側が私に好意的な発言をしたので海軍が反発したと聞いている。

最後の夜、支局の整理を済ませて現地酒で乾杯した際、「戦争は決まっている。どっちに転んでも同じことだ」と私が言ったら、河井、池田の両君も静かにうなずいていた。しかし終戦のため、わずか20日足らずで召集解除となり、その後はビートン地区で抑留生活に入って「日本人は食糧を生産すべし」と、慣れぬ耕作仕事に追われたのである。

以上が簡単な始末記だが、敗戦を目前にした陸海軍のあつれきは深刻なもので、進出商社の人々も板挟みの苦しみをなめていた。

（新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」）

最も危険なアンボン支局

内田啓明（元同盟通信マカッサル支社）

マカッサル支社管内の多くの支局は、戦局が不利になるにつれて、連合軍の激しい攻勢で、生死の間をさまよう危険の日々が続いていた。中でもアンボン支局は最も激しい状況下にあった。同盟通信社が占領地に展開した多くの支局の中でも最も危険で、悲劇に満ちた所であつたろう。

アンボン（あるいはアンボyna）は、インドネシア（当時はオランダ領東インド）の東部、バンダ海にある最大の島、セラム島の南に接する小さな島である。面積は816平方キロ（761平方キロという説も）で、島の中心である港湾都市もアンボンという。この島はチョウジ、ニクズクなどの香料

の特産地である。中世にアジア各地で香料を探し求めていたポルトガルが1512年に発見している。欧州諸国のいわゆる香料戦争の舞台となり、香料の争奪を巡ってイギリスとオランダが攻防を繰り返し、最終的にオランダが支配するようになった。

アンボンは港湾条件に恵まれていることから香料の積み出し港として発展した。大戦中は海軍が主要な軍港として利用、重要な海軍の戦略基地であつた。防衛庁（現防衛省）の太平洋戦争史によると、防衛する陸軍部隊は3万人以上も配置され、ピーク時の陸海軍の総兵力は、合わせて5万人以上上ったという。

支局開設のトップを切って、大獄玄谿支局長、林清（電務）、円谷利夫の3氏が、貨物船で赴任したが、敵潜水艦の魚雷攻撃を受けて大獄、林両氏は気の毒に船と運命を共にされた。

無事生還した円谷氏は、その後バンジャルマシン、次いでポンチャナック支局へ。いったん乗船した安永勝太郎氏は、「君は降りろ」という森元治郎支社長の命令で出航直前に下船し、難を免れた。最近、森さんにその理由を訪ねたら「支社の人手が足りなかったから」と言っておられた。もし人手が十分あつたならば、安永氏はどんな結果に……。人の運命は全く分からない。一寸先は闇である。アンボン支局は、このように悲劇のスタートであつたが、確かな開局の月日もはっきりしていない。

アンボン島では、読売新聞社がセラム新聞を発行していた。同盟の支局は読売や陸海軍部隊にニュースを提供したほか、民政部や公共機関、進出企業にも配信していたが、その数は全く分からない。資料は皆無である。しかも支局に勤務していた11人のうち、3代の支局長や取材記者などが既に6人も他界されている。残る5人のほとんどは消息不明である。これでは調べようがない。活動ぶりは残念ながらすべて不明である。支局を開設した秋山如水初代支局長は、爆撃の激しくなってきた昭和

19(1944)年8月にメダン支局長に転出している。その後任の佐藤武美支局長は、支局が何回も壊滅する猛爆撃を受け、ジャングルを転々としていた。仕度極まる環境であった。支局員とともに終戦まで生きていたのが不思議なくらいである。

〔マカッサル支社局の記録〕 1991年5月発行

米軍上陸で山に逃げる

大橋博(元同盟通信大阪支社経済部主任)

昭和18(1943)年12月、私は2度目の召集を受けた。同盟通信大阪支社外国経済部主任の時だった。陸軍第100師団(原田次郎中将)の独立歩兵第168大隊(片桐広一大佐 第2中隊)に入隊。同月、門司からフィリピンのミンダナオ島ダバオに向かった。

翌19年1月、マニラに寄港。私は同盟マニラ支社を訪問した。渡辺孟次さん(後に共同通信社社長)と再会。皆藤幸蔵支社長(後に時事通信社編集総務)にあいさつした際、出張中の加藤松同盟ダバオ支局長(後に共同通信校閲部長)を紹介された。支局長は「報道班に引っ張るよ」と手を握ってくれた。渡辺さんらに市内を案内され、中華料理をごちそうになった。

マニラを出て、同月下旬ミンダナオ島北端のカガヤン・デオロ港に到着。ミンダナオは島といっても、九州と同じくらいの大島だった。3月初め、私は「ダバオ報道班勤務」を命じられた。師団所属になったわけである。ダバオは西欧文化の香り高い近代都市だった。海のかなた

にサマール島。後ろには比島一の高山、アポ山(2953m)がそびえていた。山裾に見渡す限りの麻畑が広がっていた。明治時代末、邦人が移住して40年。2万人の汗と脂の結晶だった。

報道班(班長・小林国臣中尉)は報道、宣伝を表に掲げてはいたものの、軍と比人のパイプ役を務めながらの情報収集、宣撫工作が主任務。加藤支局長、松尾次勇支局記者も訪ねてきてくれた。私は報道班員として、終戦までの約17カ月間をここで過ごした。

ダバオは19年8月5日夜、米機B25の初空襲を受けた。その時、ビラをまいていった。「I SHALL RETURN」。米極東軍司令官マッカーサー大将の写真入りだった。これが比島への反攻開始を告げるかぶら矢だった。9月10日、ダバオは延べ300に及ぶ米機に猛爆された。市街は全滅、炎上。空襲はその後毎夜のように続いた。住民は山へ逃げた。男は車を引き、牛を追ひ、天びん棒を担いだ。母親は重い風呂敷包みを背負っていた。米、塩、衣類などだった。手を引かれて行く幼児はわあわあ泣いていた。阿鼻叫喚のちまたと化していた。

おまけに、海軍の湾口見張所から「敵機動部隊、ダバオに向かいつつあり。上陸の公算大」との情報。慌てた海軍第32特別根拠地隊(代谷清志中将)も逃げ出し、混乱に拍車を掛けた。しかし、これは誤報だった。世に名高い「ダバオ誤報事件」は、この時の出来事を指す。代谷司令官はもとより、その情報を信じ、作戦を混乱させた第1航空艦隊司令長官寺岡謹平中將も更迭された。

当初、私は邦字紙、英字紙、放送原稿の検閲をしていた。そのうち、小林班長から大衆運動面でのサポートを命じられた。私は班員とともに、軍と住民の仲良し作戦を計画。日比合同大運動会、演芸大会、大ダンスパーティーなどを催した。炎上後、報道班も郊外のカリナンの町に移動。洋裁店の2階を借りて活動を再開した。ダバオ新聞など報道関係者も近

くに集まった。同盟の受信機は農家の防空壕^{ごう}に入れ、マニラ支社などとの交信を続けた。

陣中新聞「必勝」を発行

レイテ戦²³²が終わり、20年3月にはマニラも陥落した。「次はダバオ」と予測。私は「陣中新聞」を作る決心をした。師団参謀長・服部宗一朗大佐の許可もとった。題字は「必勝」。同盟の三宅敬オペレーターが東京ニュースを、私がサンフランシスコ、モスクワ、重慶¹¹⁸放送などを聞き、紙面を作った。

わずか2³²日、隔日刊。だが、「ルーズベルト米大統領死亡」連合軍、桑港²³³(サンフランシスコ)会議開催「独宣伝相が(悲愴な)声明」「欧州戦終局」など、特大ニュースで紙面を飾ることもしばしばだった。

そんなさなかの4月、同盟の斉藤桂助セブ支局長が突然現れた。私は一瞬、亡霊ではないかと思った。古オーバーを引っ掛け、汚い袋をぶら下げ「やつ、大橋君、酒を頼む」。3月セブ島を脱出。米機に追われながら、丸木舟で風まかせの旅を1カ月近く続け、カガヤン港に。それからミンダナオ島200²³⁴キロを縦断し、やっと到着したのだという。奇跡としか言いようがなかった。私は老酒で慰めた。彼は言った。「レイテの敗走、セブの断末魔のうめき。ミンダナオの避難住民らの大混乱。日本敗るの日は近い。戦争準備なんかどうでもよい。逃げろ、逃げろ。塩と米と糠^{ぬか}を持ってな」。私は彼を報道班に缶詰めにした。憲兵に警戒されると考えたからだ。

20年4月19日、米軍はついにミンダナオに上陸した。ダバオから西方250²³⁵キロのコタバトだった。空母1、巡洋艦2、駆逐艦5、6に陸軍1個師団の大機動部隊。私は直ちにサンフランシスコ放送の情報を司令部

に連絡した。軍はがぜん緊張したが、報道は厳禁された。第30師団²³⁶(両角^{さみぎょう}製作中)将²³⁷が守備していたが、一戦も交えず、山に逃げ込んだ。報道班もカリナンからさらに奥の「水車小屋」に移動。もうこれ以上伏せられないと、私は独断で米軍上陸を報じた。

邦人、比人らの混乱は極限に達した。女、子供は晴れ着を持ち出したり、紙くず同然となった軍票を腰いっぱい²³⁸に巻き付けたり。そんな人たちに「食糧と薬だけ持って逃げるんだ」と説得するのは辛かった。牛車に食糧、寝具などを積み、その上に幼児を乗せた幌牛車隊はとにかく出発。だが、行き先のあてはなかった。

米軍、ダバオ正面に

5月1日、米軍はダバオ正面に現れた。わが師団との戦闘が始まった。同日は「ヒトラー独総統戦死」²³⁹の特報も。「欧州戦は終わった。こちらも終局に向かおう。無駄死にするなよ」との思いが募り、特報を一刻も早く前線にと焦った。

ダバオ前線の戦いは激しかったが、日本軍は後退するばかりだった。「この辺で総攻撃を」と原田師団長は逸^はった。だが、服部参謀長は「まだ、まだです」。もうすぐ戦争は終わる、犠牲者を最小限に、との配慮によるものだった。

前線の統制は一度崩れだしたら速い。敗走兵らはジャングルに逃げ込んだ。だが、食糧はない。7月初め、兵1人が殺され、食糧が奪われた。婦女子も狙われ、泣きながら非道を訴えて歩いてた。今日は10人殺され、明日は100人になるかもしれないとの恐怖が走った。

新聞を届ける先もなくなり、報道班も後退した。海軍にもらった米で、細々と生命をつないだ。山を越え、谷を渡り、同盟の洞窟にたどり着い

たのは15人。5人が行方不明になっていた。米機が落とすビラには「比島を完全制圧」、サンフランシスコ放送も「延べ二千数百機で、全国の都市を爆撃」。

竹筒に入れて運んだガソリンも尽き、放送さえ聞けなくなった。石油缶に水を入れ、イモの葉、トマトの葉、イヌビユなどの草を放り込んだ。それにひと握りの米を加えた雑炊。いや、草汁を飲んだ。あくで、どす黒かった。腹が減るので、草取り、まき拾い以外ひたすら寝ていた。そんな時、斉藤支局長が叫んだ。「食糧を出し合い、腹いっぱい食おうじゃないか」。みんな、それが何を意味するか分かった。「これ以上の団体行動は無理」と小林班長は班の解散を宣した。

20年7月15日、「短気を起こすなよ」と互いに手を握り、散った。私は同盟の4人と別れた。班員2人と山を下りた。終戦を知ったのは8月20日。再び山に入り、このことを知らせて歩いた。9月14日投降。ダリアオン収容所に入れられた。同盟の4人も生き延びていた。

ミンダナオ戦では、1万5千人(うち邦人5千人)を超す戦死者が出た。収容所入りしてからも、さらに1万人余り(同4千人)が死んだ。栄養失調、マラリアによるものだった。

(新聞通信調査会報「第487号 2003年5月1日発行」)

飛行機で連続3度の命拾い

大平安孝(元同盟通信編集局次長)

太平洋戦争も昭和18(1943)年に入ると、日本は迫られる立場になった。前線にいる同盟通信社員にも焦りの色が見え始めた。マニラ、アンボン、ニューギニア、ラバウル方面は、戦局も激烈で苦勞が多いのに、慰問に出る人がとんとない。あれやこれやで、結局前線に人を出した責任者の私にお鉢が回ってきた。

19年3月、塚本松哉機長の操縦する同盟機でマニラに飛んだ。同乗者は西村楽天他2名で、マニラでこの3人と別れ、ダバオ、アンボンを経てニューギニアの北側に接するマノクワリ島に向かう。空襲の合間をぬってホーランジャに行き、ラバウルに届ける無線機を軍に託し、マノクワリで給油の上、さらにニューギニア西部のパビ飛行場に向かうのだが、ここで氷壁のような積乱雲が前面いっぱい立ちふさがり、どうしてもパビに入ることができない。やむなく、マノクワリに引き返したのであるが、進行が東に向かうので、日足がぐんぐん短くなり、とつぷり日が暮れてしまった。もはや、島のありかさえ見定めることが困難になった。飛行場に夜間飛行の準備を頼んでも応答がない。何とも、心さびしい限りである。

ところが、全く不思議な現象と言える。かすかに、マノクワリ島らしい島が、あかあかと灯をともして眼前に見えた。命の綱をつかんだ思いで、乗機は翼の一部を破損しただけで、どうにか無事着陸した。後で聞くと、灯をとしたのは、爆撃に出た飛行機のうち未還機が1機あったため、そのお陰で命を救われたのであった。

翼を修理し、ハルマヘラ島南部のガレラ飛行場に引き返した。同飛行場では、アンボン支局長の秋山如水君が支局長と出迎えてくれた。かれは、妙に私の足ばかり見つめている。「どうしたんだ」というと、「本社から大平機が消息を絶った。生死のほどを調査せよという指令がきている」という。「足があるところを見ると、どうやら幽霊ではなさそうだ」と大笑いしたものである。

メナドで温泉につかり、ダバオで加藤松支局長からヤシの実で作ったというウイスキーやマンゴー、ドリアンなどもらってマニラに帰った。その翌日、私は2度目の命拾いをした。マニラ飛行場を飛び出す直前、私の乗機が火を噴いて大破してしまった。ここの滑走路は傾斜していて、事故がしばしばという。せっかく、内地へのみやげに買い込んだウイスキーも、果物も、前もって積んでいたのでみんな持ち帰れなくなった。けれども、私は幸いけが一つしない。

さて、マニラから台北にきて1泊。台北から福岡を経て、正午には東京に着く予定である。「二度あることは三度」というが、その3度目は日本内地であった。大井川の河口近くにさしかかると、突然、棚に積んでいた荷物が音をたてて落下した。驚いて機長に近づくと「片翼が動かなくなった。SOSです」という。ひやりとする。しかし、これもどうやら大井飛行場に不時着で、3度目の命を拾うことができた。私はこの連続3度の命拾いで、飛行機が嫌になった。大井飛行場からトラック便で金谷に出て、そこから汽車で悠々と帰京したのである。

〔新聞通信調査会報〕第39号 1966年3月1日発行

敵の魚雷攻撃を同盟機から目撃

小林修三(元同盟通信写真部)

よく晴れた朝だった。昭和19(1944)年8月のマニラは焼けつくような暑さだ。K支社長の見送りを受けてクラーク飛行場を飛び立った同盟機はエンジンも軽く、針路を南へ、南へと進む。確か正午近くだったと記憶する。南の海はあくまで青く、波も静かだった。

ミンドロ島が左に見え始めた時だ。静かな海面に突然閃光(はんこう)のような白線が一本、ものすごい速さで進むのを見てハッとした時は既に、ミンドロ島寄りに進んでいた日本の船団がごう音とともに撃沈されていた。右からまた左から、それはまさに一瞬の出来事であった。

同盟機のT機長はすかさず機を下げ旋回すること数回、機が右に回れば左からまた一本魚雷攻撃が続く。左に機を回せば右からと、またたぐ間に数隻の日本船が撃沈された。

悲しいかな同盟機には爆弾がない。波間に漂う日本船員のブイにつかまる姿が手に取るように見える。海上すれすれ。機は50呎の超低空。今まで静かだった南の海は瞬時にして修羅場と化し、戦争の惨めさを目の前に見せつけられた。

〔共同通信社友会会報〕第15号 1974年4月15日発行

2カ月の命だったパラオ支局

多田貞二郎（元同盟通信社パラオ支局長）

どうしたわけか、内南洋²³⁴唯一のパラオ支局のことが『通信社史』に載っていない。私はその責任者として、同志諸君に知ってもらい、一緒に苦闘した支局員のためにも始末記を書かなければならないと思い、拙い筆をとった。

ニミッツ軍（米太平洋艦隊）の中部太平洋進攻作戦がどんどん進み、日本海軍から「太平洋の防波堤はグアム、サイパン、テニアン、ヤップ、パラオの線である。これを失えば、本土の防衛はもうどうにもならない」と言われ始めたころの昭和19（1944）年3月。当時通信部長だった福井輝三²³⁵さんから「今度、南洋群島に支局を作ることになり、まず君に行ってもらったことになった。米軍が攻めて来るのは目の前だ。大陸や表南洋とは違い、まず生きては帰れまいから、そのつもりで行ってくれたまえ！」という話。

そして後続部隊として、誰と誰を後から送るから、取りあえずサイパンに行き、「南洋毎日」と通信契約をした上で、コロール島²³⁶原注Ⅱ当時南洋庁の所在地で海軍30根Ⅱ第30根拠地隊Ⅱ司令部、海軍武官府などがあつた）に行き、パラオ支局を作るようにという命令だった。

4月中旬、横浜基地から2式大艇に乗って赴任の途に就いた。横浜上空を旋回すること2度、3度、桃か桜の花が真つ盛りだったことを覚えていた。朝靄^{あさぐも}をついて飛び立った大艇が、硫黄島付近で方向を変更したことに気がついたのが、昼食の弁当を渡されたとき。操縦士席下の長い海軍毛布を2枚かぶって寝ながら話し合っていた若い陸軍少尉と

2人で、弁当配給係の海軍さんに質問すると「今サイパンが空襲中で、飛行艇は基地へ引き返している」という。幸先の悪いこと、自分の前途に暗い影が差しているような気分になった。この日夕方、二度と来られないと思っていた編集局へ、小さなリュックを担いで私が姿を現すと、先輩や友人たちが幽霊でも見るような目で、私の顔を見ていた。

それから2、3日後、南洋庁長官の細萱^{ほそがや}戊子郎^{ぼしろう}海軍中将らと一緒にサイパンに着水したが、この年の正月以来、度重なる米軍の空襲でサイパンの港や街はもう大変な姿だった。いきなり第一線に來たという感じが、私の胸を引き締めた。5根（第5根拠地隊）司令部は小高い丘の上に、こざっぱりした建物の片鱗をしのばせてくれたが、空襲の跡は隠しようもなかった。受付の下士官も将校も気負い立っている様子が、内地から今着いた私には、びんびんと響くように感じられた。

料理屋は軍人でいっぱい

住民は大部分が数力所に集められ、街には軍人以外は人影がまばら。それでも夜になれば森の中のバラック建ての料理屋には女も酒もあった。しかもそれが軍人さんでいっぱい、三味線の音も聞こえるというありさま。人間、死ということを考えると、やはり酒と女に走るのが通有性らしい。南拓²³⁸の売店に入っても、もう売る品物はほとんどなく、砂糖をたっぷり入れた甘水がコップ一杯10銭だった。内地ではこの甘味にもすっかりごぶさたしていただけに、これは安いと何杯もお代わりをした。「南洋毎日」の岡本専務に会ってはみたが、いつ米軍が上陸作戦を開始するか分からず、毎日のように空襲の脅威にさらされている状態では、ちよつと通信契約は難しい、ということになった。本社にいて計画されている幹部諸公の考えと、第一線の生々しい現実を見た私の考えとは、

だいぶ大きな開きができてしまったことはやむを得ない現実であった。

街は軍人であふれ、港は船団からの資材揚陸でこった返すサイパン島を足にまかせて回ってみた。道路だけは実に立派だ。ただしこれも軍用第一、小型機なら道路上に離着陸できるほどのものである。サイパン神社から見下ろすと軍艦島を中心として、大小の船が港いっぱいになりを下ろし、揚陸に懸命になっている様子がよく見える。船から降ろした資材を陸軍の兵隊さんが陸続としてダポチョ山の下へ運んでいた。スッペ飛行場、南北ガラパンの街、ダポチョ山など、これが四十余日後には天下分け目の戦場になってしまったのだ。

コロールに支局開設

4月25日朝、川西大艇でサイパンからコロールに飛んだ。翌26日、30根司令部に司令官伊藤賢三中将を訪ね、古野伊之助社長からの贈り物「富岳」の引き伸ばし写真と、タバコ「光」(のような気がする)を渡してから支局設置にかかった。この島には「南洋新報」があり、通信契約を結べという命令だったので、まず陸海軍司令部、南洋庁の了解を得て、月額社費金2千円ということで話し合いがついた。

本社への連絡はすべて、セレベス島と横浜の間を飛んでいる川西大艇か2式で内地へ帰る軍人を利用するより方法がない。この頃、コロールは時々、米軍大型機の空襲を受けるようになっていた。本社で約束してきた後続部隊など、こんな危険なところへよこすはずがないことも分かった。南洋新報から5人の社員を譲り受けて支局開設をするより方法がなくなった。その5人の待遇も本社で手間取ったが、結局人事部長の船木(重光)さんからの電報(この時はまだ通じていた)で次のようなメンバーが決まった。

山崎晴茂君(現在共同通信宮崎支局勤務)と加藤保君(三重県度会郡出身)が無電係で社員。窪川秀雄君(終戦後、遺族は千葉市にいらっしやると聞いた)と丸山君(どうしても名前を思い出せない。秋田県八森に遺族がおられると聞く)が電訳係で嘱託。比嘉憲章君(沖縄出身)が無電係助手で准社員。

設立開業したのは昭和19年5月15日。支局は「南洋新報」の裏で、海軍軍需部のそば。支局も無電機も「南洋新報」のものをそっくり譲り受けた。この代金が大枚金2千円。東京を出る時、友人や先輩に「多田君この際だ。1万円もらっていけよ」と注意されたのに、経理部長の上村(藤吉)さんは「あんまり持ちつけないものは持つなよ。後から送金してやるから」と渡された金が金2千円。それでも後から金2千円が電報為替で送られてきた。検見川から送信される国内同報無線を受信して南洋新報へ、重要なものは陸海軍司令部や南洋長官へというのがその任務だった。

設立後1カ月もたたないのにもう6月12日、サイパンに米軍来襲という騒ぎ。サイパンとコロールの間はグラマン戦闘機なら約2時間足らずの距離だ。コロール島も空襲また空襲というありさまである。馬力のある山崎君が無線機を担いで支局のそばの防空壕へ駆け込み、米機が去るまで全員無線機を囲んで、今の時間は本社からどんなニュースを送っているだろうかと心配していた。

7月16日には早くもサイパン島陥落。25日から27日まで米機動部隊のパラオ群島大空襲があり、新聞社も支局も木っ端みじんになってしまった。戦時中、最も短命の支局だったろう。この直前の7月21日、巡洋艦「名取」が入港した。加藤君の夫人と窪川君の夫人と長男をこれに乗せてこの島を離れさせたので、この空襲に遭わずに済んだが、山崎君のお父さんは22日に病死された。遺体は空襲の合間をみて埋葬した。こうした大混乱の中では医師の手当てでもできないし、思うような栄養物も差し

上げられなかっただけに、今もって痛恨の思いに胸が痛む。

もはや新聞の発行もできなくなり、海軍通信隊の地下壕に預けた無線機で本社との国内通報を受信してはガリ版を切り、陸海軍と南洋庁へ納入していた。こんなことではと、陸海司令部に出頭して、大本営を通して同盟本社へ支局員の処置について問い合わせてもらった結果、「フィリピン方面支局強化の必要あり。同地方へ転進せよ」という返事をもらうことができた。

海軍の参謀長は支局長を除いた全員をフィリピンへ転進させることに賛成してくれたが、陸軍の参謀長は支局長のほか無線係1名をどうしても残せという。一晩考えた結果、近いうちにこの島に「米軍上陸必至」という軍の見通しを前提として、最後まで元気で一緒に働いてもらうにはファイトがあり、しかも頑健な山崎君に白羽の矢を立てた。この時の私の気持ちは、この島に残れば十中の十は戦死ということになるが、フィリピンへ退避させれば九死に一生の可能性があると思ったからだ。

8月18日、丸山、窪川、加藤3君は、マラカル港に突然入港した巡洋艦「名取」と駆逐艦2隻のうちの「時雨」に便乗して、コロール島を離れていった。その前に比嘉君には赤紙が来て召集され、私たちの助手として兵隊のままもらいたいと情報参謀に頼んでみたが、もう離島ペリリュー島へ運ばれていった後で間に合わず、結局支局に残った者は、私と山崎君だけとなった。3君がコロール島を脱出するときに、これまでの一切の経過報告とともに、同盟通信の旗の下に戦死する覚悟で「古野社長万歳」の文書を持たせてやった。駆逐艦「時雨」がセブ島に着き、3君が斉藤桂助支局長の麾下に入り、万歳報告が同支局長の手で本社に送られたということや、セブ島からルソン島へ転進の途中、船が米軍の魚雷にやられて3君のうち丸山、窪川両君が戦死したことなどは、終戦後、山崎君と内地へ帰ってから初めて知った。

8月25日から米軍4発大型機大編隊によるじゅうたん爆撃が始まり、次々と機動部隊が来襲し、9月15日にはパラオ群島内、アンガウル、ペリリュー両島に米軍大部隊の上陸作戦が開始された。9月2日、私と山崎君は連日のじゅうたん爆撃を逃れてパラオ本島へ退避した。最高司令官も陸軍の井上貞衛中將となり、その司令部に無線機を据えつけて、情報集めに大わらわとなった。この頃にはもう交流受信機は駄目になり、直流受信機も故障また故障といった案配で、やむなく軍から地1号無線機をもらったが、これでは同盟本社からの国内通報は受信できないので、東京からの海外放送やモスクワ、ニューデリー、ハワイ、メルボルンなどの日本語放送を受信して情報を集めた。

10月1日、最後の電報

司令部と一緒に、ジャングルの中を2回、3回と移動もした。ちょうど米軍上陸当時は雨が多くて、何もかもびしょぬれ、下痢は続くし食べるものもだんだん少なくなるし、艦砲射撃や空襲も激しくなるばかり。パラオ支局から本社に打った戦況の電報は10月1日が最初で最後となった。設立後75日で、同盟通信パラオ支局は表面上消えてなくなったわけである。

10月中にアンガウル島が、また11月にはペリリュー島も陥落し、米空軍機は指揮の間にあるパラオ本島上空へ休みなく飛来するようになった。その下で山崎君と私は情報集めを続け、「南洋新報」「同盟ニュース」「鶏瑞」「みそぎ」と題号は三転四転したが、陣中新聞のためにニュースを書き続けた。食うものもなく、野ネズミやヘビを捕らえることに上達し、どのくらい食ったことだろうか。大人の腕以上もあるウナギを、ねずみのはらわで釣ったこともあり、ウナギだと思ってヘビを手づかみ

にしようとしたこともある。ジャングル内で生えているキノコは、ニガ味の強いものはほとんど食ったといっているし、カタツムリ(パラオのものは内地のもの5倍から10倍も大きい)、ビンロウ樹の実、マングローブの実、今思い出してもおっかない話だが、名も分からない野草も片っ端から採って食った。

戦局はパラオからフィリピン、硫黄島、沖縄と進み、結局米軍はパラオ本島を見捨てて日本本土へ急進したため、私たちは助かったことになる。

終戦の年の12月28日夕、栄養失調の山崎君と私は、夏の服装で共同通信の編集局へ帰ってきた。大平(安孝)さん、船木(重光)さん、田中(正太郎)さんなどに帰国報告をして、内南洋の島々の惨状を話したのを現在政治部にいる結束(博治)さんがニュースにまとめてくれ、全国に流してくれた。その後、地下室で田中勇さんにもらって食べた大豆入りのどんぶり飯のうまかったこと。帰還船上で雪をかぶった富士山を見たときの感激と、この田中給与の飯だけは今でも忘れられない。

昭和38(1963)年記

(新聞通信調査会記録集「報道報国の旗の下に」)

心強かった同盟の海外総支局

小泉辰雄(元同盟通信名古屋支社)

軍隊では、どこに行っても同盟があった。私の軍隊生活は、昭和16(1

94)年1月から5年半で、場所は東京、華北(北京、太原^{たいげい})、ラバウル。転出先には必ず同盟の総局か支局があり、どれだけ心強かったことか。暇を見つけては訪ねて行った。

北京では名古屋支社時代の先輩の栗田さん、太原では大塚さん、藤田さん。太原から南へ4、5日間、出向いたとき路安の町で同盟の看板を発見した。和田さんがおられた。

ラバウルでは何代かの支局長にお会いした。荒尾、佐藤、浜田。一番長くおつき合いしたのは、戦況が極度に悪くなったため、敗戦時まで釘づけになってしまわれた浜田さんであった。浜田さんはそのころ、もうあまり仕事がなく、朝、毎、読の特派員と交代でガリ版刷り2ページの陣中新聞の編集をされていた程度であった。お互いによく往き来したものである。当時はほかに通信の三浦さん、車両の河合さんがおられた。

萩原忠三先輩が南方視察の途次、ラバウルに見えたことがあった。それから私とは同期(昭和15年入社)の福島君も。福島君来たるのニュースを耳にした私は支局へ飛んで行き一夜、語り合った。21年6月、ラバウルから復員船で帰国した。上陸地は私の入隊前の勤務地、名古屋だった。残念なのは福島君がニューギニアで亡くなり、ラバウルでは頑健そうであった浜田さんもまたマラリアで身体を悪くされたためか帰国後、まもなく亡くなられたことである。

(新聞通信調査会報「第320号 1989年7月1日発行」)

グアム島玉砕戦従軍記〜ジャングル彷徨の末捕虜に

高橋義樹（元同盟通信社会部）

戦後明らかにされたところによると、アメリカの統合参謀本部は、1944（昭和19）年の3月12日に、同年6月15日を期し、サイパン、テニアン、グアム3島の占領を開始することを決定していたという。3月12日といえば、当時同盟通信の社会部記者だった私が、同僚の写真部員、日野晴雄とともに第5根拠地隊付の海軍報道班員として、その司令部のあったサイパン島へ着任してから8日目のことである。

もちろん、そのころ私たちはアメリカ側がそういう決定をしたことを知る由もなかった、3カ月後に米軍がサイパン島に上陸するとは想像もしていなかった。それどころか、連合艦隊も、次期決戦海面をパラオ諸島ないし西カロリン群島方面と想定し、この方面の海域に敵の大機動部隊を誘出して一大決戦を試みよう、この年の5月3日に例の「あ号作戦」計画を発令し、小沢治三郎中将旗下の第1機動艦隊をフィリピン南部に待機させるとともに基地航空部隊の大部分をパラオ、フィリピン方面へ集中し始めたのである。

ところで、私と日野は、サイパン島で3カ月近く仕事を続けたのち、5月27日に新しい取材対象を求めてグアム島に移動した。グアム島に新設された第2飛行場（現在のアガナ国際空港の原型）に、「銀河」という最新鋭の雷爆両用陸上攻撃機を持つ鵬部隊という航空隊（第521海軍航空隊）が来着したが、この銀河機は、来たるべき敵機動部隊来襲に際しては、敵空母全滅という大戦果を収めるであろうといううわさを耳にしたからである。

なるほど、第2飛行場には銀河機が40機ばかり翼を連ねていた。その銀河機の大半がそのうちグアム島から姿を消した。連合艦隊が「あ号作戦」計画を立てたため、パラオ諸島のペリリュー基地その他へ移動して行ったのである。実を言うと、私たちが「あ号作戦」計画なるものの実態を知ったのもその頃のことだった。

ところが、この「あ号作戦」は裏目に出た。アメリカ側は予定どおり6月15日を期してサイパン、テニアン、グアム3島の占領を開始すべく、当時、マーシャル群島のマジュロ環礁に待機させていた制式、特設空母合わせて15隻を基幹とするスプルアンズ提督旗下の巨大な機動部隊をマリアナ方面へ繰り出したのだ。

6月11日から、がら空き同然のマリアナ群島の各島は激しい空襲を受け、13日からはサイパン、テニアン両島に対する艦砲射撃も始まり、15日にはついにサイパン島への米軍上陸開始となった。

こうなると連合艦隊も拱手傍観するわけにいかず、6月15日、司令長官豊田副武大将は「あ号作戦」の決戦発動を令するとともに、旗艦「大淀」にZ旗を掲げ「皇国の興廃この一戦にあり…」の電波を全軍に発したのであった。

そして、フィリピン南部にあった小沢中将の第1機動艦隊をマリアナ方面に出動させ、米機動部隊に決戦を挑んだのだが、この結果は、6月19日におけるマリアナ沖海戦となり、そこでも無残な敗北となった。ほとんど戦果らしいものを上げられずに制式空母の「大鳳」（旗艦）と「翔鶴」、特設空母の「飛鷹」を敵潜水艦に撃沈され、ほうほうの体で逃げ帰ったのである。

潜水艦浮上せず

この間にもサイパン島の死闘は続き、この島はやがて7月7日に玉碎となる。この頃から私たちのいたグアム島に対する敵艦からの砲撃も激しくなり、7月21日早朝、米軍は2方面からグアム島にも上陸した。私たちはその直前、航空隊搭乗員約130人とともに潜水艦（伊45号）でこの島を脱出しようと、横井庄一さん出現でにわかになつたタロホホ川の流れ込む入り江で約1週間、潜水艦の浮上を待っていたが、敵の警戒嚴重で同艦は浮上できず、結局、島の将兵と運命を共にすることとなる。この時、グアム島には私と日野のほか、大塚某というラバウル帰りの海軍報道班員（ニュース映画カメラマン）もいた。

さて、米軍上陸後、陸海合わせて約1万9千の日本軍守備隊の最高指揮官小畑英良中将（陸軍第31軍司令官）は、7月25日夜を期して一挙に米軍を殲滅（せんめつ）しようと、主力をアガナ（ハガニヤ）の西方にあるマンガン山という高地付近に集結し、総攻撃を行ったが、その結果は主力8割を失うという惨敗であった。

残存部隊は約2500。これは大本營の指示に基づいて島の北方へ転進することになり、私たち3人の報道班員も7月28日夜、敗走の強行軍に移ったが、北方のある地点で民間人約300人の集団と合流、やがては島の北東端、パティ岬まで追いつめられる。そして、ここで自決か突撃かの関頭（かんとう）に立たされたが、部隊指揮官某陸軍中尉に「報道任務遂行」を理由に単独行動を願ひ出て許可され、ジャングルでの持久戦に入った。それは又木山という高地で、小畑司令官が自決した8月11日（グアム島玉碎日）の確か2日前であった。

しかし、私たちは単独行動に移ったものの、それからのジャングル生活は筆紙（ひっし）に尽くしがたい苦難の連続で、雨と飢渴（きかつ）と病魔と絶望との戦い

である。そのため絶望度が一番強く、あきらめの早かつた日野晴雄がまず脱落した。彼はかつて大陸の戦野で現役兵として戦った経歴があっただけに、最後は一兵卒としての気持ちが強くなり、手榴弾（しゅりゅうだん）による自決を主張し、私にもそれを勧めたが、私はそれに従うことができなかった。というよりも、私は何とか日野に死を思いとどまらせようと、最後には私自身の日本国の将来についての漠然たる見通しに基づいて「捕虜になつても生きよう」と説得を試みたが、日野の気持ちを变えさせることは難しかった。結局、私と大塚は日野と別れた。

私と大塚はジャングル彷徨（ほうこう）の末、とある糧食地帯を見つけ、その間に加わった3人の軍属たちと共同生活を始めた。それも、ある日突然敵襲を受けて、私は一人で命からがら逃げ延びた。その結果、大塚とも離れ離れになってしまう。

その後、私はまったくの孤独に陥り、敗残兵たちの周辺に起居して一人で食糧漁り続けたのだが、そのころから体力ががたんと落ち、そのうち極度の栄養失調から歩行もほとんど困難となり、このままではジャングルの中で野垂れ死にという最悪の状態に追い込まれた。

そこでイチカバチかという気になり、米兵が毎日パトロールする地域へ出て、ある小屋の中に入り、運よく産みつけてあった鶏の卵三つを食べて寝そべっていた。すると、ものの5分とたたぬうちに偶然にも小屋の入り口から顔を出した米兵に「出てこい」と手招きされたので、外に出たところ、約10人の米兵にライフルを突きつけられ、そのまま捕虜になった。この年の10月14日のことである。

（新聞通信調査会報」第113号 1972年5月1日発行）

ミッドウェー敗戦の衝撃

岡崎亀市(元同盟通信パンジェルマシン支局長)

ミッドウェー海戦が太平洋戦争の一転期になった。私が報道班員として従軍したのは、幸い機動部隊の主力ではなく、ミッドウェー攻略隊だったので命拾いをした。「赤城」「加賀」「蒼竜」「飛竜」など空母がアメリカ急降下爆撃隊の奇襲を受けて全滅したため、あと1日で泊地に進入する近接海域まで来ていた攻略隊輸送船団は、反転しても、占領中のグアム島に逃れることができたからである。

私が従軍したのは一木支隊という北海道の部隊で総兵力約2千、ミッドウェー諸島のイースタン島攻略が使命だった。部隊長は一木清直という五十の坂を越した陸軍大佐だが、なかなか厳格な人で陸海攻略隊の集結地サイパン島で、深夜の敵前上陸演習をやったときなど、重武装の兵隊が輸送船から縄バシゴを伝って母艇に移乗するのにまごまごすると、「兵の1人や2人は突き落としてもかまわん」と怒鳴りつけ奮起させるほどであった。

報道班は私のほか、同僚の佐久間君とカメラマン1人、通訳2人で、船を分けて乗り組ませ、1組がやられても予備を残しておくよう配慮した。太平洋のご真ん中で敵前上陸するのだから、生死は半々と覚悟していたが、サイパンで海軍特別陸戦隊を乗せていた「ブラジル丸」を訪問したとき、船倉に白木の箱がぎっしり詰まっているのを見て「これだけ用意がしてある、とても生きては帰れまい」と観念したものだ。それからちょうど30年になる。

「敗戦記は1行も書くな」

昭和17(1942)年5月18日、宇品^{うじな}から輸送船「善洋丸」(6000ト)に乗り組み、サイパンを経てミッドウェーに向かったが、6月5日の海戦でわが機動隊主力は一敗地にまみれ、報道班員も、「敗戦記は一行も書くことならぬ」と厳命された。この30年間、それを守ってきたのだから、同盟記者も忠実なもので、横井庄一伍長がグアム島に28年間生きていた実感を想起させる。

私たちの輸送船団がサイパンを出たのは5月28日(水)晴れ。船団12隻、2列縦列にならび、最先頭に護衛艦隊旗艦の巡洋艦「神通」^{じんつう}がいた。「神通」の左右に8隻の駆逐艦が展開して船団の前方を囲むように護衛、2列縦列の船団先頭に1隻ずつの嚮導艦^{きやうどうかん}がついた。そして船団後尾に2隻のタンカーが従い、水上機母艦2隻も左右に展開して厳重な警戒航行ぶりだった。

東方のミッドウェーを目指すのに、船団は逆方向の西に向かったり、しばらくすると南下してロタ島を望見できる辺りまで進み、やがて東へ、そして北東へジグザグコースをとって敵潜水艦来襲に備えた。昼間は天気晴朗で、6月5日の海戦当時まで穏やかな航海だった。私はたびたび一木支隊長や山内豊秋という若い参謀を船室に訪ねて雑談したり、作戦概要を聞き出すのに懸命だった。当時の私の印象では、ミッドウェー守備の米軍を、わが攻略隊司令部は「せいぜい蒋介石旗下の兵隊ぐらい」にしか評価しておらず、「上陸したら海辺でウミガメの大きいのを捕獲し、生物学に熱心な天皇に献上するのだ」などとのんき千万なことを言っていた。

それでも海戦当日までの9日間、深夜灯火管制下の真っ暗な船内で総員乗艇の敵前上陸演習をやったり、軍装検査や将校団の兵棋研究会など

があり、結構忙しい毎日だった。ことに敵潜、敵機の哨戒には神経をすり減らした。

船団がウェーキ島北方400^{ツツ}の海上を通過したのは6月3日(水)晴れ、正午ごろで海戦の3日前になる。このころからどうやら戦雲急を告げる気配で、連合艦隊からの情報もしきりであった。艦載機の偵察によると、ミッドウェーの守備はなかなか厳重で、空陸海の哨戒も間断なく行われているという。はるか北方で敵潜1隻撃沈というニュースも入ってきた。

「ミッドウェー上陸もいよいよ2日後の深夜に敢行」という情報をつかみ、カメラや鉛筆、原稿用紙などひとまとめにして頭にくくりつけ、いつでも舟艇から浅瀬に飛び込めるような準備をした。将校団は、私たちを「しっかり頼みますよ」と励ましてくれる。船倉にぎっしり詰め込まれていた若い現役兵たちにも、加給酒が出た。みんな大変なはしゃぎようで、中には裸踊りを始めるものもいて、まことにぎやかな一夜であった。

明けて6月4日、朝食後ブリッジに上がると、中井船長以下幕僚たちがしきりに双眼鏡を手にしてあわただしい情景を呈していた。

やがて護衛艦隊から「敵機発見」の発煙信号が出た。電波の発信が禁じられ、旗艦「神通」は、「午前6時25分、船団は敵偵察機に発見せられたり。本日午後敵機の空襲算大なり。対空警戒を厳にせよ」と手旗信号を送ってきた。

正午前から全員が戦闘配置につき、水上機母艦「千歳」からは4機が飛び立って警戒にあたったが、9機編隊のB17がやってきたのは午後3時半だった。太平洋上はすでに落日間近で船団の後方には夕陽がまぶしいほど輝いていた。敵機はその夕陽を背にして船団に襲いかかり、護衛艦隊や私たちの輸送船からつるべ打ちに打ち上げる高射砲の弾幕のはる

か上から盛んに爆弾を投下してくる。ひとつも命中しなかった。彼我の激しい戦闘は20分で終わり、一同ホッとした。しかし、同夜11時半には夜襲があり、清澄丸は機銃掃射を、タンカーのあけぼの丸は空中魚雷を受けて数人の戦死者を出した。私は一木支隊長と山内参謀から戦況の展望を聞いた。司令部の見解はこうだった。

「船団は敵に発見されたから、やがて敵艦隊の迎撃に遭うかもしれない。そうすれば、北方コースを東進中のわが機動部隊の好餌^{こうじ}となって思うツボだ、攻略隊はオトリの役を果たすことになる」

しかし、これは誤算だった。「ミッドウェー島北方において敵有力艦隊を攻撃中」という連合艦隊からの情報が入ったのは6月5日午前11時ごろで、その時すでに米陸海空軍各部隊が全力をあげてわが空母と戦艦に空中攻撃を加え、未曾有の激戦が展開された後であった。

甲板でストーム

私たちの船団に待避命令がきたのもそのころで護衛艦隊はあわただしく機動部隊の救援におもむき、船団は「親潮」と「黒潮」2隻の嚮導艦だけに守られて西方に反転、敵機の爆撃圏内を逃れるに急だった。午後にはミッドウェー攻略中止がはつきりした。赤城、加賀など空母の損害情報も入った。しかし戦闘詳報は7日になっても依然不明で、米空母「ヨークタウン」の漂流やわが甲巡「三隅」「最上」の被爆などが伝えられにすぎない。

将校室の空気は一般に悲観的だった。6日にはミッドウェー泊地に入、かつ洋上で軍旗祭を迎えるというわが一木支隊は大ハッキリだったが、5日の海戦はさすがに大ショックで、おそらく飲まずにはいられなかった気持ちだったのだろう。宴も終わって消灯、就寝中、一木支隊長

が突然、将校室に入ってきた。

「幹部も兵もヘチマもない、話したいやつ、歌いたいやつはみんな甲板に出ろ」

それはまさにストームだった。深夜までみんな声を限りに歌った。船団がグアム島にたどり着いたのは6月13日。やがて、一本支隊はガダルカナル転進を命じられた。おそらく2千の将兵はガダルカナル島に骨を埋めたことであろう。

〔新聞通信調査会報〕第112号 1972年4月1日発行

ソロモン海戦の敗因は陸海軍の抗争

牧島貞一（元日本映画社カメラマン）

東京12チャンネル（現テレビ東京）で「太平洋戦史」というのが放送されている。アメリカ国防総省のフィルムによるアメリカ側の戦史だから当然一方的見方もあるだろうが、日本の戦勝宣伝がうそであったことが、今さらに思い出される。当時私は報道班員であった。

昭和17（1942）年8月から約半年にわたり、ガダルカナル島争奪を中心として戦われたソロモン海戦は両軍共にシーソーゲームを続け、大きな海戦だけでも、第1次ソロモン海戦から第3次ソロモン海戦まで、その間に南太平洋海戦を挟んで4回戦っている。両軍共にへとへとになるまで戦ったが、ついに日本の敗退となった。原因は一言にしていえば「日本陸海軍の抗争」である。

私は機動部隊司令部付報道班員だったから、ミッドウェー海戦で旗艦空母「赤城」が沈没して巡洋艦に救助され、瀬戸内海の柱島に帰ると「上陸禁止」「通信禁止」の軟禁状態に置かれ、続いて旗艦が空母「翔鶴しょうかく」となると、これに乗せられソロモン海戦に連れて行かれた。報道班員は、私ただ一人だった。当時海軍報道班員は、10人くらいが一つのグループを作って行動していた。構成は、同盟と三天紙の記者と写真部員で8人、それに映画、作家、画家等が入って一つのチームができていた。私のチームも11人の中に作家の村上元三氏の名前もあった。

8月8日の第1次ソロモン海戦は、巡洋艦対巡洋艦の夜戦だったが、これは敵のエラーで、日本艦隊の一方的勝利に終わった。

8月25日の第2次ソロモン海戦は空母対空母で、ガダルカナル島北方の海上で、昼すぎにはったり敵とぶつかり、両軍共に大慌てで最初の攻撃機を飛ばしただけ。第2次攻撃隊は敵を発見できず日没となり、全く歯切れの悪い引き分けに終わったが、日本は小型空母1隻沈没、敵は火災を起こしながらも逃げてしまつて、結果的には日本の負けだった。私なんかは、遠くを飛んでいる敵機を3回見ただけだった。

当時日本の飛行機にはレーダーがなかった。軍艦も、日本は「翔鶴」に1基付いているだけ。敵も各空母に1基ずつ付けているにすぎなかったから、敵を知る方法は偵察機を飛ばして、人間の目で発見するのが唯一の手段だった。

私は映画と写真を撮影することに専念すればよかった。記事は戦争が終ってから、ゆっくり書けばよい。氏名、数字は全部〇〇と書くことになつていたから「我が海軍航空隊〇〇部隊の〇〇機は……」といった具合で、こんな楽なものではなかった。下手に本当のことを書くものなら、バツサリ切られてしまうのだった。私の唯一の希望は、この艦隊が大勝利を収めてくれることだった。「大勝利」ともなれば、大本営も私の利用

価値を認めて、東京へ帰らせてくれるだろう。写真も記事も発表できるだろうと思っていた。

なぐさめは手紙と野菜

もう5カ月も、海と空ばかり眺めて暮らしていた。鉄の住居、潤滑油とペンキの臭いで汚された空気、缶詰の野菜と肉、これが毎日続いた。つき合わせる顔は髭面^{ひげづら}ばかり。女気は全然なし。こんな生活が5カ月も続いたらどんな心理状態になるか。一種の集団ヒステリーだった。今考えてみると、よく大ゲンカや反乱が起きなかったと不思議だ。唯一のなぐさめは、ラジオ放送と時々やってくる補給艦からの手紙と新鮮な野菜だった。

夜になると艦隊は一斉に敵に向かって南下して行く。そして日の出1時間半前に、10機くらいの偵察機を扇型に飛ばして敵を捜す。空母の甲板には、攻撃機を並べていつでも出発できる用意をする。明るくなって1時間しても、敵発見の報告が入電しないときは、すぐ反転して北上する。これは、あまり南下すると、ガ島の敵大型機の攻撃をうけるからだ。われわれはガ島の陸上基地はラバウル基地航空隊にまかせ、攻撃目標を敵空母に絞っていた。明るくなつてしばらくするとほとんど毎日敵の長距離飛行艇PBYに発見された。こいつはガ島のはるか南方の島から飛んできた。戦闘機が飛び出してすぐ、片づけてしまうのだったが、その前に敵は無電を打ってしまうのでわれわれは進路を変えて敵の目をくらますことにしていた。夜は南下、昼は北上、これを毎日くり返した。

ちぐはぐな連絡

陸軍の船団を守ってガ島に行った駆逐艦は、何回も敵と戦闘を繰り返していた。陸軍の総攻撃を助けるため、戦艦と巡洋艦が夜間、敵飛行場を攻撃して火の海としたこともあったが、陸海軍の攻撃が同時に行われたことはほとんどなかった。両者の連絡はいつもちぐはぐだった。海軍は機械力で行動していたから時間は正確だったが、陸軍はいつも遅れた。こんなことが1月以上も続いて10月になってしまった。

軍艦は燃料消費の関係から1日でも作戦が狂うのは大変に困るので、この点を山本五十六^{いそく}大將が陸軍に抗議すると、「海軍の協力なくば陸軍は独自の行動をとる」と開き直ってきた。10月18日、陸軍から「予定の揚陸完了、士気大いに上がる」と言ってきたかと思うと、19日に「攻撃を1日延期する」、20日には「さらに2日延期して22日にする」、22日には「さらに2日延期24日とする」。われわれは延期の無電を受ける度に北上して燃料補給して待機した。まるで陸軍にからかわれているみたいだった。

23日、「一切の準備完了、勝算すでにわれにあり、ご安心なう」と打電してきた。24日の夜は、陸軍の攻撃が始まるから敵艦隊が出てくるのは早ければ25日、遅くとも26日と想定された。

25日は、敵艦隊は行動を起こさなかったが26日の夜半、敵のPBY飛行艇が、月明かりを利用して偵察にやってきて、「翔鶴」を狙って爆撃したが命中せず、われわれはただちに進路を変えたものの、夜明けとともに敵の攻撃を受けてしまった。

当時、敵は艦上偵察機に小型爆弾を1個つけて、2機1組で飛んできた。1機やられても残りの1機は、なんとか無電を打てる。さらにうまくゆけば小型爆弾を敵空母の甲板にたたき込んで甲板を破壊し、戦闘力

を失わせる、という考えらしかった。こいつが、「翔鶴」の右側を走っていた小型空母「瑞鳳」を攻撃してきた。アツと思う間にたたき落とされてしまったが、敵の放った一弾が甲板に命中して、甲板がめくれ上がり、火災を起こした。すぐ火は消したが、瑞鳳は飛行機の発着ができなくなってしまった。敵の先制攻撃は見事に成功したわけだ。いらいらして待っていると、味方の偵察機から「敵発見」の無電が入った。すぐ「翔鶴」、「瑞鶴」の2空母から第1次攻撃隊が出発、つづいて第2次攻撃隊も出発、最後に防空戦闘機隊も出発して空母はガラ空きとなった。

「敵機の大群、われに向かいつつあり」。約100前方に出ていた前衛部隊の最左翼、巡洋艦「筑摩」からの無電である。「いよいよ来るか」と思っていると、どうしたことか、この敵機は「筑摩」に襲いかかった。このため「筑摩」は3発の命中弾をあげ速力が低下、北方に退避を余儀なくされた。しばらくすると「翔鶴」のレーダーが敵機の編隊をキャッチした。故障続出で役にたたないと悪口を言われていたレーダーもこの日は立派に働いた。続いて味方の戦闘機から「敵機発見」の無電が入った。戦闘機はついに敵をつかまえた。

私は「軍艦の中で一番安全な場所」と爆撃機隊長山田大尉から教えられた艦首へ走っていった。艦は大きな雲の下に入った。この雲の下にいる間は大丈夫だと思っていると、いきなり雲の中から、まっ黒な敵機が躍り出て左側を走っていた駆逐艦に向かって爆弾を落とした。狙いははずれて、艦の後方海上でダーンと爆発すると、まっ黒な煙がマストの2倍くらいも高く立ち上がった。しばらく走ると、雲の下を出て晴れたところへ来た。「さあ来るぞ」と思っていて見ていると、雲の中から敵機がバラバラと飛び出した。全砲火がこれに向かって火を吐いた。五十数門の大小の砲が発砲したのだから、ダダダ…ガンガンガン…と、いっぺんに耳が聞こえなくなってしまった。その中を敵機はぐんぐん急降下してくる。

ガン、目の前が真っ暗になった。もう音ではない。顔がゆがような爆風だった。ガン、続いてまたガン、艦全体が持ち上げられ、ぐらぐらと揺れた。「こいつは当たった」と思った。

戦い終わる

突然、シーンと静かになった。深夜の静けさだ。戦いは終わったのだ。私は飛行甲板に飛び出した。艦橋から後方の飛行甲板は、メチャメチャに破壊され、大きな口がぱっくり開いた間から、煙と炎が噴き出していた。砲弾の発射葉が自爆をはじめてダン、ダンと破片を飛び散らせていた。ホースから海水が白い滝のように噴き出して、これに向かっていった。艦の速力は少しも衰えない。機関は大丈夫らしい。

「敵空母2隻やつつたぞ!」。艦橋からメガホンで誰かが叫んだ。「ワーツ万歳!」「2対2だ、これからだ」。皆、躍り上がって喜んだ。1時間ほどして火は消えた。戦死者が担ぎ出された。100人くらいあった。

味方の飛行機が帰ってきて、上空をぐるぐる回っていたが、翼を翻すと、全部「瑞鶴」に着艦した。「瑞鶴」は忙しかった。帰ってきた飛行機で、第3次攻撃隊を編成して、再び敵を攻撃した。午後になって「敵艦隊の上空敵機の影なし」。味方偵察機からの報告である。敵空母で甲板を使えるやつはもうないのだ。これで勝利は確定した。あとは追撃戦だった。前衛部隊は、敵に向かって突撃し、夜になって燃えている空母を発見、これを魚雷で沈めて帰ってきた。

大本営は軍艦マーチと共に、大勝利の放送をした。「敵空母4隻、戦艦1隻、艦型不詳1隻撃沈。…本海戦を太平洋海戦と呼称す」。しかし、実際に沈んだのは空母1隻、駆逐艦1隻で、他は全部損害を受けながら

も、夜にまぎれて逃げてしまったのだ。

ガダルカナル島の陸軍はどうなったか。「我が方損害きわめて大、これを補充すべき一兵もなし、作戦中止す」。これが陸軍の返答であった。「陸軍のばか野郎め。絶好のチャンスだ。これを逃したらもう勝てんぞ」。われわれはカンカンに怒った。

「端鶴」は横須賀に帰って修理することになり11月6日、私は6カ月ぶりに、日本の土を踏んだ。新聞に私の書いた記事や、写真が出ていい気になっていた12日夜、ガ島沖では第3次ソロモン海戦が戦われ、日本は2隻の戦艦を失う敗戦を味わった。敵のレーダーは長足の進歩をとげ、日本海軍得意の夜戦も、不可能になったのだ。12月になると陸軍はにつきもさつきも行かなくなり、海軍も潜水艦で物資の輸送をするありさまであった。

大本営は翌年1月4日、同島放棄を決定。撤退作戦は2月1日から7日にわたり、陸海1万2千人の引き揚げを終わった。半年にわたる死闘の間、勝てるチャンスは少なくとも3回あったが、全部陸海軍のチグハグな作戦で失敗した。両者の行動が一致したのはただ1回、撤退作戦の時だけだった。

ミッドウェーの敗戦は「極秘」のベールに包んで、国民の目をくらませたが、ガダルカナル放棄はごまかせなかった。国民が「日本は負けている」ことを、事実をもって認識したのはこのガダルカナル撤退であった。

〔新聞通信調査会報〕第137号 1974年5月1日発行

狭まる包囲網から脱出、敗戦直前のベルリン

江尻進（元同盟通信ベルリン支局長）

「日本は負ける」――武官の予言

戦勝一点張りから一転し、戦況が急速に憂鬱化（ゆううつ）し始めた空気の下で、1941（昭和16）年12月8日の真珠湾攻撃の第一報が入った。ドイツ側の公式の反応は、日本軍の赫々たる戦果を一応たたえてはいたが、一般国民の受け取り方は「情勢悪化の今頃になって戦線を拡大するなど、余計なことをしてくれた」と、むしろ消極的だった。

数日後に、大島（造）大使主催の小さな祝賀会が、大使公邸で開かれた。その席に、海軍中佐の軍服を着た見慣れぬ軍人が現れた。聞くと、潜水艦でフランス海岸に上陸して、着任したばかりの駐独海軍武官、横井忠雄中佐だと名乗る。

早速数名の支局長が取り囲んで、日本の近況を聞こうとしたら、横井中佐は開口一番、「今はまだ戦勝で浮かれているが、この戦争で日本は負ける」とはつきり言い放つ。われわれは憤然として「海軍武官ともあろう者が、そんな大胆な予言をしているのか」と詰め寄ると、彼は泰然として答える。

「日本を出発する直前に、陸海軍の参謀たちが、1週間にわたって合宿し、日米戦争の図上演習を試みた。その結論は、日本が半年以内に戦局を收拾すれば、何とか面目を保って、敗戦の憂き目は免れる。しかし、戦局がそれ以上長引くと必ず敗戦、という結論になった。これはまずいというので、スタッフを一新してさらに2回、同じ図上演習を試みたが、

どれも全く同じ結論にたどりつく。自分はこれに基づいて日本の敗戦を予言しているので、根拠ははっきりしている」

ドイツの対ソ冬期戦での初の後退、これと時を同じくした日本の対米開戦が、日独両国の敗戦への第一歩になるのではないかとといった不安が、それ以来、人には言えない心のしこりとなって、何となく憂鬱^{うつ}な明け暮れとなった。

猛爆下、狭まる包囲

「欧州戦局いよいよ緊迫を加える中で、同盟の全欧通信体制維持のために、いかなる対策を立つべきか、貴下の決断を問う」との古野伊之助さんの訓電を受けたのは、44年11月末だったと思う。攻撃の中心のベルリンからはいずれ退去して、どこか多少安全な避難地で活動を続けるしかない。DNB²³⁸通信社は、西方のエアフルトにひそかに本拠を移すことになる、「お前一人だけのテーブルを保留しておくから、やってこい」と、ヨハネス通り1-3番地の住所と電話番号を教えてくれた。

しかし、全体の配置としては英米の新聞や通信により敵側情報が一番早く入るリスボンに2名、同じく英米の情勢や北欧を中心にした和平の動きの分かるストックホルムに2名、中立国で比較的報道の自由な既存のチューリヒ支局に1名増員する。ベルリン支局は随時随所に退避しながら、極力通信を続ける、というのが本社への返電だった。この時、欧州総局長的な役割を要請されていることを意識して、一段の緊張を覚えた。

そのころから、英米空軍機は昼夜を分かたずベルリンに来襲し、1回に千ト、2千トの爆弾を投下する日が続いた。日米開戦とともに、ロホナーAP支局長の要請で、DNB本社の筋向かいの2階にあったAPの

大きな支局を、タイプライターなど一切の家具、備品付きの居抜きのまま借り受けることになった。APは大きな写真資料庫を持って写真サービスをやっていたが、同盟が入居すれば、この資料の維持ができるだろうとの期待から、敵国ながら目を付けたようである。

本社の訓電が来た44年末には、東西からの英米軍とソ連軍がベルリン包囲網を毎日のように縮めていった。ベルリンから北はハンブルク方面に出る狭い地峡、南はイタリアに通じるバイエルン・アルプス方面への細い地帯が残っているだけになってきた。当時のうわさでは、北のフランスブルクに小さな北政府を置いて連合国との接触に備え、大半の政府機構は、スキー場として宿泊施設の多い南のガルミッシュ・パルテンキルヘンに移すといわれていた。

これに伴って、外国人記者団や日本居留民も、激しい市街戦の予想されるベルリンの街から近郊の農村に避難所を求め、最低限の必需品を備蓄して、最終情勢に備えようとする動きが激しくなってきた。われわれのところでは、支局員全員に、どこかの避難地への脱出を希望するか、ベルリンに残留かの希望を聞いたら、全員がベルリン残留希望となった。そこで筆者がベルリンを脱出することになった。

首都に人影絶える

ところがベルリンから自動車で脱出するには、大量のガソリンが必要になる。その闇交換の材料として一番有効なコーヒ豆と、ハンガリーなどから取り寄せた強度のリキュール酒などを後部に満載。さらに万一に備えての軽機関銃購入の許可を、宣伝省からもらう準備をした。しかし、脱出道中のゲリラに対抗するには無防備、無抵抗の方がむしろ安全と判断されたので、武器携行は取り止めにした。

街のうわさとして、いろいろな情報が耳に入ってくるが、われわれを囲んでいる秘密警察のスパイからも、逆にドイツ側の情報が流れこんでくる。「ヒトラーは総統官邸の裏庭に作られた堅固な地下壕^{地下壕}にこもって、最後までベルリンと運命を共にする」とか、「秘密警察長官のヒムラーは、北のフレンスブルクを足場に、連合国側と和平についての秘密の接触を続け、ヒトラーの不興を買っている」といったうわさである。信頼できそうな、そうした情報が、次々と入ってくる。しかし、戦況は悪化する一方である。

ベルリンには、市内防衛のために動員された15歳以下のヒトラー青少年団や、ナチス党员中心の国民防衛隊員以外に、人影が見られなくなった。気味悪い静けさである。筆者は爆撃で住めなくなったカイザー・アレー(後にブendes・アレーと改称)の家から、スーツケース1個をさげて市内に残っている大小のホテルに部屋を求めて転々とする流浪の生活に入った。しかし、そのうちに暖房もとまり、2枚の毛布と薄い布団だけでは身震いが止まらず、寝つかれない。しかし、そのホテルの食堂で、配給切符でまともな朝食にありつけるのだけが、このうえなくありがたいと思わせられる日々となった。

独外相が別れの宴

整備されたAP支局跡の生活も、焼夷^{しょうい}弾攻撃で破壊され、長続きしなかった。幸いその一帯のビルの方が大きな家具屋だったので、空室になつていた1階の広い家具展示場を支局として借り受け、中央電信局とつながる電信機などを整備して、近代化した。6人分の椅子と机は家具屋の在庫でたちまち整い、大きな正面の壁面一面に数十の切り抜きファイルの入る棚もできて、当時としては他に見られぬ、堂々たる支局の風格となった。

格となった。

敗戦直前のクリスマス前の、空襲の少ない午後1時半ごろから、DNB、外務省、宣伝省の最高幹部や各国のジャーナリストなどを、保存していた酒や缶詰類を全部提供してこの支局に招き、「惜別会」を催した。爆撃の間を縫っての懇談を楽しんでもらいながら、それとなくお互いの生き残りを祈り合った。

そうした会合は各国の仲間の間で、時折行われたが、一番印象的だったのはドイツ敗戦直前の45年2月28日の午後2時から、総統官邸の並びにひっそり残っていた外相官邸で行われたリップントロップ外相主催の小茶会だった。大島大使をはじめ友好国の大使や、少数のジャーナリストが招かれていた。

ポーランド国境のヒトラーの前線本営から帰ってきたばかりという格好の外相の、そう白な顔面に浮かんでいた意気沈没ぶりは、最盛時の意気軒高な姿を知るだけに、見るにたえぬ風景だった。ヒトラーの側近としての党幹部のボルマン、宣伝相ゲッベルスと並んで、最後まで地下壕のヒトラーと行動を共にしていた外相である。敗戦の近いことを自覚しての、お別れの会という空気であった。周辺が無人のがれき街になっている荒涼たる街並みの中で比較的無傷に整った官邸の古典的な広間で、ボーイだけがタキシードの正装で、懸命に調達したと見受けられる茶菓を供している姿は、異様な風景だった。

山中から最後の打電

地下鉄を通して赤軍兵士がベルリン中心部へ迫っているとのうわさが広まってきた。銃声の聞こえない、気味悪い静かな進撃である。もうこうなつてはと、自動車で南方への脱出決意をしたのが4月の13日で、し

かも金曜日。午前10時、電話で宣伝省のウルフ課長に許可を求める通報をした。

なかなか返事がない。午後2時にやっと電話があつて、午後4時半にポツダム広場の宣伝省記者クラブ前に集合すれば、脱出の協力をするとの通告である。そこから2階建てのバスで郊外のミッヘンドルフ駅に送られ、「最後の外交団列車」と名付けられた数両の客車でベルリンを脱出することになった。

列車の前後は高射砲を備えた2両の軍用車で守られている。木の硬い座席の普通車が、東西からの敵の接近をかわしつつ、昼夜を問わずくねくねと徐行しながら南進する。プラハ、インスブルックを経て、昼夜を分かつたぬ座席での居眠りの続く中、6日目の4月19日に、やっと列車から降ろされた。スキーで有名な、ガルミッシュパルテンキルヘンである。これが南ドイツ政府の移転先と分かった。

しかし、ここには特派員を収容する余地はないと、お情けの2泊だけで追い出される。結局大島大使など外交団の避難先の、オーストリアの山の温泉地、バードガスタインに、軍のトラックなどを乗り継ぎ、4日ばかりで到着。その1週間後の5月1日夜9時半、「ヒトラー戦死」のラジオ放送で第2次大戦の終末を迎える。ここからチューリヒ支局経由で4本、英文の打電をしたのが、6年半の特派員生活の寂しい幕切れとなった。

〔新聞通信調査会報〕第379号 1994年6月1日発行

シベリア鉄道沿線に敗色漂う

坂田 二郎（元同盟通信モスクワ支局長）

聯合入社から数えても、8年そこそこにすぎない政治部の青二才記者が、畏敬する松本編集局長から突然、「坂田君、ソ連へ行ってくれたまえ」との内命を受けたのは、破竹の勢いのナチス・ドイツ軍がレニングラードに迫り、ソ連の敗北が憶測される昭和16（1941）年の夏だった。

「モスクワ支局勤務を命ずる」の辞令を8月27日付で頂いたのだが、その時は「モスクワ落ち」するであろうスターリン政権に、どこまでもくっついて行けばいいのだらうと、単純に考えていた。ところが肝心の入ソ査証の申請に対し、秋の終わりになってもなしのつぶて。それが12月8日、真珠湾攻撃の勝利が伝えられた途端に、入ソOKと言ってきたのだ。なぜだろうか。

その真意を読みかねながらも、ともあれ善は急げとばかり慌ただしく東京をたつ。明けて17年の1月末だった。混乱のシベリア鉄道沿線には、確かに敗色が漂っていた。突っ走ること20日間、ようやくボルガ河中流の地方都市クイバイシェフにたどり着いた。そこがモスクワ駐在の外交団、記者団の疎開先になっていたからだ。翌3月28日には佐藤尚武大使（たてかわよしづ）が建川美次軍人大使と入れ替わって同地に着任、早速カリーニン最高会議幹部会議長（なわがたけ）（元首）に信任状奉呈のためモスクワに飛ぶことになったので、坂田同盟、畑中朝日、渡辺毎日の3特派員は、連名でモスクワ行きをソ連外務当局に申請した。ところが許可されたのは同盟のみ。

同盟だけで日本国民に対する報道に差し支えないはずというソ連式論法からである。こんなわけで坂田一人が、春浅い4月5日、佐藤大使に

提供されたプロペラ式のソ連軍用機に秘書兼通訳のネムゼル君を伴って同乗したが、このモスクワ行きの目的は①佐藤大使の動静②戦うモスクワ市民の取材③ハミルソン・タス通信社長への表敬④残置したモスクワ支局の実情調査、および⑤スターリン・佐藤会談（実施せず）の五つであった。このうち本稿では紙幅がないので、当時の古野伊之助社長宛ての報告に基づいて③のみを書き留めておきたい。

タス本社は、タスのクイブイシェフ支局のカウフマン主任から教えられた通り、トベルスコイ・ブリワールにあった。屋上にアンテナが林立している6階建てのビル。玄関には武装したエヌ・カ・ベ・デ（NKVD）Ⅱ現在のKGBの前身Ⅱの歩哨が立ち、出入者をいちいち厳しく検問する。たとえタス社員でも、身分証明書を提示しなければ通れない。幸い、当日の午後2時15分には会見するとの予約を取りつけていたので、すんなりと3階の社長室に通される。

待っていたハミルソン社長は、大きな世界地図を背景にやおら立ち上がり「ようこそ」と握手を求める。年配は四十七、八歳くらい。6尺近いノッポで、度の強い縁なし眼鏡をかけていた。まず、東京タスのサモイロフ支局長の紹介状を手渡して初対面の挨拶、次に古野社長の友好メッセージを伝えると、「古野社長に心から感謝する。タスとして、お助けできることは何でもやってあげますから遠慮なくどうぞ」と述べ「この機会に古野社長の力を借りたいことがあるので、是非伝えてほしい」と前置きしながら、二つの要望事項を提示した。

その一つは、東京のタス支局から本社宛ての打電原稿が従来は6、7時間で受信できたのに、この頃は遅延して3日もかかっている。その原因は日本の電信局側にあると思うので、この点を改善するよう、古野社長の口添えを要望したいということ。もう一つは、タスは同盟の無線放送を大いに利用しているが、同盟はタス放送を余り利用していないので、

もっと活用するよう古野社長の努力を要望する、ということであった。

さて右のうち、第一点については、要望の取り次ぎを口約するにとどめざるを得なかったが、第二点については率直に、「タスのニュースは官僚的、宣伝的なので、日本の新聞にはなじまない。しかしタスの資料的価値は十分認識しているので、『同盟旬報』その他で大いに活用しています」と説明した。これに対し同社長は苦笑しながら、「われわれは、同盟が世界的大通信社であることを十分に認めている。この点も古野社長によく伝えてください」と、ソ連報道宣伝組織の大ボスのわりには如才なく、会話を締めくくったのであった。もう43年も昔の一断想にすぎないが、当時を回想させる唯一の形見として、日英露語入りのモスクワ支局押捺印が今も手元に残っている。

（新聞通信調査会報」第270号 1985年5月1日発行）

外交断絶後に独房へアルゼンチン

津田正夫（元同盟通信「エノスアイレス」支局長）

アルゼンチンは第2次世界大戦が勃発すると、直ちに第1次大戦時と同様、厳正中立を宣言したが、そのアルゼンチンをして対枢軸国外交断絶、宣戦布告させたのは強引極まる米国だった。

アルゼンチンの陸軍は長くドイツ陸軍によって育てられていたが、海軍には英国の教官が来ており、世界戦争に対処して両者間には絶えず摩擦があった。政府としては第1次大戦に中立を堅持し、牛肉や小麦、皮

革を連合国に売って大もうけしたので、第2次大戦でも、食糧供給国として外貨をため込もうとした（原注Ⅱ巨額の外貨蓄積で戦後、大統領になったペロンは米仏系資本の鉄道その他公共事業を全部国有にした）。

ところが、開戦当初から連合国の旗色が悪い。米国の参戦もその大勢を動かすことができない。連合国はアルゼンチンの物資を輸入していたが、独伊両国も同様、多量の食糧品をアルゼンチンから買い込み、アルゼンチン国旗を掲げた船団が連合国の軍艦を尻目に、大西洋、北海、地中海を横行していた。米国は躍起になってアルゼンチンに中立破棄を迫ったが、当時、まだ海軍大佐であったペロンを中心とする佐官グループが政府の実権を握っており、頑として米国の申し出を跳ねつけていた。

そこで米国は戦術を変え、まずリオデジャネイロで汎米会議を開き、南米諸国を対枢軸国と外交関係断絶に踏み切らせる。同時に南米諸国をしてアルゼンチンの物資を購入させないようにした。このアルゼンチン孤立策は同国に致命的な事になった。さらに米国は「アルゼンチンは中立国ではなく、国内の枢軸国スパイをして自由に反連合国活動をさせている」という外交青書を発表した。

アルゼンチンとしては、外交関係断絶程度なら致し方ないと思ったので、1943（昭和18）年2月初め、対枢軸国との外交断絶を断行した。それから、私は帰国までの3年間、同盟本社と一切音信不通になつてしまった。

ところが、政府が発表したその外交関係断絶の理由文は米国の外交青書そのまま、独伊のスパイの家宅搜索の結果、どこの家にもあるような短波ラジオをスパイが使ったのだと言ったり、アルゼンチンに住む独伊人の別荘を取り上げて、スパイの集合所だと言ったりという程度のものだ。そして独伊人数千人の名を挙げたが、日本のことには一切言及されていなかった。

それ以前から米国大使館の活動はすさまじいものがあった。ブラッデン大使の意を受けて組織されたいわゆる枢軸国スパイ活動摘発団が、あらゆる嫌がらせをやっていた。同盟の事務所の家主に強要して、私の追い出しをやり、私も対日外交断絶前に数回、事務所やアパートを替えなければならなかった。1日に何十回と電話がかかり、それを録音し、私の留守を見計らって屋内搜索をするし、外出には尾行する。私のアルゼンチン人の友人に嫌がらせをしたり、一人一人私から遠ざけさせ、事務所の使用人を辞めさせた。英米系商店やレストランには、私の写真を配布して私に買わせない、食べさせないようにした。

外交断絶が発表されると同時に、私は夜遅く警視庁に連行された。1943年2月8日だった。刑事にネクタイを外され、腰のバンドも取り上げられ、仕方なくズボンをつまみ上げて、後ろから突き飛ばされるように地下室の独房に放り込まれた。覚悟はしていたものの、あまりの情けなさに思わず涙を流してしまった。独房は2畳ぐらいの部屋で、鉄のベッドの上にはマットがない。看守が放り込んでくれた古新聞をベッドに敷いて、真夏の暑さの第一夜を明かしたが、たちまち南京虫の襲来を受け、117匹まで殺した。その後は疲れて眠ってしまった。

独房にいた間に2度も革命が起こった。その都度、政府が変わったが、看守の話で、革命ごとにペロンが陸軍次官、陸軍大臣になったと知った。そこで、あるいは近く釈放されるかと淡い希望を持っていたが、その希望は容易に実現せず、独房生活は依然として続いた。ある時、明らかに反枢軸と思われる看守が食事を運んできた。そして「おまえはウスアイヤ行きだぞ。南に行くんだ」と言った。ウスアイヤはどんなところか知らないが、アルゼンチンは南半球だから南の方が涼しいし寒いので、南とはありがたいと思った。

ところが後で「ウスアイヤは南緯55度、政治犯収容所があって、冬の

寒気に随分多くの人が凍死した」と聞いてゾツとした。ペロンが陸軍大臣になると同時に、私は独房からブエノスアイレス郊外の未決監に移された。そこには反枢軸派の政治家や著名人が大勢いた。

ラ・プレンス紙の社長ガインサもいた。私にとってはまさに呉越同舟の感があつた。日に1度、30分の運動時間にはそういう人々が小さな中庭で顔を合わせるので、すぐ話し合うようになった。後年、アルゼンチンに大使として駐在中、私は毎月1回、今となつては枢軸、反枢軸を忘れてその人たちと食事を共にする会をつくり、交互に家に招き、その交際が私の仕事に非常な助けとなつた。

毎日、退屈と焦燥の日を送つたある日、未決監の所長が私のところに来て、突然私の耳に口をつけるようにして「今日日本軍はインパールに向かつて進撃中だ。日本軍がインドに入ればインドは直ちに日本側につく。楽しみにして待っている」と言つた。これが私にとって在監122日中の唯一の戦況ニュースだつた。

122日目 釈放

自由のない生活というのは苦しい。絶えず、部屋のもぞき窓からは看守の眼が光つた。用便のときには看守の監視の下に便器にまたがる。シャワーを浴びるときも同様だ。122日目、真冬の日、私は連邦警察長官の部屋に連れて行かれた。長官は私を見ると、固く手を握り、「何とも申し訳ない。暖房もない部屋でさぞ苦しかったでしょう。何とぞ許してください(レ・ピド・ミル・ベルドーネ)」と言つて、アルゼンチン式に私を抱いた。「今となつて何事だ。一回も取り調べもしないで…」と思つたが、釈放されるうれしさにいそいそと部屋を出た。

自由の身となつて、やれうれしや、と思つたのは私の浅はかさで、米

国の出方次第では、またいつ逮捕されるかもしれないということであつた。そのとき、平素交際のない野村という米国日系二世で、松方三郎君の親類の者が突然私の前に現れた。彼はアルゼンチンに長くいて、日本から除虫菊を輸入して線香を作つて資産をなした人だが、その人が「ブエノスアイレスにいては危ない」と言つて、私を首都から800^{キロ}も離れたパンパス(草原地方)の彼の知人の牧場に連れて行つて、「迎えに来るまでいろ」と言う。私はその牧場でぶらぶら暮らし、牧場のガウチョ(カウボーイ)とも付き合つて、彼らのことを多少でも知ることができた。

年が変わつて1945(昭和20)年8月、日本が降伏した後、野村君がやつて来て、「あなたは国外追放になるらしい。私と一緒にブエノスアイレスに行き、警視庁に出頭してしばらく臭い飯を食つてくれ。政府当局には逮捕を発表しないよう、話をつけてある」という。彼とともにブエノスアイレスに戻り、今度は警視庁の特別室に入れられ、翌年3月1日国外追放となり、5月に帰国した。その当時、日本の新聞に三行記事だが、「明日入港の米船〇〇に日本人スパイがいる」と報道されたそうである。

私の独房時代、米国大使館から週に2度、私がいるかどうかを見にきた外交官は、皮肉にも私の駐在中に米国大使としてやつてきて偶然にも妙な久闊(きうくわん)を叙し合つたものである。

(「新聞通信調査会報」第115号 1972年7月1日発行)

開戦でリオ通信員から戦時調査室へ

椎野豊（元同盟通信戦時調査室）

私は太平洋戦争勃発と同時に、ブラジルで八つの嘱託給を失い、やむなく、30年のブラジル生活を捨てて、思い切って日本に引き揚げた。引き揚げて暮らしができるかどうか、当てもなし、不安におののいていた。そこに、松本重治さんの声がかかったので、一家は歓声を上げた。私は同盟本社に入社し、加藤万寿男さん指導の戦時調査室担当・堀義貴理事に籍を置くことになった。日本の事情に全然通じない私に「資料整理」という椅子が与えられたが、実は、私はその言葉さえ、どんなことか解し得なかったのである。ともかく、当時200円という月給をいただく幸運に恵まれた。

しかし「資料整理係」という担当事務のほか、年に何度か、中南米関係の「時事解説」を求められたのはうれしかった。私は資料整理の本務のかたわら、自分勝手に、戦争にかかわる中南米ニュースの翻訳をやっていたのが認められたからであろう。

その後、戦時調査室の機構改革で、私は中南米班長に任命されたのも、全く意外であった。古野伊之助―松本―加藤ライン合意の結果だろうと、私は判断したものである。約3年間の調査室勤務中に、私は勝手な「翻訳作業」をやったが、加藤さんは一切干渉がましい叱言一つ言われなかった。知識高く、能弁家でもある加藤さんは、私にとって情け深い上司でもあった。

さて、ありていに申して、私は20歳で南米に渡ったので学歴とてない。偶然の機会に堀口九万（くまいち）一（元駐伯公使。堀口大学、瑞典氏の父）遣伯使節に

よって、創立間もない同盟のリオデジャネイロ通信員に推薦された。学歴はないが、南米から2度もドイツに渡り、ドイツの国と国民は尊敬しながらも、政治的見地からは、日独提携には絶対反対と考えていた。端的に言うと、「ドイツと結べば、まずドイツが敗れ、次いで日本が敗れる。仮に日独が勝ったとしても、いつかはドイツが裏切る」というのが私の見解である。

帰国して間もなく、私は郷里（徳島）に帰った。その時、私を訪ねてきた市の巡査と、隣郡の青年会集会（200人ほど）で、右の見解を率直に述べた。警察官に話したのは、「日本の警官は親切だ」と思っていたからである。ところが、翌日、県の特高が駆けつけてきた。思えば、私が日本を出てから二十数年ぶりに単独で帰国し、満州国の状況を見たいと思って、同盟本社に相談したところ、旅費500円を支給してくれた。奉天（現瀋陽）に着いたとき、「独ソ協定が成立した」というニュースを聞いて一瞬ドキッとした。「そうであろうかもしれない」と思っていたことが、意外に早く到来したからである。私は再び帰省して、前と同じ青年会でこの感想を語った。それでスパイ視される破目となった。

交換船でも、2人の特高から尋問を受けた。同盟に入っても、2、3度、丸の内署に呼び出されたことがある。尋問は要領を得ないので、記憶しないが、要するにナンセンスという印象だけが、今に残っていることだけは確かである。

（新聞通信調査会報」第202号 1979年10月1日発行）

エンピツ1本の重さ

佐藤啓之(元同盟通信内信部)

記者は「社会の木鐸^{ぼく}」と言われた。だから、そのものする筆なり鉛筆の重みと責任は、ずしりと大きかったに違いない。私が今ここで触れようとする鉛筆の重さは、しかし、そのような意味のことではない。

昭和17(1942)年の9月、10月、11月初めと、当時同盟通信の従軍特派員として私はガダルカナル島にいた。このガ島転戦中の飢えと体力との戦いは、将兵はもちろん私も従軍記者も軽重の差はあれ同じだった。決戦を挑んだ第2師団の総攻撃も失敗し、大本営派遣の辻政信参謀の指示で後方へ下がれと言われた時には、背中のリュックには一粒の米もなかった。前人未踏のジャングルを切り開いた難険^{なんけん}悪路^{あくろ}を、にじるように歩き、辻参謀自ら「ひよどり越え作戦」と呼称した米軍のルンガ飛行場背後を衝く「一週間作戦」に、私は7日分の米と粉ミソを与えられて夜のセブリをあとにした。

しかし意外に険しい難路に部隊の行軍は手間取り、予定から3日も遅れての攻撃となった。砲も十分に第一線に到着しないままに突っ込んだ夜襲は、夜明けとともに米軍飛行機が出撃するに及んで勝敗は明らかになった。

折から滝のような豪雨に体をたたかれ、今はわずかの鉛筆とぐしゃぐしゃになった原稿用紙、それに空っぽの飯ごうなどを入れてあった軽いリュックを肩に、空腹を抱えながら、もと来た泥んこ道をトボトボと歩く心中は、生きた心地とてなかった。歩こうとする意思はある。だが足がいうことをきかない。軽いリュックも肩に食い入って痛く、それを支

える両手も次第にしびれてくる。

そこで背から下ろしたリュックの中の鉛筆を調べる。雨と炎熱のために、多くの鉛筆は芯を囲む二つの合わせ木が割れて、そのままでは使えないものばかり。鉛筆は記者の命だ、と絶ちがたい思いをしながらも、歩くためにはと観念して、その中から1本を捨てる。すると何かりリュックが軽くなったような気がして、その緩やかな坂道に挑戦できるのだった。そして何十歩か何百歩か歩く。疲れる、また座る、また捨てる。この繰り返して、どうやら出発地点から前進していた軍司令部基地のセブリにたどり着いたとき、リュックの中には割れた数本の鉛筆がまだ残っていた。

物理的に言うなら、1本の鉛筆の重さは約10⁴gほどである。1円アルミ貨が1⁴gだから、その10倍の重さを捨てるといっても、荷の重さとはるに足らぬほどの差でしかない。しかし、あのときのそれは、私の命を支えた大きな重みの意味を持つ重さだった、と私は今も切なく思い起こす。

当時のことを思うとき、今もどうしても忘れられない感慨が一つある。それは、マニラで待機中、偶然街で逢った尾高晃君(当時同盟社会部、陸軍報道班員)から、何ということなしにもらったアメリカのフィルム会社コダックのネームが入っているシャープペンシルのことである。ガ島で雨や汗でぐっしり濡れた私の従軍服の胸のポケットに、いつも納まっていたこのペンシルが、やがてラバウルで原稿を書くとき大いに役立ったのである。彼は戦時中、比島沖で戦死した。今はプラスチック製の茶色をしたあのペンシルも私の手元にはない。しかしガ島を、戦争を思い起こすとき、故人の面影が重なって万感胸に迫るのを覚える。

(「新聞通信調査会報」第151号 1975年7月1日発行)

ニュース映像で悪戦苦闘、伝え切れなかった戦争の悲惨

潮田三代治（元日本映画社カメラマン）
松崎新一（元日本映画社録音技師）

今回は世にあまり知られていない同盟通信社のニュース映画部門の誕生と実態について、実際にそこに籍を置き活躍された潮田三代治さんと松崎新一さんからお話を伺った（司会とまめは新聞通信調査会）。

盧溝橋事件きっかけに映像に進出

—いつごろから同盟のニュース映画は始まったのでしょうか。

松崎 昭和10（1935）年ごろは、文化映画と称する短編映画がブームでして、既に朝日ニュース、東日大毎国際ニュース、読売ニュースが映画館で上映されていました。そこへ12年、盧溝橋事件が発生、同盟通信がニュース映画部を設立、4社が火花を散らすことになりました。

潮田 私が東京・中野坂上にあったKSTキーに勤めていたころ、同盟ニュースの現像、編集、録音、プリントの作成に当たることになり、その後作業スタッフ全員が同盟に入社。撮影部に籍を置く私は毎週徹夜でタイトル撮影や編集の手伝いなどの仕事をしていましたが、13年11月には同盟ニュースのカメラマンとして中支へ特派員として派遣されました。

—4社のニュース映画はその後、統合され、同盟が中心となって新しい映画社が誕生しましたが、どのようないきさつがあったのですか。

潮田 13年に映画法が制定され、四つのニュース映画が多少出来栄の差はあってもほぼ同じ内容で、資材や人員面で無駄が大きいという見地

から、統合して日本ニュース映画社²⁸（後に日本映画社と改称）が誕生、社長に同盟通信社の古野伊之助社長が就任された。そのころ北支や南支など中国各地を取材していた4社のカメラマンのうち私のように同盟の特派員はそのまま残り、他社のカメラマンは日本へ引き揚げていきました。

松崎 カメラマンの現地派遣が多くなると、戦地からフィルム原稿が着き、中野新橋の作業所ですぐに現像するわけですが、取材内容によっては憲兵立ち合いで現像することもありました。

週1回の定期ニュース製作は、徹夜作業も多く、大きな都市が陥落すると特報ニュースの製作になります。また、戦争の音が必要ですが、作業所にはそのストックがなく困りました。運よく「再建ドイツ陸軍」のフィルムからコピーし、戦争ニュースの絵に合うようその都度編集して戦争音を出し、臨場感を出すよう努力したものです。

厳しい検閲

潮田 中支でチームを組んだのは政治部塚原俊郎さん（戦後、労相＝現厚労相）、写真部今井祐二さん、それに無線オペレーターの大川さんでした。目指すは漢口攻略。既に武漢三鎮²⁹は陥落し、揚子江（長江の異称）を遡江³⁰して洞庭湖³¹に向かう。

この辺りは中国のゲリラが待ち構えているので、それを討伐するというので軍に同行した。一作戦に従軍するのに缶に入った35ミリの100ミリフィルムを30個持つ。それに飯ごう、缶詰、雨具などを入れたリュックサックは20キを超す。それを12・5貫（約47キ）の私が担いで、1日40キロを歩く。行軍の途中、付いて行けなくなれば中国の兵隊に殺される。毎日しやにむに歩いていたのが今日の元気のもとになったのかもしれない。

松崎 同盟ニュースでは日本軍の万歳三唱が毎週上映されるので、「万歳ニュース」とも言われていました。解説者として、NHK浅沼博、館野守男両アナウンサーが当たり、メインタイトルは「新聞で見る、ラジオで聴く、同盟ニュース」。音楽はドイツ行進曲集から抜粋したもので、ドンドコドンの太鼓の音でタイトルが流れます。

上映には内務省の検閲が必要で、映写リーダーフィルムに検閲済みの押印があつて初めて上映できることになる。1回のプリント数は約130本、うち30本は地方新聞社のタイトルに差し替え発送しました。

―検閲はどうだったのでしょうか。真実を伝えることは難しかったと思いますが。

潮田 15年11月に紀元二千六百年の式典が二重橋前の広場で行われ、私も代表撮影の許可願を警察に提出したところ、出勤中にわが家に憲兵が来て私の部屋の中を調べ、どんな本を読んでいるか、どんな連中と付き合っているのか、近所の家から聞き込みもして調べていった。翌日渋谷憲兵隊に出頭して調書を取られ、ようやく撮影許可が出たことがあります。

敗戦色が濃くなったころ、ビルマ（現ミャンマー）、レイテへと転進し、降り掛かる砲弾の雨の中、「この戦争を終わらせないと駄目だ」と思い、悲惨な最前線の兵士たちを撮りフィルムを使い切った。しかし、願ひは届かず、送り続けた200本近いフィルムはいまだにどこへ消えたか、検閲で処分されたか、ほとんどが見つかっていません。

松崎 特派員からの同盟ニュースフィルムは練馬スタジオかKSスタジオに保管されていたらしいが、20年の空襲で焼失したようです。私もビルマ、インパール作戦に録音技師として加わり、悲惨な状況を目の当たりにしました。

戦後、お世話になった兵士たちへの恩返しのため、54年から55年

にかけ現地を訪問し、「ビルマ―その戦跡と風物」と題する50分の記録映画を製作しました。ビルマ戦争で亡くなられた兵士のご遺族に見てもらい、慰霊のお役に立てばと思ったのです。

―激しい戦いの中で生命の危険にさらされ、ご苦労が多かったと思いますが。

潮田 18年、航空母艦「瑞鶴^{ずいかく}」に乗艦したが、報道班員は私一人。ミッドウェー海戦で「赤城」「加賀」といった空母数隻が沈没するなど連合艦隊としては大変な損害を受けた。幸い「瑞鶴」は排水量3万ト、飛行甲板約300メートル、搭載機は約100機、乗員2500人で、ともかく無傷。2500人の集団生活となると、規律違反や盗難などいろいろな事が起こる。所属する分隊全員が甲板に整列させられ、「日本精神注入棒」と書いてあるカシの木の手棒で全員が尻を殴られる。私は暴力を全面的に肯定はしないが、人が成長する過程で一度だけでもこの注入棒のお世話になる必要があるのではないかと思う。

その後、私はガダルカナル島の撤収作戦で空母「隼鷹^{じゆんよう}」に乗船。同乗した引き揚げ部隊の将校はポツリポツリ、ガダルカナル島の様子を話してくれた。食べものがなくなり、動く爬虫^{はちゅう}虫類は全部食べる。友軍同士が食べ物の奪い合いで殺し合う。引き揚げの時は、数千人の将兵がわずかに200人足らず。話をしている将校の顔は頬の骨が出てガリガリだったのを今も思い出します。

生き地獄を経験

松崎 陸軍最大の失敗作戦といわれたインパール作戦では、軍隊のほか記者、オペレーター、カメラマンなどが同行、総勢33万人が参加したが、約18万5千人が戦死する大敗北だった。私は18年10月から19年5月まで、

戦場報道隊インパール作戦記録映画班の録音技師としてビルマ奥地に入りました。ジャングルで道はなく、ちょっと横にそれようものなら、英印軍が仕掛けた爆弾がさく裂。来る日も来る日もジャングルの中で雨に降られ、食糧弾薬の補給がつかず一日一食から一日半食、そのうち配給がゼロとなった。報道隊員も毎日毎日雨に降られ、着ているものは下着までびしょり。食べるものもない。報道隊員は、これ以上とてもこの部隊には付いていけない。命からがら地獄のようなところから抜け出したわけです。

潮田 私も19年1月、空母を降りた後、日映²⁸本社からビルマ行きを命ぜられ、生き地獄を経験しました。インパール作戦の記録を、ジャングルの中の生活を含め、4、5回に分けて師団司令部経由で東京へ発送しましたが、食うや食わずのあの地獄のような戦場では、フィルム原稿が輸送できるわけがないと諦めていました。

ところがコヒマというところで撮影した300¹³のフィルムだけが東京に着いていた。命からがらインパールからマニラへと戻るや否や、今度はマッカーサー率いる第24師団がレイテ島に上陸(19年10月17日)したというので、マニラから従軍せよとの指令が日映本社から届いた。今度ばかりは地獄の釜に飛び込むようなもの。人間生まれたからには一度は死ぬ、それにしてもちょっと早いと諦めながら朝日、読売、毎日など各社の人たちとともに13人の報道班員が、満州の陸軍第1師団が乗船する「金華丸」に乗り込む。レイテ島のオルモック湾上陸時にはフィルム原稿500¹³を船長に託し、幸いにも日本に着いたが、壮烈なシーンなどは検閲に引っ掛かったとみえ、公開されたニュース映画には収録されていません。

上陸後、補給路は断たれ報道班員13人の食料も軍からの配給がなくなり、報道どころではなくなった。13人のうち同盟の記者2人と朝日の記

者の合計3人が、このままでは全滅するというのでレイテ島を脱出し、マニラへ向かう。残る10人は、そのうち日本軍が盛り返し援軍が来るだろうと残留することになる。脱出組は夜陰に乗じて装甲艇に便乗、生きるか死ぬかの瀬戸際を1晩で通り越し、セブ島に着く。そこからミンドロ島へ。マニラへ着いたのはレイテを出てから何と10日後でした。

平和への責任

潮田さんが書かれた手記(本章第2節の「それは地獄だった」激戦地歩んだ報道班員)を読むとマニラ、台湾を経て20年3月、懐かしい東京の土を踏む。長い道のりでしたね。

潮田 従軍記者として感じたことは、陸、海軍それぞれ敗北につながる欠点が目につきました。陸軍では食糧の補給について現地調達という基本があつたが、中国本土では成功したものの、インパールやフィリピンでは見事に失敗した。海軍は日露戦争の日本海海戦での勝利が忘れられず、大艦巨砲主義が根強く残っていた。しかし、「大和」「武蔵」の不沈艦2隻が米軍の空からの攻撃であえなく沈没し、大艦巨砲主義が日本を敗戦へと導くことになってしまった。

最後に戦場を駆け回った報道カメラマンとして戦争と平和への思いを聞かせてください。

潮田 終戦時、生き残っただけかという無力感に襲われたものです。戦争の真実を伝え切れなかった悔いを持ちつつ、今生きている私たちが子孫のために戦争をなくす努力をすべきであり、しなければならぬ責任を重く感じている。あの戦争に従軍カメラマンとして参加した経験は、私の命の火が消えるまで決して忘れることはできません。

(「新聞通信調査会報」第545号 2007年7月1日発行)

「昭南新聞会」―軍と協力、同盟が新聞を発行

戦時中、日本軍による東南アジアや南洋諸地域の占領地では日本の大手新聞社による新聞発行が行われた。日本が掲げていた「大東亜共栄圏」構想の宣伝や現地住民の民心安定を目的としたもので、軍と協力して行われた。

同盟通信もその一つとして有力地方新聞社と「昭南新聞会」という団体を結成し、新聞発行に当たった。その数は、日本語5紙に加え、英語、中国語、マレー語など現地語の新聞を含めると20紙を超えた。

昭南新聞会

日本軍による南方占領が一段落した昭和17(1942)年9月、陸軍省報道部は「南方占領地域における通信社及び新聞社工作処理要領」を発表した。

占領地での通信業務を同盟に一本化する一方、新聞業務については、朝日、東日(大毎)Ⅱ現毎日Ⅱ、読売の全国紙3社と同盟を中核とする新聞数社の合同提携による1社を加えた4社を選定し、新聞業務を行わせることにした。その役割は「日本文化の進出、現地邦人の啓発、並びに土語(現地語)紙外字紙の指導にあたる」というもので、「現地軍の管理下に経営を行う」ことが求められた。

担当の地域は軍政域に沿って、朝日がジャワ(現インドネシア)、東日がフィリピン、読売がビルマ(現ミャンマー)、そして同盟グループが昭南(現シンガポール)Ⅱ占領に伴い日本名に改称)、マレー(現マレーシア)、

スマトラ(現インドネシア)、北ボルネオ(現マレーシア)の4地区と、それぞれ割り当てられた。

これを受け、同盟は18年1月、北海タイムス(現北海道新聞)、河北新報、日本産業経済(現日経新聞)、東京、北陸毎日(現北國新聞)、中部日本(現中日新聞)、大阪、神戸、京都、中国、岡山合同(現山陽新聞)、高知、西日本の13社と「昭南新聞会」を結成、本部を昭南に置いた。これらの新聞社は、「昭南新聞会」として最初に発行した日本語新聞「昭南新聞」創刊号で、「戦争の勝利に向け総力戦の有力な一翼として新聞の統廃合に応じて再出発した社」と紹介されている。日本国内で「一県一紙」を目指した新聞統制の流れも考慮しての選択だったようだ。

昭南新聞

「昭南新聞会」として最初の日本語新聞「昭南新聞」が発行されたシンガポールは、元々中国系住民の多いところで、日中戦争の影響もあり日本への反発が強かった。このため17年2月のいわゆる「シンガポール陥落」の直後から、抗日分子の掃討として日本軍による中国系住民の大量虐殺事件が起きるなど不穏な状態にあった。

「昭南新聞」縮刷版を編集製本した横堀洋一によると、占領直後の2月には現地住民の民心の把握と軍政の徹底のために英語、中国語の新聞が相次いで発行された。しかし中国語新聞には軍の宣伝班が直接乗り込み、軍の発表や布告などが威圧的な大見出しであふれ民心の把握とは程遠いものだった。日本語新聞は、将兵向けの陣中新聞「建設戦」が発行されていたが、軍の機関紙として宣伝色の強い性格を持っていたため、本格的な新聞の発行が必要となっていた。

このような状況の中で「昭南新聞」は誕生したが、その創刊号は「昭南新聞会」の正式発足前の17年12月8日。ちょうど開戦から1周年の記念日に当たり、同盟の手によって編集されたものだった。4ページ建てで、第1面に「大東亜戦争ここに一ケ年」の大見出しの下、「宣戦の詔書」や真珠湾で炎上する米戦艦アリゾナの写真を大きく掲載した。祝辞では東条英機首相、嶋田繁太郎海軍大臣らが新聞を



昭南新聞創刊号＝1942(昭和17)年12月8日発行

「総力戦の一翼」「言論思想戦の尖兵」と激励した。「御挨拶」として古野伊之助同盟社長が昭南新聞会長の肩書で、陣中新聞「建設戦」を継承し、作戦地の文化建設にまい進したい、と決意を述べている。

続々創刊

18年7月にはスマトラ西海岸のパダンで日本語の「スマトラ新聞」が創刊された。マレー、スマトラの防衛を担当していた第25軍司令部の移駐に伴い発行されることになった。軍の司令部の移動や軍の再編に伴い同盟は新たに支社や支局を作ったりして組織の改編を行っていたが、昭南新聞会もこれに合わせて新聞の発行を各地で始めた。軍司令部は大きなニュースソースでもあり、その移駐は軍関係者の大量の移動も伴っていたためだ。

日本語の新聞は19年5月にはマレー半島タイピンで「馬來新聞」^{マレー}、同6月に北ボルネオ・アピ(現コタキナバル)で「北ボルネオ新聞」の発行が始まった。同時に昭南での「ザ・ショーン・シンブン」(英語)、クアランプールでの「馬來新報」(中国語)、スマトラでの「パダン日報」(マレー語)など各国語新聞も次々と発行された。また南方軍総司令部のサイゴンへの移動に伴い、20年1月にはサイゴンで日本語の「陣中西貢新聞」^{サイゴン}が創刊されている。

紙面作りは日本人

「昭南新聞会」の規約2条では、目的を「マレー、昭南島、スマトラ、北ボルネオ各陸軍軍政地域における新聞事業の運営指導に任じ、もって現地軍政の施行に協力するとともに、日本文化の興隆に努め、現地邦人の啓蒙、原住民の教化にあたること」と定めている。日本

語新聞が軍関係者や在留邦人を主な対象としたのに対し、英語や現地語などの新聞は現地住民へ日本の「大東亜共栄圏」構想の宣伝と占領政策をスムーズに進めるためのものと、その役割は大きく分けられていたようだ。

昭南新聞会の理事をしていた井上勇は帰国後、「国際文化」(第27号、18年9月発行)で「軍部は現地語新聞を現地人の運営に任せることを原則としたが、現地語新聞こそ日本人が運営に当たり、現地住民の民心把握と教化に当たるべきとの立場から直接運営に乗り出した」と報告。その形態として「日本人1、2名を置くだけで他は現地人の裁量に任せ、指導のみを強力に推進した」と紹介している。本書でも、マレー半島のイポーで発行されていた英語、中国語、マレー語の「ペラ新聞」に同盟から2人を派遣、監督、指導に当たったことが報告されている。

日本語新聞の場合は、「スマトラ新聞」を担当した北海道新聞の栗原純一が「記事を書いたり整理などの編集は日本人がするが、工務関係は現地の人がほとんど」(北海道新聞労組「記者たちの戦争」と述べた上で、「活字をひろう文選作業には漢字が読めることからシンガポールから軍によって強制連行された華僑を使った」と証言している)。

一方、創刊が遅かった「陣中西貢新聞」では、同盟の3人が編集に当たり、印刷技術者や印刷に熟練した兵隊の計4人を加えた日本人スタッフだけで、タブロイド判2ページの新聞を毎日5千部発行した。

参加の形態はさまざま

ところで、これらの新聞はどの程度発行されていたのか。明確な

数字は見当たらないが、昭南を管轄していた陸軍第25軍が作った「要領」によると、昭南での新聞事業は、日本語、英語それに写真画報と制限し、資材節約のため新聞は2ページ建てで1万部以内、写真画報は5千部以内と細かく規定した。

先述の「国際文化」の記事で井上勇は、「スマトラ新聞が1万部に近いほかはことごとく少なく、当時発行していた11紙合わせても5万部は出ていない」ことを明らかにし、「現状では1万部印刷する必要ない」と述べている。「要領」では、「欠損に対する補助は軍隊の買い上げをもって保証」などとしており、経営的に問題はなかったようだ。

職員も19年半ばまでには日本人70余人、現地従業員千人余にまで増えた。しかし戦局の悪化から軍の指示で同年10月から、同盟が直接経営にあたることになり、職員も同盟に転籍した。『通信社史』によると、20年7月の時点で、昭南の本部のほかにマレーのタイピンとスマトラのブキティンギに総局を置き、役職者だけで34人に上っている。

新聞社からの出向組などの内訳ははっきりしないが、北海道新聞が社史に「18年7月から編集、工務関係技術者計12人を昭南新聞会に出向させた」と記載。中日新聞は「人員だけでなく資金や機械などを供出した」、西日本新聞も「現地従業員の新聞発行を指導するため工務局の社員を派遣した」とそれぞれ社史で紹介している。しかしその一方で、応召や徴用による人手不足から人員の派遣などでできず、出資金のみの参加となった新聞社も出た。参加の形態はさまざまだったようだ。

少ない現存紙面

「昭南新聞会」が関わった新聞はほとんど現存していないが、「昭南新聞」と「スマトラ新聞」については一部の紙面が見つかっている。「スマトラ新聞」の発見者の鈴木正夫横浜市立大名誉教授は、見つかった18年10月から約4カ月の紙面について「一面の多くは同盟配信の戦況報道が占めているが、スマトラ独自の記事もあり占領下スマトラの状況を生々しく伝える一級の資料も多い」としている。

横堀氏によって編集された「昭南新聞」の縮刷復刻版には17年12月の創刊号や18年2月のシンガポール陥落1年などの紙面の他は、主に終戦を挟んだ20年2月から9月2日までの紙面が収録されている。見出しを見る限りだが、戦意高揚をおおる記事が多い一方戦況の悪化をうかがわせる記事も目立つようになっていた。8月15日一斉に報道されたポツダム宣言受諾のニュースは6日も遅れた8月21日まで掲載されなかった。『通信社史』によると、現地軍司令部から発表を禁じられたためという。

紙面は残っていないが、「陣中西貢新聞」の場合は、日本のニュースが主で、地元ニュースのほか安南語（ベトナム語）の手引きや連載小説も載せていた。

引き揚げ者へ情報提供

終戦に伴い、これらの新聞はその役割を終え、相次ぎ廃刊となった。しかし連合軍側の指示などもあり「昭南新聞」は「世界時報」、「陣中西貢新聞」は「同盟通信」「西貢通信」と名称を変更し、発行を続けることができた。現地から日本へ引き揚げる軍関係者や在留邦人に対し終戦後の国内の状況などのニュースを提供するため、日

本人全員の引き揚げが終了する21年6月まで続いた。

昭南支社長だった吉田松治は「世界時報」について、座談会の中で「当時南方には70万人を超える日本人がいた。昭南では『昭南新聞』の関係者も集めて25人を動員、3カ月ごとにスタッフを入れ替えながらタブロイド判の週刊紙として10万部刷った」と語っている。「陣中西貢新聞」について南方総社長だった福岡誠一は「活字、印刷機があり、日本人の間にニュース飢饉を起こしては申し訳ないスタッフを縮小し新聞の発行を続けた」とその経緯を証言。最後の紙面は21年4月に行われた戦後初となる日本の総選挙開票結果を告げるニュースだった、という。

同盟は通信社本来の業務としてそれぞれ支社局で日本語のガリ版ニュース「通信」を主に軍や商社などに向け発行していた。この「通信」も日本へ帰国する人たちに向け各地の収容所や帰国船中で発行が続けられた。本書では、「昭南新聞会」の新聞発行に関する証言は少ないが、このガリ版ニュースについてはいくつか触れられている。タイピン支局の早川仁三^{じんぞう}は「シンガポールの収容所で連合軍が貸してくれたラジオでBBC放送を聞き、邦人向けのガリ版刷り『ニュース』を出した」と証言。ブキティンギ支社編集主任だった高倉正夫は「同盟の海外放送が受信できなくてもとかく通信を出そうと、NHK放送を速記受信し通信を発行した」と記している。

高倉はこの中で「いろいろなデマも飛んだが、抑留所の各棟で朗読または回覧され、最小限度の情報を伝えたことは日本人社会にいくらかは役立ったと思う」と、ガリ版ニュースの果たした役割を振り返っている。

（松本紀生）